

# 大湯環状列石周辺遺跡 発掘調査報告書(2)

1986-3

秋田県鹿角市教育委員会

## 序

大湯環状列石は、縄文時代後期の環状組石群であります。その規模と形態において極めて特異な遺跡として、昭和31年に国の特別史跡に指定されました。

市では、過去4カ年にわたりて実施したこの遺跡の周辺における分布調査結果をもとに、昭和59年度より国、県の御指導、御援助を得て発掘調査を開始したのであります。

今年度は、昨年の発掘区域の隣接地並びに野中堂遺跡の隣接部分の2カ所を発掘しましたが、その結果、たくさんの遺構を検出し、数多くの出土品を発見することができ、大湯環状列石を研究する上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書は今年度の成果をまとめたものであります。調査に関して、御指導御協力いただいた関係機関、各位に厚く御礼申し上げるとともに、本書が今後の大湯環状列石の保護と研究に大いに役立つよう念じてやみません。

昭和61年3月

鹿角市教育委員会

教育長 柳沢源一

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和60年度に国庫補助金を得て実施した大湯環状列石周辺遺跡第2次発掘調査の報告書である。なお、本調査概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。
2. 本報告書の執筆は、調査員、調査補助員が分担し、文責は各々の文末に明記した。
3. 第Ⅰ章2、3の執筆と石質鑑定は十和田高等学校教諭 鎌田健一氏にお願いした。
4. 第V章「配石遺構の土壤および甕棺土器に残存する脂肪の分析」は帯広畜産大学 中野益男助教授に分析、執筆をお願いした。
5. 第VI章「大湯環状列石周辺の古環境」は尾去沢中学校教諭 成田典彦氏に執筆をお願いした。
6. 土層、土器などの色調の記載には「新版 標準上色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
7. 本報告書に使用した地形図に、建設省国土地理院発行の毛馬内(1/25,000)を使用した。
8. 遺物の実測・探拓・トレース等の一連の整理作業は調査員、調査補助員が行なった。
9. 本報告書に使用した図版のスケールについては各々に示した。なお写真図版は任意の縮尺とした。
10. 本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用されているものについては簡略している場合もある。
11. 図版、表等で下記のような記号・スクリーントーンを使用した。

S B…掘立柱建物跡, S K…上塙, S K(F)…プラスコ状上塙, S K(T)…Tピット  
S X(S)…配石遺構, S X(F)…焼土遺構

…地山以下の土層, …焼土, …赤色範囲

12. 発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導、御助言をいただいた。記して感謝の意を表します。(敬称略・順不同)

河原純之(文化庁記念物課), 佐原 真(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター),  
中野益男(帯広畜産大学), 奈藤 忠(大正大学), 村越 潔(弘前大学), 阿部義平  
(国立歴史民俗博物館), 林 謙作(北海道大学), 工藤雅樹(宮城学院女子大学),  
小林達夫(国学院大学), スチュアート・ヘンリー(早稲田大学), 鈴木克彦(青森県  
立郷土館), 大谷敏三(千歳市教育委員会), 高橋与右二門(岩手県埋蔵文化財センター)  
, 稲野裕介(北上市教育委員会), 坂本洋一(青森県埋蔵文化財センター), 本間  
宏(福島県文化センター), 岩見誠夫, 桜田 隆, 小林 克(秋田県埋蔵文化財センター)  
, 板橋範芳(大館市史編さん室), 田村 栄(大館少年自然の家), 成田滋彦(青  
森県埋蔵文化財センター)

# 本文目次

序

例言

本文目次

図・P.L.目次

第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と立地 ..... 1
2. 遺跡周辺の地質 ..... 1
3. 発掘地点の地質 ..... 4
4. 遺跡の層序 ..... 5

第Ⅳ章 B区の検出遺構と出土遺物

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過 ..... 7
2. 調査要項 ..... 8
3. 調査の方法 ..... 9
4. 調査の経過 ..... 10

1. フラスコ状土壙とその出土遺物 ..... 50

2. Tピットとその出土遺物 ..... 57
3. 土壙とその出土遺物 ..... 57
4. 焼土造構 ..... 67
5. 瓦器 ..... 67

第Ⅲ章 A区の検出遺構と出土遺物

1. 配石造構とその出土遺物 ..... 12
2. 弧状列石 ..... 38
3. 土壙とその出土遺物 ..... 39
4. 柱穴状ピット ..... 42
5. 焼土造構とその出土遺物 ..... 43
6. A区遺構外出土遺物 ..... 43

6. 遺構外出土遺物

- 1) 土器 ..... 68
- 2) 石器 ..... 91
- 3) 土製品・石製品 ..... 102

7. 小結 ..... 111

- 第V章 配石造構の土壙および盛棺土器  
に残存する脂肪の分析 ..... 113
- 1) 土器 ..... 45
  - 2) 石器 ..... 48

7. 小結 ..... 49

1. 配石造構群について ..... 128

2. 配石造構下土壙・土壙底面の

赤色変化について ..... 135

3. 野中堂環状列石周辺の

遺構について ..... 136

4. 周辺遺跡出土土器と

大湯式土器 ..... 139

第VI章 調査のまとめ ..... 144

# 図版・PL・表目次

## 図版目次

第 1 図	道路の文様と昭和道路の範囲	2	第 53 図	B 区道構外出土十士番柄形印(1)	82
第 2 図	東角益地の地形分類図	4	第 56 図	B 区道構外出土十士番柄形印(2)	83
第 3 図	発掘調査地の地質図	4	第 57 図	B 区道構外出土十士番柄形印(3)	84
第 4 図	A 区・B 区の基本等高	6	第 58 図	B 区道構外出土十士番柄形印(4)	85
第 5 図	A ザグリット・配置図・走査配置図	11	第 59 図	B 区道構外山上十士番柄形印(5)	86
第 6 図	第 4 ~ 8 号配石道構外圖(4)	14	第 60 図	B 区道構外山上十士番柄形印(6)	87
第 7 图	第 10 号配石道構外圖(7)	15	第 61 図	B 区道構外出土十士番柄形印(7)	88
第 8 图	第 11 号配石道構・第 7 号性六状ビット式導開	15	第 62 図	B 区道構外山上十士番柄形印(8)	89
第 9 图	第 12 号配石道構外圖(9)	15	第 63 図	B 区道構外出土十士番柄形印(9)	90
第 10 图	第 13 号配石道構外圖(10)	18	第 64 図	B 区道構外出土石器素面印(1)	95
第 11 图	第 14 号配石道構・第 9 号性六状ビット式導開	20	第 65 図	B 区道構外出土石器素面印(2)	96
第 12 图	第 15 号配石道構・第 2 ~ 4 号性六状ビット式導開	22	第 66 図	B 区道構外出土石器素面印(3)	97
第 13 图	第 16 号配石道構外圖(13)	22	第 67 図	B 区道構外出土石器素面印(4)	98
第 14 图	第 17 号配石道構外圖(14)	25	第 68 図	B 区道構外出土十士石器素面印(5)	99
第 15 图	第 18 ~ 23 号配石道構外圖(15)	25	第 69 図	B 区道構外出土土石器の大きさと重さ	100
第 16 图	第 20 号配石道構外圖(16)	27	第 70 図	石器リグド印(石器出上載)	101
第 17 图	第 21 号配石道構外圖(17)	27	第 71 図	B 区道構外土石器の組成図と材質	101
第 18 图	第 22 ~ 25 号配石道構外圖(18)	31	第 72 図	B 区道構外土石器の組成図(1)	105
第 19 图	第 21 ~ 31 号配石道構外圖(19)	34	第 73 図	H 壁出土土石器の組成図(2)	106
第 20 图	第 32 ~ 34 号配石道構外圖(20)	35	第 74 図	D 1 次土石器品属図(3)	107
第 21 图	A 区出土土石器品属図	36	第 75 図	B 区出土土石器品属図(4)	108
第 22 图	A 3 号配石道構外出土七石器品属図(1)	37	第 76 図	H 土器出土土石器品属図	109
第 23 图	A 区配石道構外出土七石器品属図(2)	38	第 77 図	D 2 次タグリット印(1)製品・石器出土数	112
第 24 图	A 区道構外出土十石器品属図(4)	39	第 78 図	大海螺貝灰石司道構外・A 区配石道構外土石器品属図	114
第 25 图	第 3 ~ 12 号 A 家畜部品図	41	第 79 図	第 2 号配石道構外取扱印と試験採取地	115
第 26 图	性別状・ド・配置図・鉢形印	43	第 80 図	第 3 号配石道構外取扱印と D-2 次配石道構外地	115
第 27 图	第 14 ~ 15 号性十重模次印(15)	44	第 81 図	第 7 号土器取扱印と七块式採取地	115
第 28 图	土製・燒土製古土山・西折形印	44	第 82 図	第 12 号土器取扱印と土壁上式採取地	115
第 29 图	A 区道構外出土土石器品属図(1)	47	第 83 図	磨石道構外から採取した土の重量全品	116
第 30 图	A 区道構外出土土石器品属図(2)	48	第 84 図	配石道構外から採取した土の塊分量	116
第 31 图	十郷の山耕・耕耘地開拓	49	第 85 図	第 12 号配石道構外より脱いだ土塊外に残存する剥離の粗筋繊維	118
第 32 图	土壤条件方図	49	第 86 図	第 12 号配石道構外に残存する原野の肌筋骨組成	118
第 33 图	B 区ザグリット・配置図・走査配置図	55	第 87 図	第 7 号土器および第 12 号土器に残存する原野の粗筋骨組成	118
第 34 图	フラスコ式土石器品属図	56	第 88 図	第 12 号配石道構外上器に残存する粘土の粗筋骨組成	118
第 35 图	ビット式導開図	57	第 89 図	第 12 号配石道構外上器に残存するスチロール組成	120
第 36 图	土壤剖面図	58	第 90 図	第 7 号土器に残存するナゲール組成	122
第 37 图	地上遺構表面図	58	第 91 図	第 7 号土器および第 12 号土器に残存するアキロール組成	122
第 38 图	D 区道構外出土十士番柄形印(1)	59	第 92 図	第 12 号配石道構外上器に残存するスチロール組成	123
第 39 图	D 区道構外出土十士番柄形印(2)	59	第 93 図	第 12 号配石道構外上器に残存するアルコール組成	123
第 40 图	H 区道構外出土土石器品属図(3)	51	図 15	粗筋の粗筋骨組成と状況検定	121
第 41 图	D 区道構外出土十士番柄形印(4)	52	図 16 図	第 16 号配石道構外に残存する剥離の粗筋骨組成と状況検定	121
第 42 图	D 区道構外出土十士番柄形印(5)	53	図 85 図	第 7 号土器に残存する粗筋の粗筋骨組成と状況検定	121
第 43 图	D 区道構外出土十士番柄形印(6)	54	図 96 図	第 12 号土器に残存する粗筋の粗筋骨組成と状況検定	121
第 44 图	D 区道構外出土十士番柄形印(7)	55	図 97 図	配石道構外上器に残存する粗筋の粗筋骨組成による種類差異検定	123
第 45 图	D 区道構外出土十士番柄形印(8)	66	図 98 図	種類標準と採取量	126
第 46 图	D 区道構外出土十士石器品属図	66	図 99 図	配石道構分類図	129
第 47 图	學分布図	68	図 100 図	記念十郷の山耕×越前市開拓	130
第 48 图	B 区道構外出土新古鋤印(1)	75	図 101 図	記念十郷の長柄方舟	130
第 49 图	B 区道構外出土土石器品属図(2)	76	図 102 図	記念石道構外図	134
第 50 图	B 区道構外出土土石器品属図(3)	77	図 103 図	ラヌコ式土器の口幅・紀述枠開拓	135
第 51 图	B 区道構外出土土石器品属図(4)	78	図 104 図	カヌコ式土器の口幅・紀述枠開拓	135
第 52 图	B 区道構外出土十士石器品属図(5)	79	図 105 図	後開削土器・史跡図	142
第 53 图	B 区道構外出土土石器品属図(6)	80	図 106 図	東角地方法出土の後陣骨頭～山型の上部	143
第 54 图	B 区道構外出土土石器品属図(7)	81			

## PL 目次

PL 1 A区配石遺構断面図(1)	147	PL 15 B区遺構外出土土器(1)	161
PL 2 A区配石遺構断面図(2)	148	PL 16 B区遺構外出土土器(2)	162
PL 3 第4～8、10号配石遺構	149	PL 17 H区遺構外出土上器(3)	163
PL 4 第11～13号配石遺構	150	PL 18 A区・B区遺構内・外出土石器(1)	164
PL 5 第14～16号配石遺構	151	PL 19 B区遺構外出土石器(2)	165
PL 6 第17、18、20、21号配石遺構	152	PL 20 B区遺構外出土石器(3)	166
PL 7 第22、24～25号配石遺構	153	PL 21 B区遺構外出土石器(4)	167
PL 8 第29～33号配石遺構、低級灰石、ピット器	154	PL 22 B区出土土器(1)	168
PL 9 第4～9号二重	155	PL 23 B区出土土器(2)	169
PL 10 A区第11～13号土器、第15号灰土遺構、B区遺物出土状況	156	PL 24 B区出土土器(3)	170
PL 11 H区遺構	157	PL 25 B区出土土器(4)・石製品	171
PL 12 A区遺構内・外出土上器	158	PL 26 花崗岩の零散	172
PL 13 B区第100号カラスコ灰土器出土土器	159		
PL 14 H区遺構内出土土器	160		

## 表目次

表 1 社穴底ピット調査表	43
表 2 灰化採取地点レポートと現行脂肪抽出手帳	117
表 3 掘出された花粉化石の種類数	125

# 第Ⅰ章 遺跡の環境

## 1. 遺跡の位置と立地

鹿角市は、秋田県の最北東部に位置し、東では岩手県と、北では青森県と県境を接する。

奥羽山脈の一峰である四角岳に源を発した米代川は、湯瀬渓谷を下り、八幡平地区に出、熊沢川を合流し、その川幅を広げる。米代川は鹿角盆地西側を北流し、水田地帯に豊かな水を恵み、十和田地区で大湯川、小坂川を合流し、水量を増し、大館盆地へと抜ける。

米代川やその大小の支流によって作られた舌状台地は、盆地東側に多く発達し、縄文時代から中世に至る遺跡が数多く分布している。

国の特別史跡「大湯環状列石」及び周辺遺跡（大湯環状列石周辺に広がる大湯環状列石と直接又は間接的に関連ある遺跡）もその一つであり、大湯川と豊真木沢川によって作られた南西方向に緩かに延びた標高180mほどの通称「風張台地」上にあり、一本木・寺坂両集落のほぼ中間に位置する。

周辺遺跡については、昭和48年から51年にかけて、遺跡の保護と保存対策に資するため分布調査が実施された。その結果、台地上には大規模な環状列石や配石造構、縄文時代後期の住居跡などが検出されたことから、周辺遺跡の範囲は大湯環状列石を中心として東西約650m、南北400mに及ぶことが判明した。

本年度の調査区は、県道大湯花輪線の南東側、2ヶ所を選び便宜上A区・B区と仮称した。

A区は、野中堂遺跡の東方300mの地域で、昭和51年の分布調査の際、第3の環状列石が検出された地域として注目されていた所である。A区は昨年度の調査区西側に隣接する区域で、環状列石の北西部を明らかにするよう設定された区域である。

B区は、野中堂遺跡および収蔵庫の北東側隣地で、周辺遺跡のほぼ中央にあたる。昭和56年のトイレ増築に先立ち、B区隣地の発掘調査を実施した。その結果、2基の土壙と多量な遺物が出土し、大湯環状列石の性格解明の一助となる資料を提供したことから、A区と同様に注目されていた所である。

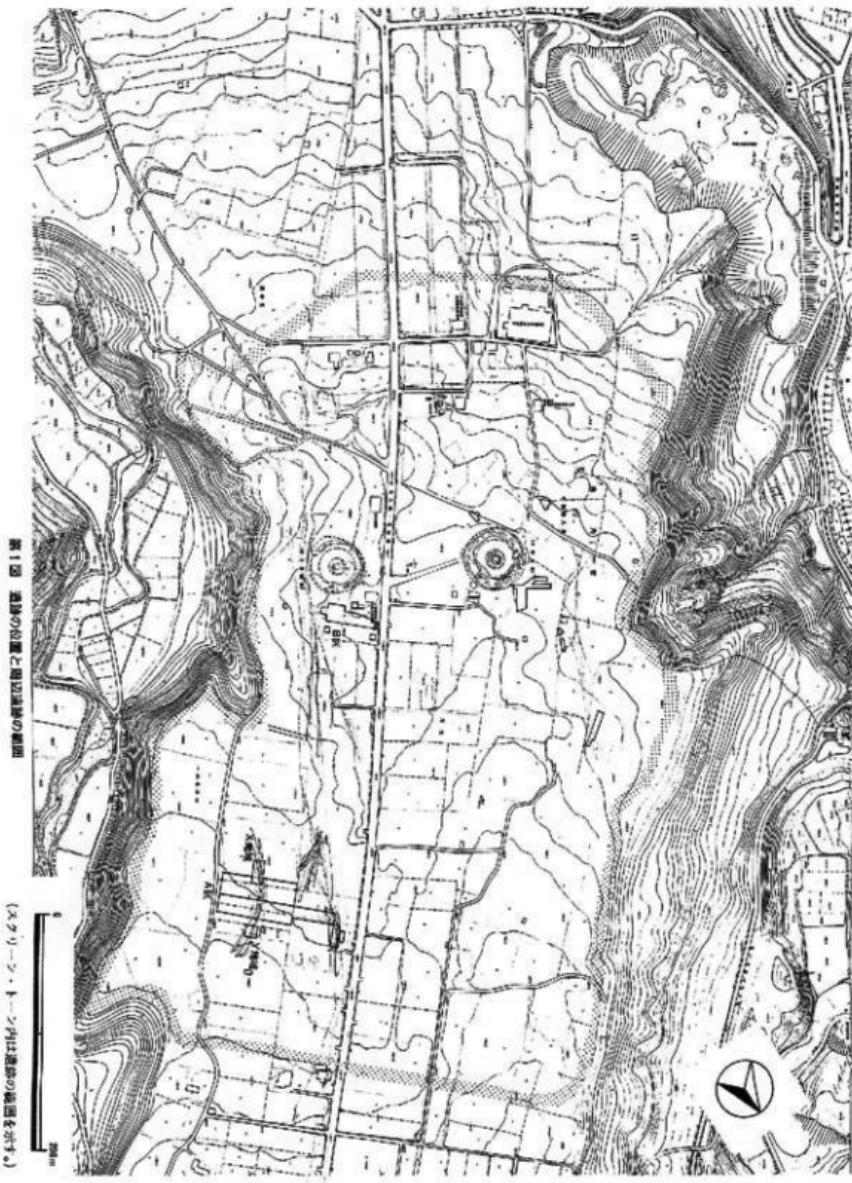
周辺遺跡、野中堂・万座両環状列石の存在する台地の現況は、主に果樹園（リンゴ）、畑地として利用されている。特に秋、樹々にたわわと紅く実ったリンゴ園の光景はすばらしいものである。

（藤井 安正）

## 2. 遺跡周辺の地質

鹿角盆地は、東は奥羽脊梁山脈、西は高森山地に囲まれ、北に開いた三角形の盆地である。東西両縁は断層となっている。

脊梁山脈は800～1100mの標高で、四角岳(1003m)、皮投岳(1122m)、五ノ宮岳(1115m)



等を中心とする急峻な壯年期の山地であり、地質は、下位より安久谷川層、瀬の沢層、大葛層、大滝層、遠部層などの新第3紀の堆積岩類、火山岩類となる。

高森山地は、400~500mの丘陵性の山地で、東側と同様新第3紀中新世の大葛層、大滝層、遠部層、さらに槽内層で構成されている。鹿角盆地はこれらの山地に取り囲まれ、台地・段丘・低地がいたるところに見られる。とくに北部は十和田火山由来のシラス台地が分布し、東部や南部は脊梁山脈を源とする河川によって形成された扇状地地形が特徴である。盆地内の段丘は從来は、高位面、中位面、鳥越面、毛馬内面(内藤1970)という分類がされてきたが、最近の調査により、高位より柏木森面、小坂面、小豆沢面、鳥越面、白欠面、大里面、菩堤野面、毛馬内面の8段に区分される(第2図 1983年秋田県)。次にそれぞれについて簡単に記載する。

柏木森面：200~380mの標高で、段丘の中で最も高い位置にある。崖土神~小豆沢ではきちんととした段丘を示すが、北方の草木、つづじ平では開析されて丸みをおびた段丘面になっている。構成層は粒径数cm~50cmの亜角礫が雖然と混入した不淘汰礫層であり、地表面付近は風化が進み、礫はくさってマトリックスとほとんど同じかたさになっている。

小坂面：小坂川左岸の小坂高校付近に分布する標高210~240mの波状の起伏をなした地形面である。構成層は灰白~赤灰色(ピンク)をした軽石質火山灰層で、或層した形態をとらずに急激に凹地をうめて堆積し、定着した痕状を示す。十和田湖西方では最下位の火山灰である。鉱物組成は、石英や角閃石を含み、全体に風化しており、輝石は変質した形状を示す。起源マグマは石英安山岩質と考えられる。

小豆沢面：崖土神~谷内に分布し、標高は180~300mである。構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に30cmくらいの角礫、亜角礫が混入する礫層で、全体的に層理は不明瞭で塊状を呈す。

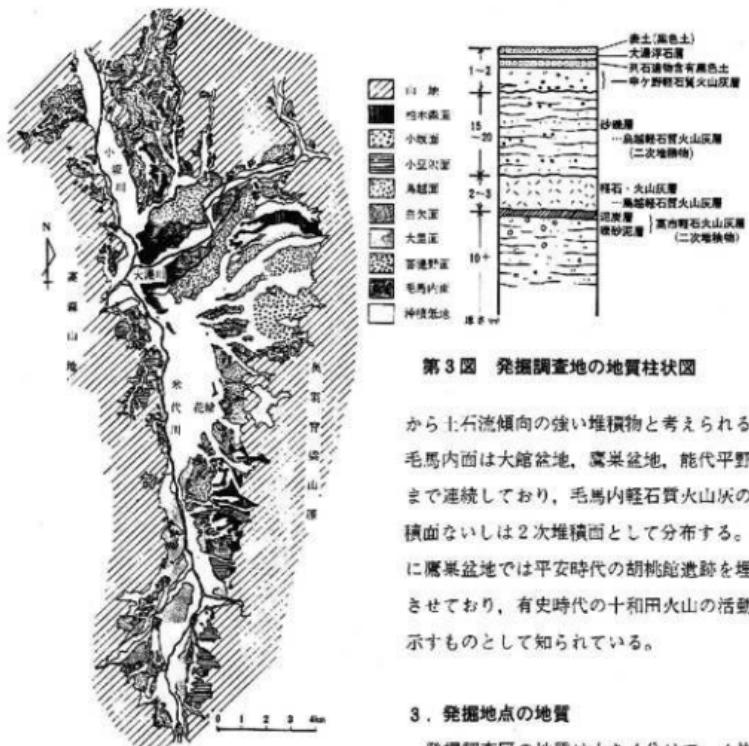
鳥越面：大湯環状列石など多くの遺跡をのせ、盆地内に最も広く分布する。標高は150~280mで、無層理の灰白色の軽石質火山灰層またはその二次堆積物となる。また炭化木片をしばしば混入し、その年代測定より約12700±270年前に形成されたと考えられる。

白欠面：盆地南部の夜明島付近に発達する標高200~230mの河岸段丘面で、ほとんど開析をうけてなく、平坦面がきれいに保存されている。構成層は薄い河成の礫層である。

大里面：大里、松館、谷内付近に分布する面で、標高は150~170mの河岸段丘で、構成層はくずれやすい河床性の礫層を主とし、田泥質の砂礫層が重なる。

菩堤野面：北部の草木、菩堤野に発達する沖積扇状地である。亜円~亜角礫層で構成され、最上部に大湯浮石層がみられる。

毛馬内面：大湯川流域に分布する最低位の段丘面である。構成層は、毛馬内軽石質火山灰であるが、この軽石流にともなって、さまざまな大きさ(数cm~数10cm)の礫層をともなうこと



第2図 鹿角盆地の地形分類図

灰の二次堆積物であり、軽石や砂礫からなり、地層中に平行ラミナやクロスラミナが発達する。この上に薄い泥炭をはさみ、厚さ2~3mの鳥越軽石質火山灰層が重なる。本地區では、腰廻りに最も厚く堆積しているが、発掘区域では、極端に薄くなっている。この上に水の作用によって堆積した鳥越軽石質火山灰層の二次的堆積物である軽石質段丘砂礫層がある。さらにこの層の上に風化のすんだ大形の軽石嚢を含む串ヶ野軽石質火山灰層が重なる。

最上部は黒色土と黑色土の間に大湯浮石層がみられる。(第3図)

#### 大湯浮石層について

大湯軽石層ともいわれ、藤岡一男、佐藤久による大湯環状列石調査報告(1953)の中で、環状列石の堆積的観察、遺物含有黒土とともに特徴ある火山灰として記載されている。形成時代は浮石層と遺跡との関係から繩文後期から奈良時代の間と位置づけられた。この浮石層は、鹿角

第3図 発掘調査地の地質柱状図

から土石流傾向の強い堆積物と考えられる。毛馬内面は大館盆地、鷹巣盆地、能代平野にまで連続しており、毛馬内軽石質火山灰の堆積面ないしは2次堆積面として分布する。特に鷹巣盆地では平安時代の胡桃館遺跡を埋没させており、有史時代の十和田火山の活動を示すものとして知られている。

#### 3. 発掘地点の地質

発掘調査区の地質は大きく分けて、4枚の大湯浮石層よりなる。最下部は高市軽石質火山

全域で当時の地形面をおおう形で堆積しており、全体に連続性もよい。一般に十和田湖に近くなるほど粒径や層厚が大きくなる傾向があり、十和田火山起源と考えられる。しかし地形的に凹地で厚くなっている、地表に近いところに堆積したため人工的な擾拌が進んでいる。局的に耕作されたり、削剥されたりしておらず、地域的な層厚曲線図を作るのは困難な点がある。堆積の状態から、降下堆積は比較的短期間に行われたと考えられるが、上位の黒色土が形成されるまでに、かなりの時間経過が考えられ、雨水などによる火山灰の消失、移動があり、保存状況に地域差がある。発掘地域の浮石層は十和田湖にも比較的近く、保存状況もよい。しかし同じ地点において厚さ数cm～30cmと幅がある。大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)では、大湯浮石層を色彩、粒子径、固結の仕方等により、5層に分けています。しかし鉱物組成的にはいずれの層も角閃石が認められない点、斜方輝石が單斜輝石よりも多くなっており、すべて一連のものと考えてよいと思う。今回の調査では、大湯浮石層の一部に、固結し、緻密になった部分が見られた。特徴として、①広がり（地域的にせまい）②堆積構造（その内部に平行ラミナやクロスラミナなど水の作用が働いたことが認められる）③重鉱物組成（角閃石がみられないなど下部のものと変わらない）。以上のことから、降下、堆積はほとんど同時に行われたが、その後二次的に水の作用により、浅い水たまり（沼？）が形成され、上部のみが淘汰されて形成されたものであろう。

（鎌山 健一）

#### 参考文献

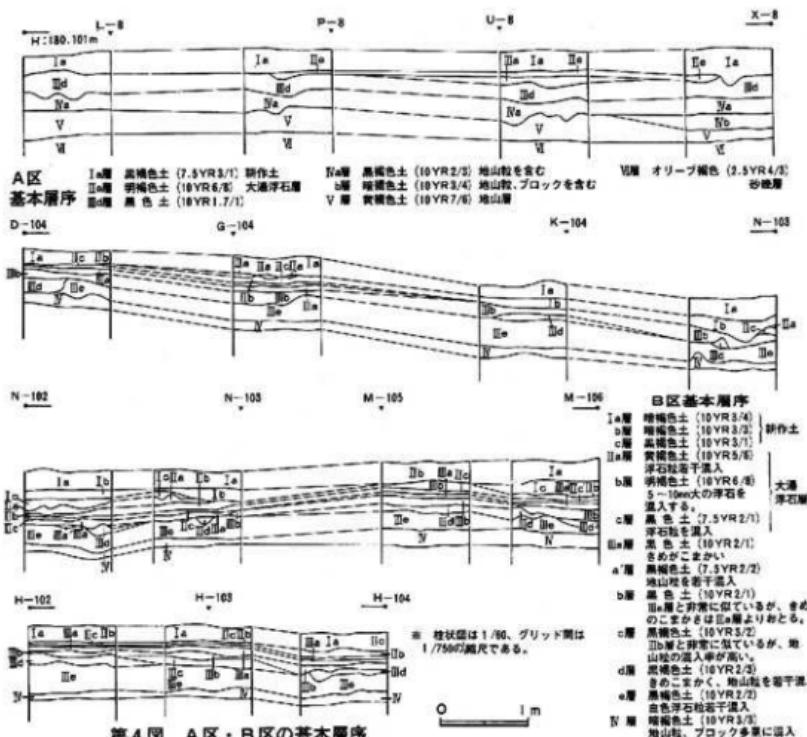
- |   |             |
|---|-------------|
| 内藤博夫 「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」 地理学評論 第39巻第7号     | 1966年       |
| 内藤博夫 「秋田界花輪盆地および大庭盆地の地形発達史」 地理学評論 第43巻第10号      | 1970年       |
| 中川久夫・他 「十和田火山発達史概要」 東北大地質古生物研究報 第73号            | 1972年       |
| 藤本幸雄 「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成（その1）」 昭和54年度人間工業高校研究紀要 | 1980年       |
| 斎藤仁子・大池昭二 「十和田新期火山の地質と岩石」 地球科学 38巻2号            | 1984年       |
| 秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」                   | 1981年・1982年 |
| 鹿角市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)」                 | 1985年       |

#### 4. 遺跡の層序

ここでは表土から申ヶ野軽石質火山灰層と考えられる黄褐色火山灰層までについて記述する。それ以下の地質については3. 発掘地点の地質を参照されたい。なお、A区とB区とはかなりの距離を有しているため、基本的にはI～IV層に分層したもの、各層の細分にあたっては別個のものとした。またA区については昨年度の分層基準と同一にした。

第I層は大湯浮石層（II層）までの堆積層で、表土の厚いB区においては、さらに3層（Ia～Ic層）に分層できる。いずれも耕作土である。

第II層の大湯浮石層は、耕作による擾乱がIII層にまで及ぶB区南部（J-101～102, K-L-101～103）を除くほぼ全域とA区配石造構群域以南において観察された。特にB区最南東



第4図 A区・B区の基本層序

端のNラインでは15~25cmの層厚があり、粒子の粗細・色調・浮石の含有量から3層(IIa, IIb, IIc層)に細分された。なお、大湯浮石層については青森県及び岩手県北部に堆積している十和田a降下火山灰と一連のものであり、約1000年前の噴火によって噴き上げられた降下軽石層(大池:1972)と考えられている。

第III層は大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土(IV層)までの黒色または黒褐色を呈する土層である。A区配石遺構の配石は本層上位において露頭、その全容は下位において確認されている。B区においては、本層は5層に細分され、遺構はその最下層IIIe層において確認された。IIIa~IIId層が繩文時代の造物包含層であり、特にIIIb層からは多量の後期前葉~中葉の造物の出土があった。

第IV層は地山(下位火山灰)直上の層で、暗褐色を呈し、若干粘性があり、しまりのある層である。第V層直下の第VI層は先に述べたとおり、申ヶ野火山灰層と考えられる黄褐色を呈する火山灰層である。遺構はIII層下位を掘り込み面とし、IV層及び本層(一部にはVI層…鳥越軽石質火山灰層)を掘り込み、壁・底面としている。本層は上位に堆積する大湯浮石に対応させ、

下位火山灰、あるいは関東ロームに相当するところからロームと呼ばれているものである。本報告書では、本層をV層以外に下位火山灰、地山と表現している。  
(秋元 信夫)

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 調査に至るまでの経過

調査に至るまでの経過については、大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)に、1. 大湯環状列石発見から今日までの経過、2. 大湯環状列石について、3. 大湯環状列石周辺遺跡について、として詳しく述べているので、ここでは簡単にその概要を記するに留める。

昭和6年、中通地区の耕地整理中に発見された大湯環状列石は、浅井末吉・諏訪富多・諏訪綱俊・高木新助氏等を中心とする地元、大湯郷土研究会や、武藤一郎・深沢多市氏や喜田貞吉博士等多くの県内外の先学・諸氏の手により、調査・保護されてきた。

大湯環状列石の大規模な発掘は昭和17年の神代文化研究所による発掘に端を発する。この調査は考古学的研究とは別の目的をもって実施されたものであり、調査方法・記録・分析等に問題を残しながらも、ほぼ大湯環状列石の構造を解明できた事、これ以降の調査の灯火となつた事等から軽視できない。

太平洋戦争の激化とともに人々の視野から遠ざけられていたこの遺跡も、終戦後間もなく、学術的対象として学界の表面に浮上してくる。昭和21年8月には甲野 勇・江坂輝彌氏の祝賀があり、10月15日からは秋田県・朝日新聞社共催による3週間に及ぶ発掘調査が実施された。この調査には甲野・江坂両氏の他に、後藤守一・吉田 格氏らが参加、初めて学術的に遺跡の追求がなされた。諸般の事情から、調査後すぐに報告書は刊行されなかつたが、その調査の結果は甲野氏により昭和22年2月の人類学会例会において発表され、甲野・後藤両氏により、數種の雑誌に紹介された。また甲野氏等に同行した週間朝日の記者は「日本にも巨石文化址」と題して発掘当時の状況、調査経過などを記事にしている。これらの論文、記事等により、大湯環状列石は広く知れわたり、遺跡の重要性が再認識されるに至つた。

昭和26年、文化財保護委員会(現文化庁)は、第1回文化財専門委員会に愛知県吉胡貝塚とともに大湯環状列石の国営発掘を諮問、可決されたことから、翌27年との二次にわたる発掘調査を実施、多くの成果を上げた。

このような調査を経て、この遺跡の重要性が判明するにつれ、遺跡の保存・保護も大きな問題となつた。昭和25年6月30日には秋田県教育委員会によって史跡に仮指定され、翌年12月26日には国指定史跡に、さらに昭和31年3月31日付で国指定特別史跡に指定された。

昭和40年代になると、急速に道路整備が進み、それに伴い、土地開発事業も増加した。大湯環状列石周辺も例外ではなく、遺跡の北東約500mに「鹿角大規模農道」の建設が計画され、

南西約300mの地点で砂利採取事業が行なわれるなど、遺跡周辺の土木工事が多くなってきた。また、周辺農家の家屋改築が遺跡近辺へと広がる様子を見せ、農業の機械化は、周辺に存在が予想される関連遺跡の存続を脅かしつつあった。

そのため、大湯環状列石と関連ある遺跡の範囲確認を目的に、秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会により昭和48年には緊急分布調査、翌49年から51年には詳細分布調査が実施された。

この調査により、特別史跡大湯環状列石と直接あるいは間接的に関連ある遺跡（大湯環状列石周辺遺跡）の範囲は列石から北東約300m、南西約180mに及ぶことが判明した。

この結果をもとに鹿角市は、(1)歴史広場としての公開による学術振興、(2)環境保護整備の具体化と実施、(3)施設の設置と教育作用の強化を柱とする「特別史跡大湯環状列石保存管理計画書」を作成、以後この計画書を基本指針とし、主に指定地拡大の問題に取り組んできた。さらに昭和59年からは、上記保存管理計画書を具体化し、今後の実施計画の基礎資料を作成することを目的に周辺遺跡の発掘調査が開始された。第1次（59年）調査は昭和51年の分布調査において、その存在が確認されていた野中堂環状列石北東約300mの配石遺構群の解明を主目的におこなわれ、本年度は同目的の他に野中堂環状列石近傍の遺構の確認という目的を達成するため、5月7日より調査が開始された。

（秋元 信夫）

## 2. 調査要項

1. 遺跡名 大湯環状列石周辺遺跡

2. 調査地、発掘面積

A区 鹿角市十和田大湯字一本木後口102他 1,320m<sup>2</sup> (第1次調査地の追調査地300m<sup>2</sup>を含む)

B区 鹿角市十和田大湯字一本木後口139 550m<sup>2</sup>

3. 調査期間

発掘調査 昭和60年5月7日～昭和60年9月18日

整理・報告書作成 昭和60年9月19日～昭和61年3月31日

4. 調査主体者 鹿角市教育委員会

5. 調査担当者 秋元信夫（鹿角市教育委員会 社会教育課）

6. 調査参加者

調査指導員 墓澤泰時（秋田県教育庁文化課 学芸主事）

調査員 鎌田健一（秋田県立十和田高等学校 教諭）

成田典彦（鹿角市立尾去沢中学校 教諭）

三ヶ田俊明（小坂町立七瀧小学校 教諭）

藤井安正（鹿角市教育委員会埋蔵文化財調査員）

調査補助員 佐藤 樹、藤井富久子、浅石闘子、菊池 明（昭和60年8月退職）  
三ヶ田曉子（昭和60年5月退職）、杉江雅之  
作業員 木村千鶴江、木村ヒロ、木村イミ、千葉ヨリ、苗代沢ノブ、  
苗代沢静子、苗代沢敬子、宮沢キヨ、宮沢トミエ、柳沢勝江、  
柳沢テル、柳沢ヤス、柳沢栄子、柳沢恵美子

#### 7. 社会教育課

課長 佐藤一彦  
課長補佐 安田孝司  
文化財係長 柳沢悦郎（庶務担当）  
主事 秋元信夫（調査担当）  
臨時議員 目時キミ子（庶務）

#### 8. 協力機関・協力者

文化庁記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、蒂広畜産大学、  
柳沢賢哉、工藤芳雄（土地所有者）

（秋元 信夫）

### 3. 調査の方法

59年度の第1次調査において、大湯環状列石周辺遺跡に所在する配石遺構群は、幅30mの帯状にさらに南西→北東方向に延びることが予想された。このため本年度はその南北方向の範囲確認を目的に、59年度発掘区の南西隣接部を調査対象とし、2カ年の発掘区全域をA区とした。また、大湯環状列石（野中堂遺跡）近傍の遺構確認を目的として、野中堂環状列石外帶より北東方向11~50mに調査区を設定してこれをB区とした。調査対象面積はA区1170m<sup>2</sup>、B区1383m<sup>2</sup>であるが、A区では51年度調査地X地域と59年度発掘区の中P~S-11~13グリッドについても調査した。グリッドは第1次調査のもとを延長した。N-49°Wを基準線とし、それに直交する線を5m単位とした。杭番号はアルファベット（北西→南東方向）と算用数字（北東→南西方向）で付し、西隅の杭を以てグリッドを呼称した。B区ではA区からL線を延長したが、便宜上100番台を用いた。尚、L-101~L-8間は240mである。

表土からの除去作業は全て手掘りに依る分層発掘とし、できるだけ上面での遺構確認に努めた。遺構外の遺物は層位・グリッドごとに一括で採集したが、A区とB区の任意の6グリッドのⅢ層以下と遺構内の遺物は、1点ずつの図化・レベル実測後に取り上げることを基本とした。遺構の番号は種類別に発見順に付したが、A区では第1次調査に引き続けて、B区ではA区遺構との混同を避けるために101号より用いた。ただし調査結果から、A区で配石遺構へ訂正し

た土壙が数基あり、B区で土壙を形態別に分類したので、調査時と本報告書の遺構番号には多少異同がある。遺構精査は、配石遺構は四分法、土壙・焼土遺構は二分法を原則とした。遺構等の実測は簡易通り方測量を用い、配石・焼土遺構、遺物の微細図は1/10、土壙、遺物の出土状況は1/20の縮尺で図化した。写真撮影は各段階において白黒、リバーサルに収めた。

尚、遺跡の環境、性格の自然科学分野からの解明のため、花粉分析、脂肪酸分析を依頼した。

(藤井富久子)

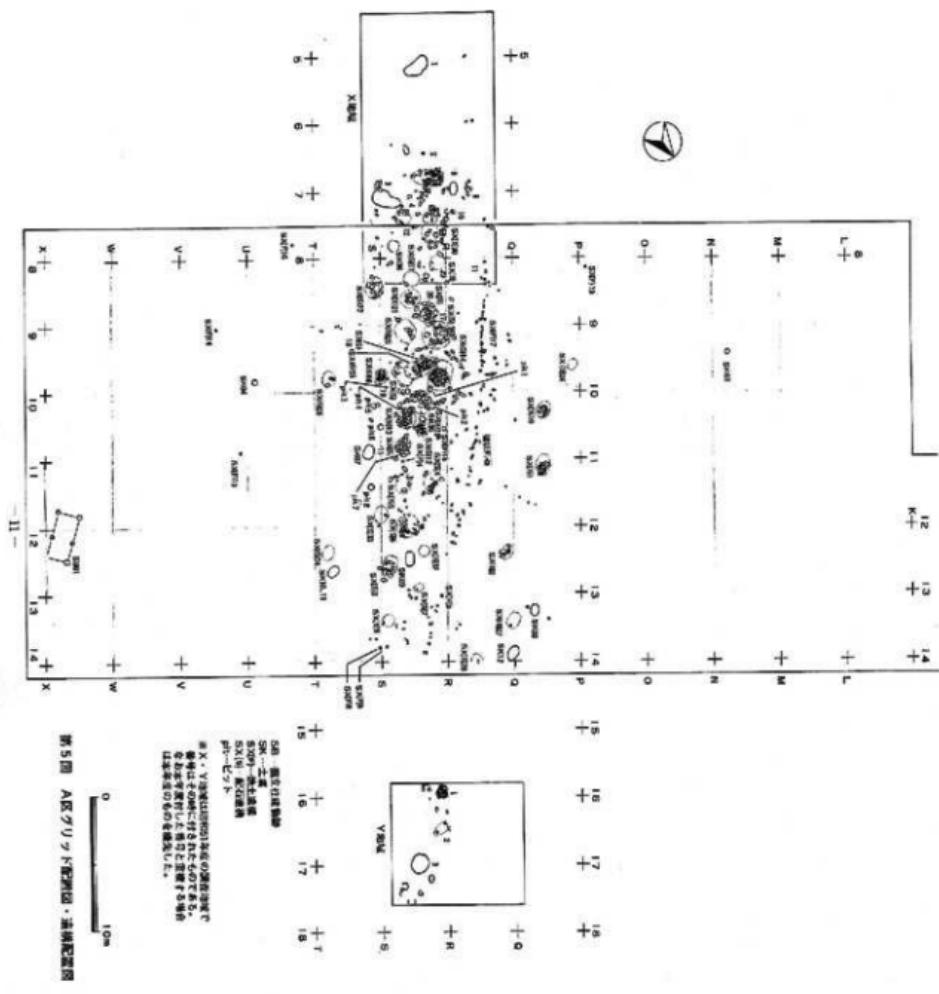
#### 4. 調査の経過

大湯環状列石周辺遺跡の第2次発掘調査は昭和60年5月7日より開始され、1870m<sup>2</sup>（A区1320m<sup>2</sup>、B区550m<sup>2</sup>）の調査を終了したのは9月18日であった。以下調査日誌に基づき、調査経過の概要を述べる。

5月7日、作業員への作業説明、連絡事項伝達の後、A区の本年度調査区の南東端より粗掘を開始する。同月10日、南東部（T～X-7～10グリッド）の粗掘、遺構確認を終了、配石遺構が位置すると予想される中央部（P～S-7～10グリッド）を残し、北西部（K～O-7～10グリッド）の粗掘へと移る。同月24日、北西部の粗掘、遺構確認を終了する。尚、南東部からは土壙1基、焼土遺構3基、北西部からは土壙、焼土遺構それぞれ1基を検出した。25日から中央部の粗掘と併行して南東部、北西部の遺構精査を行う。6月中旬にはA区全ての粗掘を終了し、16基の配石遺構、3基の土壙、6基の焼土遺構、1条の弧状列石を確認した。以後、A区遺構精査と併行してB区の調査を行う。B区の調査は、層序・遺物出土状況を把握するためにD-103・105、G・I-103、L-105、M-102の6グリッドを先に調査し、後E～Lグリッドへと拡張した。この6グリッドでは全ての遺物の図化とレベル測量を試みたが、出土量が非常に多く難航し、黒色土中の遺構確認も容易ではなかった。6月下旬、A区の2基の配石遺構で壁塗を確認する。7月24日、報道関係者への中間発表と12号配石遺構の壁塗の取り上げ、脂肪酸分析のための土壙採取を行う。8月に入りA区では、本年度調査区内の調査をほぼ終了し、51年度調査地X地域及びP～S-11～13グリッド（59年度調査区）内の全ての遺構確認・調査を目標に作業を行う。8月30日からはB区の遺構確認・調査に全力を注ぎ、作業員打ち切りとなった8月末日以後も担当者・調査員・補助員で調査を続ける。

調査開始以来、多数の研究者や見学者の来訪があったが、9月14日の現地説明会には80余名の参加者を迎えた。同月17日、全ての調査、配石遺構の復原、航空写真、最終写真撮影を終了し、翌日、後片付け、運搬作業を行った。4カ月半に渡る調査で、A区では配石遺構24基、弧状列石1条、土壙10基、焼土遺構6基、柱穴状ピット8基の計49基の遺構の検出、ダンボール箱5箱の遺物の出土があり、B区ではフラスコ状土壙7基、Tピット2基、土壙8基、焼土遺構3基の計20基の遺構の検出、53箱の遺物の出土があった。

(藤井富久子)



第5回 八ヶ岳クリーク鉱床・深淵鉱床  
 地質図  
 (八ヶ岳クリーク鉱床の地質構造)

## 第Ⅲ章 A区の検出遺構と出土遺物

大湯環状列石周辺遺跡第2次調査において、A区で検出された遺構は配石遺構、弧状列石、土壙、柱穴状ピット、焼土遺構である。この章では上記の検出遺構について記述し、A区の小結を本章6で、配石遺構の分析・考察については第Ⅳ章1でまとめる。

なお、第1次調査で、精査まで至らなかった遺構については、第2次調査で精査を行なった。その結果についても記述する。

### 1. 配石遺構とその出土遺物

周辺遺跡で「配石遺構」としたものは、大小の河原石を組み合せて作った組石遺構、石を離然と積み重ねたものや配置したもの、このほか環状列石などと呼ばれている遺構の総合的な名称として使用した。また、本遺跡では、土壙上に1個でも石が配置されているものや、石の抜き取り痕が確認されたものも、配石遺構と判断し、その範囲に入れた。

第2次調査A区で検出された配石遺構は、調査区のほぼ中央部、P～S-7～10グリッドに集中し、第1次調査及び、昭和51年の分布調査で確認したX地域配石遺構を連続させる状態で検出された。配石遺構は基本層序第Ⅱ層（大湯浮石層）直下で、その一部を現わし、第Ⅲd層下位においてその全容が明らかとなる。第2次調査で検出された配石遺構は、ほぼ完全な形で残っているもの、その形態を推察することのできるものが多く、配石遺構を解明する上で、良好な資料が得られた。以下第1次調査で確認された第4～8号配石遺構を含め、精査結果を記述する。

#### 第4号配石遺構（第6図）

配石遺構群域の中央よりやや北側（R-11グリッド）に位置し、南東1mの地点に第5号配石遺構が隣接する。第Ⅲd層下位において、8個の石と7箇の石の抜き取り痕を確認した。

配石は破壊を受けており、推定される構造は、配石縁辺部に7個以上の立石を楕円形になるように一巡させたものと考えられ、その内部中央部に僅かに石頭を表わすように埋設させた立石、これを取り囲むように、4個以上の平石を配置した構造をもつものと考えられる。本来は第16号配石遺構に類似するものであろう。配石の規模は推定で長軸150cm、短軸90cmを測る。使用される石材の大きさ、形は様々であり、立石とされるものは長さ31～40cmを測る不規則な形状のもので、その他のものは12～32cmとやや小さめで偏平な石である。

配石下より検出された土壙は、配石の位置と一致する。その規模は長軸131cm、短軸90cmを測り、楕円形を呈する。長軸方向はN-54°-Eを指す。第Ⅲd層下位から掘り込まれ、VI層の砂礫層まで達し、深さ70cmを測る。底面は平坦で、堅くしまっており、ほぼ全域にわたって赤色範囲が認められた。遺構内より遺物は出土しなかった。

壙土は、ブロック状に8層に分層された。人為的な堆積状況を示す。

本遺構の構築時期は、配石周辺から出土した土器から判断して、縄文後期前葉と考えられる。

#### 第5号配石遺構（第6図）

配石遺構群域の中央よりやや北側（R-11グリッド）に位置し、北西1mの地点に第4号配石遺構が隣接する。第Ⅲd層下位において、12個の石と18個の石の抜き取り痕を確認した。しかし破壊がすみ、構築時の位置を保っているものは、中央にある大型の石3個だけである。

配石の推定される構造は、その縁辺部に13個の石（平石か？）を椭円形に一巡させるもので、一部で2重をなす。その内部に数個～十数個の偏平な石を配置したものと考えられる。推定される規模は長軸158cm、短軸108cmを測る。使用される石材は、大きさ、形状とも様々である。平石として使用されるものは、36～48cmとやや大きく偏平なものである。

配石下より検出された土壌は、配石の位置と一致し、長軸148cm、短軸111cmを測り、椭円形を呈する。長軸方向はN-49°-Eを指す。第Ⅲd層下位より掘り込まれ、第Ⅶ層の砂礫層まで達し、深さ73cmを測る。底面は平坦で、堅くしまり、ほぼ中央に径45×110cmほどの赤色範囲が認められた。埋土はブロック状に12層に分層され、人為的な堆積状況を示す。

遺物は、配石及び下部土壌からは出土しておらず、その構築時期を明らかにすることはできないが、配石周辺から出土した土器より判断して、後期前葉と考えられる。

#### 第6号配石遺構（第6・22図）

配石遺構群域の中央よりやや北東側（R-11・12グリッド）に位置し、第5号配石遺構が南西側2mほどの地点に隣接する。配石の全容は第Ⅲd層下位において明らかとなった。

配石は破壊を受け、多くの石が取り除かれている。そのため26個の石と8個の石の抜き取り痕から、その構造を推定するしかない。推定される配石の構造は、縁辺部に大型の石を使用し、径が150cmほどの円形になるように巡らし、その内部にコブシ大から人頭大ほどの石を19個～数十個を数きつめたものと考えられる。

配石下より検出された土壌は、配石の位置より北寄りに僅かにずれて構築されている。その規模は長軸150cm、短軸152cmを測り、円形を呈する。長軸方向はN-65°-Eを指す。第Ⅲd層下位から掘り込まれV層まで達し、深さ70cmを測る。底面は小さな起伏をもつが、平坦な感じを受け、一様に堅くしまる。底面中央には径35×70cmほどの赤色範囲が認められた。

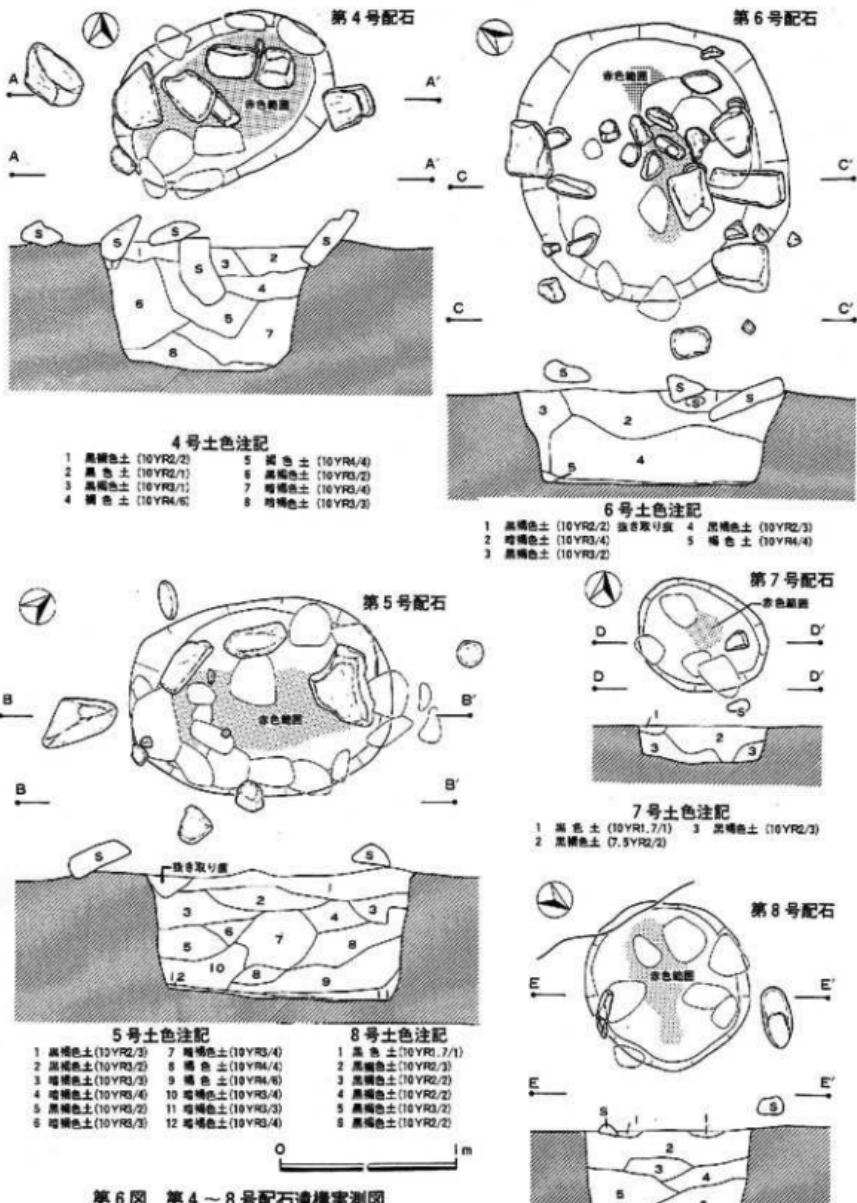
埋土は6層に分層された。4層に砂礫が多く混入することから人為堆積と考えられる。

土壌埋土中より縄文土器破片（第22図1～3）が5点出土した。1～3は無文地に平行沈線文が施されるもので、1・2は同一個体である。

本遺構の構築時期は、土壌内及び配石周辺から出土した土器から、後期前葉と考えられる。

#### 第7号配石遺構（第6図）

配石遺構群域の北東側（R-12グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位において、4個の石の



第6図 第4～8号配石造構実測図

抜き取り痕と、これらを取り囲むように地山粒を多く含んだ黒色土の落ち込み（土壌）を検出したことから配石遺構と判断した。なお、土壌上面に1個の石が認められたが、構築時の位置を保っておらず、本配石に伴うものかは不明である。

配石は、まったく破壊され、その構造を知ることができない。その規模は石の抜き取り痕から径70cmほどを測る。

配石下より検出された土壌は、石の抜き取り痕（配石）の位置とほぼ一致する。その規模は長軸77cm、短軸61cmを測り、楕円形を呈する。長軸方向はN-69°-Wを指す。第Ⅲd層下位より掘り込まれ、V層上位まで達し、深さ22cmを測る。底面はこまかな起伏をもつが、全体的に平坦な感じを受け、堅くしまり、中央に径18×23cmほどの赤色範囲が認められた。

埋土は4層に分層され、各層に地山ブロックが多量に混入していたことから、人為堆積と判断された。遺構内より遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期については、配石周辺から出土した土器破片より、後期前葉と考えられる。

#### 第8号配石遺構（第6図）

配石遺構群域の北東端（R-13グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位において、2個の石と7個の石の抜き取り痕を確認した。配石はまったく破壊され、2個存在する石も構築当時の位置を保っているとは言い難い。石の抜き取り痕から推察して、石を径1mほどの円形に巡ぐらしたものと考えられるが、これ以上の推察は不可能である。

配石下より検出された土壌は、石の抜き取り痕（配石）の位置とほぼ一致する。土壌の一部は風倒木痕により僅かに破壊を受けるが、その形態、規模が不明となるほどではない。その規模は長軸101cm、短軸92cmを測り、円形を呈する。長軸方向はN-50°-Eを指す。第Ⅲd層下位より掘り込み、VI層の砂礫層上面まで達し、深さ50cmを測る。底面は平坦で堅くしまり、中央に径35×75cmほどの赤色範囲が認められた。

埋土は、6層に分層され、各層に地山ブロック、砂礫が混入していたことから人為堆積と判断された。遺構内から遺物は出土しなかった。

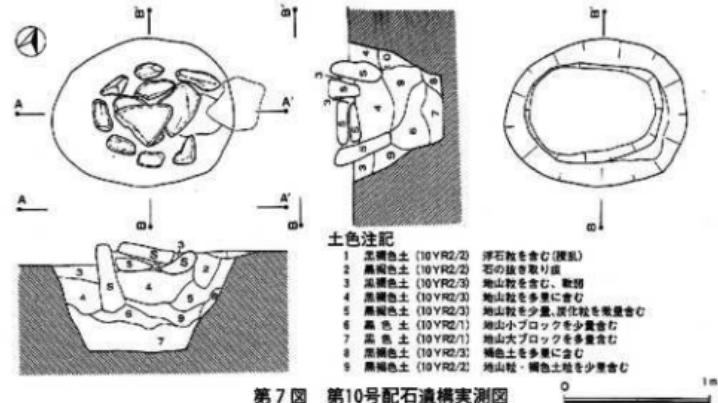
本遺構の構築時期は、配石周辺から出土した土器より、後期前葉と考えられる。

#### 第10号配石遺構（第7・22図）

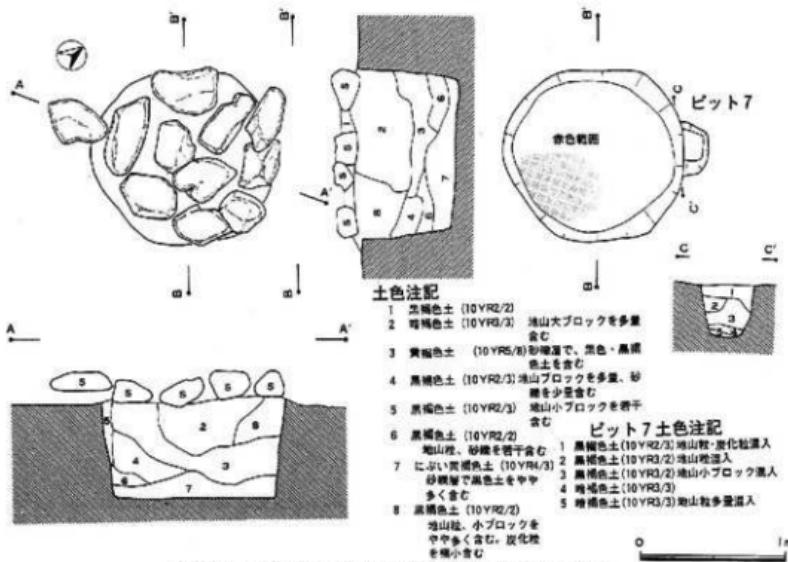
調査区のはば中央、配石遺構群域の北西端（R-10グリッド）に位置する。第Ⅲd層において縁辺部の立石を検出し、同層下位で11個の石と2個の石の抜き取り痕からなる配石の全容が明らかとなった。北東3mの地点に第1号配石遺構が存在する。

配石は、縁辺部に9個の立石を構成形に一巡させたものであるが、北東部の石が1個取り去られている。この内部に3個の偏平な石を重ね置いた構造をもつ。その規模は長軸115cm、短軸71cmを測る。縁辺部の立石は22~43cm大で、細長いものが使用され、これらの石が僅かに頭

を出す程度に埋設されている。内部に置かれるものは32~40cm大の形の不規則なものである。配石下より検出された土壤は、配石の位置より僅かに北西へ寄る。規模は長軸125cm、短軸101cmを測り、梅円形を呈する。長軸方向はN-64°-Eを指し、配石のそれとほぼ同一である。第Ⅲd層下位から掘り込まれ、第V層下位を底面とする。深さ61cmを測る。平坦で堅くしまる。赤色範囲は認められなかった。



第7図 第10号配石遺構実測図



第8図 第11号配石遺構・第7号柱穴状ピット実測図

埋土は12層に分層され、ブロック状を呈し、人為的な堆積状況を示す。

埋土上層より、縄文土器破片（第22図4・5）が出土した。5はミニチュア土器で、法量は不明。無文土器で、焼成は良好、色調は灰白色を呈する。4は深体形土器破片で、口縁部に平行沈線文が施文されるものである。

本遺構の構築時期は、遺構内及び周辺から出土した土器から、後期前葉と考えられる。

#### 第11号配石遺構（第8・22図）

調査区および配石遺構群域のほぼ中央（R-10グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位においてその全容が明らかとなった。第5号配石遺構をはじめとし多くの配石が隣接する。

配石は、11個のやや大型の石から構成される。その構造は縁辺部に27~57cm大の石6個を使用し、石の長軸方向を連結させ、円形に一巡させたもので、その内部に37~47cm大の細長いもの又は不規則な形状の偏平な石を配置したものである。その規模は長軸120cm、短軸115cmを測る。

配石下より検出された土塊は、配石の位置と一致する。その規模は長軸127cm、短軸125cmを測り、円形を呈する。長軸方向はN-57°-Eを指す。第Ⅲd層下位~V層を掘り込み、底面とし、深さ70cmを測る。底面は平坦で、一様に堅くしまり、土壌南壁下に径52×50cmの赤色範囲が認められた。埋土はブロック状に8層に分層され、人為的な堆積状況を示す。

埋土上層より、縄文土器破片4点（第22図6・7）が出土した。6は底部破片で、スダレ状圧痕がみられる。7は無文土器、胴部破片である。

なお、配石下の土塊と第7号柱穴状ピットが重複している。柱穴状ピット上面に配石の一部が存在していることから、本配石が新しい。

本遺構の構築時期は、遺構内及び配石周辺から出土した土器から後期前葉と考えられる。

#### 第12号配石遺構（第9・21図）

調査区および配石遺構群域のほぼ中央（R-10グリッド）に位置し、第Ⅲd層下位においてその全容が明らかとなった。第11号、13号、15号配石遺構が隣接する。

配石は、12個の石と1個の石の抜き取り痕からなる。その構造は、配石下土塊の東、南、北壁に接し、石頭がわずかに現われる程度に立石を立て、その内部に2個の平石を置いたものである。<sup>(註)</sup>さらにこれらを覆うように、幅の広い7個の斜め立石を配石北西側に配置している。本来、この斜め立石は一巡するものと考えられる。その規模は長軸95cm、短軸92cmを測る。使用される石材の形は多様で、立石は長さ40cm余りの柱状を、平石は長さ30~35cmの偏平で不規則な形状のものを、縁辺部を巡る斜め立石は長さ30~55cm、幅12~27cmの偏平なものである。

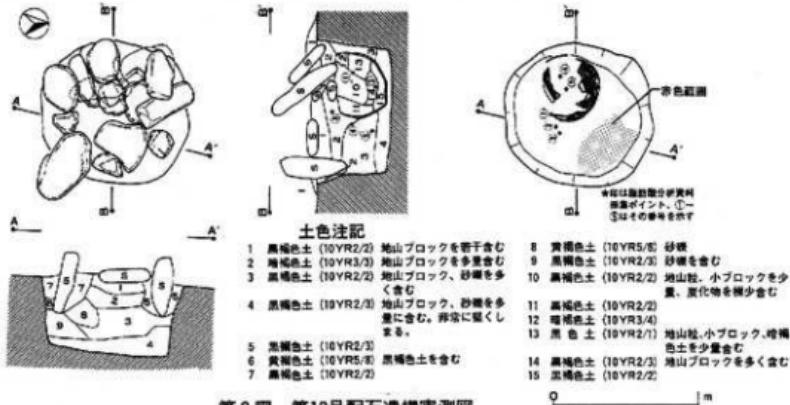
配石下より検出された土塊は、配石の位置とほぼ一致し、円形を呈するもので、その規模は長軸108cm、短軸101cmを測る。長軸方向はN-48°-Eを指す。第Ⅲd層下位、IV層を掘り抜き、V層中位を底面とし、深さ55cmを測る。底面はゆるやかな起伏を示し、一様に堅くしまっ

ていた。また底面東側に径45×25cm大の赤色範囲が認められた。

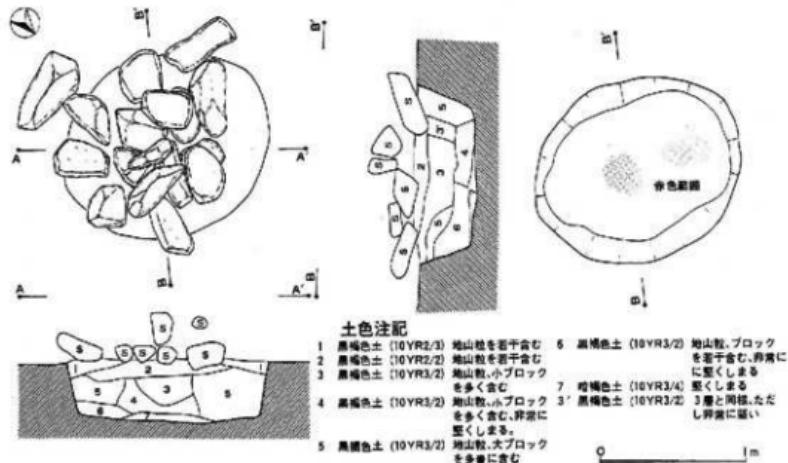
埋土は、ブロック状に9層に分層され、人為的な堆積状況を示す。

土壇西壁に接して、大型の壺形土器（第21図1）が正位の状態で埋設され、その上部には蓋として使用されたと考えられる2個の石が存在した。土器内の埋土は6層に分層された。土器内からは、人骨、副葬品は出土しなかった。

壺形土器は、底径18.5cm、胴部最大径39.8cmを計る。文様帶は調部の最張部に施文された陰



第9図 第12号配石造構実測図



第10図 第13号配石造構実測図

沈文により、上部文様帶と下部無文帶とに区画される。文様帶には2~5条の平行沈線により横位方向へ展開する曲線文が施文され、平行沈線間及び隆帶上にLR繩文が充填されている。底部に網代痕がみられる。胎土に砂粒・小礫を含む。焼成は良好で、色調は灰黄褐色~黒色を呈する。本遺構の構築時期は、出土土器から後期前葉と考えられる。

(注) ここでいう斜め立石とは、配石構築面に対して斜め方向に埋設された立石をいう。

#### 第13号配石遺構 (第10・22図)

配石遺構群域のほぼ中央 (R-10グリッド) に位置し、第11号、12号、15号配石遺構が隣接する。第Ⅱ層 (大湯浮石層) 除去後、配石中央にある立石を検出し、第Ⅲd層下位でその全容が明らかとなった。配石北側が若干の破壊を受けている。現存する石は17個である。

配石は、縁辺部に6個以上の石を使用し、これらの石の長軸が配石の中心を向くように配置し、一巡させたものと思われる。この内部に偏平な石9個を2段に積み重ね、その中央に偏平な石を立石とする構造をもつ。推定される規模は長軸167cm、短軸152cmを測る。

配石下より検出された上層は、配石の位置と一致する。その規模は長軸148cm、短軸124cmを測り、橢円形を呈する。長軸方向はN-72°-Wを指す。第Ⅲd層下位、Ⅳ層を掘り込み、V層中位を底面とする。深さ47cmを測る。底面は小さな起伏がみられるが、一見して平坦な感じを受け、一様に堅くしまる。底面の中央と西側に、径40×29cm、33×25cmほどの赤色範囲が認められた。埋土は、ブロック状に9層に分層され、人為的な堆積を示す。

土壤埋土中より、2点の繩文土器破片 (第22図8・9) が出土した。いずれも頭部破片で、8はRL繩文が施文され、9は無文土器である。

なお、本遺構は、第15号配石遺構、第4号柱穴状ピットと切り合い関係にある。新旧関係は第4号ピット→第15号配石→本配石の順である。

本遺構の時期は、遺構内及び周辺から出土した土器から、後期前葉と考えられる。

#### 第14号配石遺構 (第11・22図)

配石遺構群域の中央よりやや西寄り (Q-R-9・10グリッド) に位置する。第Ⅲd層下位で配石の全容が明らかとなった。本配石は第15・17・18号配石、第1号柱穴状ピットと切り合う。新旧関係は第1号柱穴状ピット→本配石→第15・17・18号配石である。

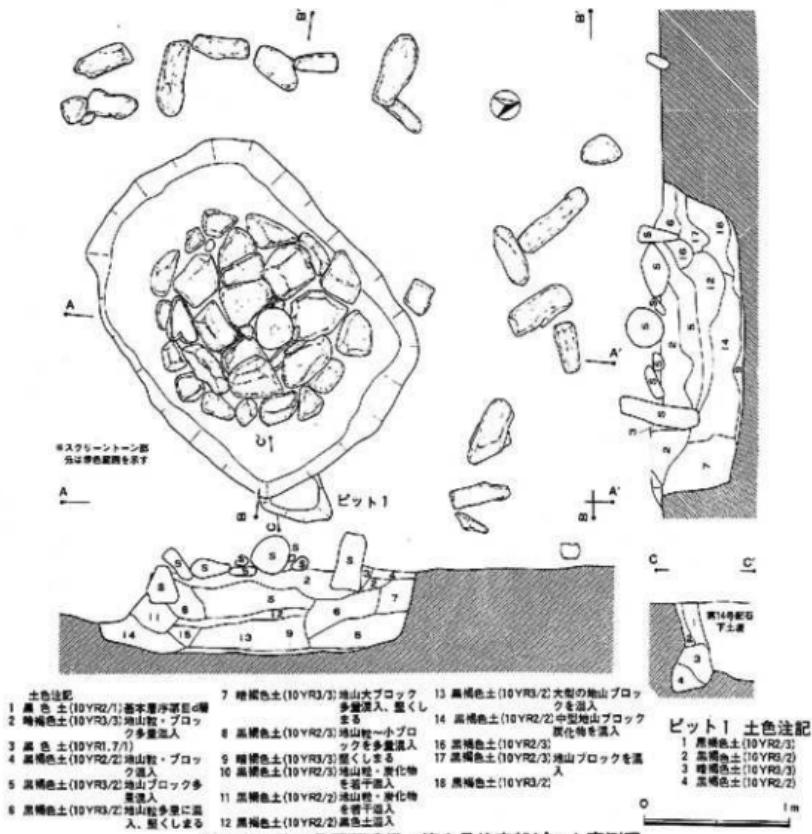
この配石は、他のものとやや趣を異にし、配石とこれを取り囲む環状列石からなる。<sup>(脚)</sup>

配石は、縁辺部に15個の立石を円形に一巡させ、内部に12個の偏平な石を積み重ね、その中央部に球状の石を配置した構造をもつものである。この配石を取り囲むように、石の長軸方向を連続させた、直徑約350cmの環状列石が存在する。この環状列石の所々に、石の長軸を中心に向けて倒れているものがある。これらの抜き取り痕は検出されなかったが、構築当時は立石として存在していた可能性もある。なおこの環状列石の南東側は第15・17・18号配石により破

壊されている。

配石縁辺部に巡ぐられた立石は28~55cm大で、やや幅広のものが多用され、内部に積まれる平石は30~42cm大の不規則な形状で偏平なものが使用される。また環状列石に使用される石は、25~57cm大の幅の狭いものである。

配石下より検出された上塙は、環状列石の中央部で、配石の位置と一致する。長軸236cm、短軸175cmを測り、隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-56°-Eを指す。第Ⅲd層下位・Ⅳ層を掘り抜き、V層中位を底面とし、深さ53cmを測る。底面はゆるやかな起伏を示し、中央に向かわざかに傾斜し、全体的に堅くしまっている。中央に径15~25cm×27~35cmほどの赤色範囲が3ヵ所認められた。埋土はブロック状に20層に分層され、人為的な堆積状況を示す。



第11図 第14号配石遺構・第1号柱穴状ピット実測図

土壇内より、縄文土器破片5点（第22図12）、配石内より16点（第22図10・11・13～16）が出土した。10～15は同一個体で、口縁部及び胴部下半の3条の平行沈線により、胴部文様帯を区画する。胴部文様帯には2～3条の平行沈線により横位方向に展開する入組状曲線文が施文され、平行沈線内にR L縄文が充填される。16も同一手法をとる。

本造構の構築時期は、配石及び土壇出土の遺物から後期前葉と考えられる。

注）ここでいう環状列石とは、野中堂・万座遺跡のようなものを表わすものではなく、單に石が円形に配置されているものを指す。

#### 第15号配石造構（第12・22図）

配石造構群域のほぼ中央（R-9・10グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位においてその全容が明らかとなった。本配石周辺には、第12～14号配石造構などが隣接する。

配石は、東側の約半分が破壊され存在しない。残在する部分から推定される構造は、縁辺部に大型の石を円形に一巡させ、その内部に偏平でやや小型の石を積み重ね、さらにその隙間にコブシ大の石を埋めていったものと考えられる。推定される配石の規模は、径150cm程である。

配石下より検出された土壇は、推定される配石の位置とほぼ一致する。その規模は直径184cmを測り、円形を呈する。長軸方向はN-Sを指す。第Ⅲd層下位～V層を掘り抜き、砂礫層（VI層）まで達し、これを底面としている。深さ87cmを測る。底面は砂礫層に作られるため、小さな起伏があり、堅くしまる。中央からやや西寄りに、径28×35cmの赤色範囲が認められた。

埋土は、砂礫を多く含み、堅くしまっていた。6層に分層され、人為堆積を示す。

配石直下より、縄文土器破片7点（第22図17～19）が出土した。いずれも深鉢形土器胴部で17はR L縄文が施文されるもの、18・19は無文土器の胴部破片である。

なお本造構は、第14号配石の環状列石東側一部と第2・4号柱穴状ピットを切って構築されている。

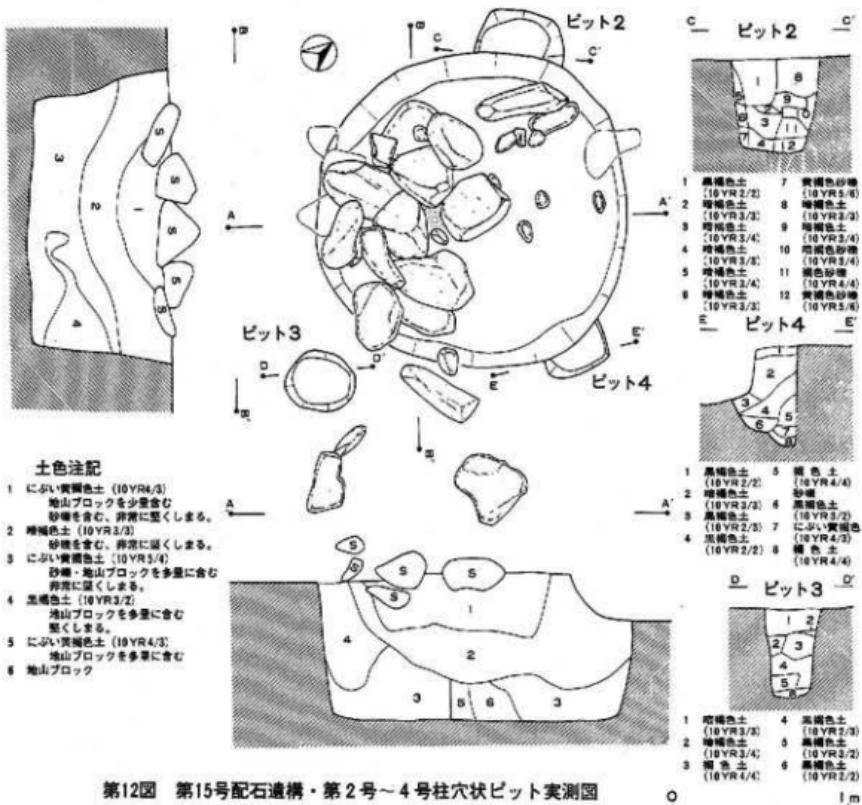
本造構の構築時期は、造構内及び周辺出土の土器から後期前葉と考えられる。

#### 第16号配石造構（第13・21・22図）

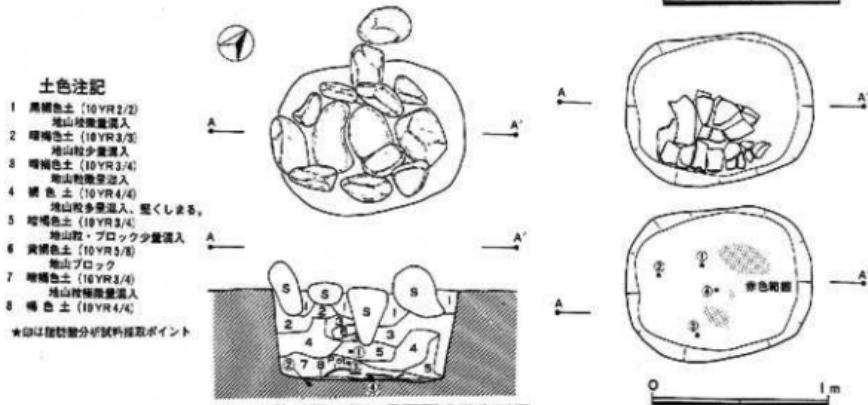
配石造構群域の中央よりやや西側（R-S-9グリッド）に位置する。配石の全容は第Ⅲd層下位で明らかとなった。北西1mの地点に第19号配石造構が存在する。

配石は、14個の石で作られる。配石縁辺部は9個の立石を構成し、その内部中央に立石1個、その隙間を埋めるように平石2個を配置した構造をもつ。その規模は長軸98cm、短軸90cmを測る。縁辺部に巡ぐる石は、やや幅の広いもので、15～30cm大、内部立石は三角錐状で32cm大、平石は25～35cm大の偏平な石材が使用される。

配石下より検出された土壇は、配石の位置と一致し、長軸106cm、短軸84cmを測り、構成形を呈する。長軸方向はN-46°-Eを指す。第Ⅲd層下位・IV層を掘り抜きV層を底面とし、深



第12図 第15号配石遺構・第2号～4号柱穴状ピット実測図



第13図 第16号配石遺構実測図

き52cmを測る。底面は中央に向けてゆるやかに傾斜し、全体的に堅くしまっている。底面中央と北側・南東側に径8~22cmほどの赤色範囲が認められた。

埋土は、ブロック状に8層に分層され、人為的な堆積状況を示す。

上壙底面の南東壁に接して、口縁部を南西方向に向けて、横位に埋設された大型深鉢形土器（第21図4）が出土した。このほか埋土中より縄文土器破片が4点（第22図20~22）出土した。

大型深鉢形土器は器高47.5cm、口径28.6cm、底径18.3cmを計り、色調は灰黄褐色を呈する。胎土は砂粒、小礫を含み、焼成は良好である。胴部には黒斑がみられる。平口縁で、器面は無文研磨され、底部に網代痕がみられる。20は磨消縄文が施文されるもので、地文はR L縄文、21・22は同一個体で、深鉢形胴部下半の無文帶部分である。

本遺構の構築時期は、土壙内・配石周辺から出土した遺物から後期前葉と考えられる。

#### 第17号配石遺構（第14・22・24図）

配石遺構群域の南西部（Q・R=8・9グリッド）に位置する。配石の全容は第IIId層下位において明らかとなつたが、南東部が攪乱を受け破壊されている。本配石は、第14・20号配石と重複する。本配石は第14号配石の環状列石を破壊していること、また第20号配石の一部が本配石の土壙上面に存在することから、新旧関係は第14号配石→本配石→第20号配石である。

配石は、26個の石で構築される。縁辺部北側には外斜する立石を、南側に直立する立石が配置され、これらが13個以上連結し椿円形に一巡するものと思われる。その規模は推定で長軸200cm、短軸150cmを測る。使用される石は、縁辺部で26~45cm大の幅広のもの、やや細長いもので、内部に置かれるものは29~35cm大の偏平で不規則な形状のものである。

配石下より検出された土壙は、配石の位置より僅かに東側へずれる。その規模は長軸223cm、短軸202cmを測り、椿円形を呈する。長軸方向はN-72°-Wを指す。第IIId層下位～V層を掘り抜き、砂礫層（VI層）まで達しており、深さ72cmを測る。底面は砂礫層につくられるため小さな起伏があり、中央へに向けてゆるやかに傾斜している。底面の東側と南西側に径75×112cm、20×40cm程の赤色範囲が認められた。埋土はブロック状に16層に分層され、人為的な堆積状況を示す。

遺物は、上壙埋土中から縄文土器破片14点（第22図23~29）が出土しているほか、底面及び直上から石器13点（第24図1~13）が出土した。これらの石器は底面東側に認められた赤色範囲上からである。1~3・6・10・12は平基有茎石器、4・5・7~9・13は凹基有茎石器、11は凸基有茎石器である。石材は珪（硬）質頁岩、蛋白石。土器は、23が無文の地文上に平行沈線を施したもの、24~26は磨消縄文による平行及び曲線文を施文したもので、地文は24・25がL R縄文、26がR L縄文である。27は無文帶化された口縁部破片、28・29はL R縄文が施文された胴部破片である。

本遺構の構築時期は、遺構及び周辺より出土した遺物から後期前葉と考えられる。

#### 第18号配石遺構 (第15・21・22図)

配石遺構群域の中央よりやや西側 (R-10グリッド) に位置する。配石は29個の石を用いて作られ、その全容が明らかとなったのは、第Ⅲd層下位である。なお本配石は、北東側で第14号配石と、南東側で第23号配石と重複する。新旧関係は第14号・23号配石→18号配石である。

配石は、縁辺部の長軸両端に大型の石を斜めに立て、これを結ぶように両縁辺に4~5個のやや大きめの偏平な石を置き、横円形になるように一巡させており、その内部には18個の大小さまざまな石を雑然と積み重ねた構造をもつ。その規模は長軸201cm、短軸104cmを測る。配石に使用される石は、21~57cm大の不規則な形状を示すものであるが、縁辺部両端のものは長さ41cm、57cmと大型で、四角柱状である。

配石下より検出された土壌は、配石の位置と一致し、長軸180cm、短軸114cmを測り、横円形を呈する。長軸方向はN-82°-Wを指す。土壌は第Ⅲd層下位・IV層を掘り込み、V層まで達し、底面とする。深さ25cmを測る。底面は、全体的に小さな起伏を示すが、平坦な感じを受け、堅くしまっている。赤色範囲は認められなかった。埋土は、ブロック状に6層に分層され入為的な堆積状況を示す。

遺物は、配石東側の石の隙間から深鉢形土器(第21図2)が出土したほか、配石上面及び土壌より24点の土器破片(第22図30~35)が出土した。深鉢形土器は法量不明で、器面には横位・縦位方向の条痕文が施文されている。色調はに深い褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成はやや良。30~32は同一個体で、磨消繩文による入組状曲線文が施文される。33は胴部上端に2条の隆沈文を施文、さらに所々に粘土塊の貼り付けが行なわれている土器で、隆沈文上にはL R繩文が施文されている。34は無文地に沈線により幾何学文が施文された土器、35はし無節繩文が施文されるものである。

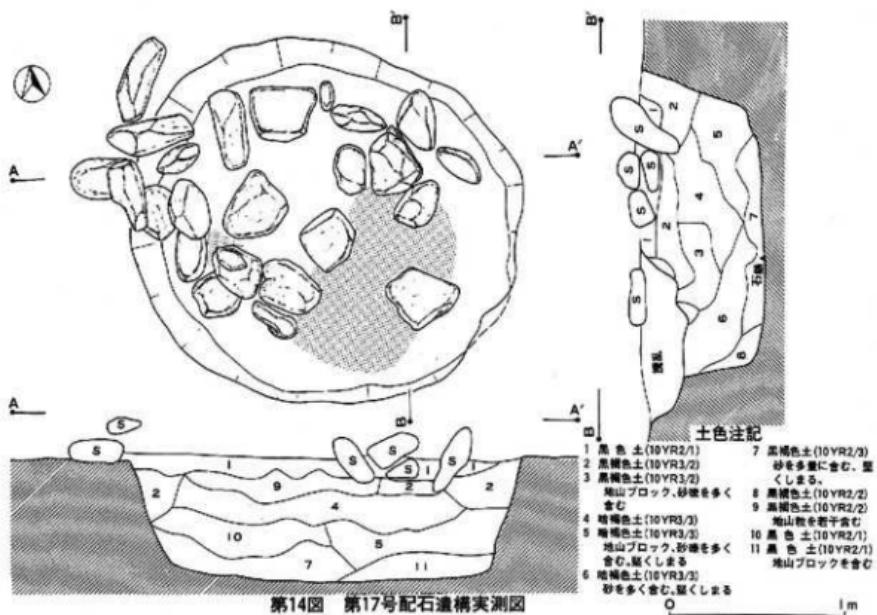
本遺構の構築時期は、遺構内及び周辺から出土した遺物より、後期前葉と考えられる。

#### 第19号配石遺構 (第15・22・24図)

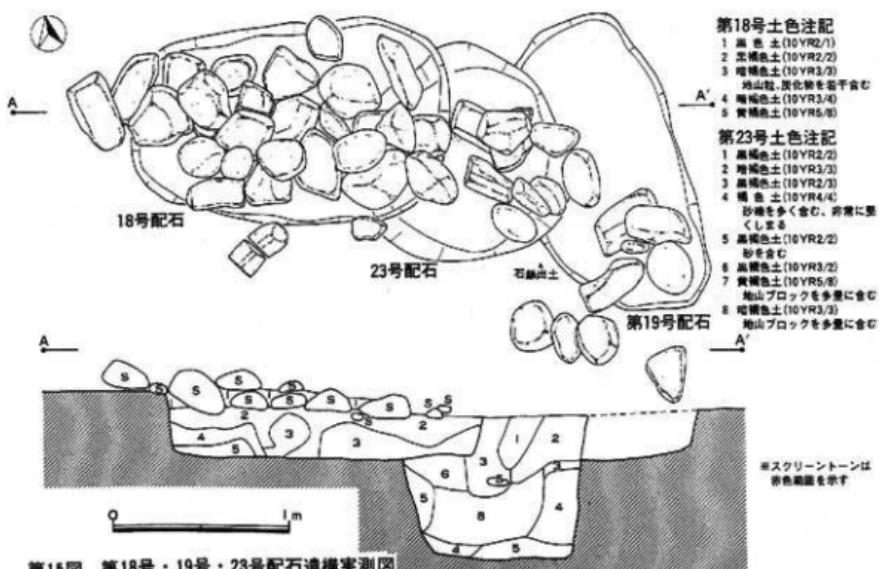
配石遺構群域の中央よりやや西側 (R-9グリッド) に位置する。配石の全容は第Ⅲd層下位で明らかとなった。本配石は第23号配石と切り合い、本配石が古い。

配石は、破壊がひどく、その一部を検出したにすぎない。現存する石は9個で、その大きさは様々で、15~40cm大の偏平で不規則なものが多い。

配石下より検出された土壌は、横円形を呈し、長軸175cm、短軸92cmを測る。長軸方向はN-12°-Wを指す。第Ⅲd層下位、IV層を掘り込み、V層上位を底面とし、深さ26cmを測る。底面は、全体的に小さな起伏をもつが平坦な感じを受け、堅くしまっている。赤色範囲は認められなかった。



第14図 第17号配石造構実測図



第15図 第18号・19号・23号配石造構実測図

配石内より4点の縄文土器破片（第22図36～39）が出土した。36・37には磨消縄文による曲線文が施され、37には刺突文がみられる。地文として36はR L、37はL無節縄文が施されている。38・39は深鉢形土器洞部下半の無文部で、L R縄文の消し残しがわずかにみられる。また配石西側より平基無蓋式石器1点（第24図14）が出土した。

本遺構の構築時期は、配石下土壇及び周辺から出土した土器から後期前葉と考えられる。

#### 第20号配石遺構（第16・22図）

配石遺構群域の南西側（R-8・9グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位でその全容が明らかとなった。北側に第17号配石遺構、南側に第21号配石遺構が重複又は隣接する。なお、第17号配石下の土壇上面には、本配石の一部が構築されており、新旧関係は第17号配石→本配石である。

配石は、擾乱を受け、東側の一部を欠く。配石縁辺部は9個の立石を円形に一巡させ、その内部に3個の偏平な石を積み重ねたもので、さらに縁辺部外周には、石の長軸方向を連結させるように9個の石を円形に配置した構造をもつ。その規模は、長軸198cm、短軸185cmを測る。配石に使用される石は、縁辺部で30～40cm大のやや幅の狭いもの、その外周にはこれよりもやや大きく35～55cm大の幅広のものや、不規則な形状のものが使用される。内部の石は42～53cm大で偏平なものが使用される。

配石下より検出された土壇は、配石中心からやや東へ片寄って構築されている。その規模は長軸157cm、短軸128cmの橢円形を呈する。長軸方向はN-62°-Eを指す。第Ⅲd層下位～V層を掘り込み、砂礫層に達し底面とする。深さ83cmを測る。底面には小さな起伏が極めて多く、東側に向けてゆるやかに傾斜する。全体的に堅くしまる。また西側底面に径37×46cmの赤色範囲が認められた。

埋土は、ブロック状に12層に分層され、人為的な堆積状況を示す。

土壇内より、縄文土器破片7点（第22図40～43）が出土した。40・41はL R縄文が施文されるもの、42・43は無文の洞部破片である。

本遺構の構築時期は、遺構内及び周辺の出土土器から後期前葉と考えられる。

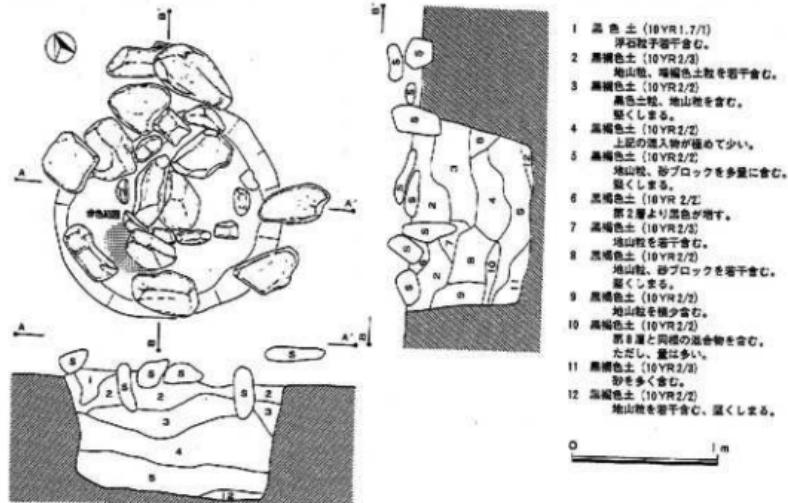
#### 第21号配石遺構（第17図）

配石遺構群域の南西側（R-8グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位で、配石をつくる9個の石と、3個の石の抜き取り痕を検出した。北側に第20号配石遺構が隣接する。

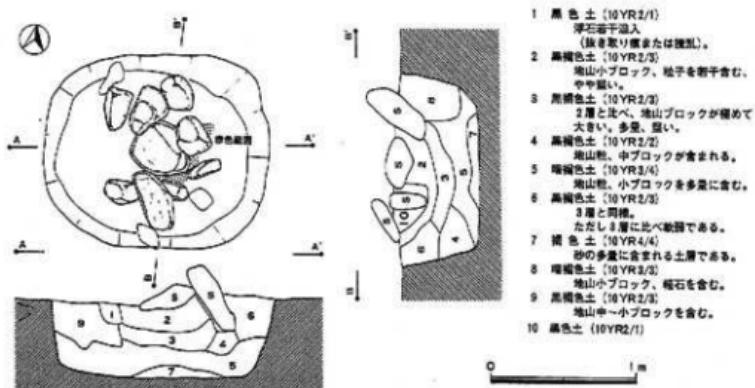
配石は若干の破壊を受ける。その構造は、配石中央に大型で偏平な石を1個置き、これを取り囲むように7個の立石を円形に一巡させたもので、さらにこれを覆い被すように斜めに埋設した立石を巡らせたものと考えられる。配石の規模は推定で長軸98cm、短軸94cmを測る。中央の石は42cm大の円盤状の平石で、縁辺部とその外周の石は25～30cm大の幅広のもの、不規則な

形状のものが使用される。

配石下より検出された土壌は、配石の位置と一致する。その規模は長軸 154 cm、短軸 132 cm を測り、橢円形を呈する。長軸方向は N=84°-E を指す。第Ⅲd 層下位～V層を掘り込み、砂礫層に達し、この上面を底面としている。深さ 58 cm を測る。底面は、小さな起伏が多いが、平坦な感じを受け、堅くしまっている。また底面中央に径 38×55 cm 程の赤色範囲が認められた。



第16図 第20号配石造構実測図



第17図 第21号配石造構実測図

埋土は、ブロック状に9層に分層された。人為的な堆積状況を示す。遺構内より遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺出土の土器から後期前葉と考えられる。

#### 第22号配石遺構（第18図）

配石遺構群域南側（R・S-8グリッド）に位置する。昭和51年度調査区のX地域の東端部において、その一部が検出されていたもので、今回の調査でその全容を明らかにすることができた。

配石は、第Ⅲd層下位に構築され、10個の石と4個の抜き取り痕からなる。検出時の状況などから判断して、その構造は、縁辺部に大きめの石を配置し、その内部に大小の石を雜然と積み重ねたものと考えられるが、推測の域を出ない。おそらく第11号配石遺構に類似するものであろう。配石の規模は、長軸138cm、短軸130cmを測る。使用される石の大きさは、32~55cmほどで、幅広のもの、幅の狭いものがある。

配石下より検出された土壠は、配石の位置と一致し、長軸164cm、短軸115cmを測り、梢円形を呈する。長軸方向はN-59°-Eを指す。第Ⅲd層下位～V層を掘り抜き、砂礫層に達し、底面とする。深さ67cmを測る。底面は堅くしまり、平坦で、ゆるやかに東側に傾斜する。また長軸線上、壁より僅かに離れて、径28×30cm、25×40cmの赤色範囲が2カ所認められた。

埋土は、ブロック状に13層に分層され、人為的な堆積状況を示す。遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺から出土した土器から、後期前葉と考えられる。

#### 第23号配石遺構（第15・23図）

配石遺構群域の中央よりやや南西寄り（R-9グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位においてその全容が明らかとなった。当初第18号配石の一部と思われたが、精査の結果一つの配石であることが判明した。本配石は、第18・19号配石と重複する。第18号配石とは上層断面から、第19号配石の土壠上に本配石の一部が存在することから、新旧関係は第19号配石→本配石→第18号配石である。

配石は、破壊を受けており、その構造を推察することは不可能である。現存する石は9個で、その大きさは25~35cmの不規則な形状を示す。

配石下より検出された土壠は、現存する配石の位置より若干西側へずれる。しかしこの配石が破壊されていることを考慮すれば、本来は配石の位置とほぼ一致するものと思われる。土壠の規模は長軸124cm、短軸115cmを測り、円形を呈する。長軸方向はN-Sを指す。第Ⅲd層下位～V層を掘り抜き、砂礫層（VI層）まで達し、深さ81cmを測る。底面は堅くしまり、小さな起伏をもち、ゆるやかな鍋底状を呈する。底面には径20×25cmの赤色範囲が認められる。

埋土は、ブロック状に10層に分層され、人為的な堆積状況を示す。

上塙内より、縄文土器破片6点（第23図44～46）が出土した。44は磨消縄文による曲線文が施文されるもので、45も同一手法によるものであろう。46は無文化された副部破片である。

本遺構の構築時期は、土塙内及び周辺より出土した遺物から後期前葉と考えられる。

#### 第24号配石遺構（第18図）

配石遺構群域の西側（P-8グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位において、浮石粒を多量に含んだ黒色土の落ち込みを検出し、付近又は土塙上に石（配石）が存在しないことから土塙と判断した。しかし、土塙埋土1層を除去した後、2層上面で石の抜き取り痕と思われる8個の落ち込みを検出したことから、配石遺構とした。このような例としては、第25号、32号配石遺構がある。破壊された時期は、埋土1層中に浮石粒が混入していることから平安時代後半以後と思われる。

配石の構造は、石の抜き取り痕から推察して、配石縁辺部に6～7個の立石を楔円形に一巡させ、その内部に偏平な石を置いたものと考えられる。第1号、10号配石遺構に類似するものであろう。推定される規模は長軸70cm、短軸50cm程度である。

土塙は、石の抜き取り痕から判断して、配石の位置から僅かに西へ寄っている。規模は長軸95cm、短軸63cmを測り、楔円形を呈する。長軸方向はN-82°-Wを指す。第Ⅲd層下位～IV層を掘り抜き、V層中位を底面とする。底面は平坦で、堅くしまる。赤色範囲は認められない。

埋土は、ブロック状に9層に分層され、人為的な堆積状況を示す。遺物は埋土中から縄文土器破片が1点出土した。しかし細片であるため型式の同定は不可能である。遺構構築時期については明確に判断できないが、周辺から出土した遺物から後期前葉と考えられる。

#### 第25号配石遺構（第18・23図）

配石遺構群域の南西側（R-8・9グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位において、浮石粒を多量に含んだ黒色土の落ち込みを検出した。

配石は、破壊を受けており、他の配石遺構の全容が明らかとなる面では配石および石の抜き取り痕は検出されなかった。上塙埋土1層を除去していく段階で、配石の一部である5個の石と、2層上面で6個の石の抜き取り痕を検出した。なお、当初土塙と判断し、精査を行なったため、配石南東部の石の抜き取り痕を除去してしまったことから、その構造を推察することは不可能である。使用される石は、23～58cm大で、不規則な形状のものである。

配石下より検出された土塙は、配石と位置を一致するものと考えられる。その規模は長軸181cm、短軸158cmを測り、楔円形を呈する。長軸方向はN-45°-Eを指す。第Ⅲd層下位～V層を掘り抜き、砂礫層上位まで達し、底面としている。深さ60cmを測る。底面は平坦で、堅くしまり、中央南西寄りに径19×33cm、東側に径15×16cmの赤色範囲が認められた。

埋土は、ブロック状に8層に分層され、人為的な堆積状況を示す。

埋土中より、縄文土器破片7点（第23図47～49）が出土した。47、48はLR縄文、49は無文土器洞部破片である。

本遺構の構築時期は、遺構内及び配石周辺から出土した土器から後期前葉と考えられる。

#### 第26号配石遺構（第18・23図）

配石遺構群域の中央より南側（S-9グリッド）に1基だけ他の配石と離れて存在する。配石の全容は第Ⅲd層下位で明らかとなった。

配石は、2個の石で作られるものらしく、この周辺に石の抜き取り痕は検出されなかった。その構造は、土壤長軸線上に、45cm大の柱状またはやや幅広の石を、2個一対にし、立てたものと思われる。

配石下より検出された土壤は、配石の位置から、西側に僅かにずれている。その規模は長軸113cm、短軸103cmを測り、円形を呈する。長軸方向はN-35°-Eを指す。第Ⅲd層下位・IV層を掘り込み、V層中位を底面とする。深さ55cmを測る。底面は一様に小さな起伏をもち、ゆるやかな鍋底状を呈する。底面南西側に径33×35cmの赤色範囲が認められた。

埋土は、7層に分層された。各層に地山粒、地山ブロックが多量に混入していることから、人為堆積と判断された。

土壤内より、縄文土器破片1点（第23図50）が出土した。50は深鉢あるいは鉢の口縁部で、折り返しL1線直下に3条の平行沈線、頸部に斜位方向の平行沈線文が施されている。

本遺構の構築時期は、土壤内及び周辺出土の土器から後期前葉と考えられる。

#### 第27号配石遺構（第19図）

配石遺構群域の北側（P・Q-13グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位において、1個の立石と、7個の石の抜き取り痕が確認された。

配石の構造は、縁辺部に8個の立石と梅円形に一巡させ、その内部に平石を置くものと考えられ、第1号配石に類似するものであろう。立石に使用される石是非常にもろく、その上半を欠く。現存する大きさは13cmを測る。推定される配石の規模は長軸73cm、短軸67cmを測る。

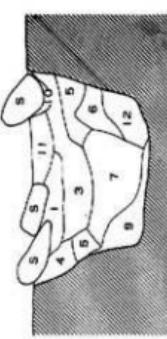
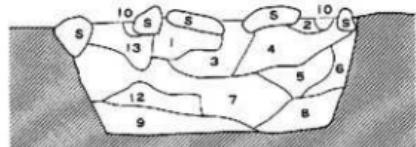
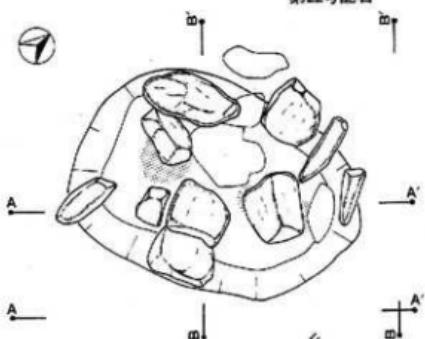
配石下より検出された土壤は、配石の位置より西側へわずかに寄る。長軸124cm、短軸98cmを測り、楕円形を呈する。長軸方向はN-60°-Eを指す。第Ⅲd層下位・IV層を掘り抜き、V層上面に達し、底面とする。深さ28cmを測る。底面は、ゆるやかな起伏をもち、堅くしまる。底面中央に径23×42cmの赤色範囲が認められた。埋土は3層に分層された。一見自然堆積を思わせる状況を示すが、各層に地山ブロックが多量に混入することから、人為堆積と判断された。

遺構内から遺物は出土しなかった。

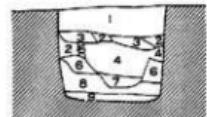
本遺構の構築時期は、周辺出土の土器から、後期前葉と考えられる。

#### 第28号配石遺構（第19図）

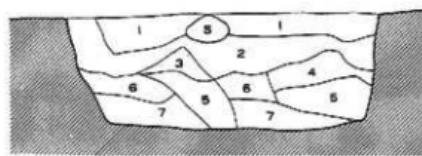
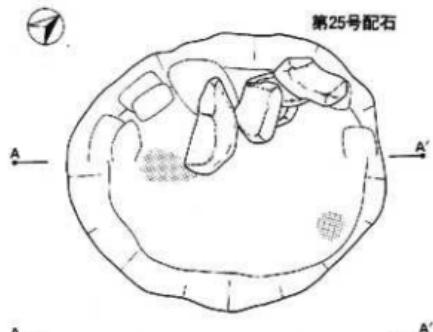
第22号配石



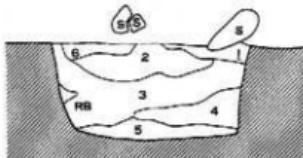
第24号配石



第25号配石



第26号配石



※スクリーントーンは原色範囲を示す

第18図 第22、24~26号配石造構実測図



配石遺構群域の北東部（Q-13・14グリッド）に位置する。第Ⅲd層下位において、1個の立石と6個の石の抜き取り痕を確認した。しかし配石の東側は調査区外のため、その全容を明らかにするまでは至らなかった。立石として使用される石は、20cm大で幅広のものである。

配石下より検出された土壤は、配石の位置とほぼ一致する。その規模は長軸120cm（推定）、短軸92cmを測り、橢円形を呈する。推定される長軸方向はN-29°-Eを指す。第Ⅲd層下位・IV層を掘り抜き、V層まで達し底面とする。深さ38cmを測る。底面は、ゆるやかな起伏をもち、堅くしまる。中央部に赤色範囲が認められたが、面的に捕えることができなかった。埋土は、5層に分層され、各層に地山ブロックが多量に混入しているなど、人為堆積と判断された。

遺構内からは、遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺より出土している土器から後期前葉と考えられる。

#### 第29号配石遺構（第19図）

配石遺構群域中央より南西側にあり、R-7・8グリッドに位置する。第IV層上面で全容が明らかとなった。本配石は、昭和51年の分布調査で検出されたX地域第7号遺構に相当するものである。なお、検出面が他配石より若干レベルが低いのは、昭和51年の調査時に、すでにIV層上面まで掘り下げられたことに起因する。

配石は、破壊されており、まったく石が存在せず、石の抜き取り痕を1個、検出したに止まった。第19図は、昭和51年の図面を元に作図したものである。当時の報告書をみると、下部土壤の南西・南東壁の上面に、47~55cmのやや幅広の石が2個存在している。

配石下より検出された土壤は、長軸123cm、短軸102cmを測り、橢円形を呈する。長軸方向はN-70°-Wを指す。第IV層・V層を掘り抜き、砂礫層（VI層）まで達し、底面としている。深さ57cmを測る。底面は、小さな起伏が多くみられ、堅くしまる。底面東側に径20cmほどの赤色範囲が認められた。埋土は、ブロック状に9層に分層された。人為堆積を示す。

土壤内から繩文上器破片1点が出土した。しかし細片であり型式の同定が不可能なため明確に判断できないが、配石周辺から出土した遺物から、本遺構の構築時期は後期前葉と考えられる。

#### 第30号配石遺構（第19・21・23・24図）

配石遺構群域の南西側（R-7グリッド）に位置する。昭和51年の分布調査で確認されたX地域第6号遺構に相当するものである。配石はすでに取り除かれており、本年度確認したのは、その下部にある土壤のみである。確認面は第29号配石と同様、第IV層上面である。

第19図は、昭和51年度及び本年度作製した図面をもとに作図したものである。図面・写真及び報告文から判断して、配石縁辺部に立石あるいは平石を9個ほど橢円形になるように巡らし、その内部に偏平な石を数個置いたものと考えられる。

確認された土壤は、配石の位置とほぼ一致する。その規模は長軸 153 cm、短軸 119 cm を測り、楕円形を呈する。長軸方向は N-44°-E を指す。第 IV・V 層を掘り抜き、砂礫層（VI 層）まで達し、底面とする。深さ 72 cm を測る。底面中央に径 64 × 82 cm の赤色範囲が認められ、この部分が 1 cm ほど掘りくぼめられ、これを U 字状に取り囲むように砂鉄が 2 mm 程の厚さに堆積していた。しかし、この砂鉄が人為的に散布されたものか、自然によるもののかは判断できなかった。埋土は 6 層に分層され、各層に地山ブロック、砂礫が多量に混入していることから、人為堆積と判断された。

遺物は、上部底面直上から石鐵（第24図15）1点と、土壤確認面、南壁に接して壺形土器（第21図3）と土器破片（第23図51・52）が出土した。壺形土器は頸部に2条の平行沈線、胴部上半に平行沈線で幾何学文が施文され、沈線間に L 無節縄文が充填されている。口径 9 cm で、胎土には砂粒・小礫を含み、焼成は良好。色調はにぶい黄褐色を呈する。石鐵は平基式石鐵で、石材は珪（硬）質頁岩である。

本遺構の構築時期は、出土遺物から後期前葉と考えられる。

#### 第31号配石遺構（第19図）

配石遺構群域の南西側（R-8 グリッド）に位置する。第 IIId 層下位、IV 層上面でその全容を確認した。配石は、破壊されており、1 個の石を検出したのみであるが、この石が移動した痕跡がないこと、昭和51年度の調査時には、この付近に数個の石が存在していたことから、配石と判断した。第19図は昭和51年、本年度の図面を元に作図したものである。配石の構造、規模を推定するまでは至らない。

土壤の規模は、長軸 132 cm、短軸 120 cm を測り、円形を呈する。長軸方向は N-83°-E を指す。第 IIId 層下位～V 層を掘り抜き、砂礫層を底面とする。深さ 61 cm を測る。底面は浅い鍋底状を呈し、堅くしまる。底面の東側・西側に、それぞれ径 25 × 50 cm、16 × 25 cm の赤色範囲が認められた。埋土は、4 層に分層された。各層には地山粒・ブロック、砂礫が多く混入していることから、人為堆積と判断された。遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺より出土した土器から、後期前葉と考えられる。

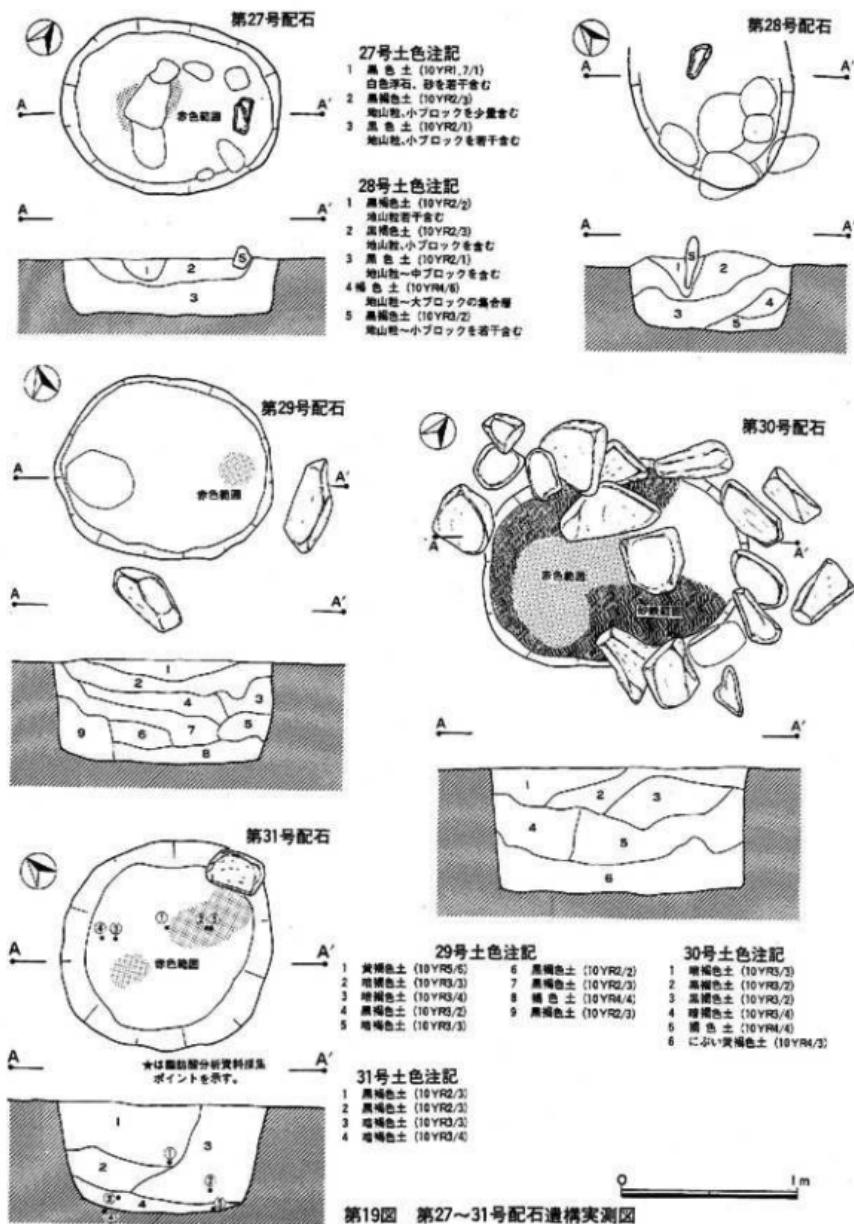
なお、本遺構において、残存脂肪酸分析資料を採集した。（第 V 章参照）

#### 第32号配石遺構（第20図）

配石遺構群域の北東側（R-12 グリッド）に位置する。第 IIId 層下位において、浮石粒の混入した黒色土の落ち込み（土壤）を検出した。

土壤埋土を 15 cm ほど掘り下げた時点で、土壤壁に沿って巡ぐる 9 個の石の抜き取り痕を検出した。推定される配石形態は、第 1 号配石遺構、Y 地域 1 号遺構に類似するものと考えられる。

配石の規模は、長軸 70 cm、短軸 54 cm ほどである。



第19図 第27～31号配石造構実測図

土壇は、配石の位置と一致し、その規模は長軸86cm、短軸82cmを測り、円形を呈する。長軸方向はN=71°-Wを指す。第Ⅲd層下位・IV層を掘り抜き、V層中位を底面としている。深さ44cmを測る。底面は浅い鍋底状を呈し、堅くしまる。赤色範囲は認められなかった。

埋土は、ブロック状に6層に分層され、各層には地山ブロックが多量に混入していることから、人為堆積と判断される。下部土壇から遺物は出土しなかった。

本造構の構築時期は、周辺より出土した土器から、後期前葉と考えられる。

### 第33号配石造構 (第20図)

配石造構群域の北東寄り (R・S-11グリッド) に位置する。第Ⅲd層下位において、30cm大の石1個と、13個の石の抜き取り痕を確認した。しかし、これらから配石の形態を推察することは不可能である。

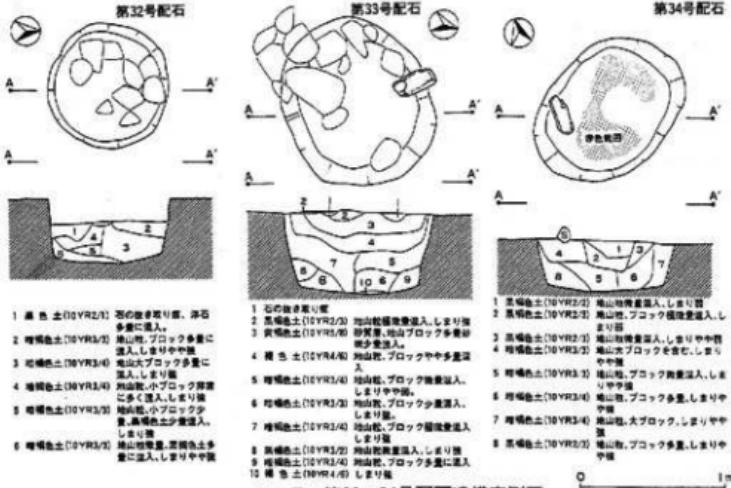
土壇は、推定される配石の位置より、やや北側に位置している。その規模は長軸118cm、短軸100cmを測り、梢円形を呈する。長軸方向はN=42°-Eを指す。第Ⅲd層下位・IV層を掘り抜き、V層下位を底面とし、深さ51cmを測る。底面は、浅い鍋底状を示し、堅くしまっている。

埋土は、ブロック状に13層に分層された。各層とも地山粒・ブロックを多量に含んでおり、人為堆積と判断される。遺物は出土しなかった。

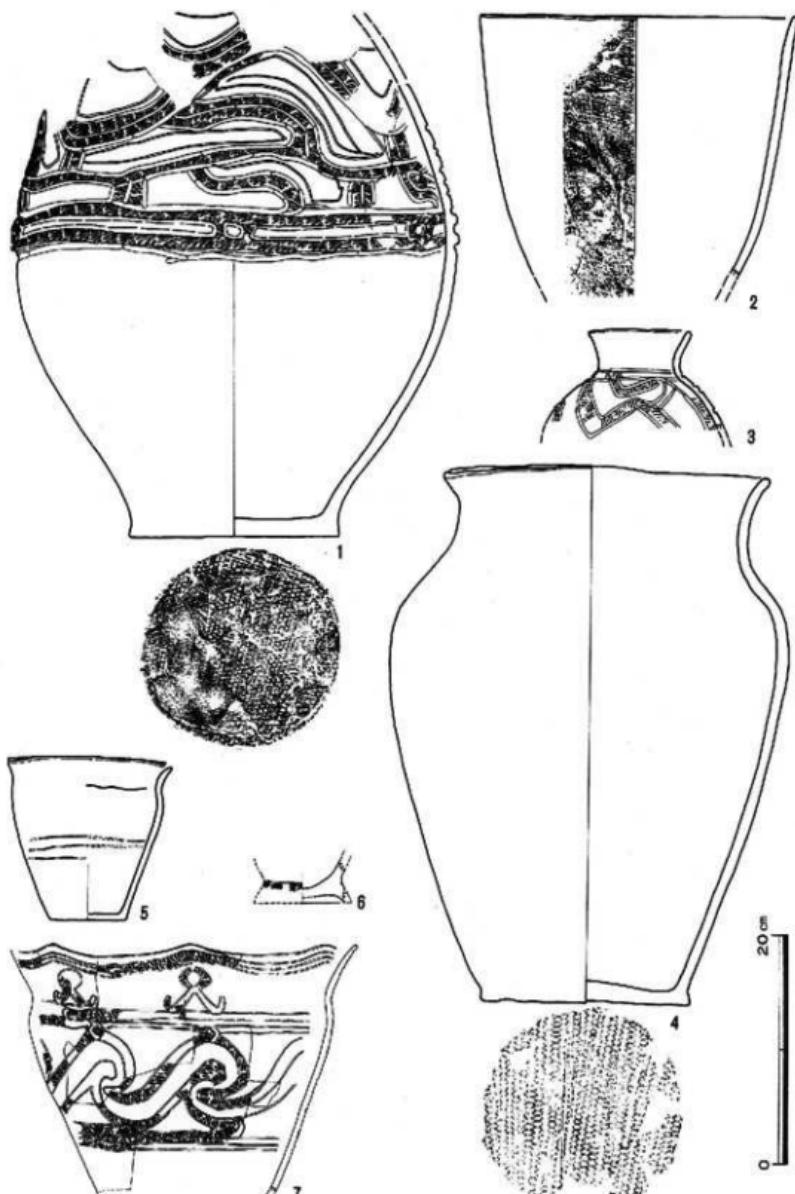
本造構の構築時期は、周辺より出土した土器から、後期前葉と考えられる。

### 第34号配石造構 (第20図)

配石造構群域の東寄り (S-12グリッド) に位置する。第Ⅲd層下位において、35cm大の石

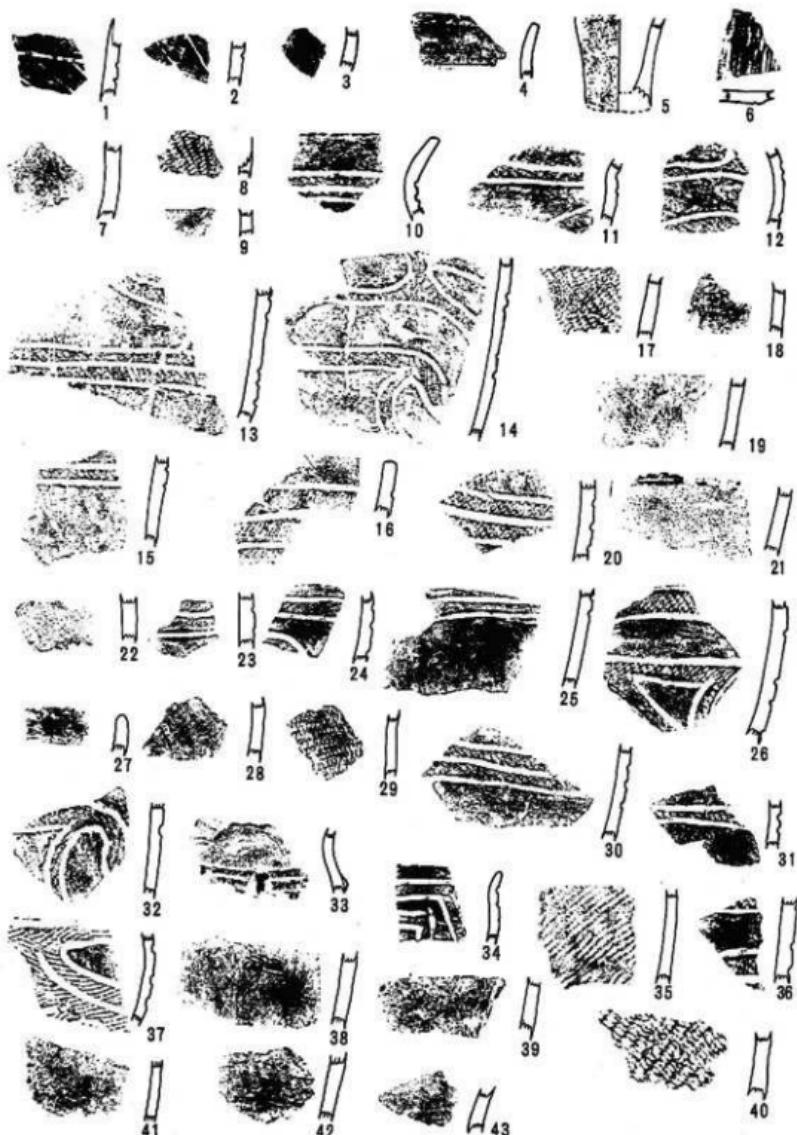


第20図 第32~34号配石造構実測図



第21図 A区出土土器実測図

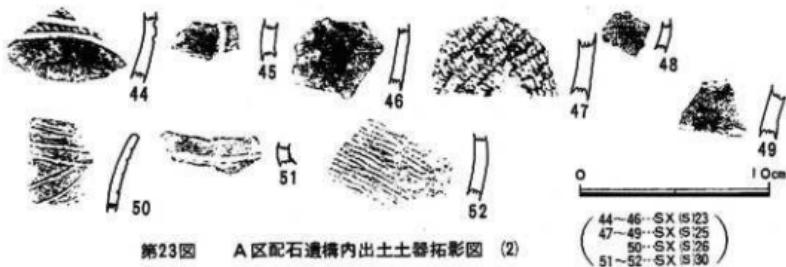
(1…SX(S)12, 2…SX(S)18  
 (3…SX(S)30, 4…SX(S)16)  
 5～6…遺構外)



(1~3--SXIS6, 4~5--SXIS10, 6~7--SXIS11, 8~9--SXIS13  
 (10~16--SXIS4, 17~19--SXIS15, 20~22--SXIS16, 23~29--SXIS17  
 (30~35--SXIS8, 36~39--SXIS19, 40~43--SXIS20)

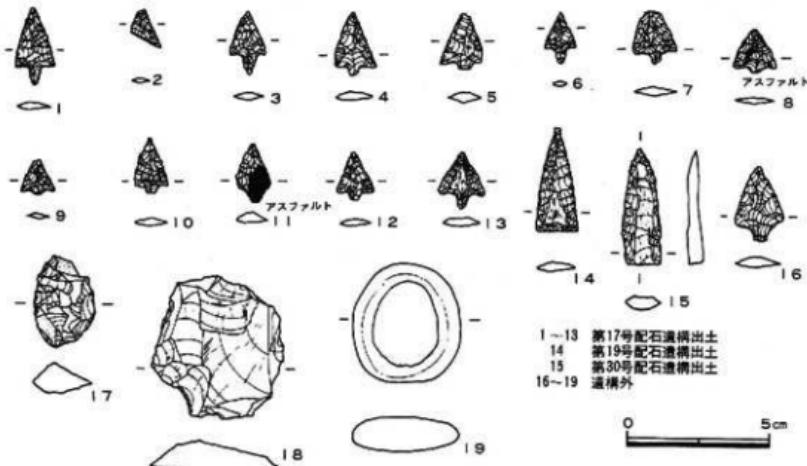
第22図 A区配石遺構内出土土器拓影図(1)





第23図 A区配石遺構内出土土器拓影図 (2)

(44~46--SX 15123)  
(47~49--SX 5225)  
(50--SX 5226)  
(51~52--SX 5300)



第24図 A区遺構内・外出土石器実測図

1個と、土壤を検出した。配石の形態は不明である。

土壤は、長軸112cm、短軸82cmを測り、橢円形を呈する。長軸方向はN-52°-Eを指す。第Ⅲd層下位・Ⅳ層を擦り抜き、V層上面を底面とし、深さ35cmを測る。底面は浅い鍋底状を呈し、堅くしまる。底面に赤色範囲が認められた。埋土は、ブロック状に8層に分層され、人為的な堆積状況を示す。下部土壤内より遺物は出土しなかった。

本遺構の構築時期は、周辺より出土した土器から、後期前業と考えられる。

(藤井 安正)

## 2. 弧状列石 (第5図)

配石遺構群を、およそ南北に二分するかのように、Q-8~12, R-12~13グリッド内に存在する。現時点での列石の長さは約33mを測る。検出面は配石遺構と同様第Ⅲd層下位である。

構築方法は、横立石（石の短軸方向を立て、埋設したもの）の長軸方向を連結させ、大きな弧を画くように配置させている。使用される石の大きさは、長径15~30cm大の偏平な楕円形のものが多く、わずかに不規則な形状のものもみられる。

この列石には、所々に石の配置されていない部分や、枝分かれするような所があり、これらから6~7つの単位に分割されそうである。

なお、列石に付属する施設及び遺物は、検出・出土しなかった。 (藤井 安正)

### 3. 土壙とその出土遺物（第25・28図）

59年度には2基の土壙（1, 2号）を確認・調査した。K-13グリッドに位置する1号土壙は、堆積土より平安時代後半に時代が下る可能性があり、I・J-11グリッドの2号土壙は、その位置より配石造構群との関連が考えられた。本年度は10基の土壙（3~12号）を確認・調査した。このうち8基は配石造構群域内に位置するものである。

#### 第3号土壙

A区配石造構群域外西方のM-9グリッドに位置する。IV層上面において黒色土の落ち込みを確認した。この付近に他の造構はない。平面形は円形を呈し、規模は長軸86cm、短軸74cm、深さ70cmを測る。長軸方向はN-42°-Eである。IV・V・砂礫層を掘り込んで壁とし、底面は砂礫層より成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は8層に区分でき、人為堆積である。遺物の出土はなく、本造構の時代時期は不明である。

#### 第4号土壙

A区配石造構群域外南方のT-9グリッドに位置する。風倒木痕と重複しているためIV層上面まで確認することができなかった。平面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-10°-Eである。規模は推定長軸96cm、短軸74cm、深さは34cmを測る。IV・V層を掘り込んで壁とし、底面はV層より成り、やや平坦であまり堅くない。壁は底面からやや垂直に立ち上がり、あまり堅くない。堆積土は5層に区分でき、人為堆積である。覆土上層から2点の縄文土器片を出土している。出土遺物より、本造構の時期は縄文時代後期と考えられる。

#### 第5号土壙

A区配石造構群域内ほぼ中央のR-10グリッドに位置する。本造構上位のIII層中まで擾乱されており、確認できたのはIIId下層中面であった。北東壁は12号配石造構と接し、南東壁側に13号配石造構、南壁側に15号配石造構が近接する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸90cm、短軸70cm、深さ24cmを測る。長軸方向はN-17°-Wである。IV層を底面としており、全体的に小さな起伏が多く、やや軟弱である。壁は底面よりやや外反して立ち上がり、IIId・IV層より成る。堆積土は單一層で、黒色土に浮石粒を混入している。遺物の出土はなく、本造構の時代時期は

不明である。

#### 第6号土壤

A区配石造構群域内、その中央より南側のR-7グリッドに位置する。IV層上面での確認で、北壁側に31号配石造構、東壁側に22号配石造構が位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸84cm、短軸78cm、深さ19cmを測る。長軸方向はN-15°-Wである。IV層を掘り込んで壁とし、V層上面を底面とする。底面は起伏が激しく、西壁寄りから東壁寄りへかけて緩やかに傾斜し、堅くしまっている。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3層に区分でき、人為堆積である。縄文土器片1点が出上しておる、出土遺物より本造構の時期は縄文時代後期と考えられる。

#### 第7号土壤 (第28図4・5)

A区配石造構群域内、その中央より南東側のS-10グリッドに位置する。擾乱がIII層にまで及び、造構確認はIV層上面まで下げざるを得なかった。近隣に他の造構はない。本造構の規模は長軸110cm、短軸76cm、深さは44cmを測る。平面形は梢円形を呈し、長軸方向はN-51°-Eである。IV・V層を掘り込んで壁とし、底面はV層より成る。底面は平坦で一様に堅くしまり、長軸線上に45cm×30cm、40cm×25cmの2カ所に赤色に変化した部分がある。壁は底面よりやや外反して立ち上がる。堆積土は8層に区分でき、人為堆積である。28図4・5は、覆土上層より出土の縄文土器片である。出土遺物より本造構の時期は縄文時代後期と考えられる。

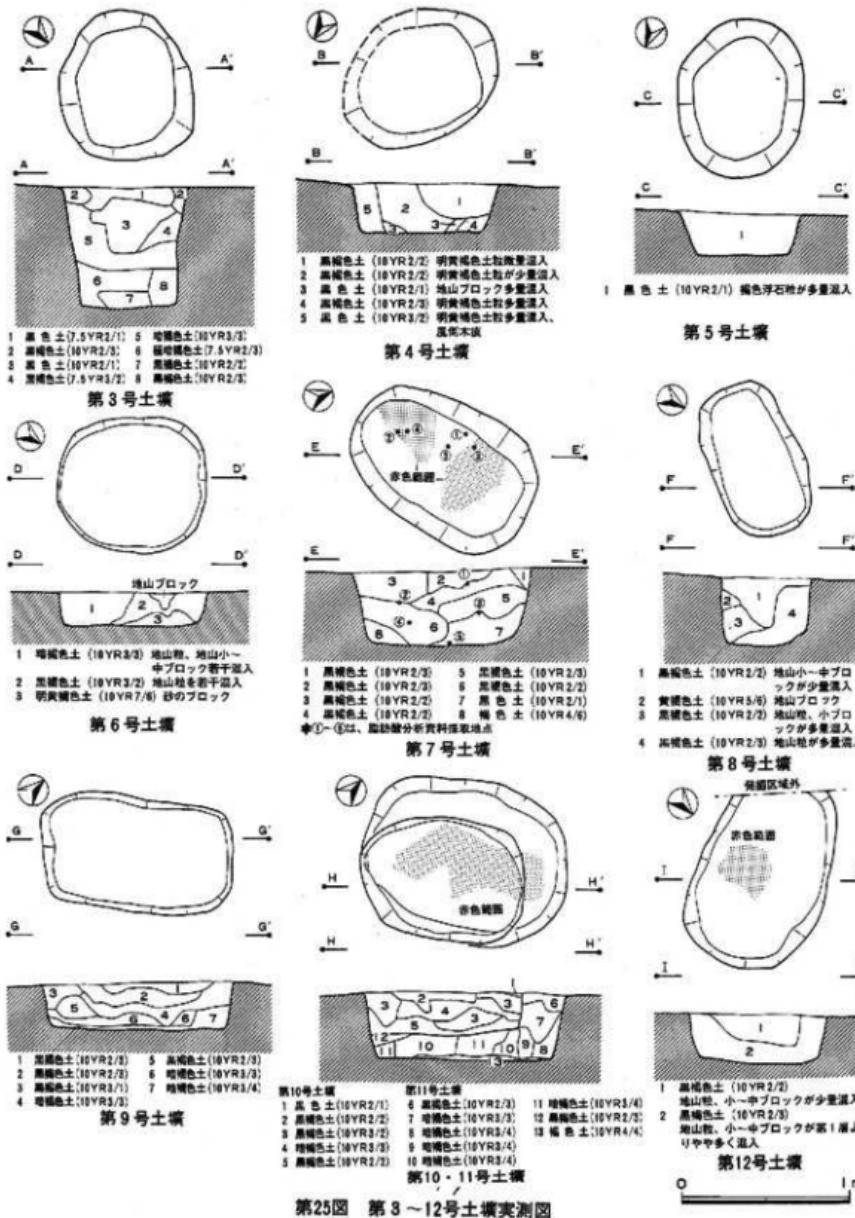
本造構より、脂肪酸分析のための土壤を5点ほど採取した。(第V章参照)

#### 第8号土壤

A区配石造構群域内、その中央より北側のP-13グリッドに位置する。IV層上面において、地山ブロックが混入した黒褐色土の落ち込みを確認した。東壁側に27号配石造構が近接する。平面形は梢円形を呈し、長軸方向はN-41°-Eである。規模は長軸87cm、短軸53cm、深さ39cmを測る。IV・V層を掘り込んで壁とし、砂礫層上面を底面としている。底面は小さな起伏があって中央部がやや盛り上り、堅くしまっている。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は4層に区分でき、人為堆積である。本造構からの遺物の出土はない。

#### 第9号土壤

A区配石造構群域内、その中央よりやや北東寄りのR-12グリッドに位置する。IV層上面において地山粒が混入した梢円形のプランを確認した。北東壁側に7号配石造構、南東壁側に3号配石造構、西壁側に32号配石造構、南西壁側に6号配石造構が近接する。平面形は梢円形を呈し、長軸方向はN-38°-Eである。規模は長軸108cm、短軸65cm、深さは26cmを測る。IV・V層を掘り込んで壁とし、底面はV層より成り、起伏があつて比較的軟弱である。壁は底面からやや外反して立ち上がり、軟弱である。堆積土は7層に区分でき、人為堆積である。本造構からの遺物の出土はない。



第25図 第3～12号土壤実測図

### 第10号土壙（第28図3）

A区配石造構群域内、その中央より東側のS-12グリッドに位置する。IV層上面で、地山粒・ブロックが混入した楕円形の落ち込みを確認した。11号土壙と重複し、本造構が新しい。平面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-42°-Eである。規模は長軸93cm、短軸70cm、深さは25cmを測る。11号土壙覆土を掘り込み、壁は11号土壙覆土及びIV・V層、底面は11号土壙覆土より成る。底面は堅く、ほぼ平坦である。南東壁は11号土壙と共有する壁であるが、底面から緩やかに立ち上がり、他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。V層を壁とする面は堅く、他の面はやや軟弱である。堆積土は5層に区分でき、人為堆積である。28図3は、覆土上位より出土の縄文土器片である。出土遺物より、本造構の時期は縄文時代後期と考えられる。

### 第11号土壙

A区配石造構群域内、その中央より東側のS-12グリッドに位置する。10号土壙と重複し、本造構が古い。平面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-53°-Eである。規模は長軸118cm、短軸93cm、深さ38cmを測る。IV・V層を掘り込んで壁とし、底面はV層より成り、起伏があって堅い。底面の長軸線上に85cm×40cmの範囲に、赤色に変化した部分がある。壁は底面から外反して緩やかに立ち上がり、V層より成る面は堅く、他の面はやや軟弱である。残存する堆積土は8層に区分でき、人為堆積である。本造構からの遺物の出土はない。

### 第12号土壙

A区配石造構群域内、その中央より北側のP・Q-13・14グリッドに位置する。IV層上面において地山・ブロックが混入した黒褐色土の落ち込みを確認した。南西壁側に27号配石造構、南東壁側に28号配石造構が近接する。本造構の東端は調査区域外のため未調査である。平面形は楕円形を呈し、長軸方向はN-58°-Eである。規模は推定長軸114cm、短軸75cm、深さ28cmを測る。IV・V層を掘り込んで壁とし、底面はV層より成る。底面中央に向けて緩やかに傾斜し、中央は平坦で、他は起伏がある。一様に堅くしまっている。底面中央からやや北寄りの位置に30cm×24cmの範囲で赤色に変化した部分がある。北・南壁は底面からやや垂直に立ち上がり、他の壁はやや外反して立ち上る。堆積土は2層に区分でき、人為堆積である。本造構からの遺物の出土はない。

（藤井富久子）

## 4. 柱穴状ピット（第5・8・11・12・26図）

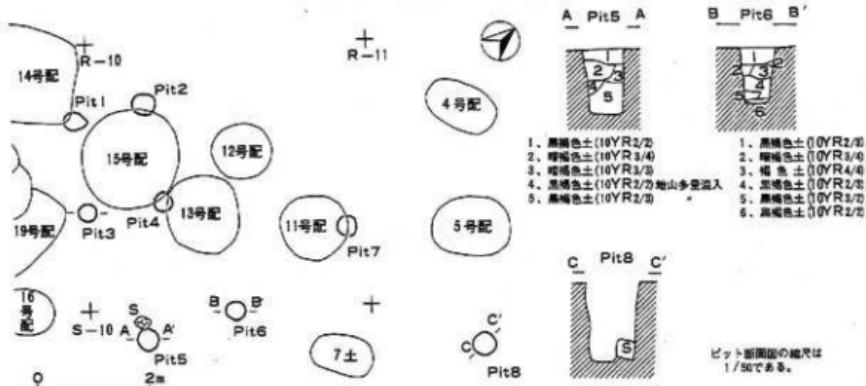
配石造構群域のほぼ中央、R・S-9~11グリッドにおいて8基の柱穴状ピットを検出した。これらは配石と重複して検出されるものが多く、新旧関係は配石より新しくなることはない。

なお配石との位置関係については第26図に示したが、各々のものについては重複又は隣接する配石の各図に載せている。以下観察事項を表としてまとめる。

ビット番号	地出グリッド	地盤(長軸×短軸、深さ)cm	埋土	備考	区番号
1	R-9	径47×45、深59	4層に分層。地山ブロック、砂礫を含む	第14号配石下土壤の東壁と重複	第11区
2	R-10	径50×1、深53	12層に分層。7層下に砂礫を含む	第15号配石下土壤の北西壁と重複	第12区
3	R-9・10	径40×35、深52	6層に分層。砂礫を含む	第15号・19号配石のほぼ中間に位置する	第12区
4	R-10	径37×1、深56	5層以下に砂礫を含む	第13号・15号配石と重複する	第12区
5	S-10	径40×46、深52	5層に分層。4層下に地山ブロック、砂礫を含む	第16号配石の北東2mの地点、ビット上面に石が存在する	第26区
6	R・S-10	径35×35、深50	6層に分層。3層下に地山ブロック、砂礫を含む	第13号配石の東1.5mの地点	第26区
7	R-10	径37×1、深36	5層に分層。4層下に地山ブロック、砂礫を含む	第11号配石下土壤の東壁と重複	第8区
8	S-11	径48×45、深74	多量の地山ブロック、砂礫を含む	第5号配石の南東2mの地点	第26区

第1表 柱穴状ビット観察表

(藤井 安正)



第26図 柱穴状ビット配置図・断面図

## 5. 焼土遺構 (第27・28図)

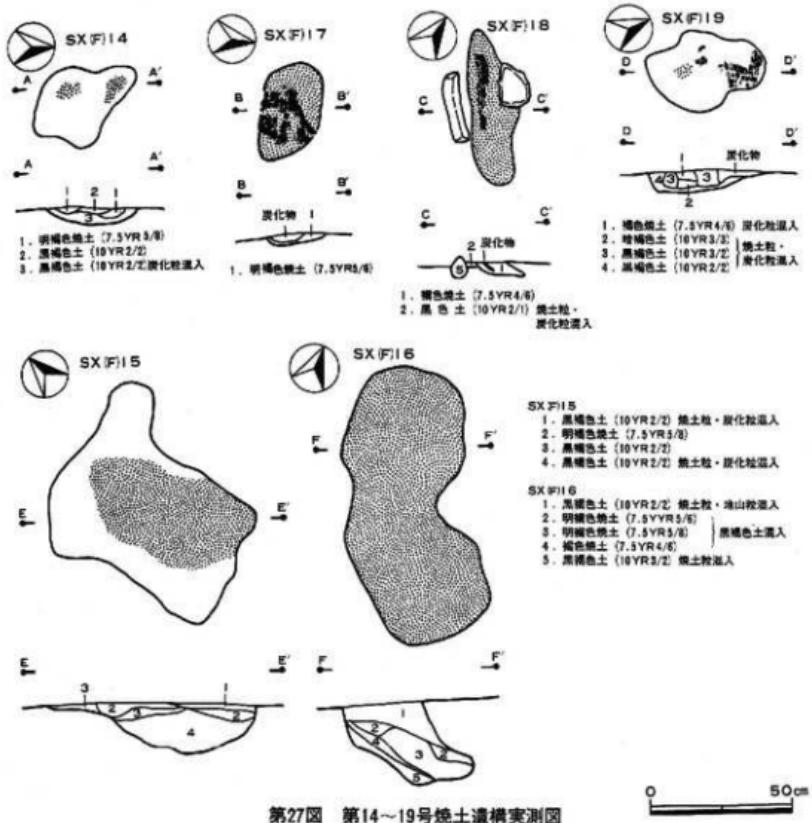
59年度に10基の焼土遺構 (1~3・5・8~13号) を確認・調査しているが、K~Wグリッドに位置するものは4基で、いずれも配石遺構群域内である。本年度は6基の焼土遺構 (14~19号) を確認・調査した。

## 第14号焼土遺構 S X (F) 14

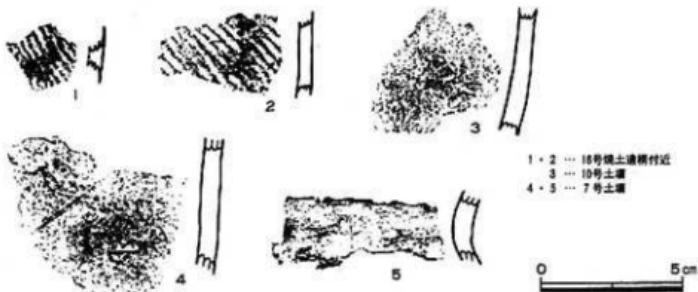
A区配石遺構群域外南側のU-9グリッドに位置する。Ⅲ層下層中面での確認である。近接する他の遺構はない。42cm×29cmの範囲に炭化粒が混入した黒褐色土が分布しており、12cm×6cm、12cm×5cmの2ヵ所で厚さ3cmほどの焼土を確認した。遺物の出土はない。

## 第15号焼土遺構 S X (F) 15

A区配石遺構群域外南東側のJ-10グリッドに位置する。Ⅲ層下層中面での確認である。近接する他の遺構はない。90cm×75cmの範囲に炭化粒が混入した黒褐色土が分布している。その



第27図 第14~19号焼土遺構実測図



第28図 土壌・焼土遺構出土土器拓影図

中に50cm×55cm、厚さ5cmほどの焼土を確認した。焼土の下に55cm×45cmの不整形を呈する、深さ15cmの丸底の落ち込みがあった。遺物の出土はない。

#### 第16号焼土遺構 SX(F)16 (第28図1・2)

A区配石遺構群域外南側のT-7グリッドに位置する。Ⅲ層下層中面で微量の焼土粒を確認したが形態が不明確で、詳細なプラン確認面はⅣ層上面であった。100cm×43cm、厚さ16cmの焼土が西方から東方へ斜位に落ち込んでいる。風倒木痕と重複しており、木が倒れる際に根の近くにあった本遺構が落ち込んだものと考えられる。焼土内より5点、付近より14点の縄文土器片が出土している。28図1・2は、本遺構付近出土の上器片である。出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

#### 第17号焼土遺構 SX(F)17

A区配石遺構群域内、その中央より西寄りのQ-9グリッドに位置する。Ⅲd層下位での確認である。本遺構の南～東側に弧状列石が位置する。36cm×25cmの範囲に厚さ4cmほどの焼土を確認、その上に20cm×25cm、厚さ3cmの炭化物が、木材の燃焼後の状態のまま堆積していた。遺物の出土はない。

#### 第18号焼土遺構 SX(F)18

A区配石遺構群域内、そのほぼ中央のR-10グリッドに位置する。Ⅲd層下位での確認である。南東側には12号配石遺構が近接する。縦長の石と角形の石の間に、56cm×16cmの範囲で厚さ4cmほどの焼土を確認し、その中に27cm×5cm、厚さ3cmの炭化物が、木材の燃焼後の状態のまま堆積していた。遺物の出土はない。

#### 第19号焼土遺構 SX(F)19

A区配石遺構群域内、その中央より最西端のO-8グリッドに位置する。Ⅲd層下位での確認である。本遺構に近接する他の遺構はない。42cm×29cmの範囲に焼土粒が混入した黒褐色土が分布しており、その中央より南寄りに厚さ4cmほどの焼土と、北側に25cm×16cm、厚さ6cmの範囲に炭化物を木材の燃焼後のままの状態で確認した。焼土内より1点の縄文土器片が出土している。

(藤井富久子)

## 6. 遺構外出土遺物

### 1) 土器

A区遺構外からは7点の復元可能土器とダンボール箱3箱の土器の出土があった。これらの土器は縄文時代後期に位置づけられるものであり、そのほとんどは配石遺構群域及びその周辺(P～Tグリッド)からの出土で、特にR・S-10グリッド、T-7グリッドからの出土が多い。層位的には配石遺構確認面(Ⅲd層中位)から遺構構築面(Ⅲd層下位)にかけて集中している。

## 第Ⅰ群 後期初頭～前葉の土器

### 3類 沈線文を主体とする土器 (第21図5, 29図1～5)

無文地に棒状工具により沈線文が施文されている土器類で、隣沈文で縦・横位に文様帶が区画されているもの、口縁部の横位平行沈線文から平行沈線文が曲線・直線的に延びるもの、円文・長方形文が施文されるもの等がある。本類には、深鉢、鉢、壺等の器形がみられる。いずれも焼成は良好で、色調はにぶい橙色、浅黄橙色、橙色を呈する。P-8, 11, Q-11, R-8, 11, V-8グリッドのⅢd層下位より出土している。

25図5はR-11, 12グリッド・Ⅲd層下位出土の鉢形土器で、口縁部に1条、洞部中央に3条の平行沈線文が施文されている。

### 4類 磨消繩文を主体とする土器 (第21図7, 29図6～31, 34)

充填技法、磨消技法による帯状文の施文されている土器類で、文様は2～3条の平行沈線で描かれている。文様には横位線文、幾可学文、入組状曲線文、階段状文等がある。口縁部無文帯に枝状の装飾文様があるもの(9, 14, 15)や幾何学文の交点付近に刺突が伴うもの(17)もみられる。深鉢には波状口縁のものと平口縁のものがあり、波状口縁の頂部には3～5条の棒状工具による側面押圧文を有するもの(6, 16, 23)もある。地文はL.R繩文がほとんどでまれにR.L, L繩文がみられる。色調はにぶい黄橙色、にぶい橙色を呈するものが多い。

25図7はS-10グリッド・Ⅲd層下位出土の深鉢形土器である。8つの頂部を有する波状口縁の土器で、帯状文により区画された洞部上半には入組状曲線文、口縁部には花弁状文が施文されている。また洞部の人組状曲線文の上・下端にも花弁状文が付加されている。

## 第Ⅱ群 後期中葉の土器

### 1類 磨消繩文に刺突が伴う土器 (第29図35)

沈線文内に纏繩文が充填され、さらに沈線文に沿って連續刺突文が施文される土器類である。R-11グリッド・Ⅲd層中位からの出土で、地文はL.R繩文、焼成は非常に良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

### 2類 磨消繩文の土器 (第29図36)

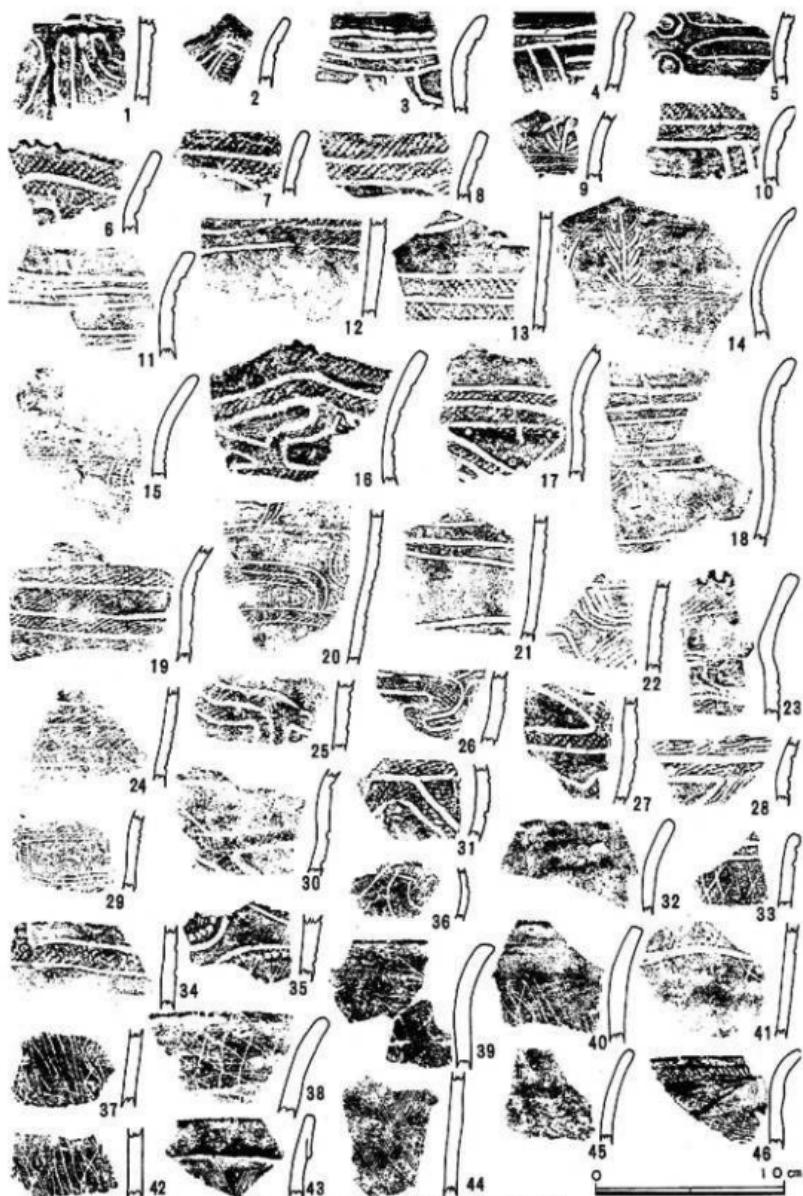
沈線による曲線文内に細繩文が充填された土器類で、P-8グリッド・Ⅲd層下位の出土である。地文はL.R繩文、焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

## 第Ⅲ群 後期初頭～中葉の土器

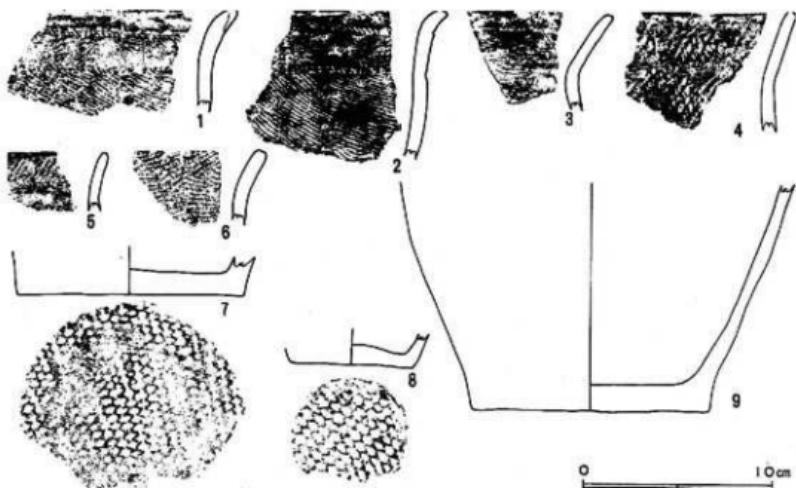
本群には後期初頭から中葉に位置づけられる条痕文、擦糸文、繩文の土器を一括した。

### 1類 条痕文の土器 (第29図43～44)

いずれもS-11グリッド・Ⅲd層中位からの出土で同一個体と考えられる。平口縁の深鉢で、折り返し口縁直下より条痕による格子目文が施文されている。焼成は良好で、色調は灰黄褐色を呈する。



第29図 A区遺構外出土土器拓影図(1)



第30図 A区遺構外出土土器拓影図(2)

2類 摺糸文の土器 (第29図33, 37~42)

経位方向の摺糸文、連鎖状部分を有する摺糸文(37, 40, 42)、網目状摺糸文(33, 38, 41)等が施された土器類で、ほとんどが平口縁の深鉢と考えられる。「I縁部が無文となるもの、口縁部や胴部下半の沈線文により文様帯が区画されているものもある。焼成は良好なものが多く、色調は灰褐色、にぶい橙色を呈する。P-Q-8~9グリッド、S-T-8, 10グリッドのIIId層下位からの出土である。

3類 繩文の土器 (第29図45~46, 30図1~6)

本類の土器には、胴部上端の摺糸圧痕文により口縁部無文部と胴部繩文部分を画しているもの(45~46, 1~2)、口縁部が無文のもの(3)、口縁部に無文帯を有しないもの(4~6)がある。いずれも平口縁で、口縁部が外反する深鉢である。摺糸圧痕文を有する土器にはL、その他の土器にはL, LR繩文が多用される。本類の土器はP-8~9, S-10, T-7, V-9, V-8グリッドのIIId層下位より出土している。

(秋元 信夫)

2) 石器 (第24図16~19)

A区調査区内の遺構外から出土した石器は、4点と少量である。

石鎌(16)…凸有茎石鎌で、長さ2.7cm、重さ1gを計る。石材は珪(硬)質頁岩である。

搔器(17・18)…17は器側縁を一周するように刃部加工される。18は一次剥離片に二次調整を加え成形しているもので、一部に刃こぼれ痕がみられる。石材は珪(硬)質頁岩である。

磨石(19)…径4.2cm程の偏平な円盤の比較的平坦な表裏2面を磨面とするもので、石材は石英安山岩である。

(藤井 安正)

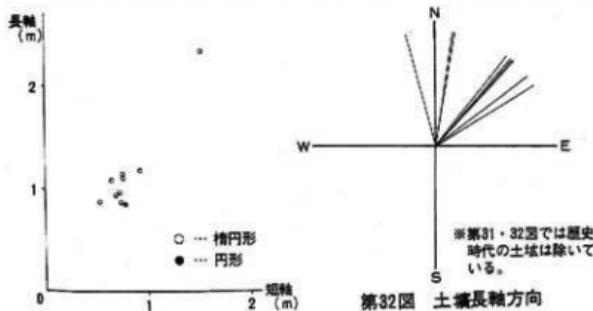
## 7. 小 結

第1次・2次発掘調査の2ヵ年でA区において検出された縄文時代の遺構は、配石遺構34基、弧状列石1条、土壙9基、柱穴状ピット8基、礫群1ヵ所、焼土遺構16基である。このほか歴史時代に属すると考えられる掘立柱建物跡1棟と土壙2基、時期不明の土壙1基があり、総計72基である。これらはA区の南東寄りに存在し、特に縄文時代の遺構はP～Tライン内に集中している。

ここでは、配石遺構と関連の深い、土壙、柱穴状ピット、焼土遺構についてまとめ、配石遺構・弧状列石については第4章に述べる。

土壙は、配石遺構群域内に7基が存在する。土壙同士の重複例が1例存在するが、他のものは重複、かつ集中することなく分布している。これらを概観すると、平面形が橢円形を呈するものが多い。規模(第31図)は長軸84～120cm、短軸78～100cmの範囲に集中しており、配石下で検出された土壙の規模と比較し、幾分小型である。長軸方向(第32図)は、北東方向を向くものと、磁北方向を向くものとに大きく2分することができる。数例で底面に赤色範囲が認められるものがある。土壙の性格は、その多くが配石遺構群域内という限定された区域内に存在していること、いずれも屈膝姿勢ならば埋葬できる規模をもち、埋土は人為堆積を示していることなどから、配石群域内に存在する7基の土壙は墓壙とみてさしつかないと考えられる。土壙(墓壙)から出土した遺物は極めて少ない。構築時期は遺構内周辺より出土した土器と確認面などから配石同様、後期前葉と考えられる。

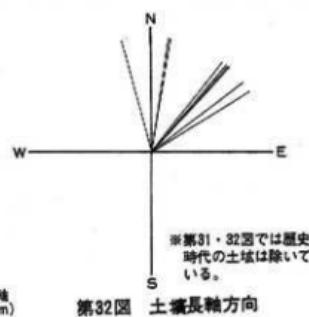
柱穴状ピットは、配石遺構群域内でも最も配石が集中するR-10グリッドを中心として、8基確認された。これらの多くは配石と重複し、確認状況などから判断して配石より新しくなることはない。このピット群の性格を考える上で参考となる類例としては、長方形柱穴列を検出した岩手県西田遺跡、墓壙の存在を示す墓標が立てられたと考えられるピットを検出した同蔵内遺跡などがある。A区においてもピット1～6の配置から長方形柱穴列を思わせる形態をみ



第31図 土壙の長軸・短軸相関図

せるが配置に並みが大きいこと、さらに各地でみられる類例は、柱穴列と墓壙群とが区画されており、A区のような混存した配置を示さない。

また墓標が立てられたピットであるとすればピット5、6、8の傍らに墓壙が



見あたらないこと、配石を墓標としてとらえれば、配石とピットが重複するものは、1基の墓壇に2つの墓標が存在することになる。このように疑問な点が多く、性格については即断することは避け、今後の課題としたい。

焼土遺構は2カ年で10基検出された。確認面及び周辺出土の遺物から配石・土壙と同時期と思われる。いずれも焼土は薄く、掘り込みをもたないことから、一時的な火焚場とみることができる。葬送儀礼の行われた場と推察できるが、積極的な根拠をもたない。(藤井 安正)

## 第IV章 B区の検出遺構とその出土遺物

本発掘区内より、フラスコ状土壙7基、Tピット2基、土壙8基、焼土遺構3基が検出された。なお、下方が末広がりになる所謂フラスコ状を呈するものをフラスコ状土壙、平面形が長楕円形を呈し深い掘り込みをもつ「溝状土壙」、「溝状ピット」などと言われているものをTピット、その他を土壙とした。遺構の多くは、発掘区南側西端部に集中している。また、フラスコ状土壙からは、多量の復元可能土器、土器片が出土した。以下項目別に記載する。

### 1. フラスコ状土壙とその出土遺物

第101号フラスコ状土壙(第34図、38図8~12、39図17~21、42図1~14、46図2・5・9・12・16、72図7・8・19、74図1~3・38、75図9~11・13・14・20、76図19)

発掘区南部のK-103グリッドのⅢe層上面で確認した。口径178×164cm、頸部径102×93cm、底径188×178cm、深さ192.7cmを測る。底面は平坦で中央付近はしまりがある。底面中央に37×35cm、深さ12cmの円形ピットをもつ。このピットの底面、壁とも軟弱である。覆土は15層に区分でき、上層部は人為堆積、下層部は自然堆積を呈する。1~4、6層は非常によく似ており、粘土粒、炭化粒を多量混入している。

覆土上~中位より多量の復元可能土器、土製装飾品2点、円錐状土製品7点、鋸形土製品胴部片、搔器、円盤状石製品各1点、底面・直上より円盤状土製品4点を出土した。また、覆土中より石鏃2点、搔器2点を出土した。

38図9、11、39図18は1層より出土した土器である。9は小型深鉢形土器で、口径11.3cm、底径5.1cm、器高11.6cmを計る。4個の波状口縁の土器で、2~3条の平行沈線により区画された口縁部から胴部上半に文様帶を有する。磨消繩文技法により、斜行線文、階段状文が横位に展開する。地文はL繩文で、色調はにぶい褐色を呈する。11は浅鉢形土器で、口径19.4cm、底径5.6cm、器高9.0cmを計る。口縁部に狭い無文帶を洩し、2条の平行沈線により区画された胴部等ほどに横位に展開するような曲線文を主体とする文様が施文される。これらの文様は3条の平行沈線により施文されている。18は無文の壺形土器で、口径10.3cm、底径12.0cm、最大胴径21.8cm、器高21cmを計る。底面には継代痕を有する。11、18とも焼成は良好で、色調は

11が灰黄褐色、18がにぶい黄橙色を呈する。

39図17は2層より出土した深鉢形土器で、口径26.5cm、底径12.3cm、器高24.0cmを計る。口頭部から胴部まで斜位方向の撚糸文が施文されている。原体はR縞文で、焼成は良好、色調は橙色を呈する。

39図21は6層より横につぶれた状態で出土した深鉢形土器で、口径29.7cmを計る。口縁部から胴部までR縞文を原体とする斜位方向の撚糸文（交叉部分を一カ所有する単軸絡糸体）が施文されている。焼成はやや良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

39図19は7層より出土した壺形土器で、底径10.6cm、最大胴径26.1cmを計る。口頭部には隆沈文により長方形文が施文され、胴部各の1条の横位隆沈文により区画された胴部上～中位の文様帶は、さらに縦方向の平行沈線文により8区画される。幅狭の区画内は「S」字文、渦巻文、弧状文が施文され、幅広の区画内には渦巻文、平行沈線が施文される。これらの調部文様は1～3条の沈線により施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

38図8、10、12、39図20は覆土上位より出土した土器である。8は浅鉢形土器で、口径10.3cm、推定器高7.8cmを計る。1個の突起を有し、その下に穿孔されている。口縁部から胴部まで横・斜方向のL R 縞文が施文されている。10は壺形土器で、底径6.9cm、最大胴径11.3cmを計る。胴部上半に曲線文を主体とするような文様内にL R 縞文が充填されている。12は6個の頂部を有する波状口縁の深鉢形上器で、口径14.4cm、底径6.0cm、器高17.4cmを計る。折り返し口縁部分は無文となり、波状口縁下には多条の弧状文が施文されこの直下及び弧状文間の口頭部から1条の沈線が垂下し、これらの縦位沈線文間を逆傾斜の平行沈線で連結されている。20は無文の壺形土器で、口径9.7cmを計る。これらの土器はいずれも焼成が良好で、色調は8、10が橙色、12がにぶい黄橙色、20がにぶい褐色を呈する。

42図10が底面、12が覆土下位、1、9が覆土中位、2～8、11、14が覆土上位出上の上器である。

出土遺物より、本造構の時期は縞文後期前葉と考えられる。

第102号フ拉斯コ状土壙（第34図、38図13～16、42図15～20、43図1～3、72図2・3。）  
(73図1、74図4・5・39・40・42、75図46・47)

造構が集中するK-101グリッドのⅢe層下面で確認した。本造構北西側に第105号フ拉斯コ状土壙、南東側に第104号土壙が隣接する。口径95×82cm、頭部径55×55cm、底径164×159cm、深さ176.0cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は直線的である。底面中央に35×26cm、深さ8.7cmの楕円形ピットをもつ。覆土は10層に区分でき人為地殻を呈する。

覆土上～中位より耳栓2点、覆土下位より土偶体部下半1点の他、覆土中より多量の上器片と円盤状土製品7点を出土した。

38図14は3層より出土した小型深鉢形土器で、口径8.2cm、底径3.8cm、器高8.2cmを計る。口頭部と胴部各の平行沈線により区画された胴部上～中位に、沈線による楕円形文を主体とす

る文様が横位に展開する。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。土器内にうるしと考えられる凝固物が付着していた。

38図15は覆土中～下位より出土した小型深鉢形土器で、口径9.6cm、底径4.6cm、器高10.0cmを計る。口頸部に長方形文、胴部上半に横位連続三角形文を施文し、区画文外にL R繩文を充填している。焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。

38図16は覆土下位より出土した蓋で、径16.1cm、厚さ0.5cmを計る。円盤状を呈し、内面が多少湾曲する。縁辺に2条の平行沈線を巡らし、中心部を通る平行沈線間に連続刺突文が施文されている。中央部を欠損しているが弧状文の一部がみられる。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

38図13は底面より出土した壺形土器で、口径9.8cmを計る。口頸部には隆沈文による円文、長方形文が施され、胴部全面には沈線による複雑な曲線文が展開する。また、口唇部の4ヵ所には、円形に粘土紐の貼り付けがなされ、縦に燃った粘土紐が口頸部円文に垂下している。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

42図15、43図1、2が底面、42図16～20が覆土下位、43図3が覆土中位出土の上器である。

出土遺物より、本遺構の時期は繩文後期前葉と考えられる。

第103号フラスコ状土壙(第34図、39図22、43図4～11、46図4、73図8、74図6・7・)

遺構が集中するK・L-101グリッドのIIIe層下面で確認した。第104号フラスコ状土壙と重複し、本遺構が古いと考えられる。また、北西側に第101号Tピット、第102号土壙、東側に第107号土壙が隣接する。口頸部は148×112cmの橢円形、底面は190×106cmの方形を呈し、深さ116.9cmを測る。遺構東半分はきれいなフラスコ状を呈し、底面も軟弱ではあるがほぼ平坦であるのに対し、西側半分は粗い掘り方をしており、まるで途中でやめたかのように見える。覆土は5層に区分でき人為堆積と考えられる。

底面直上より復元可能土器1点、底面より球状石製品1点の他、覆土中より円盤状土器5点、土偶頭部、石鎌、円盤状石製品各1点を出土した。

39図22は底面直上より出土した深鉢形土器で、口径29.5cm、推定器高38.4cmを計る。8個の頂部をもつ波状口縁で、頂部口唇部には大きめの円形刺突文(凹文)が施文され、その直下の口縁部には縦位の粘土紐の貼り付けがなされている。口頸部には弧状文、長方形文が施文され、円文、長方形文により区画された胴部上半はさらに2分され、三角形文、弧状文、「S」字文等により構成され、上下段に類似する文様が施文されている。これらの頸部、胴部文様は、すべて隆沈文によって施文されている。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

43図5～7、10が覆土上～中位、4、8が覆土上位出土の土器である。

出土遺物より、本遺構の時期は繩文後期初頭～前葉と考えられる。

第104号フラスコ状土壙(第34図、40図23～26、41図31・32、43図12～24、44図1・2、)

遺構の集中する K-101 グリッドの IIIe 層下面で確認した。第 103 号 フラスコ状土壙、第 101 号 T ピットと重複し、本遺構は第 101 号 T ピットより古く、第 103 号 フラスコ状土壙より新しいと考えられる。口径 81×80cm、腹部径 69×61cm、底径 222×176cm、深さ 121.4cm を測る。底面南側は一段低くなっている。確認面から 152.7cm を計る。底面は上・下段ともやや軟弱であるが、南側の方がしまりがある。覆土は 8 層に区分でき人為堆積を呈する。

底面上、底面より多量の復元土器、石錐 1 点、搔器 2 点の他、覆土中より円盤状土製品 3 点、石錐 1 点、搔器 2 点を出土した。

40 図 25、26、41 図 31 は底面南側の一段低い部分よりまとめて出土した土器類である。いずれも横軸状態での出土であった。25、26 はいずれも無文の土器で、焼成はやや良好、色調は灰褐色を呈する。25 は口縁部が若干内湾する深鉢形土器で、口径 12.0cm、底径 6.1cm、器高 16.8cm を計る。26 は壺形土器で、口径 7.5cm、底径 8.1cm、最大胴径 13.0cm、器高 19.9cm を計る。31 は L R 繩文を口縁部から胴部下半まで施文した深鉢形土器で、口径 23.8cm、底径 11.4cm、器高 31.7cm を計る。焼成はやや良好で、色調は灰褐色を呈する。

40 図 23、24 は壺形土器口縁部及び深鉢形土器底部で、いずれも底面からの出土である。無文土器の可能性が高い。色調はともににぶい橙色を呈する。41 図 32 は壺形土器で、口径 12.9cm を計る。口縁部の L R 繩文压痕文下より胴部にかけ、L R 斜繩文を施文している。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

43 図 15、16、23、24 が底面、43 図 17、44 図 1 が底面上出土の土器である。

出土遺物及び新旧関係より、本遺構の時期は繩文後期前葉～中葉と考えられる。

#### 第 105 号 フラスコ状土壙 (第 34 図、40 図 27、44 図 3～17、46 図 6・8・18、71 図 9～11・24・45・46)

遺構が集中する J-101 グリッドの IIIe 層下面で確認した。第 106・107 号 フラスコ状土壙と重複し、本遺構が古い。また、西側に第 105、106 号 土壙が隣接する。口径 89×80cm、底径 150×144cm、深さ 135.5cm を測る。底面東側は一段高くなっている。下段との差は約 5cm である。底面から 20～50cm 大の自然石が 5 個、また覆土中からも数個の自然石が出土した。覆土は 10 層に区分でき人為堆積を呈する。

覆土中より円盤状土製品 6 点、石錐 1 点、搔器 2 点を出土した。

40 図 27 は底面より出土した橢状把手を有する壺形土器の頭部である。頭部には隆帯による円文、長方形文が施文されている。これらの隆帯及び把手には、L R 繩文が施文されている。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

44 図 6、9 が底面、12 が覆土上位出土の上器である。

出土遺物及び新旧関係より、本遺構の時期は繩文後期前葉と考えられる。

#### 第 106・107 号 フラスコ状土壙 (第 34 図、40 図 28～30、41 図 33・34、44 図 18～30、46 図 7・14・17、72 図 16、73 図 14、74 図 2～17・25～29・31～34・47～51、75 図 21・28・39・45・49・50、76 図 2)

遺構が集中するJ-101グリッドのⅢe層下面で確認した。確認プランは2基の重複とも思えたが判然とせず、半裁し土層を観察した。土層断面からは1基と考えられるが、口頭部、底部のプランからは2基の重複とも考える事ができる為、とりあえず第106・107号とした。第105号フ拉斯コ状土壙と重複し、本遺構が新しい。また、南側に第105、106号土壙が隣接する。口径148×79cm、頸部径126×67cm、底径245×210cmを測る。底面は南西側が一段低くなる二段構造を呈し、確認面から上段まで134.7cm、下段まで146.1cmを測る。底面上段の東壁際に113×54cm、深さ22cmの掘り込みがある。また、中央には118×40cmの掘り込みがあり、底面上段から19.0cm、下段から7.6cmの深さを測り、この部分に貼り床がなされており堅くしまっている。覆土は11層に区分でき人為堆積を呈する。

覆土上位より鋸形土製品、環状土製品を各1点、覆土中位より岩板1点の他、覆土中より円錐状土製品26点、搔器3点を出土した。

40図28は覆土上位より出土した注口土器で、推定底径4.7cmを計る。体部上半に入組状曲線文を施文し、L縦文を充填している。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。40図29は覆土上位より出土した蓋である。台形状を呈し、縁辺に平行沈線を施文し、沈線間に横円文が施文されている。

41図34は覆土中位より出土した壺形土器で、口径10.5cmを計る。口頭部のL縦文圧痕文下より調部下半にかけ、L斜縦文が施文されている。41図33は覆土中～下位出土の壺と考えられる土器の底部である。胴部までLR縦文が施文されている。また底面には網代痕がみられる。33、34とともに焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

40図30は覆土下位より出土した碗状を呈する蓋である。沈線による入組状曲線文を主体とした文様が、横位に展開する。径13.4cmを計る。焼成はやや良好で、色調はにぼい黄橙色を呈す。

44図18、23、26、29が覆土下位、20、21、25、27、28が覆土中位、22、24、30が覆土上位出土の土器である。

出土遺物及び新旧関係より、本遺構の時期は縄文後期前葉と考えられる。

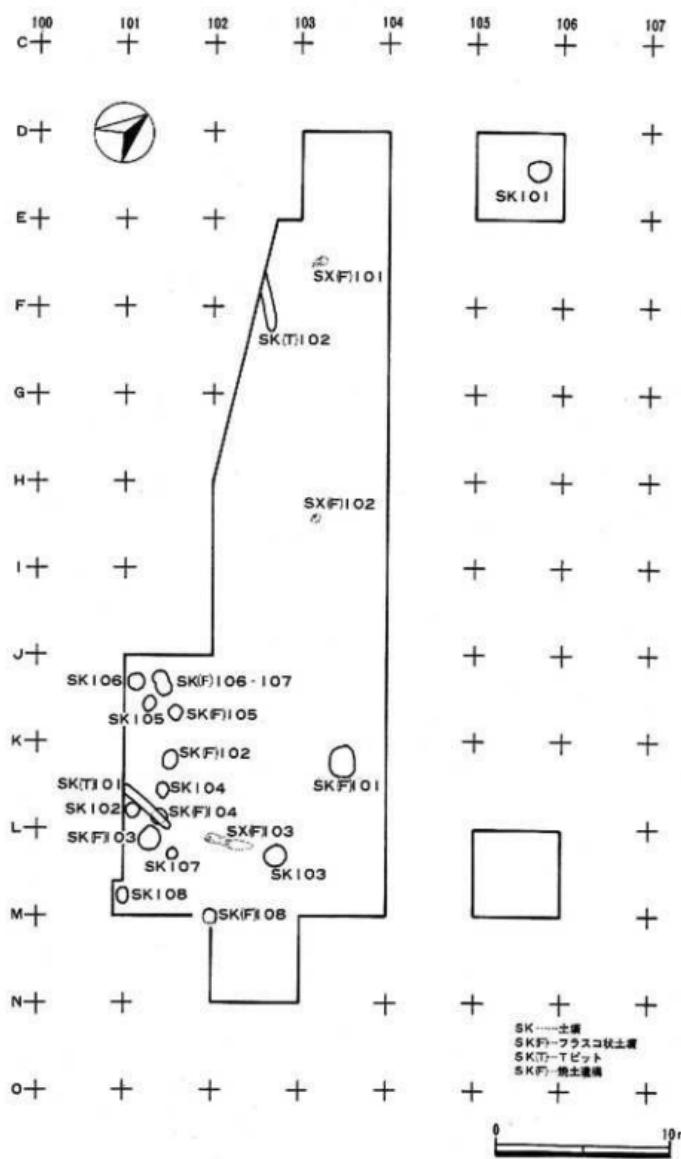
#### 第108号フ拉斯コ状土壙（第34図、44図31～34、46図1）

遺構が集中する地域南端のL・M-101・102グリッドのⅢe層下面で確認した。遺構南側は未発掘の為全貌は明らかでないが、口径79cm、頸部径66cm、底径110cm、深さ139.1cmを測る。底面はほぼ平坦で、底面中央に22×21cm、深さ11.4cmの方形ピットをもつ。覆土は14層に区分でき自然堆積を呈する。

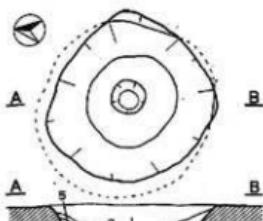
覆土中より少量の土器片と石鏃1点を出土した。44図31～33は沈線による横位横円文、平行線文を主体とした土器、34は撚糸文（交叉をもつ單軸絡条体）を施文している土器である。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文後期前葉と考えられる。

（佐藤　樹）

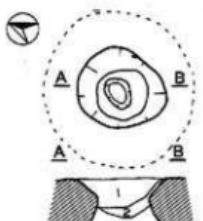


第33図 B区グリッド配置図・造構配置図

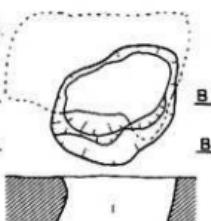


第101号 フラスコ状土壌  
1層 黒褐色土 (10YR3/2) 9層 増殖色土 (10YR3/4)  
2層 黒褐色土 (10YR3/1) 10層 明灰褐色土 (10YR4/6)  
3層 黒褐色土 (7.5YR3/1) 11層 にじく黄褐色土 (10YR4/3)  
4層 黒褐色土 (7.5YR2/2) 12層 にじく黄褐色土 (10YR4/4)  
5層 黒色土 (7.5YR2/1) 13層 黑褐色土 (10YR2/2)  
6層 黒褐色土 (10YR3/2) 14層 黒色土 (10YR2/1)  
7層 黒褐色土 (10YR3/1) 15層 黑褐色土 (7.5YR2/1)  
8層 黑色土 (10YR2/2)

第101号 フラスコ状土壌

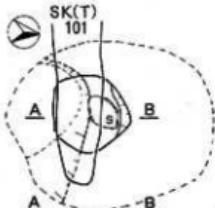


第102号 フラスコ状土壌  
1層 黒褐色土 (10YR2/2)  
2層 黒褐色土 (5YR3/1)  
3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)  
4層 增殖色土 (7.5YR3/4)  
5層 黑色土 (7.5YR2/1)  
6層 黑褐色土 (10YR2/2)  
7層 黑褐色土 (10YR2/2)  
8層 增殖色土 (10YR3/2)  
9層 黑褐色土 (5YR2/1)  
10層 黑褐色土 (10YR2/2)  
11層 增殖色土 (10YR3/1)



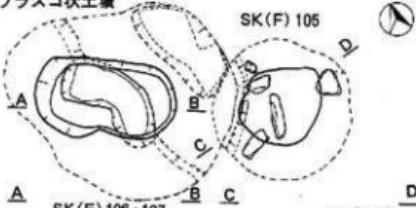
第103号 フラスコ状土壌  
1層 黒褐色土 (10YR2/2)  
2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)  
3層 黒褐色土 (7.5YR2/2)  
4層 增殖色土 (7.5YR3/3)  
5層 黑色土 (10YR2/1)

第103号 フラスコ状土壌



第104号 フラスコ状土壌  
土層記述  
1層 黒色土 (10YR2/1)  
2層 増殖色土 (10YR2/3)  
3層 增殖色土 (10YR3/2)  
4層 增殖色土 (7.5YR3/2)  
5層 增殖色土 (7.5YR2/2)  
6層 增殖色土 (7.5YR2/2)  
7層 增殖色土 (10YR2/2)  
8層 增殖色土 (10YR2/2)

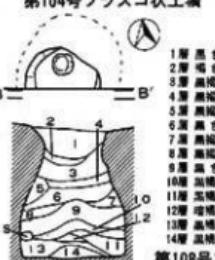
第104号 フラスコ状土壌



SK(F) 105  
A SK(F) 106・107  
B  
C  
D  
地山ブロック  
1層 黒色土 (10YR2/1) 地山粒・炭化少々、泥土粒  
2層 黑褐色土 (10YR2/2) 地山粒・地山ブロック多量  
3層 黑色土 (10YR1.7/1) 地山粒・地山ブロック・原化  
4層 黑色土 (10YR1.7/1) 花崗岩・粘土粒・砂土粒多量混入  
5層 黑褐色土 (10YR2/2) 砂岩・花崗岩・粘土粒多量混入  
6層 明灰褐色土 (10YR7/6) 地山粒・黑色土粒少量混入  
7層 黑色土 (10YR2/1) 地山粒・地山ブロック・原化  
8層 黑褐色土 (10YR3/2) 粘土粒少々混入  
9層 黑色土 (7.5YR1.7/1) 粘土粒少々混入  
10層 黑褐色土 (10YR2/1) 粘土粒多量混入  
11層 黑褐色土 (10YR2/1) 粘土粒多量混入  
12層 黑褐色土 (10YR2/2) 粘土粒少々混入  
13層 黑褐色土 (10YR2/3) 粘土粒少々混入  
14層 黑褐色土 (7.5YR2/2) 粘土粒少々混入

第105号 フラスコ状土壌

第104号 フラスコ状土壌



第108号 フラスコ状土壌

第34図 フラスコ状土壌実測図

## 2. Tピットとその出土遺物

### 第101号Tピット（第35図、44図35～37、45図1～2）

造構が集中するK-101グリッドのⅢe層下面で確認した。第104号フ拉斯コ状土壙と重複し本造構が新しい。また、北側に第104号土壙、南側に第102号土壙が隣接する。長軸390cm、短軸58cm、深さ97.7cm、長軸方向N-82°-Eを測る。底面はやや軟弱で、西側から東側に若干傾斜する。短軸方向の壁は、底面から垂直に立ち上り中程より外反する。長軸方向の壁は、ほぼ垂直に立ち上る。覆土は5層に区分でき自然堆積を呈する。

覆土中より少量の土器片、炭化したクルミを出土した。

出土遺物及び新旧関係より、本造構の時期は縄文後期中葉と考えられる。

### 第102号Tピット（第35図、45図3～9、74図52）

発掘区北西部のE・F-102グリッドのⅢe層下面で確認した。造構西端は未発掘の為全貌は明らかでないが、長軸330cm以上、短軸57cm、深さ166cm、長軸方向N-47°-Wを測る。底面は軟弱で平坦である。短軸方向の壁は、底面から垂直に立ち上り中程より外反する。長軸方向の壁は、ほぼ垂直に立ち上る。覆土は9層に区分でき上層部は人為堆積、下層部は自然堆積と考えられる。

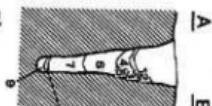
覆土中より少量の土器片、円盤状土製品1点を出土した。

出土遺物より、本造構の時期は縄文後期前葉と考えられる。

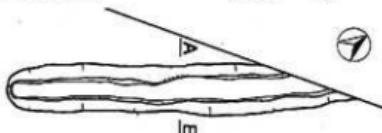
(佐藤 樹)

第101号Tピット土層注記

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1)
- 2層 黄褐色土 (10YR2.0/3)
- 3層 明黄褐色土 (10YR6.6/6)
- 4層 黑色土 (10YR2.0/1)
- 5層 黄褐色土 (10YR2.0/3)
- 6層 黑色土 (10YR2.0/1)
- 7層 黄褐色土 (10YR5.6/6)
- 8層 こぶい黄褐色土 (10YR6.4/4)
- 9層 黑色土 (10YR2.0/1)

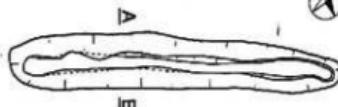
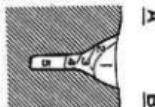


第102号Tピット



第102号Tピット土層注記

- 1層 黒色土 (10YR2.0/1)
- 2層 黄褐色土 (10YR5.6/6)
- 3層 黄褐色土 (10YR3.0/3)
- 4層 黑色土 (10YR6.4/4)
- 5層 増強土 (10YR3.0/4)



第101号Tピット

第35図 Tピット実測図



## 3. 土壙とその出土遺物

### 第101号土壙（第36図）

発掘区北端のD-105グリッドのⅢe層下面で確認した。平面形は126×104cmの楕円形を呈し、深さ15.7cm、長軸方向N-31°-Eを測る。底面は北側から南側に若干傾斜しており、やや凹凸

があって堅くしまっている。壁はほぼ垂直に立ち上る。覆土は4層に区分でき人為堆積を呈す。  
遺物の出土はなかった。

#### 第102号土壙（第36図、45図10～17、74図30、76図16・17）

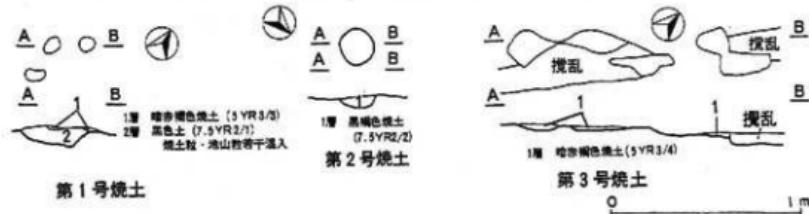
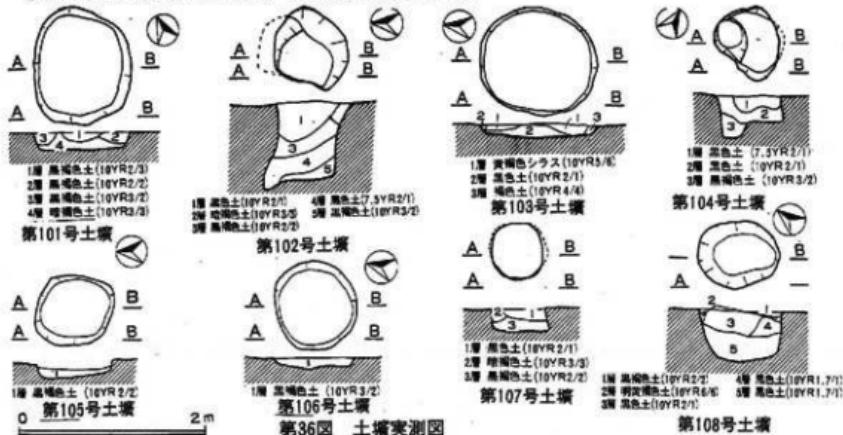
遺構が集中するK-101グリッドのⅢe層下面で確認した。北側を第101号Tピットと接し、東側に第103号フ拉斯コ状土壙が隣接する。平面形は78×78cmの円形を呈し、深さ93.7cmを測る。北壁は外側に若干入り込み、他はほぼ垂直に立ち上る。底面は北側が若干傾斜する他はほぼ平坦である。覆土は5層に区分でき自然堆積を呈す。

覆土中より少量の土器片、円盤状土製品1点、円盤状石製品2点を出土した。

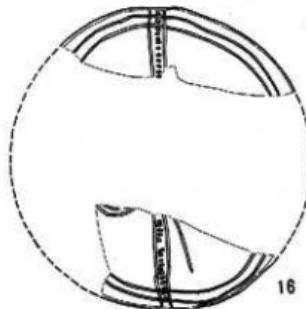
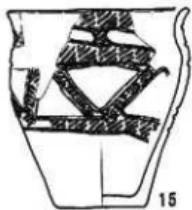
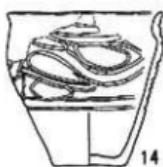
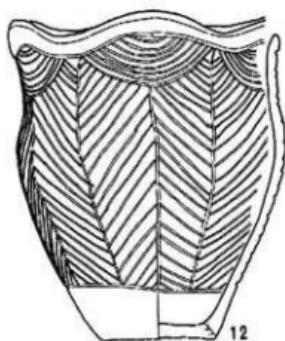
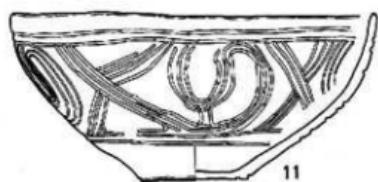
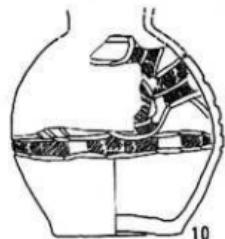
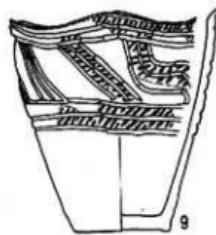
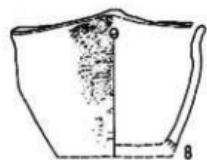
出土遺物より、本遺構の時期は縄文後期前葉と考えられる。

#### 第103号土壙（第36図）

発掘区南側のJ-102グリッドのⅢe層下面で確認した。南側に第108号フ拉斯コ状土壙が近接する。平面形は122×113cmの円形を呈し、深さ11.3cmを測る。底面はほぼ平坦で、堅くしまりがある。覆土は3層に区分でき人為堆積を呈す。

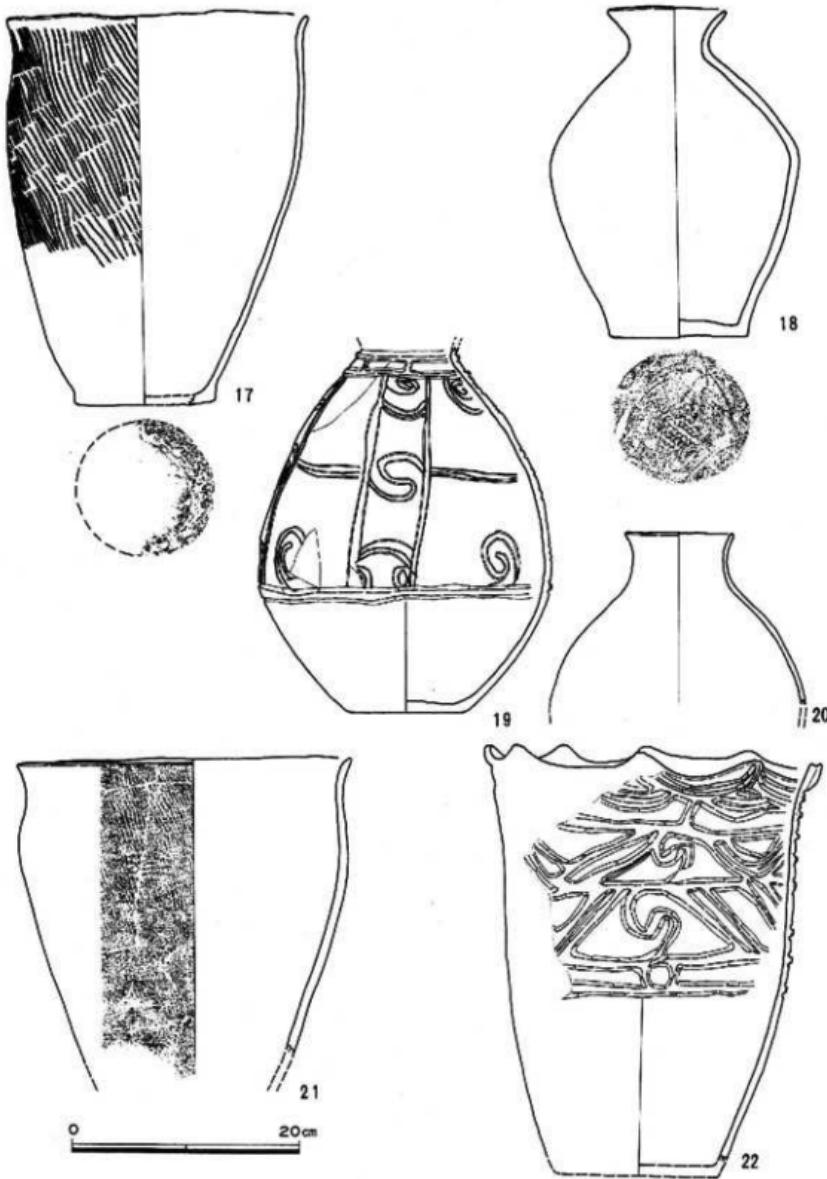


第37図 焼土遺構実測図



0 10cm

第38図 B区造構内出土土器実測図(1)(8~12...SK(F)101、13~16...SK(F)102)



第39図 B区遺構内出土土器実測図(2) (17~21…SK(F)101、22…SK(F)103)

覆土中より若干の土器片を出土した。

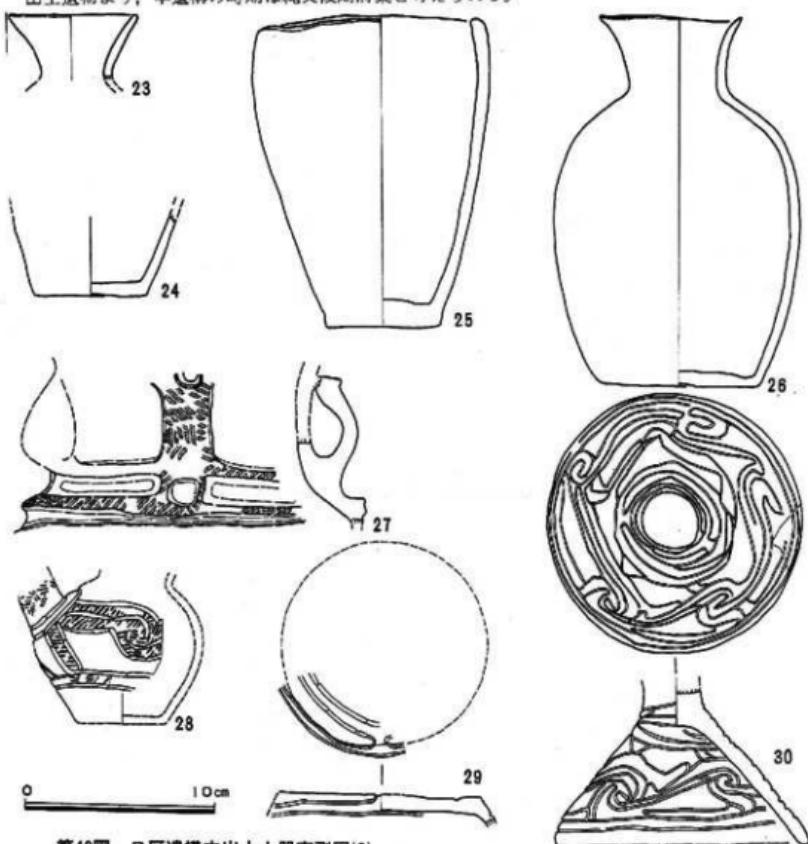
出土遺物より、本遺構の時期は縄文後期初頭～前葉と考えられる。

第104号土壙（第36図、45図18～21）

遺構が集中するK-101グリッドのⅢe層下面で確認した。北西側に第102号フ拉斯コ状土壙、南側に第104号フ拉斯コ状土壙、第101号Tピットが隣接する。平面形は77×61cmの円形を呈し、深さ27.4cmを測る。底面西壁際に41×34cmの円形ピットがあり、確認面から最深部までは50.5cmを測る。覆土は3層に区分でき自然堆積を呈する。

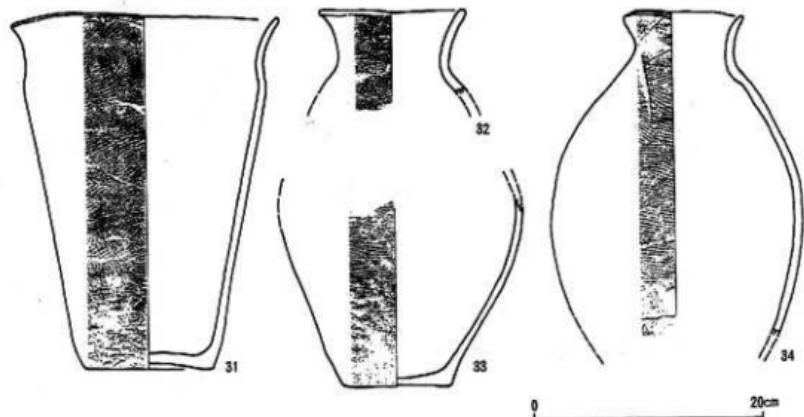
覆土中より若干の土器片を出土した。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文後期前葉と考えられる。



第40図 B区遺構内出土土器実測図(3)

(23～26…SK(F)104、27…SK(F)105、28～30…SK(F)106・107)



第41図 B区遺構内出土土器実測図(4) (31・32…SK(F)104, 33・34…SK(F)106・107)

#### 第105号土壤 (第36図)

遺構が集中するJ—101グリッドのⅢe層下面で確認した。北側に第106・107号フラスコ状土壤、北東側に第105号フラスコ状土壤、西側に第106号土壤が隣接する。平面形は78×74cmの隅丸方形を呈し、深さ15.8cmを測る。底面は若干凹凸がある。覆土は単一層で人為堆積と考えられる。遺物の出土はなかった。

#### 第106号土壤 (第36図)

遺構の集中するJ—101グリッドのⅢe層下面で確認した。北東側に第106・107号フラスコ状土壤、東側に第105号土壤が隣接する。平面形は95×85cmの円形を呈し、深さ8.4cmを測る。底面は若干凹凸がある。覆土は単一層で人為堆積と考えられる。

覆土中より若干の土器片を出土した。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文後期初頭～前葉と考えられる。

#### 第107号土壤 (第36図, 45図22・23)

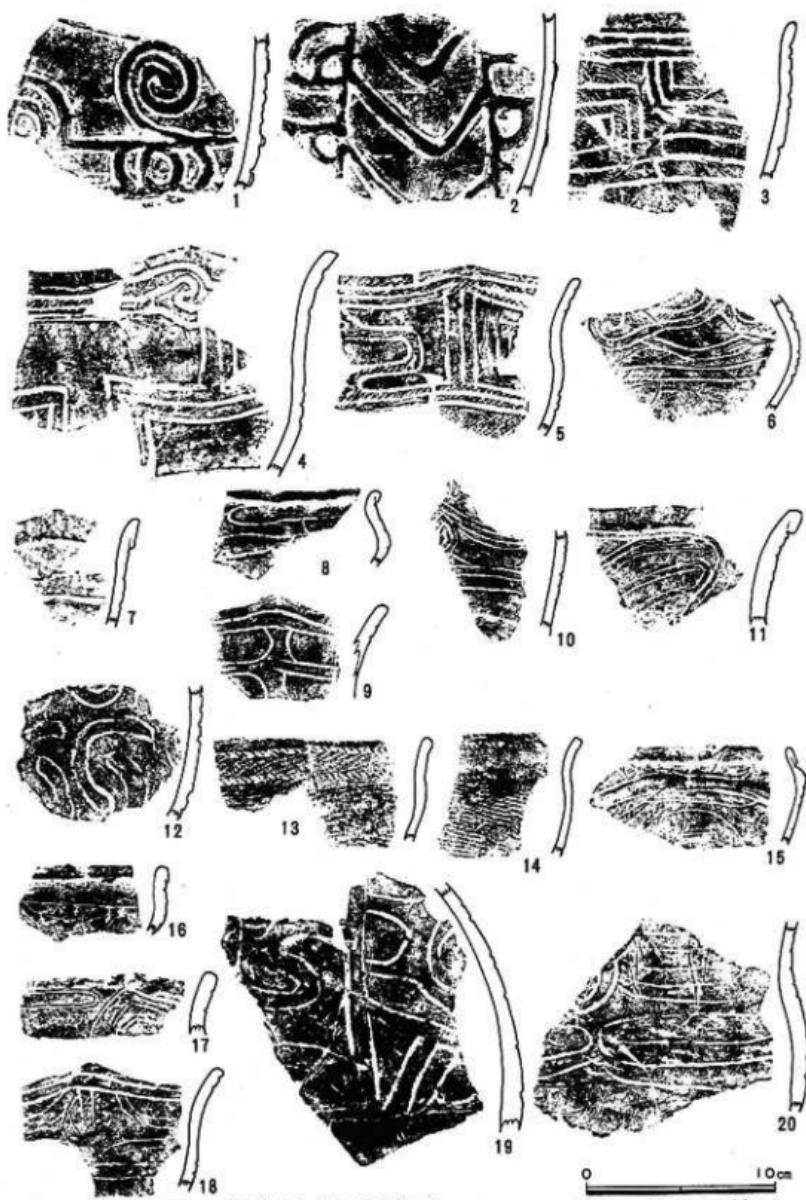
遺構が集中するL—101グリッドのⅢe層下面で確認した。西側に第103号フラスコ状土壤、南側に第108号土壤が隣接する。平面形は60×54cmの円形を呈し、深さ20.7cmを測る。底面はほぼ平坦で堅くしまっている。北・南壁は若干外側に入り込み、他は垂直に立ち上る。覆土は3層に区分でき自然堆積と考えられる。

覆土中より若干の土器片を出土した。

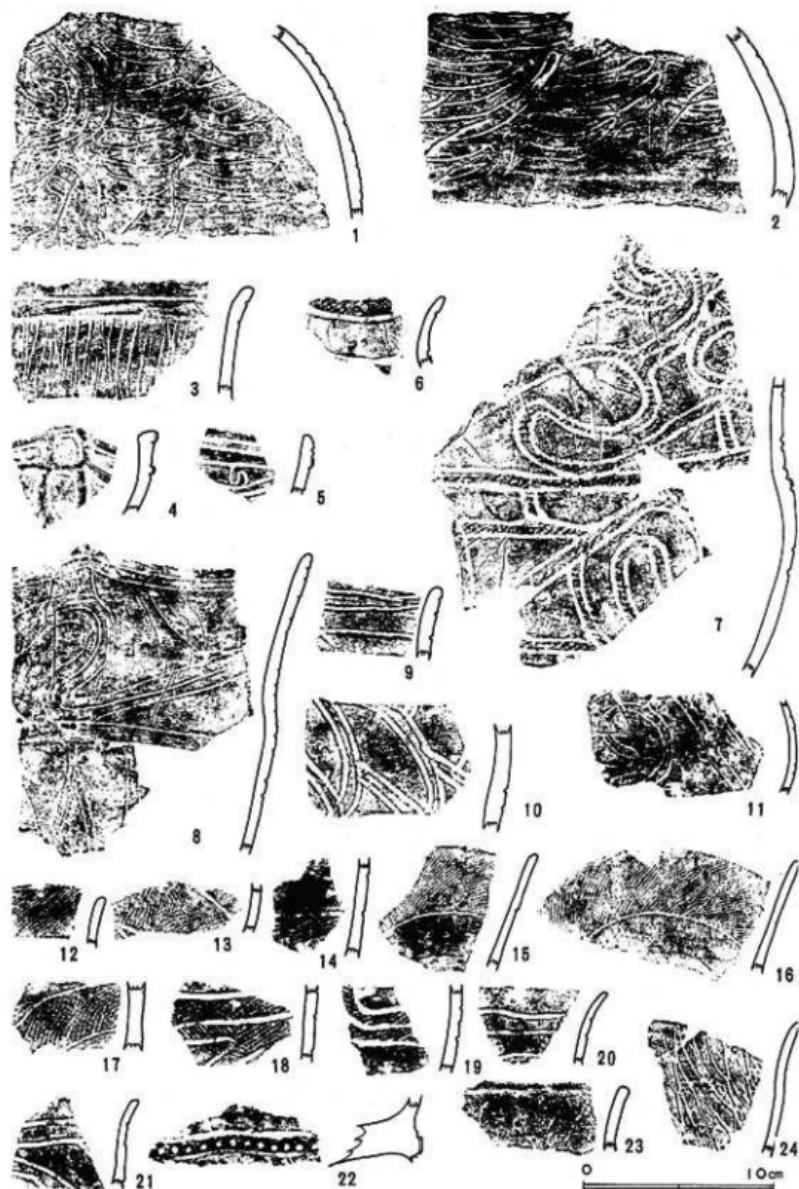
出土遺物より、本遺構の時期は縄文後期前葉と考えられる。

#### 第108号土壤 (第36図, 45図24～27, 74図18・53, 75図44)

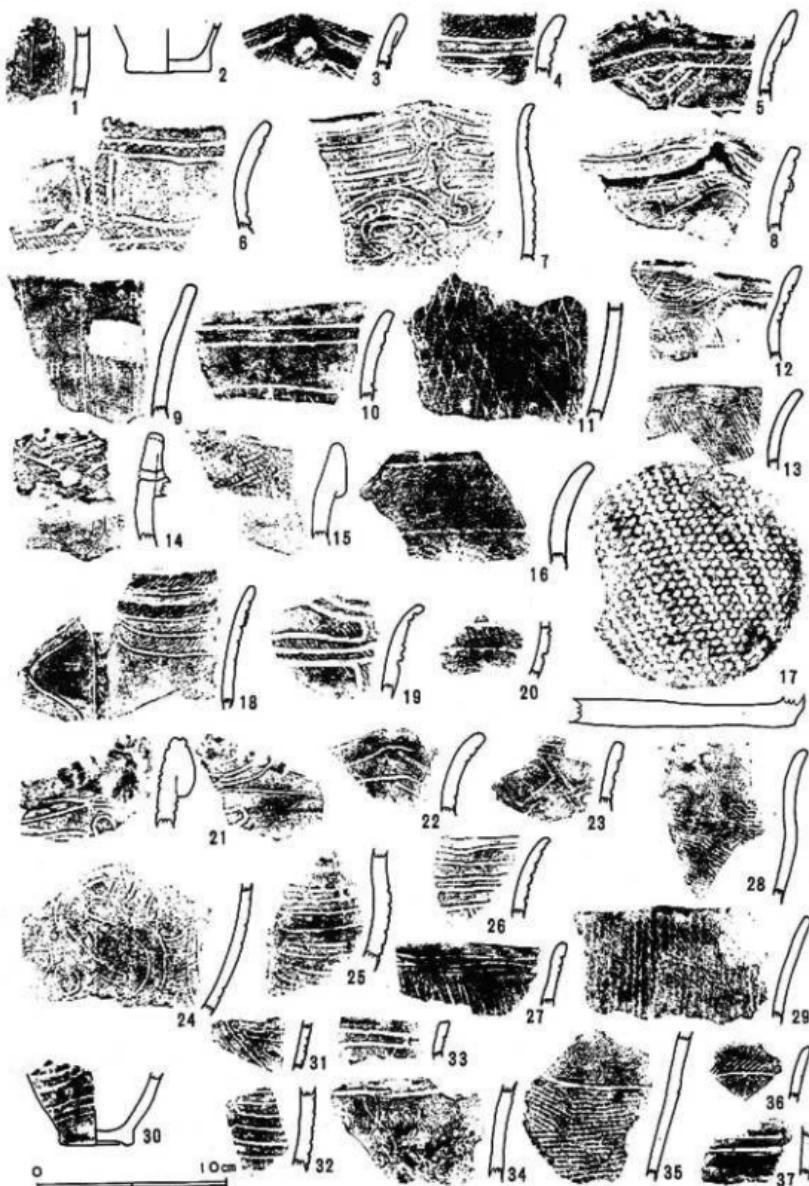
遺構が集中する地域南端のL—100・101グリッドのⅢe層下面で確認した。平面形は87×72cm



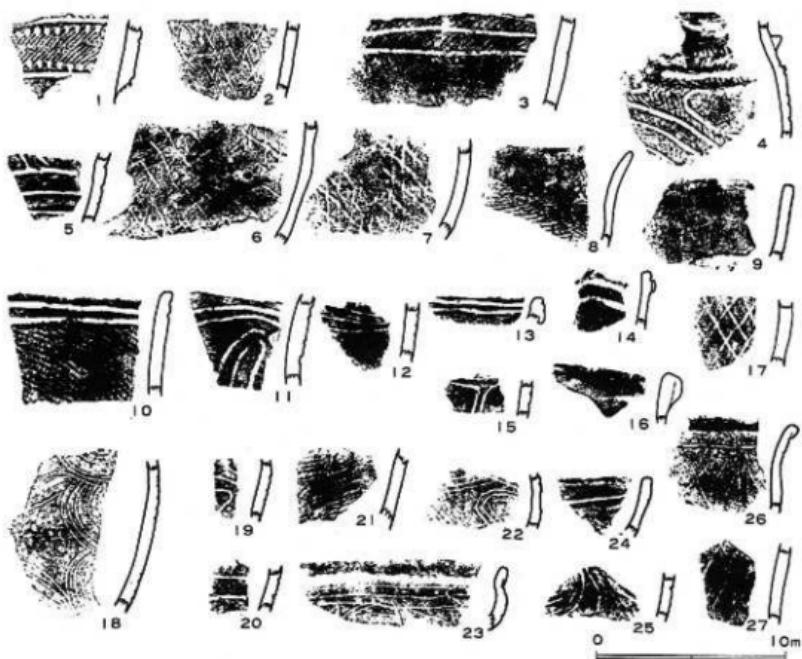
第42図 B区遺構内出土土器拓影図(1) (1~14…SK(F)101 15~20…SK(F)102)



第43図 B区遺構内出土土器拓影図(2) | 1~3...SK(F)102  
12~24...SK(F)104 | 4~11...SK(F)103 |

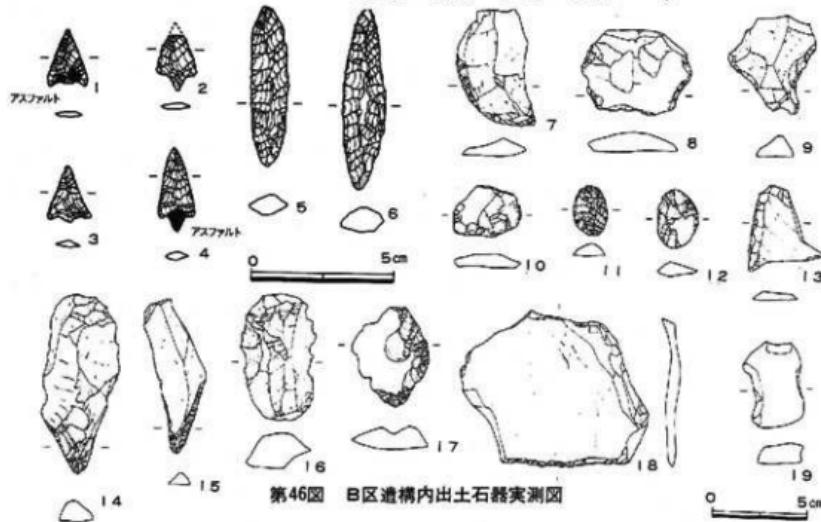


第44図 B区遺構内出土土器拓影図(3) | 1~2...SK(F)04 3~17...SK(F)105  
18~30...SK(F)106・107 31~34...SK(F)108  
35~37...SK(T)101



第45図 B区遺構内出土土器拓影図(4)

(1～2……SK(T)101 3～9……SK(T)102  
10～17……SK102 18～21……SK104  
22～23……SK107 24～27……SK108)



第46図 B区遺構内出土石器実測図

の楕円形を呈し、深さ55.4cm、長軸方向N-43°-Wを測る。底面はレンズ状を呈し堅くしまっている。南東壁はほぼ垂直に、他はゆるやかに立ち上る。覆土は5層に区分でき人為堆積を呈する。

覆土中より少量の土器片と円盤状土製品3点を出土した。

出土遺物より、本遺構の時期は縄文後期初頭～前葉と考えられる。

(佐藤 樹)

#### 4. 焼土遺構 (第37図)

3基検出され、いずれも掘り込みをもたない。また、焼土厚も薄く、焼土化も著しくない事から一時的な使用と考えられる。

第1号焼土は、E-103グリッドのⅢb層下面で確認した。42×26cmの焼土粒を含む黒色土範囲中に、約10×7cm、厚さ2cmの焼土が3カ所存在する。

第2号焼土は、H-103グリッドのⅢe層上面で確認した。規模は18×17cm、厚さ6cmを測る。

第3号焼土は、L-101・102グリッドのⅢb層下面で確認した。擾乱されており焼土範囲は明らかでないが、焼土厚2cmを測る。

(佐藤 樹)

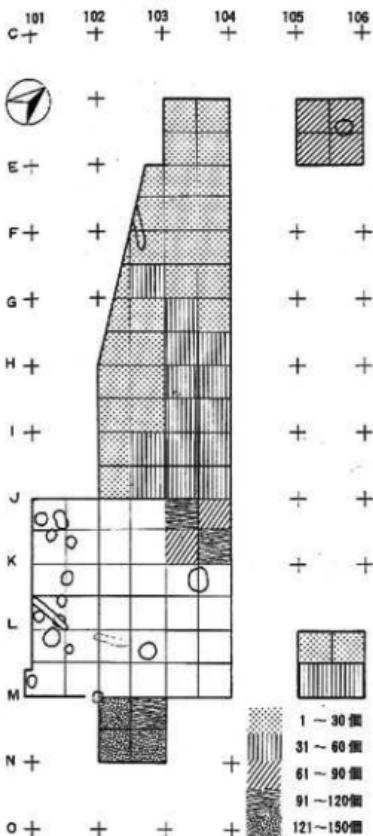
#### 5. 磚群 (第47図)

B区南東部を除くほぼ全域から多量の4~48cm大の磚が多数検出された。B区南東部は礫混入層のⅢ層にまで耕作の及んでいる地域であり、北西から南東方向に下るにつれ磚の分布密度が高くなること、この擾乱部分を境にして両側より多量の磚が検出されたことから、本来この磚はB区ほぼ全域に分布していたものと考えられる。これらの磚は、明らかに配石遺構の石とはその大きさ、形状において異なり、さらに人為的に配置された痕跡を認められず、区別される。しかし、この種の磚はこの台地上には本来存在せず、何らかの目的を持って、他からこの近傍に持ち込まれたと考えられる。なお同種の磚群は昨年度調査(A区)北西部及び北東部の一部においても検出されている。

これらの磚は擾乱部を除くほぼ全域のⅢa~Ⅲe層中位より検出され、総数2,506点を数える。その平面分布密度はM-102, J-103, I-103, H-103, G-103, F-102グリッドやD-105, L-105グリッドが濃い。土器、石器等の遺物と同様、野中堂環状列石を中心とする環状あるいは弧状の分布とも考えられるが、D, L-105グリッドの分布密度を考慮すると本発掘区東側の小沢(A区まで延びていたと考えられる)との関連も考える必要がある。この点については周辺の発掘を待たなければならない。

また、垂直分布を見ると、Ⅲb層の分布密度が高い。Ⅲa~Ⅲe層中位は縄文時代後期初頭～中葉の遺物包含層であり、これらの磚は同時期に廃棄あるいは流入したものと考えられる。

磚は10~16cm大の小型のものが多く、角磚が目につく。風化、亀裂、破碎した磚等さまざま



第47図 磁分布図

### 第I群 後期初頭～前葉の土器

本群は縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器で、東北地方北部の前十腰内、十腰内Ⅰ式、南部の南境式に比定できる。施文技法、主要文様により次のように細分した。

#### 1類 隆線文、隆沈文の土器（第51図81～83、55図1～4、9～18）

a 本類は隆線により文様を施文する土器類で、1点（1）が該当する。L-103グリッド・Ⅲb層からの出土で、横位方向の隆線から2条の平行隆線が垂下している。隆線には整形が加えられ、断面が三角形を呈する。小破片のため3a類の可能性もある。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

であり、火熱を受けている礫も若干見られる。岩質は流紋岩、石英安山岩、火山礫凝灰岩、石英閃綠玢岩、斜長石斑岩、粘板岩等多種多様である。  
(秋元信夫)

### 6. 造構外出土遺物

#### 1) 土器

B区造構外からは69点の復元可能土器とダンボール箱34箱の土器の出土があった。これらの土器は縄文時代後期に位置づけられるもので、その大半は後期前葉のものである。土器を初めとする遺物は、F～I-102グリッド、G～J-103グリッド及びM-102グリッドに集中し、南東部の擾乱を考え合わせると、これらの分布は、野中堂環状列石を中心とする弧状に分布していると考えられる。層位的には、明らかに擾乱と考えられるI～II層出土の土器を除くと、Ⅲa～Ⅲe層上位からの出土であり、Ⅲb～Ⅲd層の出土が多い。地山までの堆積土が厚い割には縄文時代の文化層が薄く、擾乱等により層序が不安定であり、出土土器と層序との関係は明確にできなかった。また復元土器が少なかつたこともあり、分類は施文技法及び特徴的文様の相違によった。

b, 本類は隆線上に縦文を有する隆沈文で文様を構成する土器類（2～4）である。数条の横位平行線文下から無方向に曲線文が延びている。隆線に伴う沈線は幅広で浅い。また隆帶上にはLR縦文が施されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色、にぶい褐色・灰褐色等を呈する。F-102, H-103グリッド・Ⅲb～Ⅲd層からの出土である。

c, 本類は隆沈文により文様が施される土器類（81～83, 9～18）である。隆線上に縦文は有せず、隆線から沈線部分にかけ、ていねいに整形が加えられている。文様より次のように細分した。

c<sub>1</sub> 縦位連結文（9～18）

溝巻文、縦位横円文を縱方向に連結したものや「8」字状文を、器面に等間隔に配置、その間を弧状あるいは直線文で連結している。波状口縁の深鉢が大部分と考えられ、これらの縦位連結文は、波状口縁頂部下に配置されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色、灰褐色等を呈する。F, H～J-102, K-103グリッド・Ⅲb～Ⅲe層から出土している。

c<sub>2</sub> 幾何学文（82）

口縁部から胴部にかけ、二方向の斜行陥線による格子目状文及びそれに沿う沈線文により、菱形連續文の効果を出している土器である。82はM-102グリッド・Ⅲd層出土の深鉢形土器で口径21.6cmを計る。4つの頂部を有する波状口縁で、頸部でいくらか狭まり、外反した口縁部はその先端において若干内凹する。胴部中央から下半にかけての文様は不明。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。

c<sub>3</sub> 無方向曲線文（81, 83）

区画された胴部文様帯全面に隆沈文による曲線文が展開する土器類を本類とした。胴部文様帯は胴部中央部よりいくらか底部寄りまで及ぶ。81は8個の頂部を有する波状口縁の深鉢で、口縁部でいくらか狭まり、外反した口縁部はその上半でわずかに内凹する。頂部下口縁には「8」字状文が施され、口縁から胴部下半までの胴部文様帯は2段に分離されている。この2段の文様帯には入組文、弧状文等の連結文が無方向に展開、類似した文様構成となっている。83は壺形土器の胴部下半で、隆沈文による円文をはさんだ長方形文2段により胴部文様帯を区画している。いずれも焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。81はJ-102グリッド・Ⅲb層、83はG-102グリッド・Ⅲb層より出土した。

2類 地文上に沈線文が施された土器（第48図45, 59図1～6, 8～9, 11）

本類は縦文を施した器面上に沈線文が描かれた土器類である。地文にはLR, L縦文が使用されている。口縁部には横位平行線文が施され、山形口縁頂部下には弧状文や「S」字文が付加されている。また胴部には2～3条の平行沈線による曲線文が施されている。これらの沈線は細く、浅い。文様自体も難で、一部擦り消されているものもある。焼成はやや良で、

色調はにぶい橙色、にぶい褐色、褐灰色を呈するものが多い。本類の土器はE～G, I～102, H, J～103, L～101～102グリッド・Ⅲb層より出土した。

3類 沈線文を主体とする土器 (第48図36～44, 46～47, 55図19～32, 56図1～31, 57図1～33, 36～37, 58図11～21)

本類には無文地に沈線文が施文された土器を一括した。口縁部文様や文様帯区画に隆沈文が使用されているものや格子目状沈線文等も本類とした。文様により次のように細分した。

a, 本類は縱位構円連結文、「8」字状文 (48図40, 56図12～20, 22～23), 縱位平行沈線文 (48図36, 56図1～2, 21)などを等間隔に配置、その間を2～3条の弧状や直線状の平行沈線で連結している土器類である。36は2つの頂部を有する波状口縁で、その頂部口唇部には構円形に粘土紐の貼り付けが行なわれている。またこの頂部下及びその中间には円文を主体とした文様が、胴部上端には2段の円文をはさんだ長方形文が隆沈文により施文されている。この円文から胴部中央にかけ、やや幅広の平行沈線が垂下し、その間に縱位波状沈線文が施文されている。40は4つの頂部を有する壺形土器で、口頸部に一条の隆沈文を巡らし、その直下から胴部にかけ、3条の平行沈線による縱位構円連結文が4ヵ所に施文され、それらを2～3条の弧状沈線文で連結している。本類には深鉢、壺がみられ、深鉢には折り返し口縁のものもある。焼成は良く、色調は浅黄橙色、褐灰色を呈するものが多い。I, L～M～102, G～J～103グリッド・Ⅲb～Ⅲc層からの出土である。

b, 本類は曲線文、直線文が無方向に展開される土器類 (48図38～39, 55図23～25, 29, 31～32, 56図5～8, 28, 57図5, 17～19, 21, 29)である。口縁部には平行沈線文や円文をはさんだ長方形文等が沈線や隆沈文により施文されている。また胴部に沈線による円形文の施文されているもの (57図17～18) や横位隆沈文が施文されているもの (55図30, 56図5)もある。これらの土器はいずれも焼成が良好で、色調は灰褐色、にぶい橙色、にぶい褐色等を呈する。本類の土器はF～G, I～J, M～102, F, K～103グリッド・Ⅲb～Ⅲe層から出土している。

c, 本類は曲線文や幾何学文が横位方向に展開する土器類である。横位平行線文、長方形文や円文をはさんだ長方形文を数段重ねた文様 (55図26～28, 56図29～31, 57図1～4, 6～16, 22), 三角形文、長方形文、構円形文等が横位方向に連結するもの (56図24～27), 横位方向に延びる曲線文 (48図42)などがある。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい橙色、にぶい黄橙色、灰褐色、にぶい赤褐色等を呈する。本類の土器はJ～L～101, F～I, M～102, H～J～103グリッド・Ⅲb～Ⅲd層からの出土である。

d, 本類には格子目状沈線文のものを一括した。沈線による格子目状文のもの (58図19)と条痕による格子目状文のもの (58図20～21)とがある。いずれも焼成は良好で、色調は灰褐色やにぶい褐色を呈する。K～101, F, H～102グリッド・Ⅲb層からの出土である。

e, 本類は脣部に縦位の矢羽根状の沈線文が一巡する土器類 (48図44, 46~47, 58図13~16) である。いずれも口縁部が外反する深鉢を呈し、口頸部と脣部下半の横位沈線文間に矢羽根状沈線文が施文される。等間隔に沈線が垂下され、その間には斜方向の沈線が施文される。この傾斜は交互に変わる。口縁部は無文となるものが多いが、幅広で波状口縁のものは、その頂部下に渦巻状の沈線文 (58図16) が施文されている。いずれも焼成は良好で、色調は灰褐色、にぶい褐色を呈する。本類の土器は I, L-102, H-I, K-L-103グリッド・Ⅲb~Ⅲd層より出土している。

4 類 磨消繩文を主体とする土器 (第49図48~53, 51図84~87, 52図88, 58図1~10, 59図7, 12~28, 60図1~31)

a, 本類は縦位椿円連結文、「8」字状文を特徴とする土器類 (59図7, 12~13) で、モチーフは第3 a 類に類似する。地文を回転押圧後、平行沈線で縦位椿円連結文、「8」字状文を主体とする文様を施文、その内・外を磨消している。13は平行沈線外を磨消して帯状文とし、7, 12は逆に平行沈線内を磨消している。地文にはLR斜繩文が多用される。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい褐色、灰黄褐色を呈する。これらの土器はF-102, G-102~103グリッド・Ⅲb~Ⅲc層より出土している。

b, 本類は幾何学文、曲線文が横位方向に展開する土器類である。文様を有する土器類では最も出土量が多い。これらの文様は脣部上半に限定され、脣部には階段状文 (49図53, 52図88)、波状文 (51図84)、斜状文 (51図86)、入組状文 (49図52, 51図87) を主体とする文様が施文される。主体となる文様からは文様帶を区画する帯状文に縦・斜方向の直線文・曲線文が伸び、所々に花弁状文をはじめとする装飾文様が付加され、全体として複雑な文様を呈する。口縁部には花弁状や「Y」字状などの装飾文様が施文されている。これらの文様は2~3条の平行沈線により施文され、磨消技法や充填技法により沈線間にのみ繩文をつけ、帯状文による文様としている。地文にはLR繩文が多用され、他にRL, L繩文が使用されている。焼成は良好なものが多く、色調は灰褐色、にぶい褐色、にぶい黄橙色等を呈する。

本類には深鉢、壺、鉢があり、深鉢は波状口縁、小突起を有する口縁、平口縁のものがあり、口頸部でせばまり、口縁部が外反するものが多い。波状口縁の深鉢の頂部口唇部に棒状工具の側面圧痕文や刻みを有するものもみられる。

これらの土器はJ~L-101, E~M-102, E~L-103グリッド・Ⅲa~Ⅲd層より出土している。

c, 本類は横位に展開する入組状曲線文を特徴とする土器類 (51図85, 59図18~28, 60図1~4) である。脣部上半の文様帶には、横位方向に連続した入組状曲線文が一巡する。区画帶との接点部分に花弁状文が付加される程度で、4 b 類に比べ、文様が単純である。口縁部には

4 b 群と同様、花弁状文等が施文されている。2~3条の沈線で文様を施文、L R, R L 繩文が充填されている。本類には深鉢、壺の他に鉢、注口土器等がある。焼成は良好で、にぶい黄橙色、にぶい褐色を呈するものが多い。本類の土器はE~H-102, G~I-103グリッド・Ⅲb~Ⅲd層から多く出土している。

d. 本類は横位平行沈線文を特徴とする土器類（49図48~50, 58図1~6）で、横位方向の帯状文だけのもの（49図49~50, 58図1~2），その間を斜線、階段状文、花弁状文等で連続しているもの（49図48）がある。前者は2条の平行沈線、後者は3条の平行沈線による文様の施文という違いもみられ、細分も考えられる。これらの土器の地文にはL R, L 繩文が使用されている。また焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色、にぶい褐色、灰褐色等を呈する。K-101, H~I-102, E, I~L-103グリッドのⅢa~Ⅲb層からの出土が多い。

#### 5 群 無文の上器（第49図54~64, 50図65~77, 52図89~90, 62図1~7）

本類はⅢ群3類の繩文のみ施文された土器に次いで多い。他類の口縁部や底部付近の土器片を混入している可能性もあるが、それらを除いても、この順位は変わらない。

本類には、深鉢、鉢、浅鉢、台付土器、壺等があり、比較的小型のものが多い。深鉢は平口縁のものと波状口縁のものがあり、後者には頂部に2~3条の棒状工具の側面圧痕文を施文しているもの（3）がある。また前者には折り返し口縁のもの（89, 1~2）もある。底部から外傾して口縁に至るものや口頭部で若干くびれ、口縁が外反する器形を呈するものもある。鉢はいずれも平口縁であり、口頭部で若干くびれ、口縁が外反するものと、底部から口縁まで直線的に外傾するものがある。浅鉢もやはり平口縁であるが、丸底や底径が小さく、やや内擣するか、底部から口縁まで直線的に外傾する。台付土器の台部は上げ底のものとそうでないものがある。壺も平口縁であり、大型のものは、口縁部が短く、最大胴径が胴部中央より若干下、小型のものは細口で、口縁部が長く、胴部中央よりやや下に最大胴径をもつ傾向にある。

これらの土器は焼成が良好なものが多く、にぶい黄橙色、浅黄橙色、にぶい橙色を呈するものが多い。B区中央部のI~J-103グリッド・Ⅲb~Ⅲd層より多く出土した。

#### 第Ⅱ群 後期中葉の土器

本群は繩文時代後期中葉の土器であり、東北地方北部の十勝内Ⅱ・Ⅲ式、南部の宝ヶ峯式に比定できる。出土量が少なく、全体の器形・文様を考察するほど復元できた資料もないため、主に施文技法により細分した。

#### 1 群 磨消繩文に刺突が伴う土器（第61図1~3）

曲線的な磨消繩文を構成する沈線に沿って、連続刺突文が付加されている土器類で、刺突は磨消繩文側に施文されるもの（1~2）が多いが、無文側に施文されたもの（3）もみられる。

刺突の方向は器面に垂直なもの、沈線文方向へ傾斜するもの、磨消繩文部から無文部方向へ傾斜するものがみられる。地文にはR LまたはL Rの細繩文が使用されている。焼成は非常に良く、色調は灰褐色、あるいは褐色、あるいは黄橙色を呈する。B区南西端のH-I-102, J-101グリッドのⅢa-Ⅲb層からの出土である。

## 2類 磨消繩文の土器 (第61図4~35)

磨消繩文による曲線文が施文された土器類で、細繩文が多用されている。地文にはL R繩文の他にR L, L繩文も若干使用されている。比較的薄手のものが多く、焼成も非常に良い、色調はによい黄橙色や褐色を呈するものが多い。4~5, 11~12は波状口縁頂部の装飾突起、2と6, 15と18は同一個体である。幅の広い帯状文、幾何学文、末端に渦巻部をもつ曲線文、入組帶状文と種々の文様があり、細分が可能であり、時間的幅があると考えられる。

本類の土器はE-102, F-103, H-I-102~103, J-L-101グリッド等のⅢa~Ⅲd層から出土しているが、層位的にはⅢb層からの出土が多い。

第Ⅱ群とした土器のほとんどは深鉢と考えられる。平口縁、波状口縁や装飾突起を有するものなどがあり、底部から外傾して立ち上がるものの、口縁部が若干内彎するもの、外反するものなどがみられる。

## 第Ⅲ群 後期初頭~中葉の土器

A区と同様、本群には後期初頭から中葉に位置づけられる条痕文、撚糸文、繩文の土器を一括した。

### 1類 条痕文の土器 (第52図91~93, 53図94, 63図1~4)

本類の土器はすべて深鉢で、平口縁の他に4つの頂部をもつ波状口縁のものもあるが、その高低差は小さく、平口縁に近い。口縁部が外反するものが多く、92のように底部から胴部にかけ大きく外反し、口縁部で垂直に立ち上がる器形のものもみられる。

条痕は縦位で、胴部以下に施文、口縁部に無文部を有するもの (91~93, 63図1~2) と口縁部上端から施文されるもの (94) がある。焼成は良好なものが多く、色調は灰褐色、あるいは褐色、あるいは黄橙色等を呈する。本類の土器はI-102グリッド、D, G~I, L-M-103グリッドのⅢb~Ⅲd層より出土している。

### 2類 撥糸文の土器 (第50図79~80, 53図95~98, 62図9~27)

単軸絡条体の回転押圧文を本類とした。本類は軸への条の巻き方により次のように細分される。

#### a, 撥糸文 (第53図95, 62図9~14)

本類は軸の周囲に条を单一方向に卷いたものを縦位方向に回転押圧した文様を有する土器類である。口縁部の2~3条の平行沈線から胴部下半にかけ施文され、口縁部が無文となるもの

(9~10, 13), 沈線等の境界文を有しないが、口縁部を無文としているもの (14), 口縁部上端から撚糸文が施文されるもの (95, 11~12) がある。軸に巻かれる条にはし縄文が多用され、R縄文がそれに次ぐ。焼成はいずれも良好で、色調はにぶい褐色、灰褐色を呈するものが多い。

b, 綱目状撚糸文 (第50図79, 53図96, 62図15~21)

本類は2本の条を用い、一方を軸に右巻に、他を左巻にしたものと縦位方向に回転押圧した文様を有する土器類で、交叉部分が交互に上下するもの (17, 19) と同一方向のみが上となるものがあり、後者が多い。条にはR縄文が多用されている。折り返し口縁直下から施文されるもの (15, 17), 脊部上端の横位沈線文下から脣部にかけ施文するもの (18) の他、綱目状撚糸文が脣部上端あるいは口頭部から施文されるものなど口縁部に無文帶を有するものがほとんどである。これらの土器の焼成は良好なものが多く、色調はにぶい褐色、灰褐色を呈するものが多い。

c, 連鎖状撚糸文 (第50図80, 53図97~98, 62図22~27)

本類は、撚糸が弧をなして次々に重なった様な文様を有する土器類で、前に巻いた部分を跨ぎながら巻き進んだ結条体を縦位に回転押圧し、文様が施文されている。一ヵ所だけ路がせた結条体のもの (98) や2~3ヵ所跨がせた結条体のもの (80, 97, 22~27) がある。前類と同様、脣部上端に平行沈線が施文され、口縁部は無文となっているものが多い。条にはR縄文が多用されている。焼成は良好なものが多く、色調は灰褐色、にぶい褐色、にぶい黄褐色等を呈する。

第2類土器はほとんど深鉢で大型のものが多い。ゆるい波状口縁か平口縁で、脣部上半が張り出し、口縁部が外反するものが多い。F~G-102, I~K-103グリッド・Ⅲb層に集中している。

3類 繩文の土器 (第50図78, 53図99, 54図100~103, 63図5~27)

口頭部の撚糸圧痕文や平行沈線文以外に文様を有せず、縄文を主文様とする土器類を本類とした。撚糸圧痕文、平行沈線文の有無や、口縁部無文帶の有無により次のように細分した。

a, 撥糸圧痕文が無文部分と縄文部分を画するもの (102, 5~14, 19)

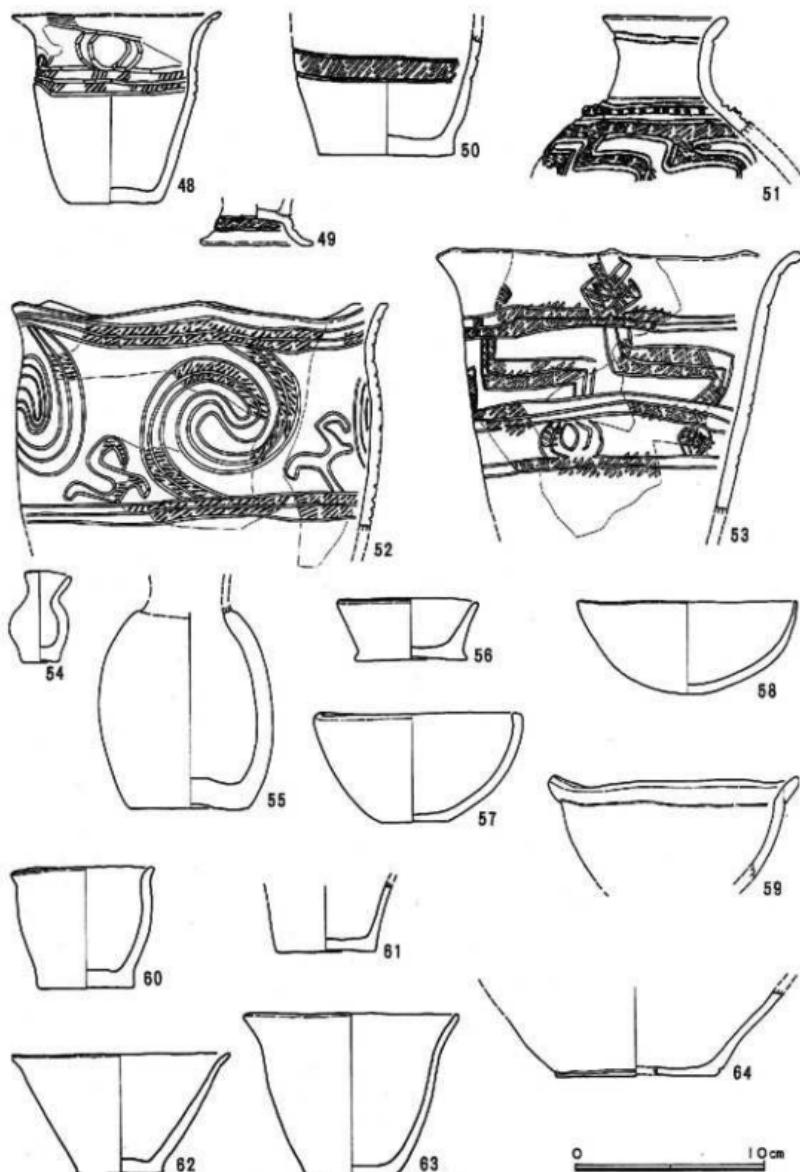
脣部上端の口縁部無文帶との境界にのみ撚糸の圧痕がなされるもの (102, 9~14, 19) と他に口縁部上半にも撚糸圧痕がなされているもの (5~8) がある。縄文は脣部上端から下半にかけ施文され、その原体にはしR縄文が多用され、RL, L縄文と続く。撚糸圧痕文の原体も脣部縄文と同一種類のものが使用されている。これらの土器の焼成は良好で、にぶい褐色、にぶい橙色、灰褐色等を呈する。.

b, 沈線文が無文部分と縄文部分を画するもの (15~18)

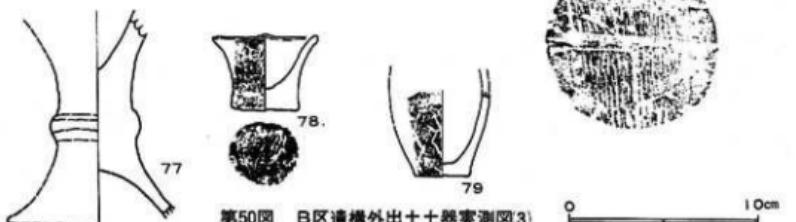
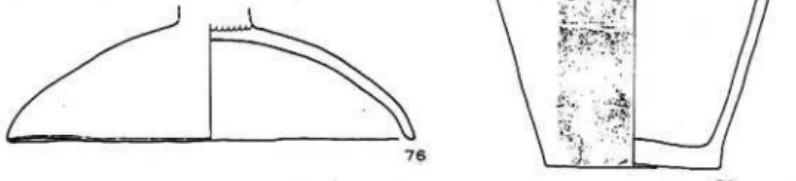
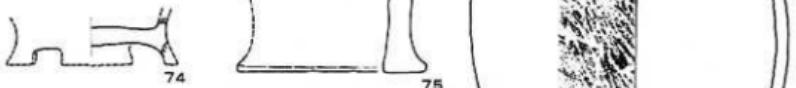
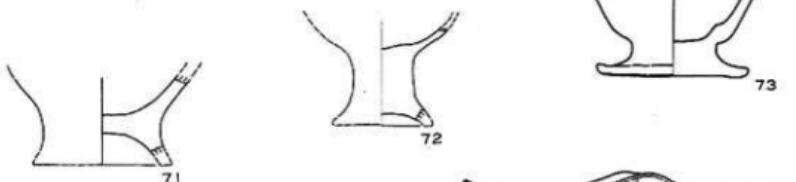
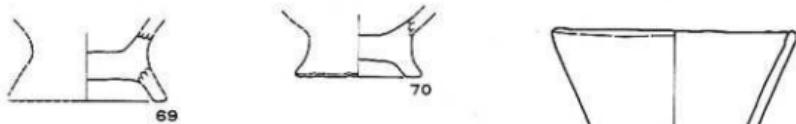
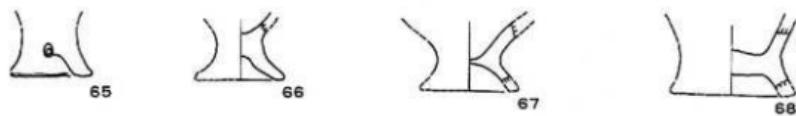
本類にも口縁部無文帶との境界にのみ1条の沈線文が施文されるもの (15~16, 18) と2条



第48図 B区遺構外出土土器実測図(1)

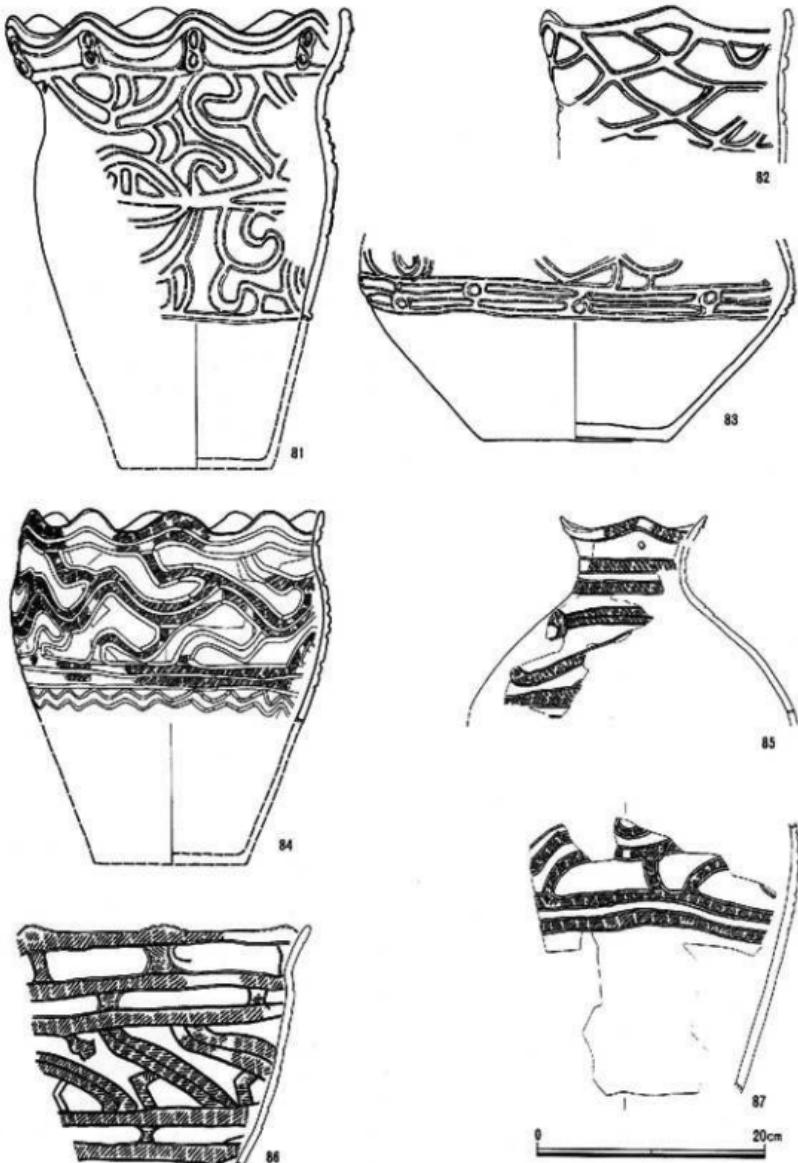


第49図 白区遺構外出土土器実測図(2)

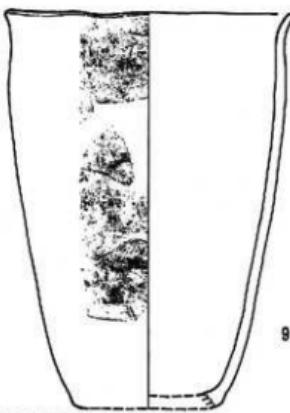
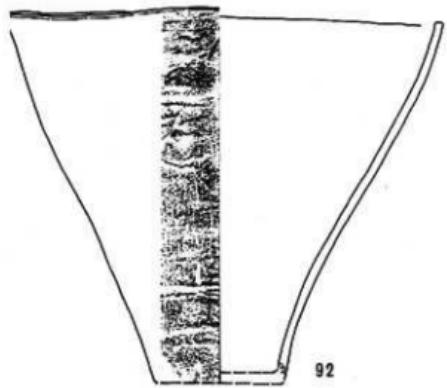
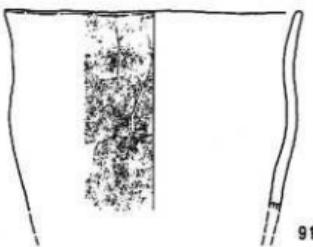
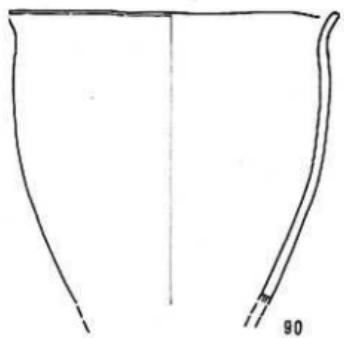
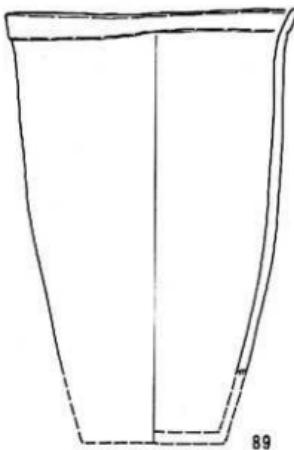
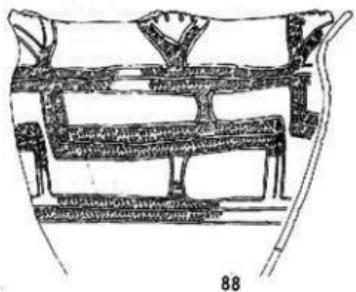


第50図 B区遺構出土土器実測図(3)



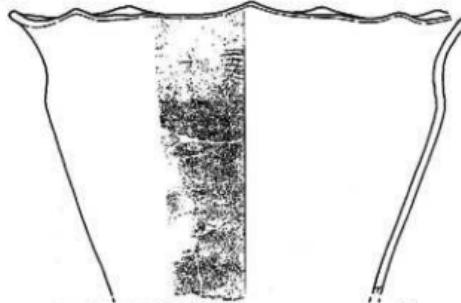
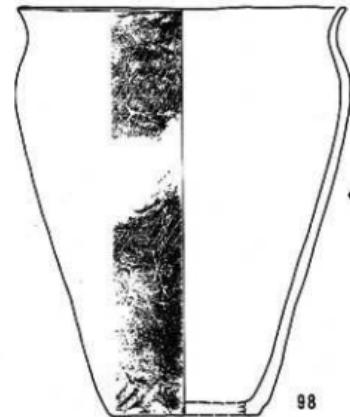
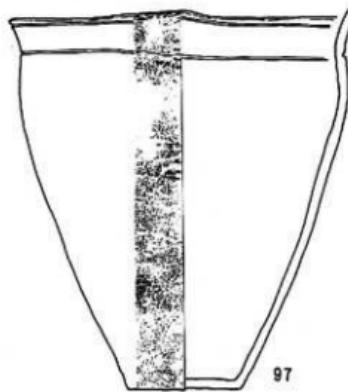
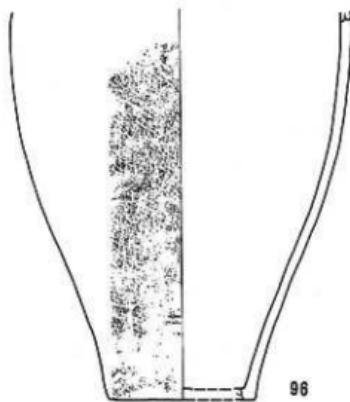
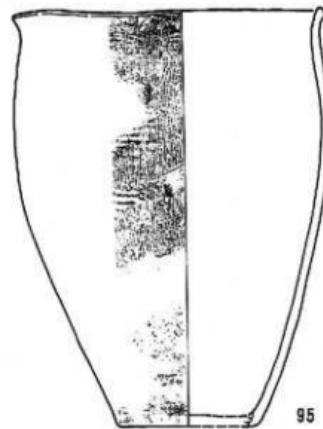
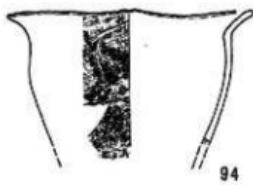


第51図 B区造構外出土土器実測図(4)



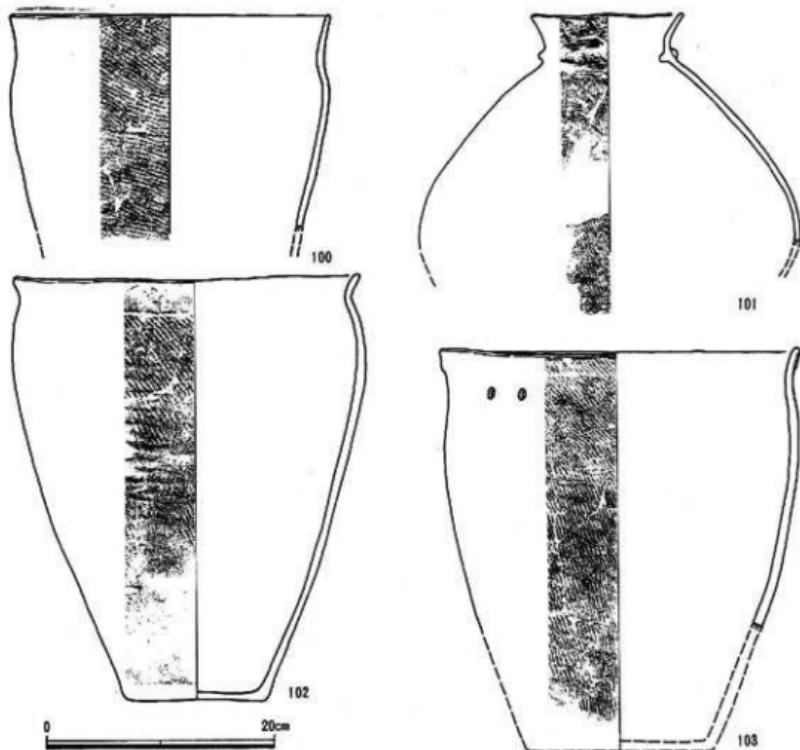
0 20 cm

第52図 B区造構外出土土器実測図(5)



0 20cm

第53図 B区遺構外出土土器実測図(6)



第54図 B区遺構外出土土器実測図(7)

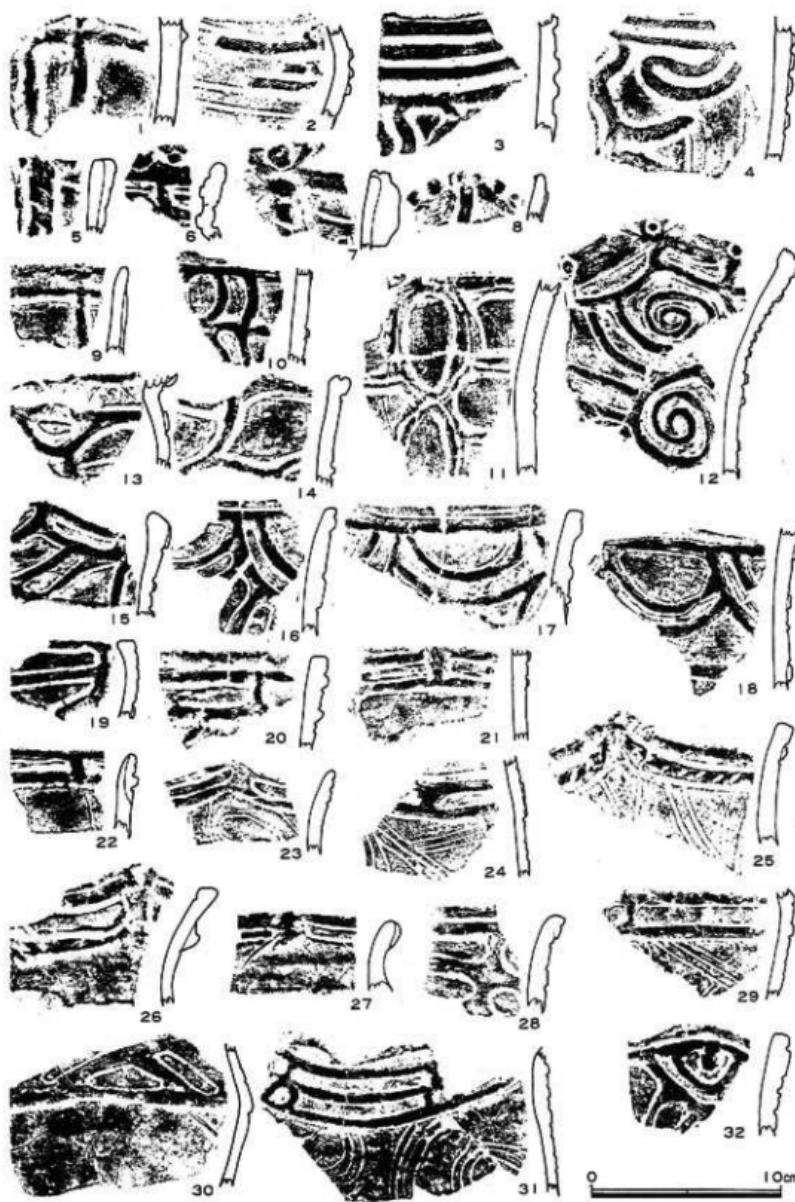
の平行沈線が施文されるもの（17）とがある。前類に比べて無文帯の幅が狭い傾向にある。18の口縁部の磨消は充分でなく、部分的に地文が残っている。地文にはL R綱文が多用され他にR L綱文のものもみられる。これらの土器の焼成は良好なものが多く、色調は灰褐色、にぶい褐色、にぶい赤褐色等を呈する。

c, 隆帯が無文部分と綱文部分を画するもの（101）

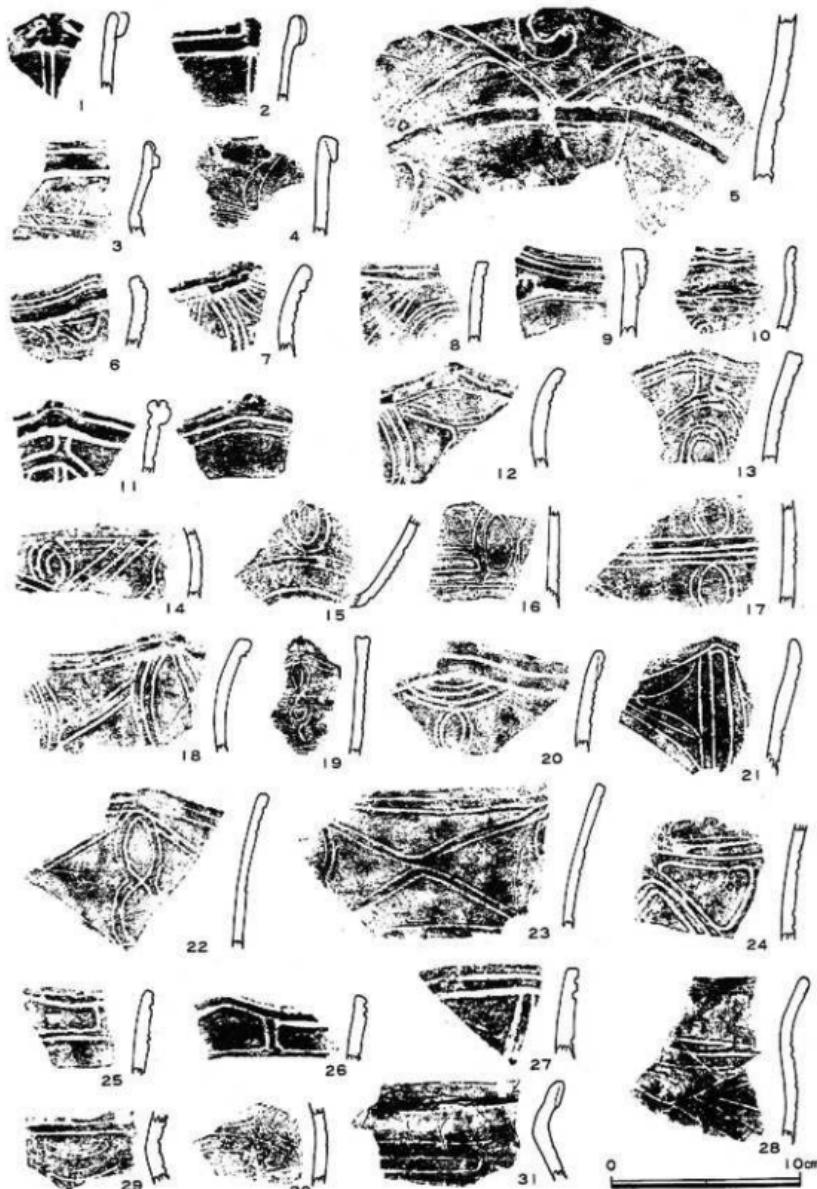
本類は壺形土器にのみ見られ、口縁部の隆帯下から胴部にかけ綱文が施文されている。101は口径13.4cmを計る壺形土器で、胴部にはR L斜綱文が施文されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

d, 口縁部に無文帯を有するもの（20～23）

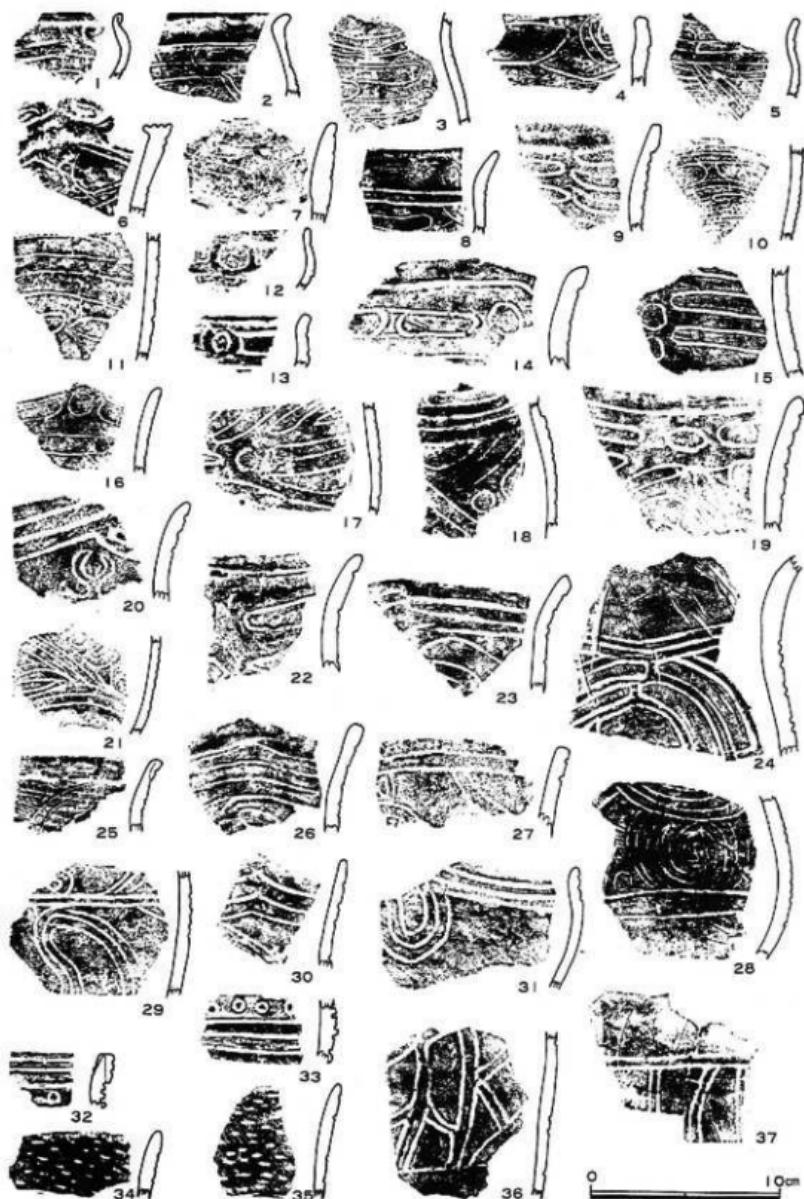
撫紙圧痕文、沈線文、隆帯等の区画文を有しないが、口縁部に無文帯を有する綱文の土器を本類とした。地文はほとんどL R綱文、焼成はやや良、色調は褐灰色を呈する。



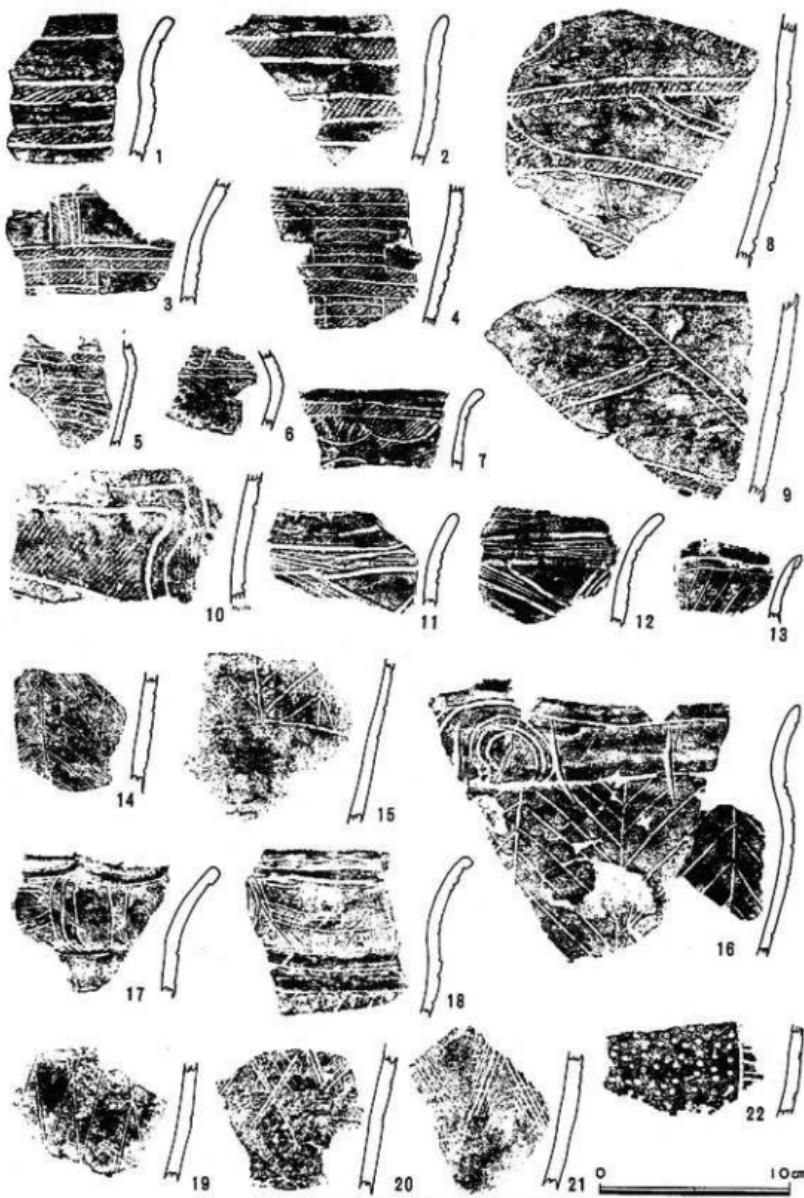
第55図 B区遺構外出土土器拓影図(1)



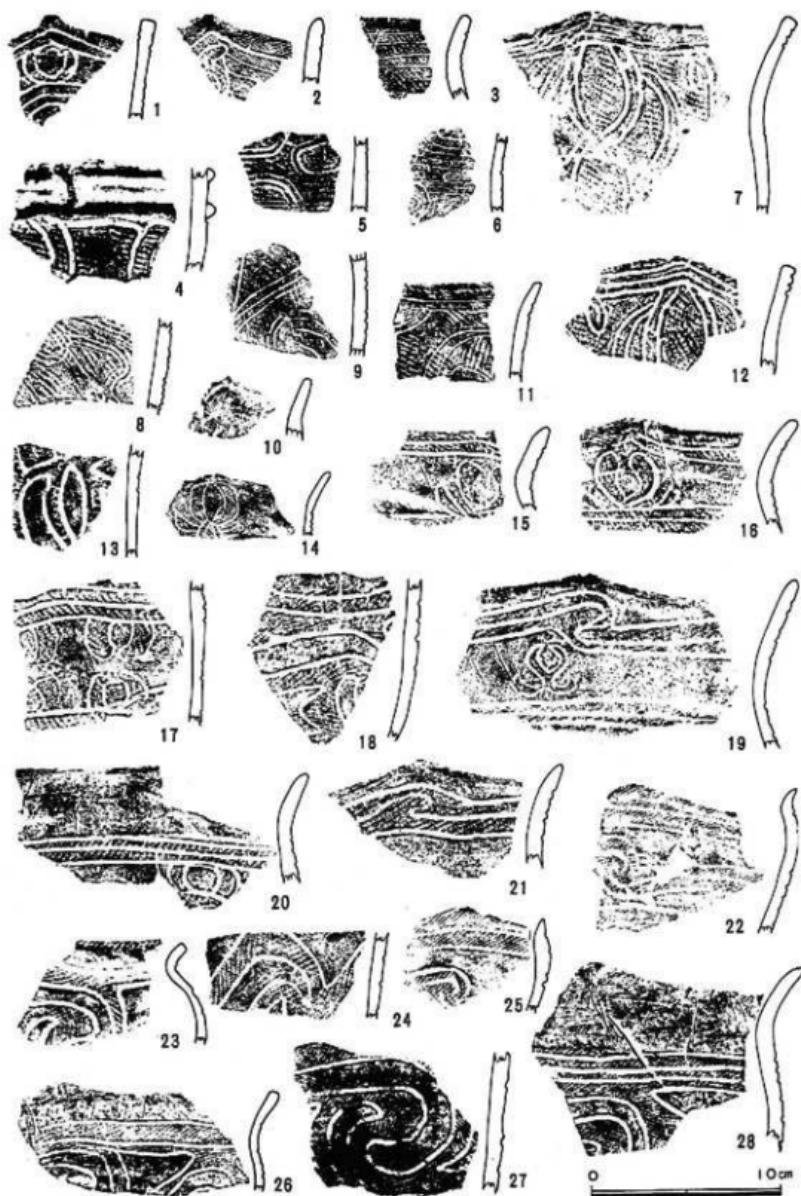
第56図 B区遺構外出土土器拓影(2)



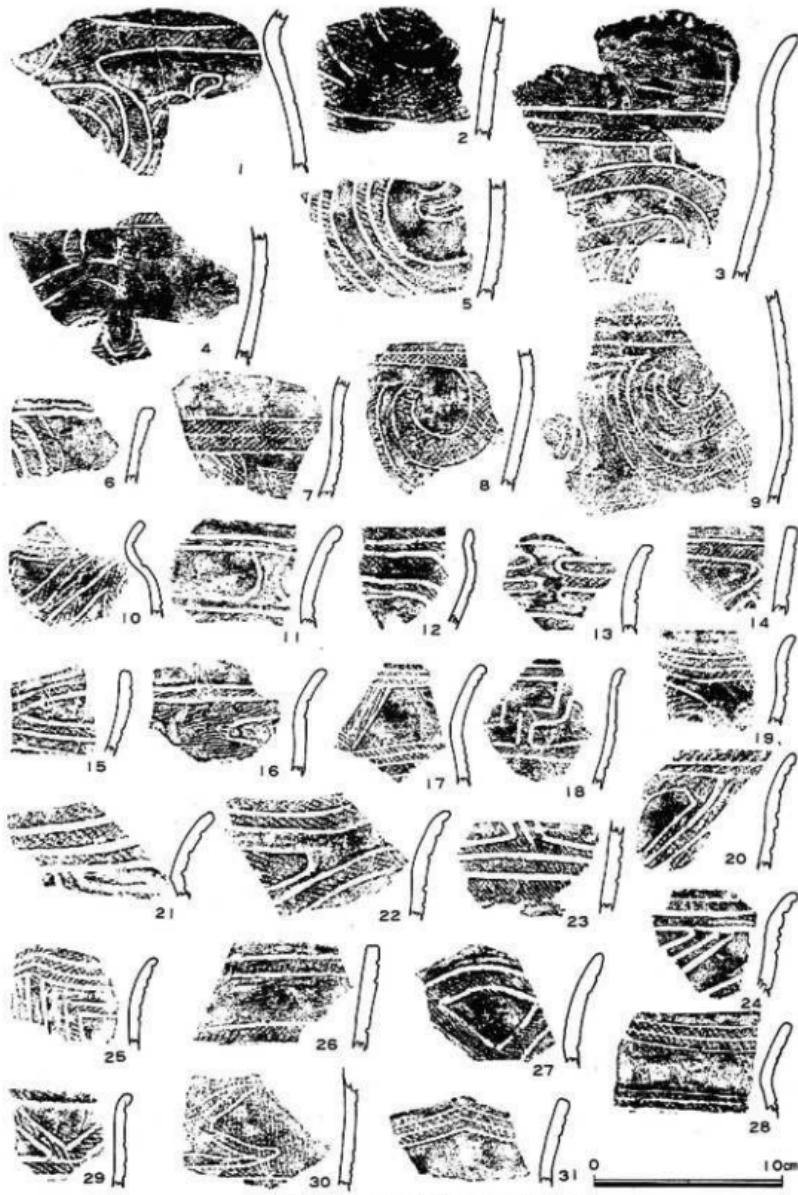
第57圖 B区遺構外出土土器拓影圖3



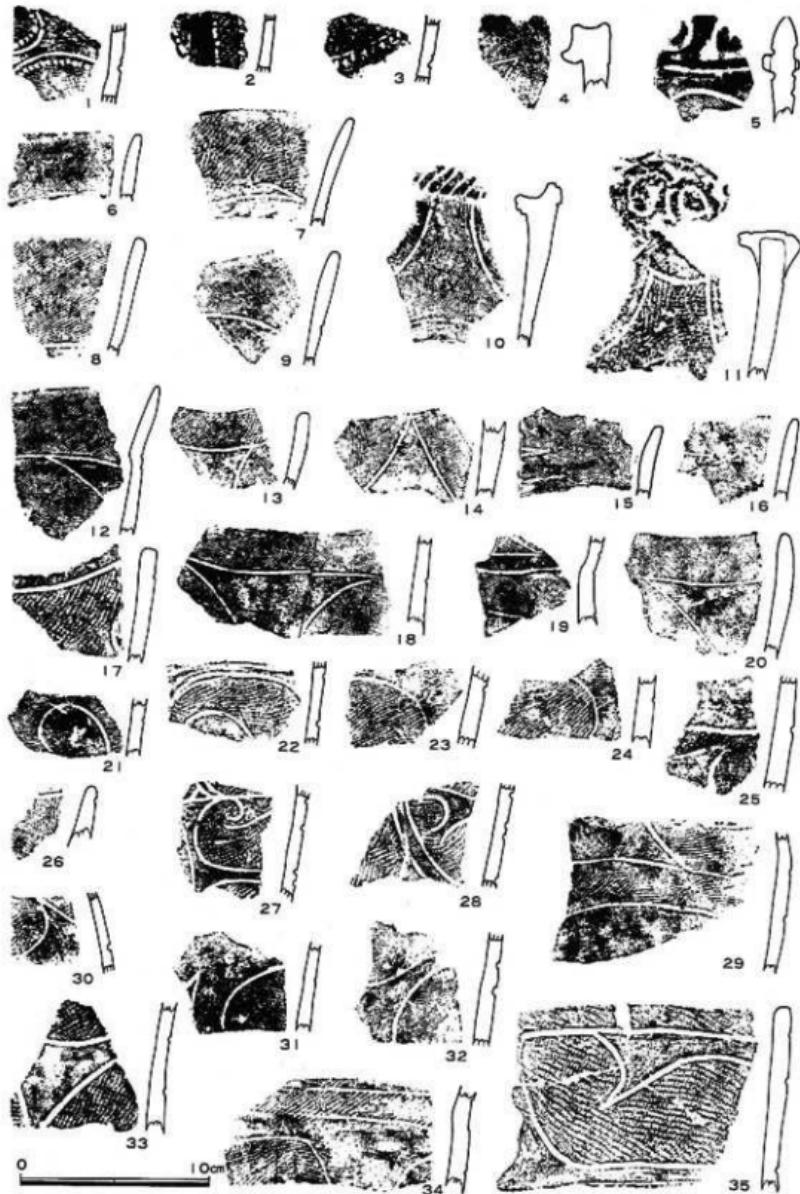
第58図 B区造構外出土土器拓影図(4)



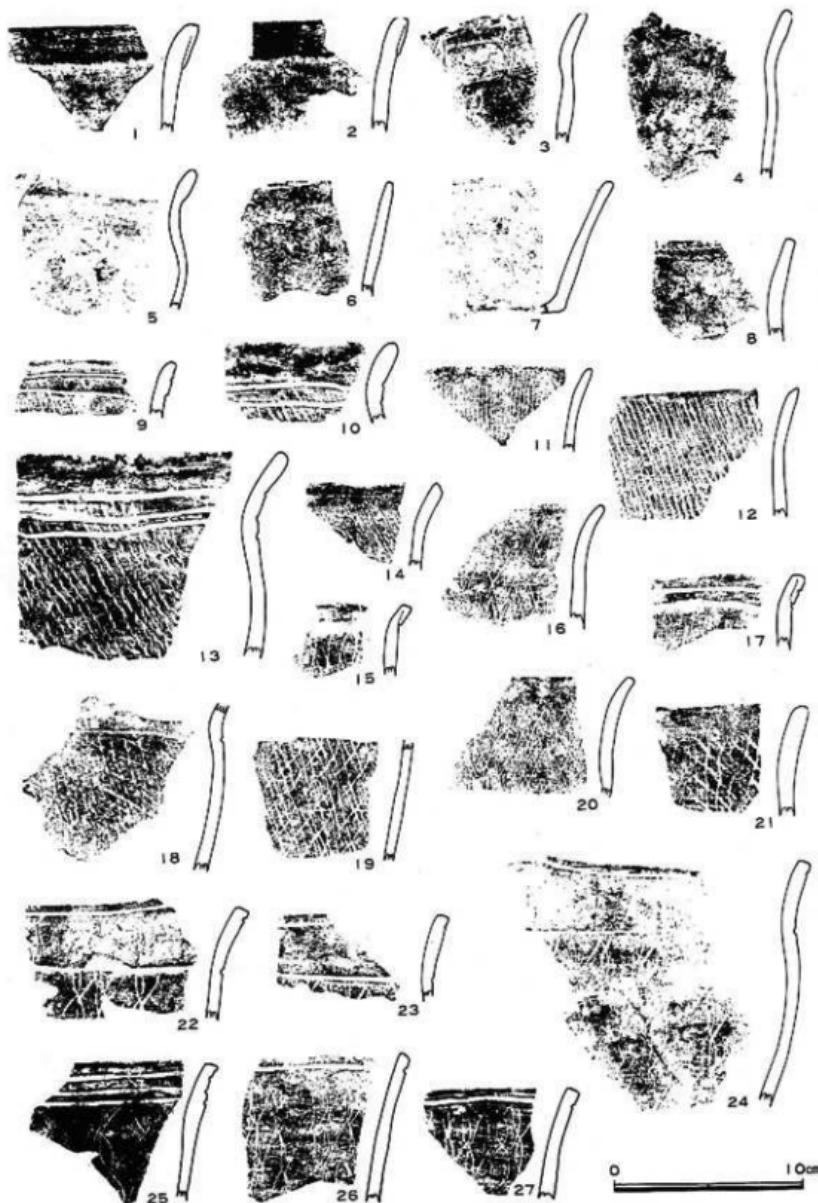
第59図 B区遺構外出土土器拓影図(5)



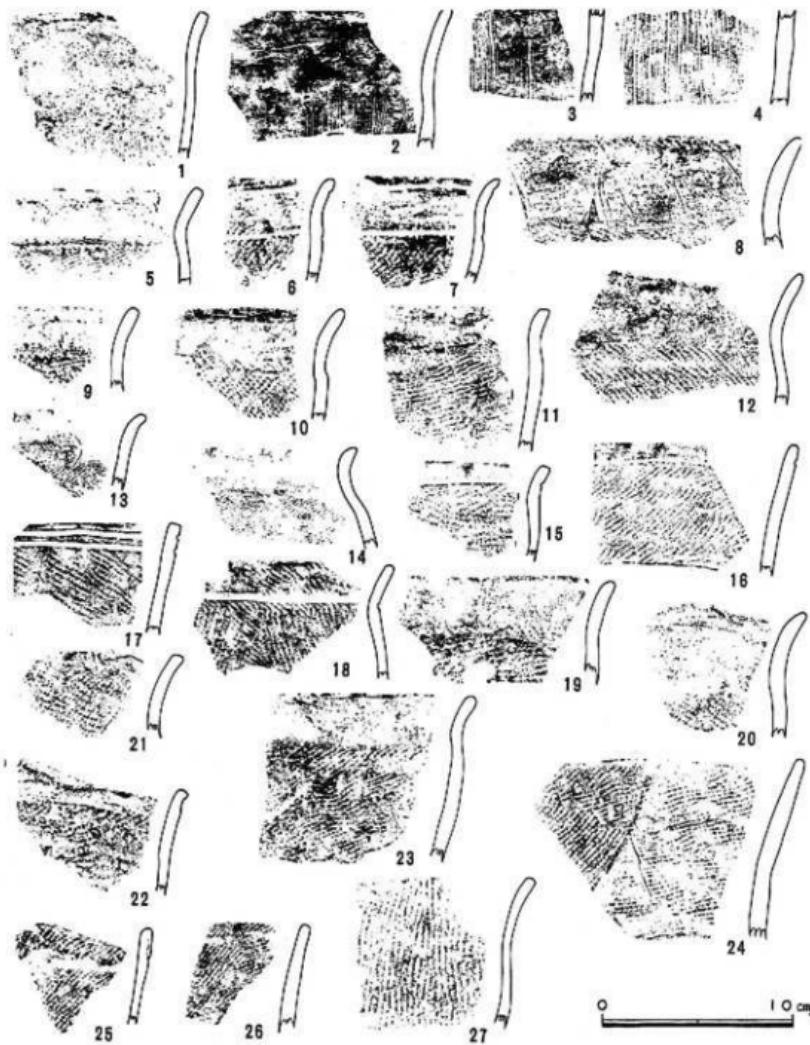
第60図 B区遺構外出土土器拓影図(6)



第61図 B区遺構外出土土器拓影図(7)



第62図 B区遺構外出土土器拓影図8)



第63図 B区遺構外出土土器拓影図(9)

c. 口縁部は上端から繩文が施文されるもの (78, 103, 24~27)

口縁部に無文帶を有せず、ほぼ口縁部上端から胴部下間にかけ繩文を施文する土器類を本類とした。103, 25のように折り返し口線上にも繩文が施文されている。地文にはLR繩文が多用され、他にRL, L繩文のものもみられる。焼成は良成なものが多く、色調は灰褐色やにぶい

黄橙色を呈する。

第3類土器には78のような小型鉢もみられるが、そのほとんどは大型の深鉢で、次いで壺が多い。いずれも平口縁またはゆるやかな波状口縁で、口縁部が外反するものが多い。

(秋元信夫)

## 2) 石器

B区より出土した石器は多種多様にわたっている。その内訳は石鎌、石槍、石錐、石匙、範状石器、擂器、異形石器の剝片石器、磨製石斧、石錘、磨石、凹石、石皿の砾石器で、その総数は625点に及ぶ。

### 石鎌 (第64図1~41)

石鎌は176点出土しており、出土地点の内訳は、遺構内6点、遺構外170点である。剝片石器中、二番目に数量が多い。石材は、珪(硬)質頁岩が109点と圧倒的に多く、蛋白石66点、鉄石英1点と続く。全体の約3割が破損品で、茎部を欠くものが多い。形態から、2群6類に分類された。  
I群…無茎石鎌である。全体の約4割を占める。基部の形態から3類に細分される。

a類 平・円基石鎌である。19点出土した。法量は長さ2.3~3.7cm、重さ1.2~3.6gを計り、重さ3g前後に集中する。鎌側縁は曲線を描く。数例であるが鎌側縁のみに剝離調整が施され、中央に一次剝離面を残すものがある。(1~7)

b類 凹基石鎌である。6点出土した。法量は長さ1.6~2.3cm、重さ0.4~1.2gを計る。基部のえぐりが深く入り込むものと、浅いものがある。(8~13)

c類 尖基石鎌で、32点出土した。いわゆる柳葉形石鎌などと呼ばれているもので、鎌の側縁がふくらむもの、基部がふくらみ丸みを帯びるもの、菱形を呈するものがあり、細分が可能である。法量は長さ2.1~6.5cm、重さ0.4~8.9gと広い範囲に分布するが、長さ3.5cm前後、重さ2g前後に集中する。アスファルトが付着するものが5点存在する。(14~20)

II群…茎を有するもので、全体の6割を占める。基部の形態から3細分される。

a類 凸基有茎石鎌である。30点出土した。茎が大きく突出するもの、極めて小さい突起状のものがある。法量は長さ1.4~3.7cm、重さ0.3~1.6gを計り、長さ2cm、重さ0.6g前後に集中する。有茎鎌では大型の部類に属する。アスファルトが付着するものが13点存在する。(26~41)

b類 凹基有茎石鎌である。43点出土し、石鎌中最も数量的に多い。基部のえぐりが小さく深いものと、浅いものがある。法量は長さ1.4~3.8cm、重さ0.3~1.8gを計る。法量はIIa類とほぼ同一範囲に集中する。アスファルトが付着するものが25点ある。(27~35)

c類 平基有茎石鎌である。29点出土した。法量は長さ1.3~2.7cm、重さ0.3~1.6gを計り、特に長さ1.6cm、重さ0.6g前後に集中する。石鎌の中で最も小型のものである。他の石鎌が茎部を欠損しているのに対し、本類は、そのほとんどが歴先を欠く。(21~25)

### 石槍 (第64図42)

遺構外より1点出土した。形態的には、石鎚Tc類に類似するが、法量的に大きいことから、石槍とした。法量は長さ7.5cm、重さ18.2gを計る。石材は珪(硬)質頁岩である。

### 石錐 (第64図43~55)

孔を穿つの用いるものである。遺構外から17点出土した。材質は珪(硬)質頁岩が14点と多く、鉄石英、石英と続く。形態的に3群4類に分類される。

I群…つまみ部と錐部からなるものである。

a類 つまみ部と錐部の境のえぐりが明瞭なものである。錐部は細長く精巧なものが多い。  
錐部断面は菱形を呈する。(43~45, 47, 48)

b類 つまみ部と錐部の境のえぐりが浅く、明瞭でないものである。錐部はやや幅広く、短かいものが多い。錐部断面は菱形を呈する。(46, 49~51)

II群…つまみ部が明瞭でないもので、一見、尖基石鎚と見間違うおそれのあるもの。(54, 55)

III群…破片の突出した部分に剝離調整を施し、錐部を作るもの。(52, 53)

従来、石錐は、形態、機能の面からみて2つに区分されている。一つは、直接手に持ち穿孔する、いわゆるdrillと、つまみ部に着柄して穿孔するawlである。I・II群はdrill、III群はawlとしての使用法が考えられる。

### 石匙 (第65図56~77)

基部にえぐりの施されたつまみを有する石サジと呼ばれるものを一括した。遺構外から28点出土しており、完形品は22点である。欠損品を観察すると、つまみ部より多小下部に近い所から欠損するものが多い。石材はすべて珪(硬)質頁岩である。形態と刃部の位置から2群5類に分類した。

I群…縦形石匙で、一般に、刃部がつまみ部に対し平行に作りだされるものである。7点出土した。いずれも縦長剥片を用い、打瘤をつまみ部に置いているものが多数を占めるが、横長剥片を用いるものが1例存在する。法量は長さ3.4~7.5cm、重さ2~13gを計る。刃部の作られる位置で、3つに細分された。

a類 左側縁に刃部が作りだされるもの。(56, 57)

b類 右側縁に刃部が作りだされるもの。(58, 59)

c類 両側縁に刃部が作りだされるもの。(60~62)

II群…横形石匙で、刃部がつまみ部に対して直交するものである。15点出土した。大型のものは横長の剥片を、小~中型のものは縦長の剥片が用いられる。法量は長さ2.5~5.7cm、重さ2~12gを計る。刃部の位置から2つに細分された。

a類 刀部が下側縁に限定されるもの。(63, 66, 73)

b類 刃部が下側縁から両側縁に広がるもの。 (64, 65, 67~72, 74~77)

#### 笠状石器 (第65図78~83)

一般的に、石ペラと呼ばれているものを一括した。6点出土し、剥片石器の中で最も数量が少ない。石材は珪(硬)質頁岩、蛋白石である。製作技法から2分類される。

I群…基部は刃部と比べ、幅が狭くなるもので、剝離調整は背面のみに施される。横断面はカマボコ状を呈する。法量は長さ2.2cm、重さ2gと、ミニチュア的なものである。

II群…基部は刃部と比べ、幅が狭くなるもので、横断面は凸レンズ状を呈する。主要剝離面、背面から交互に剝離調整が施されている。法量は長さ2.9~10cm、重さ3~72gと、長さ、重さとともに、バラツキがある。

#### 搔器 (第65図84~94、第66図95~117)

剥片石器の中で最も数量的に多く、224点が出土している。出土地点の内訳は造構内12点、造構外212点で、I・J-103グリッドより多量に出土した。石材は珪(硬)質頁岩が191点と圧倒的に多く、蛋白石・黒色頁岩・頁岩・鉄石英・石英と続く。これらは縦長・横長の剥片を利用しているが、縦長剥片が正倒的に多用される。製作技法を観察すると剥片への刃部調整は主要剝離面からの押圧によって再加工が施されるのがほとんどであるが、背面からの調整が施されるものが数例ある。剥片の打面を上にして、刃部の位置をみると、4分類される。

I群…刃部が左・右・下側縁に限定されるもの (84~90, 92~94, 95~97, 99, 100)

II群…刃部が2側縁に及ぶもの。 (101~110)

III群…刃部が3側縁に及ぶもの。 (98, 111, 112)

IV群…刃部が側縁全体に及ぶもの。 (113~117)

搔器として分類した石器には、これまで不定形石器などと呼ばれているものを一括した。刃部は搔くのに都合がよいように、鈍角に調整されている。法量は長さ1.8~9.7cm、重さ1~108gを計り、長さ5.5cm以下、重さ15g以下に若干のまとまりをみせる。しかし、搔くという機能のみに注目していたためか、素材(長さ・重さ)は特に選択されたとは言い難い。

#### 磨製石斧 (第66図119~125、第67図126~131, 171)

造構外より14点出土した。完形品は3点と少なく、製作途中のものが1点ある。これらはすべて定角式磨製石斧に属するもので、両側縁および基部が研磨され、石斧正面との間に棱を作り、横断面は隅丸長方形を呈する。石材は火山礫凝灰岩、緑色凝灰岩が多く、流紋岩、石英安山岩、玄武岩と続く。材質の違いによって石斧の大きさが違うようで、仕上り時に石の文様がきれいに浮き出る。緑色凝灰岩、流紋岩は小形又はミニチュア石斧に利用される。欠損品を観察すると、基部を欠くもの、胴部中半から刃部を欠くものが多い。敲石として再利用されるものが存在する。

### 石錐 (第67図132~144)

33点出土した。出土地点の内訳は遺構内1点、遺構外32点で、特にI・J-103 グリッドより集中して出土した。コブシ大などの偏平な石を利用し、その短軸の両端を打ち欠いているものである。法量は長さ4.6~10.2cm、重さ18~300gを計る。全体的にみて長さ7cm、重さ65g前後で集中する。石材は流紋岩が15点と多く、石英粗面岩、泥質凝灰岩、頁岩、泥岩、石英安山岩、火山礫凝灰岩と続く。

### 磨石 (第67図145~150)

27点出土した。すべて遺構外からの出土で、B区南半に片寄っている。石材は流紋岩、安山岩が多く、石英粗面岩、軽石膏凝灰岩、泥質凝灰岩、凝灰岩、凝灰質角礫岩、玄武岩が続く。法量は長さ2.3~11.4cm、重さ15~710gを計る。形態から2分類される。

I群…円礫を半分に打ち欠き、その打ち欠き面を成形して磨面とするものである。材質は加工しやすい泥質凝灰岩が用いられる。(145~146)

II群…やや偏平な円礫を使用し、比較的平坦面を磨面としている。磨面は表裏2面である。(147~150)

### 凹石 (第68図151~157)

37点出土した。すべて遺構外出土である。コブシ大からこれよりもやや大きめの円礫、楕円形の石を使用し、その比較的平坦な両面に1~3個の凹みを作りだしているものである。法量は長さ6~16cm、重さ200~900g程に集中する。石材は流紋岩が多く、安山岩、石英安山岩、石英粗面岩、凝灰岩、砂質凝灰岩、玄武岩と続く。石皿の破片を転用するもの、敲石と併用されるものが存在する。

### 敲石 (第68図158~162)

遺構外から51点出土した。コブシ大で厚さのあまりない石を使用している。敲き部分は石の一側縁または長軸一端に存在し、一側縁のものがやや多い。1例のみ2つの敲き部分をもつものがある。法量は長さ3.5~17cm、重さ20~470gを計り、長さ7cm、重さ60g前後のものに集中する。石材は流紋岩が18点と圧倒的に多く、凝灰質泥岩、石英安山岩、安山岩、砂質凝灰岩、凝灰岩、泥質凝灰岩と続く。数例、凹石と併用されるものが存在する。

### 石皿 (第68図163~169)

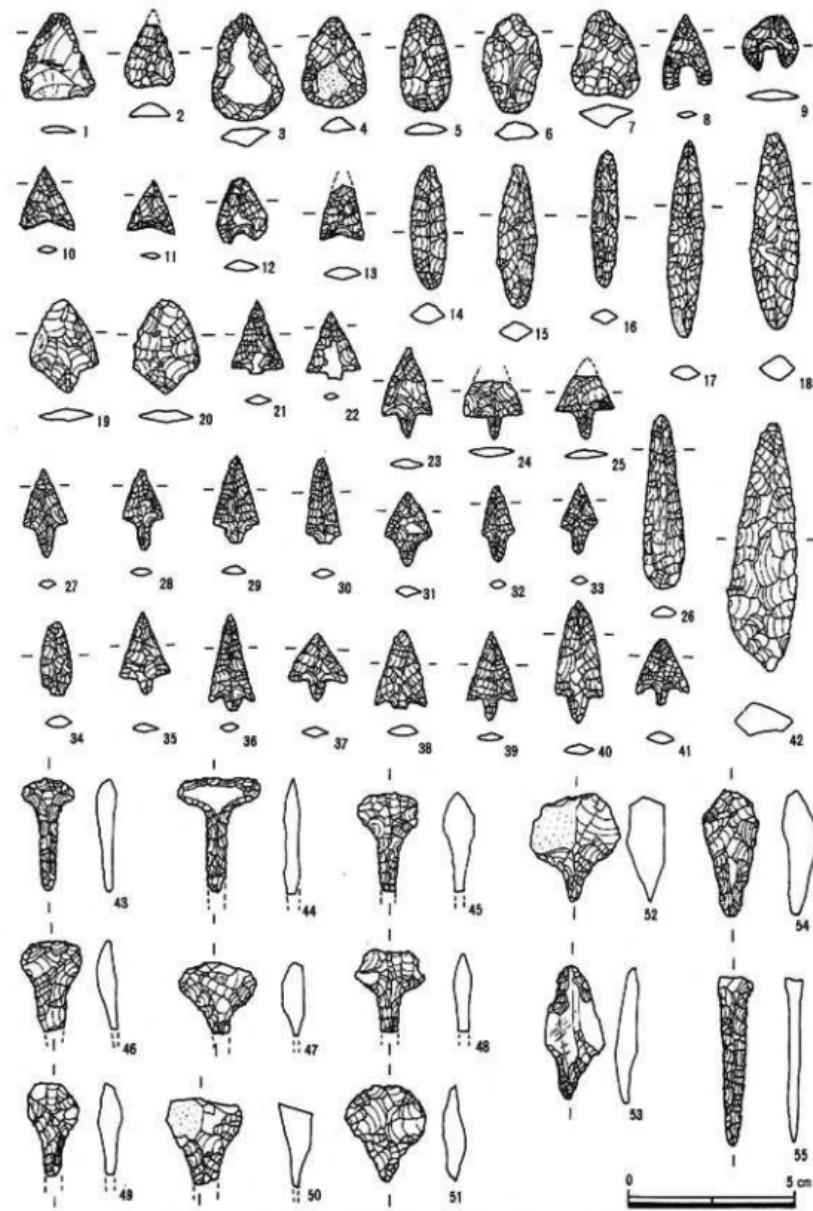
12点出土した。いずれも破損品である。石材は流紋岩が多く、砂質凝灰岩、凝灰岩、石英粗面岩と続く。形態から2分類される。

I群…円礫の平坦な面を使用しているもので、縁辺部までの変化に乏しい。(163~167, 169)

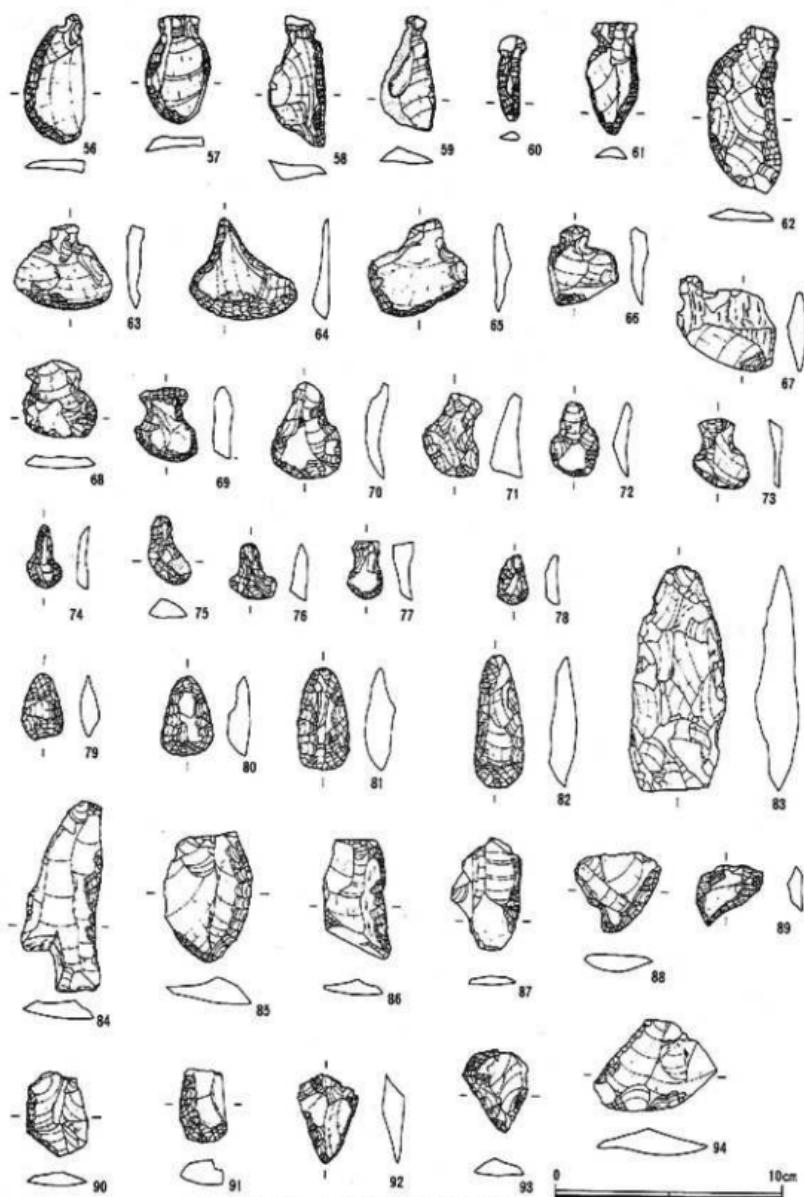
II群…使用面と縁が明瞭に区画されているもの。(168)

### その他の石器 (第66図118, 第68図170)

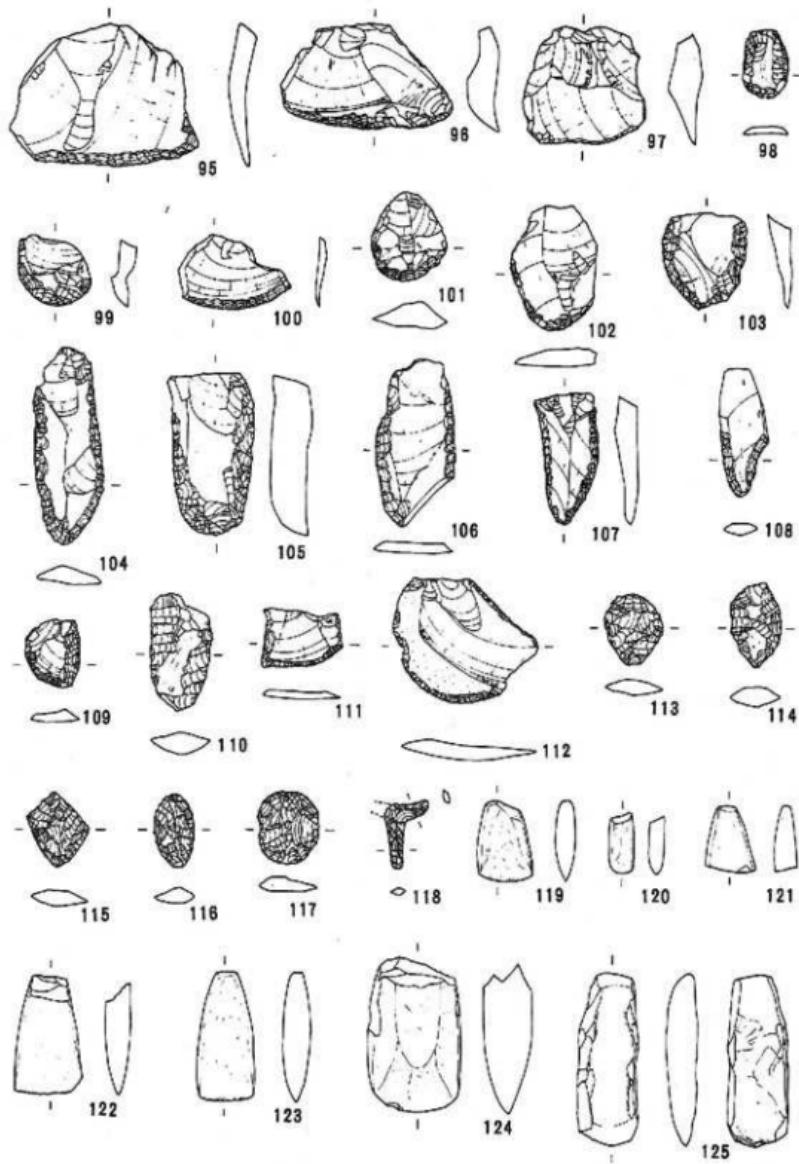
118は、異形石器で刺離調整によってY字状に成形される。長さ2.7cm、重さ2g。石材は珪(硬)質頁岩。170は、径20cm、重さ3.4kgの円礫を使用し、その縁辺に打ち欠き調整を加えるも



第64図 B区遺構外出土石器実測図(1)

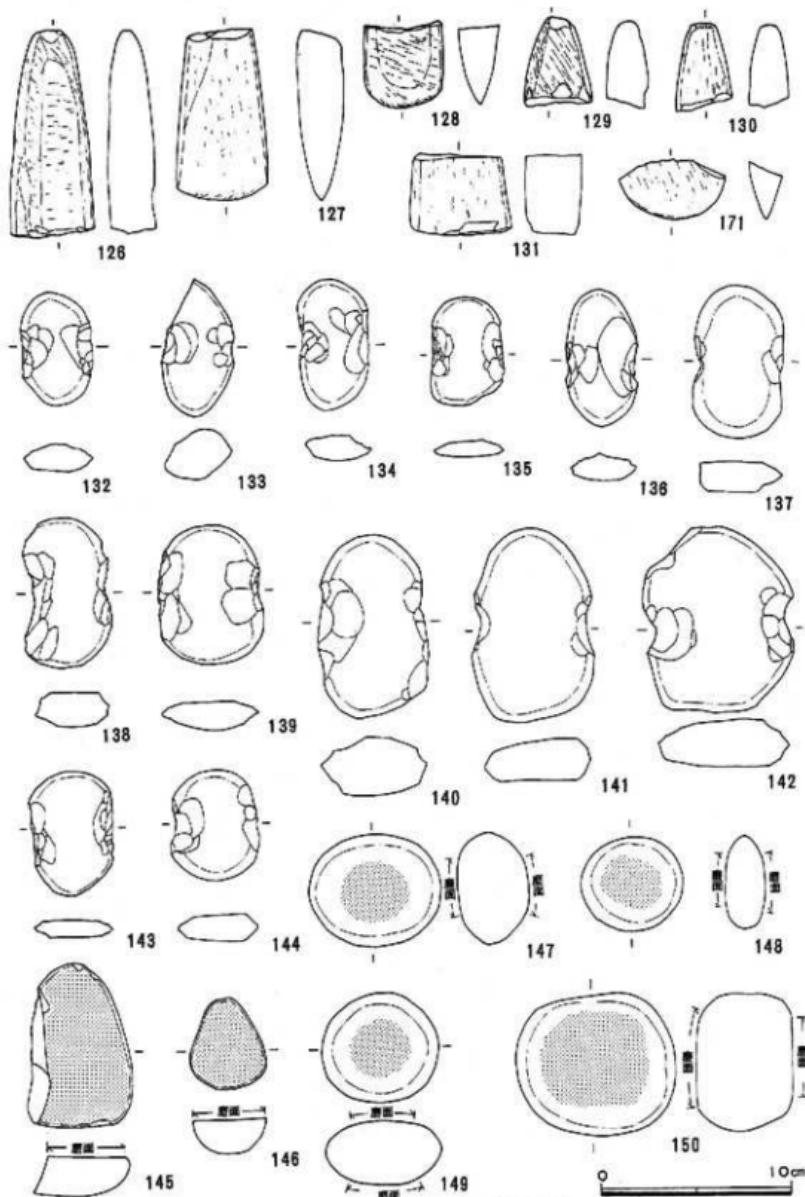


第65図 B区遺構外出土石器実測(2)

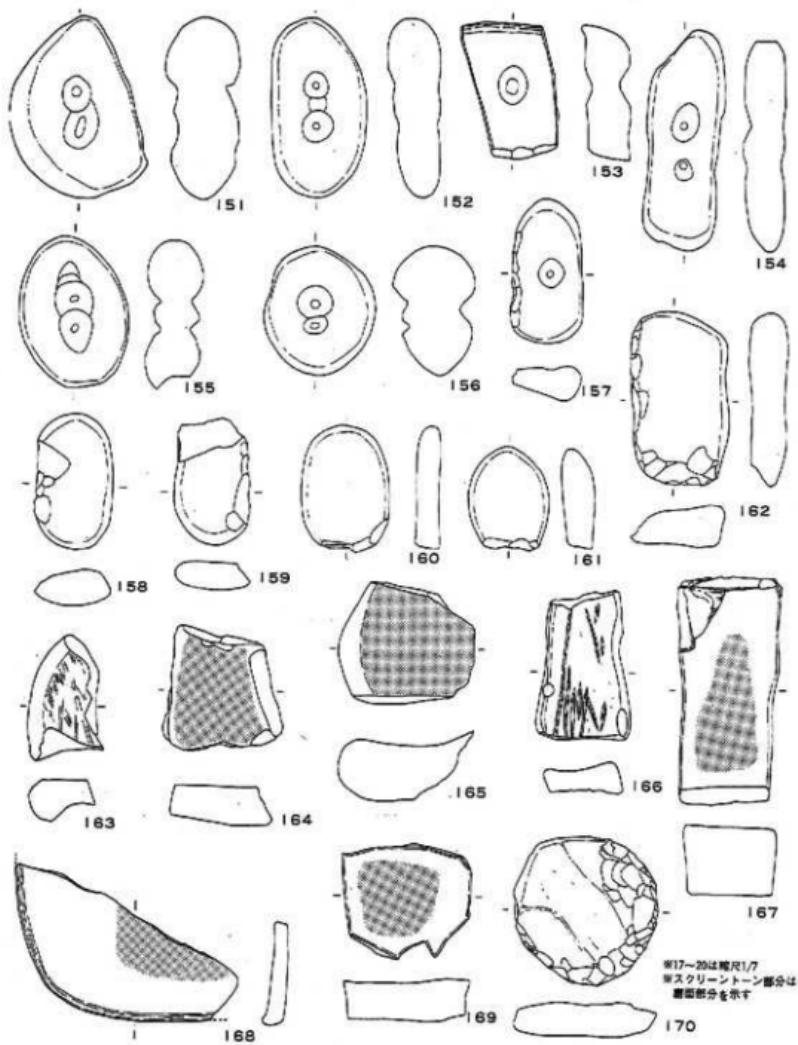


第66図 日区遺構外出土石器実測図(3)

0 10cm



第67図 白区通構外出土石器実測図(4)

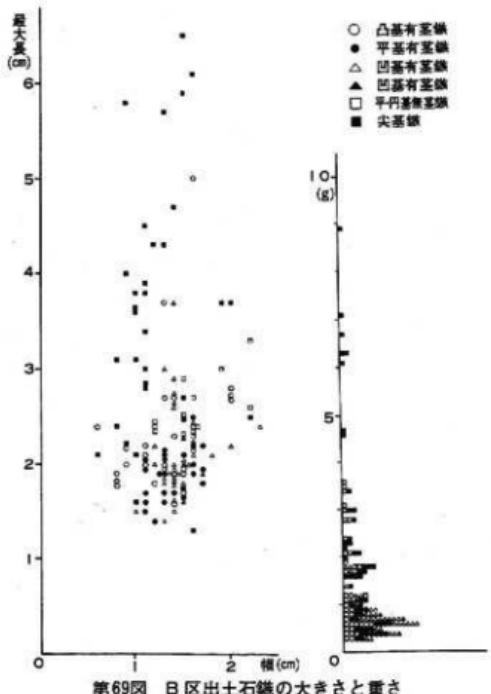


第68図 B区遺構外出土石器実測図(5)

のである。石材は流紋岩、118、170とも機能は不明。

B区より出土した石器は、剥片石器、礫石器を合せ625点に及ぶ。出土地点の内訳は遺構内19点、遺構外606点である。第70図は遺物包含層第Ⅲ層より出土した剥片、礫石器別の出土個体数を示したものである。両者とも包含層中でも特に土器出土密集地域、G～J～103グリッドに集

\*17～20は層R1/7  
※スクリーントーン部分は  
選択部分を示す



第69図 日区出土石器の大きさと重さ

中する傾向を示す。第71図は石器組成を表わしたものであり、遺跡全体を示すものとは考えられないが、その概略は知ることができる。

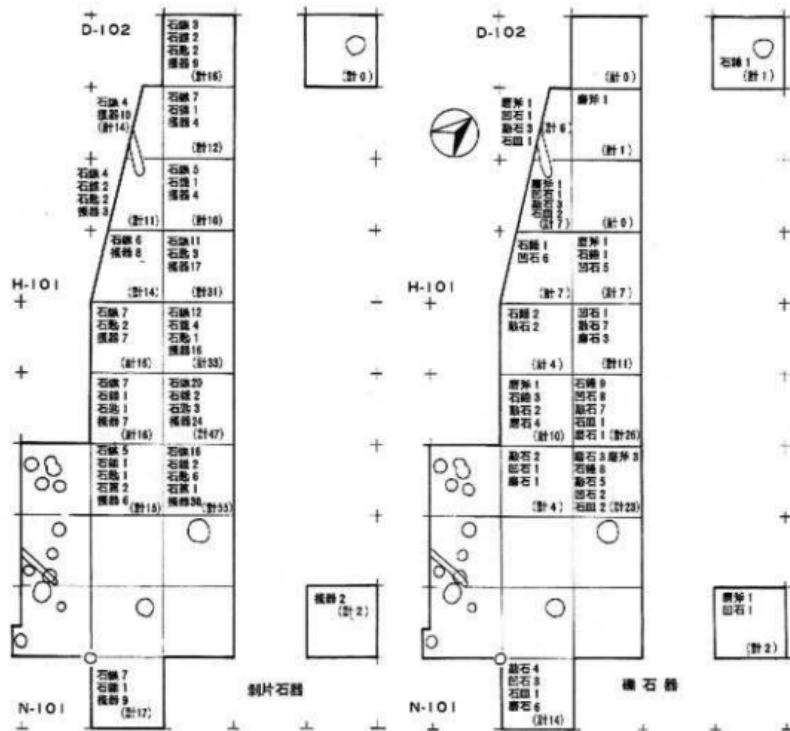
特徴的なことは、搔器、石鎌が圧倒的に多く、その反面圓状石器、磨製石斧が少ないという傾向を示す。以下、特徴のある石器について述べ、まとめとしたい。

石鎌は176点出土した。特に有茎鎌は102点と多い。有茎鎌の破損品を観察すると、わずかに茎部を欠くものがほとんどである。これらの多くにはアスファルトが付着している例が48点あることから、着柄されていたと判断され、狩猟中に破損したものや、もしくは獲物の体内に残っていたものが捨てられ、土器とともに投げ捨てられたものとみなすことができよう。

搔器は226点と最も多い。これは獲物の解体具と想定されるもので、石鎌の量からも数量の多さは推定される。しかし、その大きさや形態が様々であることは、機能のみを追求したためと考えられる。

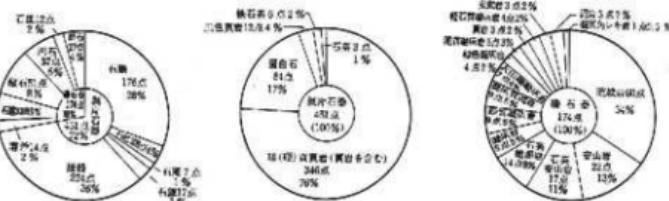
礫石器の中で、注目を引くものは石鎌である。石鎌は33点と数量的には多くないが、その形態に特徴をもつ。米代川流域の遺跡から出土した石鎌を概観すると、圧倒的に偏平な石の長軸両端を打ち欠くものが多い反面、本遺跡B区出土のものは、石の短軸両端を打ち欠くことである。本遺跡とほぼ同時期と思われる大館市塚の下遺跡出土のものは、B区出土のものと同様の特徴を示している。これは時期的、または地域の特徴なのか、今後の検討を要するところである。

剥片・礫石器に使用される石材（第71図）は20種類に細分された。剥片石器では珪（硬）質岩が圧倒的に多く蛋白石、鉄石英と続く。これらは硬度6～7と高く、いずれも貝殻状の剥離を示し、鋭利な刃部が得られるという利点から多用されたものと考えられる。礫石器は、流紋岩、安山岩など多種にわたっている。これらの石材は遺跡の存在する台地下を流れる米代川、



第70図 B区各グリッドの石器出土数

※ 第田原出土のものを統計資料とした。  
なおJ-101, K-101, L-101~103は風化を受けていたため資料から除外した。



第71図 B区出土石器の組成図と材質

大湯川河岸でたやすく入手することができるものである。その他の石材としては、遺跡付近では入手できない黒曜石が出土しており、その原産地の同定と、その流入経路が問題となるところである。

(藤井安正)

### 3) 土製品・石製品

遺構内・外より出土した土製品は、土偶11点、土板1点、円盤状土製品438点、鐸形土製品16点、葺形土製品3点、耳栓5点、装飾品3点、円形土製品1点、環状土製品2点、縫状土製品1点、その他の土製品1点の計482点である。また、石製品は、岩板1点、円盤状石製品23点、縞刻石1点、球状石製品2点、柱状石製品1点、石剣6点、石棒2点の計36点の出土があった。

#### 土偶 (第73図1~11)

遺構内より2点、遺構外より9点、計11点出土した。文様の有無により次のように分類した。

##### I類……体部に文様のあるもの (1・2・5~7)

文様は、格子目状沈線文、正中線上に曲線状、「の」字状の沈線文を施文しており、衣類を表わすものと思われる。乳房、へそは粘土を貼り付け小突起で表わしている。へその下に円形の沈線によって、陰部を描いているもの(2)、腹部を肋骨にそった三角形の凹で表わしているもの(2・7)がある。また、2には、肩から脇の下にかけて斜めに貫通孔が穿たれており、表裏面の一部にスヌが付着している。

##### II類……体部上半部で文様のないもの (3・9)

3は小突起で乳房を表わし、頭部が存在したと思われる小さな盛り上がりが見られる。また、肩部には斜めに貫通孔が穿たれている。9は右腕欠損部分にアスファルトが付着している。

##### III類……体部以外の部分のもの (8・10・11)

8は頭部である。目と鼻は粘土紐をY字状に貼り付け。鼻孔、口は刺突によって表わしている。また、上端部には頭髪と思われる沈線を描き、耳の部分には貫通孔が穿たれている。首には、格子目状沈線文を施している。10は腕部で、沈線文を施文し、垂直に貫通孔が穿たれている。11は右脚部である。

#### 土板 (第72図6)

土板としたが、むしろ土偶とすべきかもしれない。縦5.8cm、横3.7cmの方形を呈し、厚さ1.5cm、重さ48.3gを計る。表面には、目、口、乳房、正中部、裏面には耳と思われるものが円形の刺突によって表わされている。また、下端には陰部と思われる深さ2.1cmの孔が穿たれており、それを覆うようにLR縄文を施文し沈線で縁どりした下着状のものが、表面から裏面まで続く。

ここで注目したいのは胸部である。右乳房が3個の刺突、左乳房が4個の刺突、正中部が5個の刺突と1個ずつ増えていく。口の1、目の2、裏面の両耳の6をあわせると、1から6まで表現されており、数に対する意識がうかがえる。

### 円盤状土製品（第74図、75図）

土器片を二次的に使用し、打き欠き・研磨により、円形、方形、三角形に整形しているものである。土器胴部片を利用しているものがほとんどであるが、口縁部、底部を利用しているものも数点見られる。また、製作途中と思われる口縁部片が出土している。

遺構内より63点、遺構外より375点の計438点の出土があった。形状により次のように分類した。

#### I類……円形を呈するもの。

全体の84.1%にあたる370点が出土した。

##### a) 全体及び一部を研磨加工しているもの。

71点出土した。文様は、無文（22点）、沈線文（21点）がほとんどで、縄文・撚糸文、網目状撚糸文、磨消縄文、条痕文と続く。

##### b) 打き欠き加工だけのもの。

299点出土した。文様は、無文（87点）、沈線文（78点）、縄文・撚糸文（64点）がほとんどで、網目状撚糸文、隆帯十沈線、磨消縄文、条痕文、格子目状沈線文と続く。

#### II類……方形を呈するもの。

全体の4.1%にあたる18点が出土した。

##### a) 全体及び一部を研磨加工しているもの。

9点出土した。文様は、無文（4点）、縄文・撚糸文、沈線文、磨消縄文である。

##### b) 打き欠き加工だけのもの。

9点出土した。文様は、無文（3点）、縄文・撚糸文、沈線文、磨消縄文である。

#### III類……三角形を呈するもの。

全体の11.8%にあたる50点が出土した。

##### a) 全体及び一部を研磨加工しているもの。

26点出土した。文様は、沈線文（9点）、縄文・撚糸文（7点）、無文（5点）、隆帯十沈線、磨消縄文、網目状撚糸文である。

##### b) 打き欠き加工だけのもの。

23点出土した。文様は、無文（8点）、縄文・撚糸文（6点）、沈線文（5点）、磨消縄文（5点）である。

文様と形状・加工方法との相関関係は読み取る事ができなく、当時利用されていた土器文様の頻度が、そのまま円盤状土製品の文様頻度に表われてくるものと思われる。

加工は、円形のもののほとんどが打き欠き加工だけに対し、方形、三角形を呈するものは、打き欠き加工のものと、研磨加工のものがほぼ同数となる。方形、三角形の打き欠き加工だけ

のものは、判別しにくいものが多い。見落している可能性が大きく、一概には言えないが、円形の比率に比べると、方形、三角形の研磨加工の比率は高くなるものと考えられる。

大きさは、3~4cm台がやや多いが、集中度を示すまでは至らず、相当のばらつきがある。

#### 鐘形土製品（第72図11~26）

遺構内2点、遺構外14点、計16点出土した。小破片で全体の形状が不明なものを除けば、他は全て、頂端部に開口部と平行な貫通孔が穿たれている。

開口部の形状より次のように分類した。

##### I類……開口部が円形を呈するもの。

有文（12~15）と無文（22・23・25）とがある。文様は、弧状、直線状、渦巻状の沈線文、連続刺突文が施文されている。また、開口部に刻み目が施されているもの（13）も見られる。大きさはほとんど同じで、高さ4.3~5.9cm、開口部径2.3~3.3cm、厚さ0.4~0.7cmを計る。

##### II類……開口部が橢円形を呈するもの。

###### a) 貫通孔が長軸に平行なもの（11）。

偏平な三角形状を呈し、渦巻状の沈線文、連続刺突文が施文されている。高さ4.1cm、開口部径3.8×1.9cm、厚さ0.3cmを計る。

###### b) 貫通孔が短軸に平行なもの。

有文（16・26）と無文（20・21・24）とがある。文様は、沈線文、刺突文が施文されている。大きさは、24が開口部長軸7.3cmとやや開きぎみであるが、他は開口部径4.5~4.8×2.5~2.8cmである。また、高さ5.0~6.8cm、厚さ0.5cmを計る。

##### III類……胴部小破片で形状が不明なもの（17~19）。

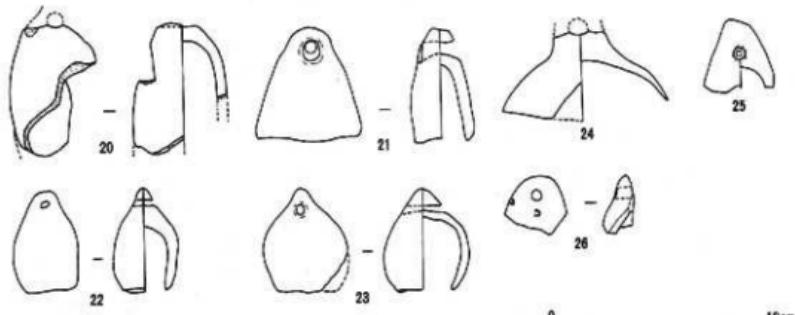
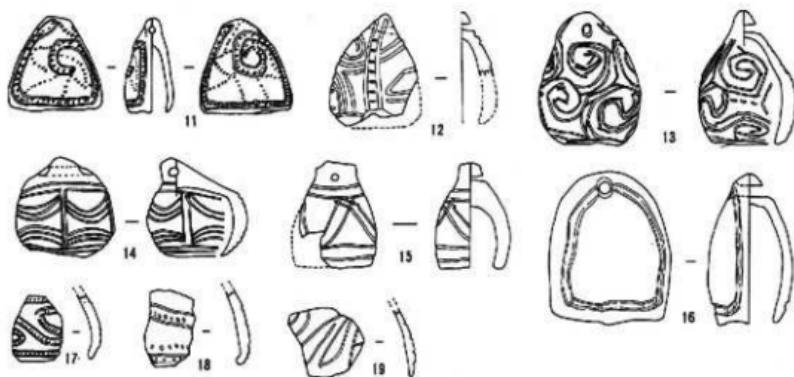
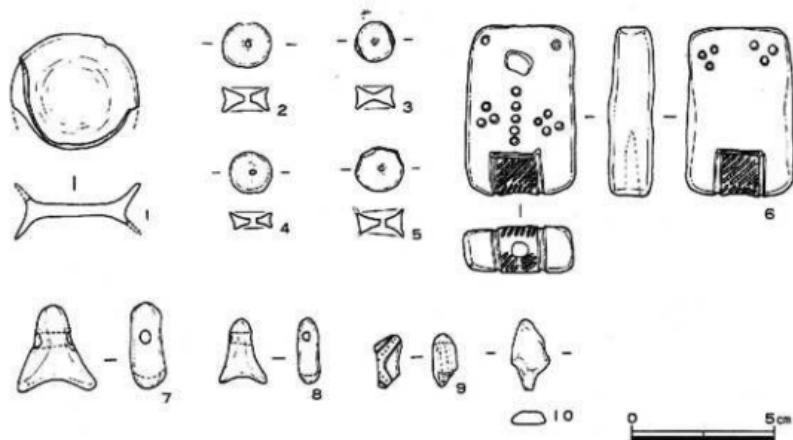
いずれも有文である。文様は、直線状、曲線状の沈線文、連続刺突文が施文されている。厚さ0.3~0.5cmを計る。

#### 算形土製品（第73図16~18）

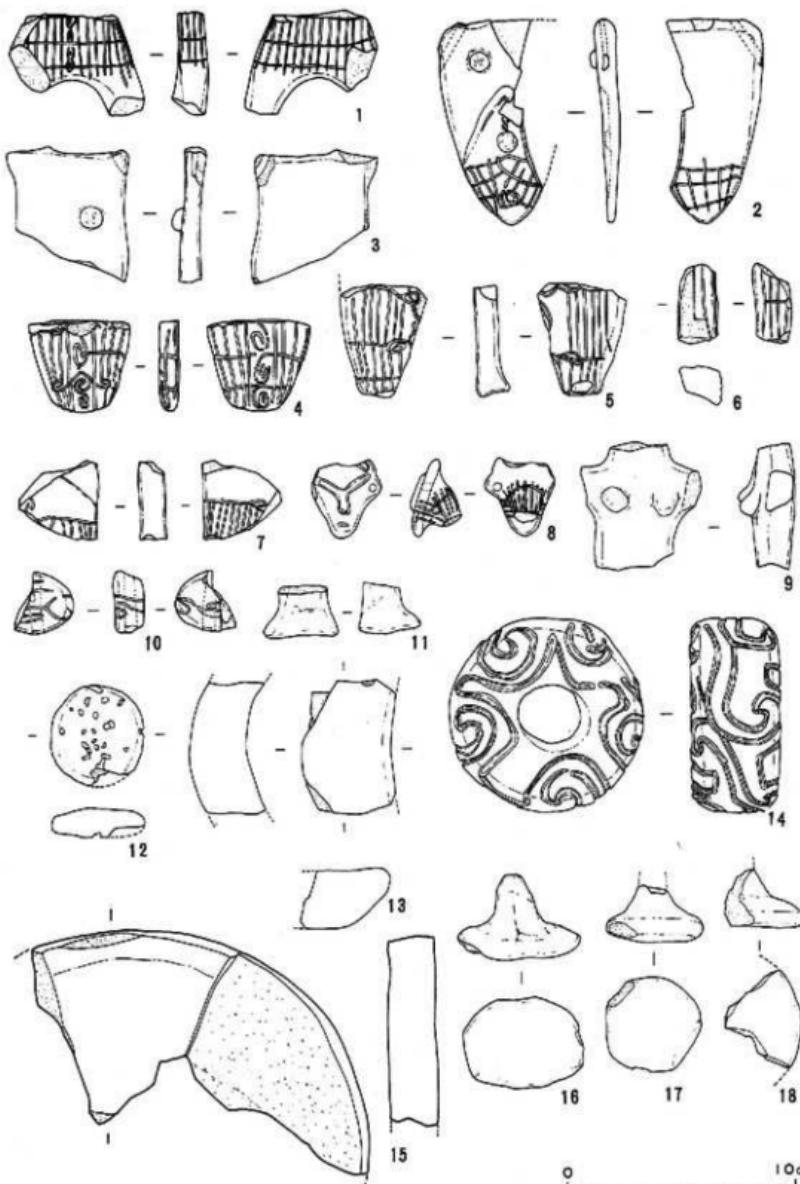
遺構外より3点出土した。16は「かさ」が橢円形で、長径5.3cm、短径3.9cm、高さ3.6cm、「茎」の径1.8cm、高さ2.1cmを計る。「かさ」はやや外反りし、「茎」はほぼ直立し先細りしている。17・18は欠損品である。「かさ」は円形を呈し、ほぼ平坦で、「茎」は直立するものと思われる。17の「かさ」の径は4.2cmを計る。

#### 耳栓（第72図1~5）

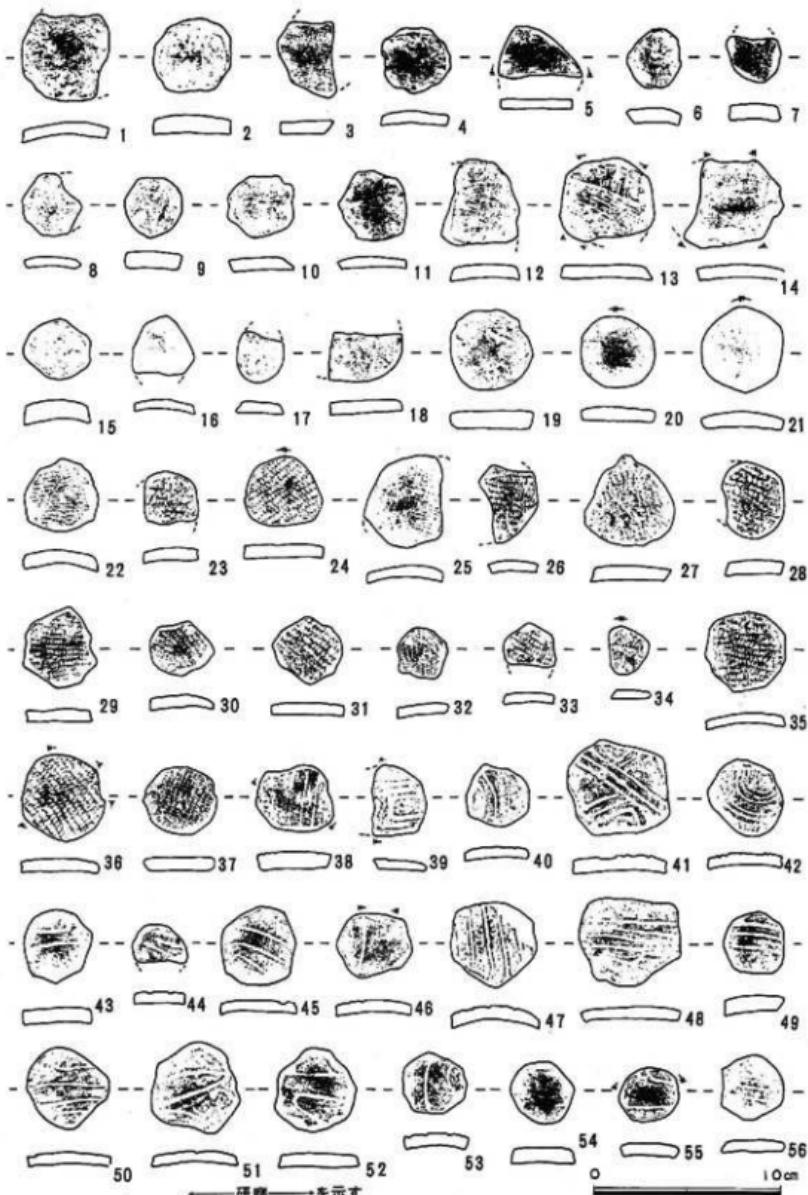
遺構内より2点、遺構外より3点、計5点出土した。凹部中央に貫通孔のあるもの（2・4・5）と、ないもの（1・3）とがある。大きさは、1は出土したものの中で一番大きく、表面径4.4cm、耳朶孔径3.4cm、側縁部厚1.8cm、中心部厚0.4cm、重さ16.8gを計る。2~5はほぼ同じ大きさで、表面径1.2~1.7cm、耳朶孔径1.2~1.5cm、側縁部厚0.5~1.0cm、中心部厚



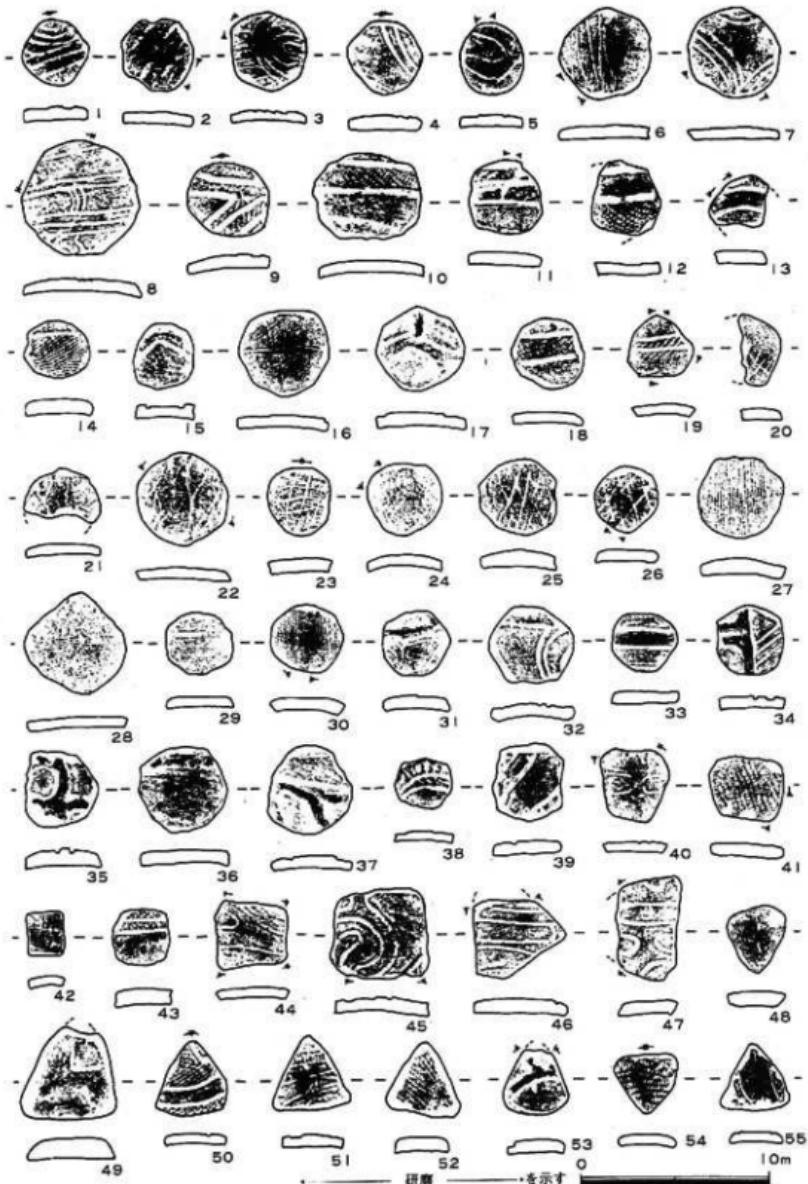
第72図 B区出土土製品実測図(1)



第73図 B区出土土製品実測図(2)



第74図 B区出土土製品(3)



第75図 B区出土土製品実測図(4)

0.2 cm, 重さ 1.1~2.1 g を計る。いずれも精選された粘土を用い、焼成も良好である。2・3は、全面に朱が塗布されている。

#### 土製装飾品（第72図7・8・9）

ここでは耳栓以外の装飾品を一括した。7・8は同じタイプのもので、いずれも第101号プラスコ状土壤より出土した。三角形状を呈し、横に貫通孔が穿たれており、焼成は良好である。7は長さ 2.6 cm, 幅 2.8 cm, 厚さ 1.2 cm, 重さ 4.7 g。8は長さ 2.1 cm, 幅 1.7 cm, 厚さ 0.8 cm, 重さ 2.1 g を計る。

9は欠損品であるが、菱形を呈すると思われる。現存長は 1.5 cm, 厚さ 0.9 cm を計る。頂点間を繋ぐような沈線と、沈線間に連続刺突文が施文されている。頂点間中央に貫通孔が穿たれている。

#### 円形土製品（第73図12）

径 4.1 cm の円形を呈する。一部欠損しているが、断面形は楮円形を呈し、厚さ 1.3 cm, 現重量 21.9 g を計る。全面に刺突が施されている。

#### 環状土製品（第73図13・14）

14は外径 8.5 cm, 内径 2.4 cm, 厚さ 3.9 cm のドーナツ状を呈し、重さ 277.5 g を計る。逆 S 字状の沈線文を施し、それを縁どるようにヒトデ形の沈線文を施している。13は無文の欠損品である。

#### 鐵状土製品（第72図10）

石鐵形をした土製品である。長さ 2.4 cm, 幅 1.3 cm, 厚さ 0.4 cm, 重さ 0.9 g を計る。裏面は平坦で、断面形はかまぼこ形を呈する。焼成はあまりよくない。

#### その他の土製品（第73図15）

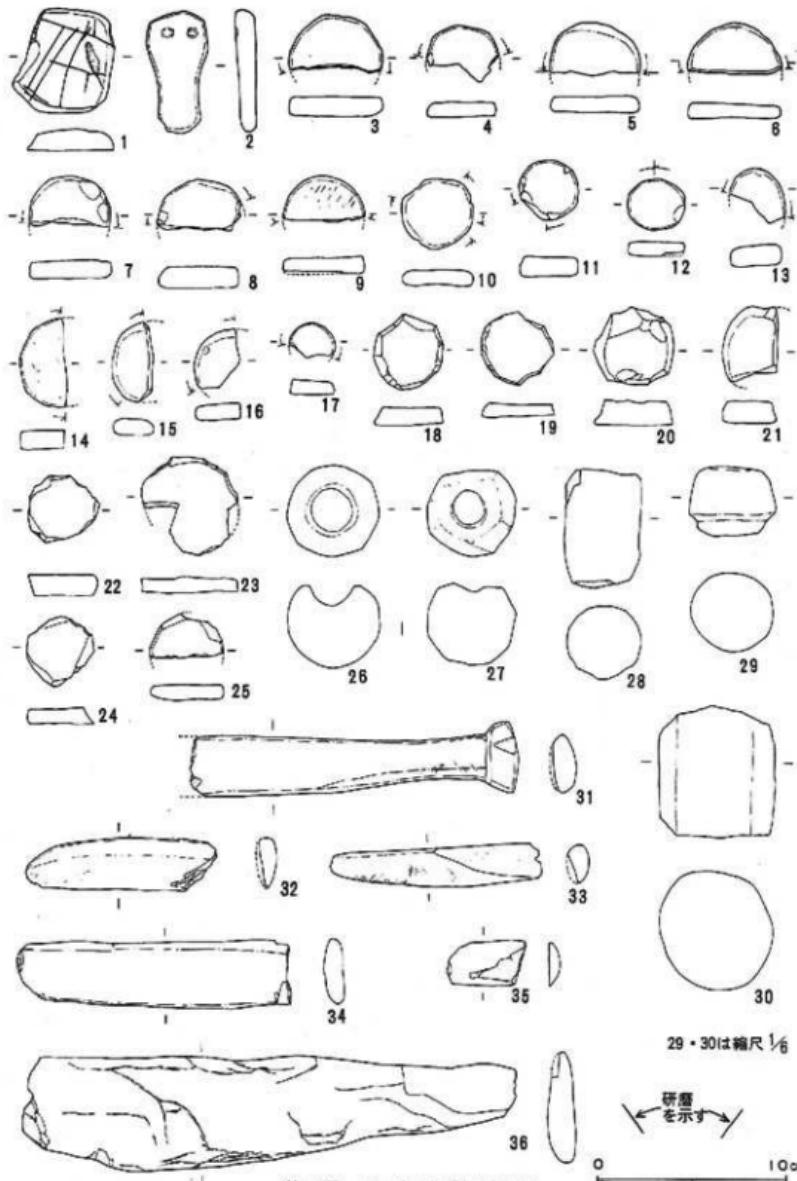
推定径 20.6 cm, 厚さ 2.1 cm の円盤状の土製品である。周縁部がわずかではあるが盛り上り、裏面及び側縁にはスグが付着しており、焼成は良好である。

#### 岩板（第76図2）

平面形はひょうたんを逆にしたような形をしており、表裏面及び側面を研磨し偏平に整形している。顔をモチーフしているようで、目と思われる凹が 2 つ施されている。大きさは、6.4 × 3.2 cm, 厚さ 1.0 cm, 重さ 16.7 g を計る。石質は凝灰岩である。

#### 円盤状石製品（第76図3~25）

遺構内 4 点、遺構外 17 点、出土地不明 2 点、計 23 点が出土した。このうち 16 点が欠損している。器皿の一部及び全面を研磨加工しているもの（3~17・21）と、打ち欠き加工だけのもの（18~20・22~25）とに分ける事ができる。接合できたものが 3 例見られる。H-103 グリッドから出土したものと、J-101 (23), J-102 (3), J-103 (4) グリッドから出土上。



第76図 B区出土石製品実測図

したものとがそれぞれ接合する事ができた。

大きさは、径4cm前後、厚さ0.9cm前後が多い。石質は、砂質凝灰岩10点、泥質凝灰岩7点、軽石質凝灰岩4点、白色凝灰岩1点、珪(硬)質頁岩1点と、軟質の凝灰岩が大部分である。

#### 線刻石（第76図1）

平面形は方形を呈し、 $5.5 \times 4.6\text{cm}$ を計り、断面形はかまぼこ状を呈し、厚さ1.1cm、重さ38.7gを計る。表面には、面をいっぱいに使い線刻がなされている。縁辺にそれぞれ1本、そのほぼ中間と、それらをつなぐように直線を用いて格子目状に刻まれている。裏面は平坦に丹念な研磨が施されている。石質は珪(硬)質頁岩である。

#### 球状石製品（第76図26, 27）

26は全面が丸く球状に磨られており、27は全面に平坦な研磨をくり返し多面体となっている。いずれも1個の凹をもち、石質は共に泥質凝灰岩である。大きさは、26が高さ4.9cm、径4.4cm、重さ41.9g。27が高さ4.7cm、径4.3cm、重さ45.2gを計る。

#### 柱状石製品（第76図28）

高さ6.0cm、径4.3cmの円柱形を呈し、重さ46.8gを計る。側面に径0.9cmの凹をもち、整形が粗い。石質は泥質凝灰岩である。

#### 石劍（第76図31～36）

いずれも欠損品である。丹念な研磨によってしあげられているもの（31～33・35）と、粗い加工のもの（34・36）とがある。31は五角形に近い台形の柄頭をもち、現存長17.4cm、幅3.1cmを計る。36は現存長26.0cm、幅5.9cmを計る。石質は31～33・35が粘板岩で、34・36が珪質粘板岩である。

#### 石棒（第76図29・30）

いずれも欠損品である。29は有頭石棒の頭の部分で、最大径9.2cmを計り、石質は石英板面岩である。30は径6.1cmを計り、石質は凝灰岩である。

（佐藤　樹）

#### 4) 小結

B区より、フ拉斯コ状土壙7基、Tピット2基、土壙8基、焼土遺構3基、礫群が検出された。また、遺構内・外より多量の土器、石器、土製品、石製品を出土した。

フ拉斯コ状土壙については第7回に述べる事とし、ここではそれ以外をまとめてみたい。

Tピットの規模は長軸約390cm、短軸58cm、深さ98～166cmを測る。いずれも短軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上り、中程で外反し、長軸方向の壁は底面からほぼ垂直に立ち上る。土壙は平面形が円形、横円形を呈し、ほとんどが浅い掘り込みである。出土遺物はほとんどなく、若干の土器を出土したのみであるが、これらの出土遺物をみるとTピット・土壙の時期は縄文後期初頭から中葉と考えられる。焼土遺構はすべて掘り込みをもたず、焼土化も著しくない事から

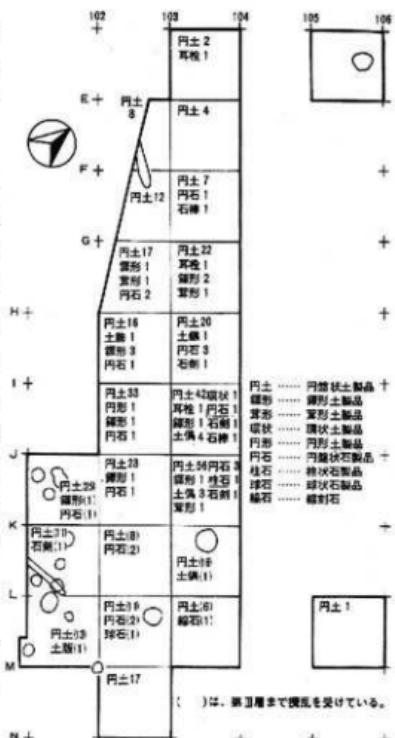
一時的な使用と考えられる。礫群は南東部を除くほぼ全域から4~48cm大の礫が多数検出された。礫は10~16cm大のものが多く火熱を受けているものも若干見られる。

B区からの出土遺物は、土器は96点の復元可能土器他、ダンボール箱37箱を出土し、これらの大部分は縄文後期前葉のものである。石器は総数625点を数え、石鏃176点と搔器224点で全体の6割強をしめる事、石鏃の形態が短軸を打ち欠く事を特色とする。土製品、石製品は総数518点を数える。これらは土偶、土板、円盤状土製品、鏃形土製品、葺形土製品、耳栓、岩板、石剣、石棒など直接生活用具として使用されないものである。また人間をモチーフした土板には、1~6の数の表現がなされており、数に対する意識がうかがえ注目できる。

遺構外の遺物分布は、土器はF~I-102、G~J-103及びM-102グリッド、石器はG~J-103、土製品・石製品はG~J-102~103グリッドにそれぞれ集中する傾向を示す。

遺構の集中する地域の外側に、野中堂環状列石 第77図 B区各グリッドの土製品・石製品出土数を中心には弧状に分布し、環状に巡るものと考えられる。

(佐藤 树)



## 第V章 配石遺構の土壤および甕棺土器に 残存する脂肪の分析

帯広畜産大学 中野益男・中岡利泰

配石遺構群のうち、前回調査分析したA区に引き続き、隣接する配石遺構群域の遺構の性格を「<sup>13</sup>C-NMR法」を用いて検索した。今回は、とくに配石遺構と上部に配石を有しない土壤の性格、および配石遺構から出土した甕棺と推定される壺形土器の用途について解析を進めた。

### 1. 土壤および土器試料

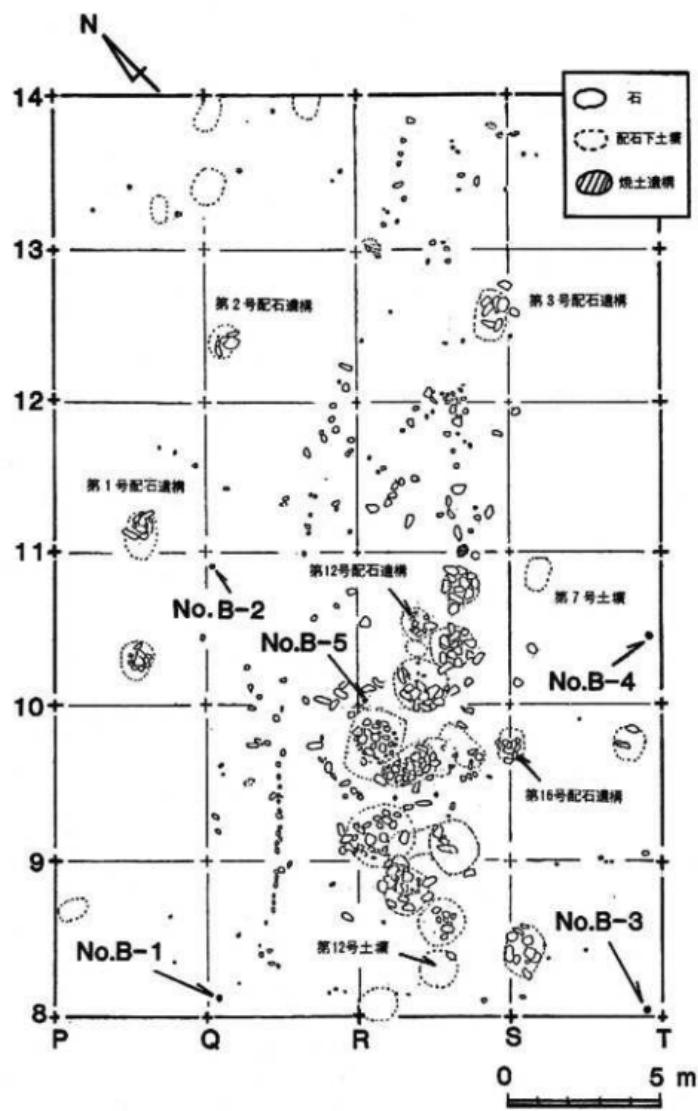
第12号配石遺構の下の土壤内5地点 (No.S 12-1～No.S 12-5)、第16号配石遺構の下の土壤内4地点 (No.S 16-1～No.S 16-4)、上部に配石を有しない第7号土壤内5地点 (No.S K 7-1～S K 7-5) 並びに第12号土壤内5地点 (No.S K 12-1～No.S K 12-5) および遺構外周辺部5地点 (No.B-1～No.B-5) から土壤試料をそれぞれ1kg採取した。土器片は第12号配石遺構から出土した甕棺土器底部6試料 (No.P-1～No.P-6) である。試料採取地点およびレベルは第78図～第82図および第2表に示す。

### 2. 土壤試料の無機成分

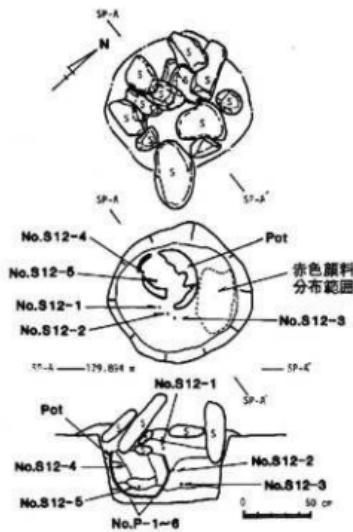
土壤試料中の無機成分を調べ、配石遺構および土壤の性格の解明を試みた。

試料の分析は前報と同様、原子吸光法によりマンガン (Mn)、鉄 (Fe)、マグネシウム (Mg)、ナトリウム (Na)、カリウム (K) の主要元素および銅 (Cu)、亜鉛 (Zn) の微量元素を分析した。堿 (P) は常法に従って比色定量により求めた。

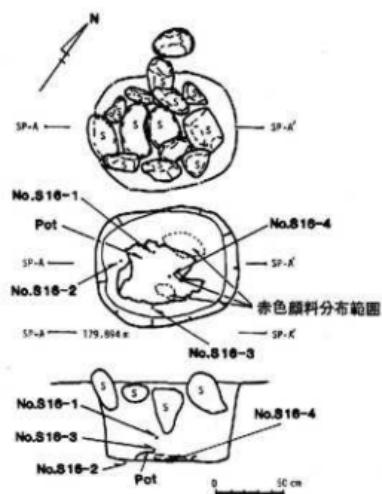
第12号配石遺構と第7号土壤の重金属分布を第83図に示す。いずれの試料もCu含量が8ppm以下、Mg含量が0.5%以下と低いことから、供試試料の母材は、酸性岩質、ケイ酸含量の高い珪長質と考えられる。甕棺土器周辺の土壤と土壤の埋土の元素組成は類似しており、両遺構はほぼ同一の土壤によって被覆されたと考えられる。また、両遺構土壤のCa、Na含量は遺構外の対照土壤と比較して明らかに高い。一般に、Ca、Naは風化過程で流亡しやすいことが知られている。従って、遺構土壤は対照土壤よりも風化年代が若いといえる。もし動物、ヒトが埋葬されてその影響があるならば、K含量はもっと高く分布する必要がある。Zn含量は、甕棺土器周辺土壤および遺構外土壤とも100～200ppmと一般火山灰土壤の2～3倍高い傾向にある。このような高い値は古代人の活動に関係あるのか、試料採取時の人為的汚染によるのか不明である。これら両遺構の重金属分析の成績は、第16号配石遺構および第12号土壤についても類似していた。これらの結果を総合すると、重金属分析からは前報と同様、遺構を墓地と認定する有力な



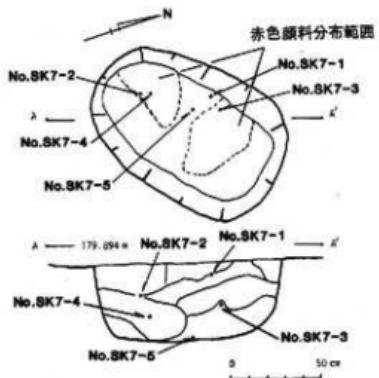
第78図 大湯環状列石周辺遺跡 A区配石遺構群域遺構配置図



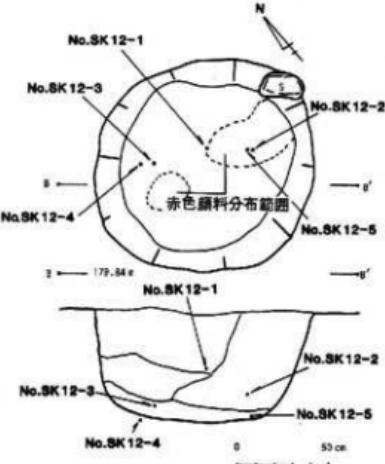
第79図 第12号配石造構見取図と試料採取地点



第80図 第16号配石造構見取図と土壤試料採取地点



第81図 第7号土壤見取図と土壤試料採取地点



第82図 第12号土壤見取図と土壤試料採取地点

情報は得られなかった。

墓壙の認定に広く利用されているP分布を第84図に示す。第12号および第16号配石遺構、第7号および第12号土壙、遺構外ともP含量は0.1%以下と低く、人為的影響の痕跡は認めにくく、いずれも遺構を墓壙と認定できなかつた。

### 3. 残存脂肪の抽出

土壤試料1kgおよび甕棺土器79~282gに3倍量のクロロホルムメタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理する前報と同様の方法<sup>11</sup>で残存脂肪を抽出した。この方法は土器に対する損傷はない。

残存脂肪の抽出量を第2表に示す。土壤試料の残存脂肪抽出量は0.018~0.161%，平均0.076%と前回の半量であった。この値は全国各地の遺跡群から抽出された残存脂肪の平均0.042%と比較して高かった。甕棺土器から残存脂肪は0.004~0.063%，平均0.036%と土壤に比べて低かった。しかし分析には十分量の抽出量であった。

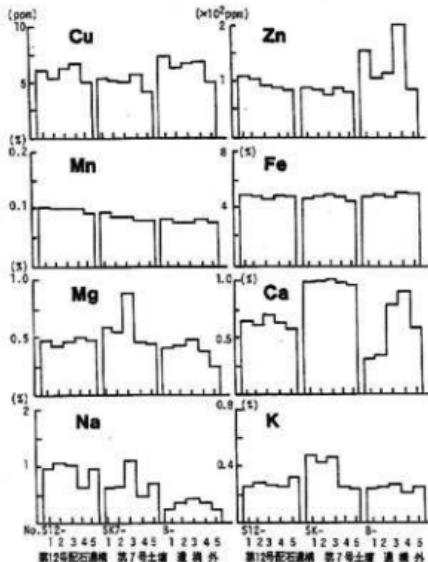
残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフ

フィーで分析した結果、脂肪種は遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリド、ステロールの順に多く、これらで全脂肪の約86%近くを占めていた。その他に微量のステロールエステルおよび長鎖炭化水素と未同定の複合脂質を検出した。

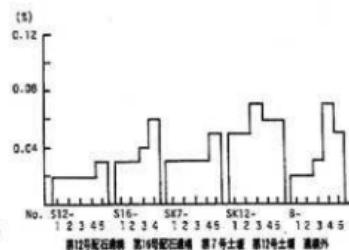
### 4. 残存脂肪の脂肪酸組成

遺構内外の土壤および甕棺土器の残存脂肪から調製された脂肪酸メチルエステルをケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した。<sup>13</sup>

残存脂肪酸の主な脂肪酸組成を第85図~第88図に示す。残存脂肪から16種類の脂肪酸を検出



第83図 配石遺構内外から採取した土壤の重金属分布

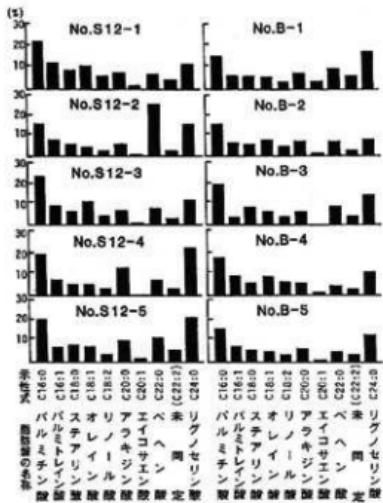


第84図 配石遺構内外から採取した土壤の脂分布

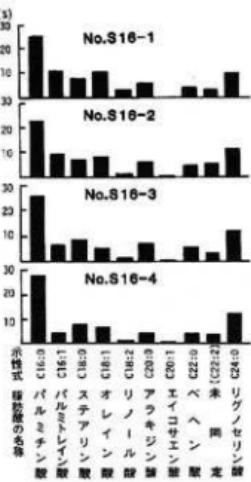
第2表 試料採取地点レベルと残存脂肪抽出量

試料名	試料採取地点レベル	残存脂肪抽出量
第12号配石造構	(m)	(%)
No.S12-1 179.212	{ 土 壤 上 位 }	0.037
No.S12-2 179.057	{ 土 壤 中 位 }	0.068
No.S12-3 178.940	{ 土 壤 下 位 }	0.040
No.S12-4 179.076	{ 土 壤 中 位 槽 内 }	0.040
No.S12-5 178.934	{ 土 壁 下 位 槽 内 }	0.018
第16号配石造構		
No.S16-1 179.115	{ 土 壁 中 位 }	0.056
No.S16-2 178.919	{ 土 壁 底 面 直 下 }	0.093
No.S16-3 179.029	{ 土 壁 下 位 槽 内 }	0.108
No.S16-4 178.938	{ 土 壁 底 面 槽 内 }	0.073
第7号土壌		
No.SK7-1 179.297	{ 土 壁 上 位 }	0.069
No.SK7-2 170.080	{ 土 壁 中 位 }	0.065
No.SK7-3 179.047	{ 土 壁 下 位 }	0.064
No.SK7-4 179.002	{ 土 壁 中 位 }	0.135
No.SK7-5 179.882	{ 土 壁 底 面 上 }	0.066
第12号土壌		
No.SK12-1 179.068	{ 土 壁 中 位 }	0.112
No.SK12-2 178.927	{ 土 壁 中 位 }	0.080
No.SK12-3 178.869	{ 土 壁 中 位 }	0.161
No.SK12-4 178.681	{ 土 壁 底 面 下 }	0.033
No.SK12-5 178.800	{ 土 壁 底 面 上 }	0.121
第12号配石造構土壤土器		
No.P-1 178.934	{ 槽 槽 壁 部 }	0.004
No.P-2 178.934	{ 槽 槽 壁 壁 部 }	0.007
No.P-3 178.934	{ 槽 槽 壁 壁 部 }	0.039
No.P-4 178.934	{ 槽 槽 壁 壁 部 }	0.052
No.P-5 178.934	{ 槽 槽 壁 壁 部 }	0.063
No.P-6 178.934	{ 槽 槽 壁 壁 部 }	0.050
造構外		
No.B-1 179.659-179.603		0.111
No.B-2 179.758-179.704		0.056
No.B-3 179.648-179.591		0.163
No.B-4 179.656-179.618		0.050
No.B-5 179.690-179.620		0.123

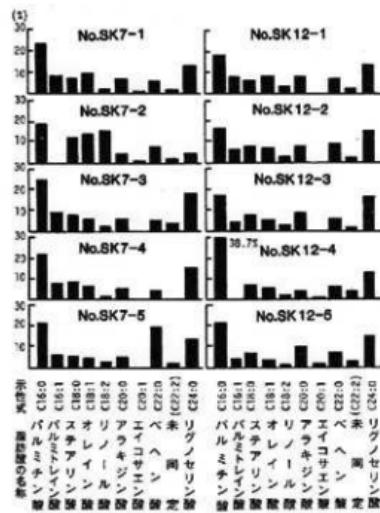
した。このうち、パルミチン酸(C16:0)、パルミトリン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)など10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析計で同定した。各配石造構と造構外の脂肪酸組成を比較してみると、造構外試料No.B-3を除くNo.B-1～No.B-5(これらをC群とする)の脂肪酸はパルミチン酸(中級脂肪酸)とオレイン酸(中級不飽和脂肪酸)などが多く、ベヘン酸など炭素数22以上の高級飽和脂肪酸は少なかった(第85図)。これらの試料はいずれも一般土壌によく見られる植物腐植に由来する脂肪酸パターンを示している。これに対し、第12号配石造構では甕槽に隣接した土壌試料No.S12-4とNo.S12-5(これらをB<sub>1</sub>群とする)で飽和脂肪酸、とくに高等動物に特徴的な高級脂肪酸のリグノセリン酸を比較的高い割合で検出した他は、甕槽外の土壌試料No.S12-1とNo.S12-3(これらをA<sub>1</sub>群とする)はいずれも造構外のC群と近い脂胞酸パターンを示した(第85図)。試料No.S12-2(これをD<sub>1</sub>群とする)の主要な脂肪酸はベヘン酸で、他の試料とは少しパターンが異なっていた(第85図)。これは異種脂肪酸、恐らく動物と推測される脂肪酸の混入によるものであろう。第16号配石造構では、甕槽に隣接する土壌試料No.S16-3とNo.S16-4(これらをB<sub>2</sub>群とする)の脂肪酸組成はB<sub>1</sub>群に近い脂肪酸パターンを示したが、リグノセリン酸などの高級脂肪酸の占める割合はそれほど高くなかった(第86図)。甕槽外の土壌中位試料No.S16-1とNo.S16-2(これらをF群とする)の脂肪酸組成は一般植物腐植によく見られる脂肪酸パターンを示していた。



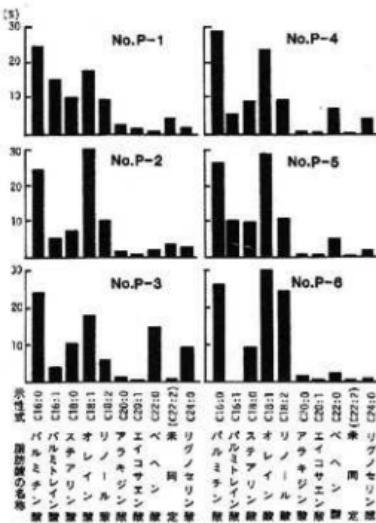
第85図 第12号配石造構および配石造構外に  
残存する脂肪の脂肪酸組成



第86図 第16号配石造構内に残存する脂肪の  
脂肪酸組成



第87図 第7号土壤および第12号土壤に残存  
する脂肪の脂肪酸組成



第88図 第12号配石造構焼成土器に残存する  
脂肪の脂肪酸組成

第7号土壤試料No.SK 7-1, No.SK 7-3およびNo.SK 7-4（これらをB<sub>3</sub>群とする）、第12号土壤試料No.SK12-1とNo.SK12-2（これらをB<sub>4</sub>群とする）、および試料No.SK12-3とNo.SK12-5（これをB<sub>5</sub>群とする）の脂肪酸組成は、いずれもB<sub>1</sub>群に近い脂肪酸パターンを示したが、リグノセリン酸などの高級脂肪酸の占める割合はそれほど高くなかった（第87図）。第7号土壤試料No.SK 7-5の主要な脂肪酸はペヘン酸（これをD<sub>2</sub>群とする）で、先のD<sub>1</sub>群に近く、動物脂肪酸の混入が認められた。第7号土壤試料No.SK 7-2はリノール酸、オレイン酸といった中級不飽和脂肪酸が主要脂肪酸を占め（これをG群とする）、植物脂肪酸の影響を認めた（第87図）。第12号土壤試料No.SK12-4は、パルミチン酸を主成分（これをA<sub>2</sub>群とする）とし、遺構外のC群の脂肪酸パターンと類似していた。これら遺構の脂肪酸組成と遺構外のそれと比較してみるとA<sub>1</sub>群、A<sub>2</sub>群、G群およびF群は土壤の上位から中位、および土壤底面直下にあり、いずれも遺構外の脂肪酸パターンと類似していた。B<sub>1</sub>群～B<sub>5</sub>群、D<sub>1</sub>群およびD<sub>2</sub>群は土壤中位から下位に位置していた。しかし、脂肪酸組成から見る限り、甕棺土器の出土した第12号および第16号配石遺構は、前報の第1号～第3号配石遺構の分析から得られた成績ほどに顕著な動物性脂肪酸は検出されなかった。また第7号および第12号土壤についても同様の傾向が見られ、動物性脂肪酸の占める割合は低かった。これは上部に配石を有しない土壤では擾乱が進んでいるために、明確な動物脂肪酸分布図が得られなかつたと推測される。

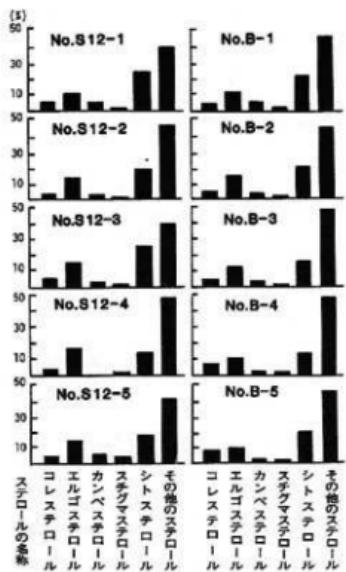
甕棺土器の残存脂肪酸組成を第88図に示す。いずれの試料も先の遺構内外土壤試料の脂肪酸組成と異なり、主要な脂肪酸はオレイン酸とパルミチン酸で、この2つの脂肪酸だけで約60%近くを占めていた。この脂肪酸組成は動物、ヒトの体脂肪のそれと非常に良く類似していた。

#### 5. 残存脂肪のステロール組成

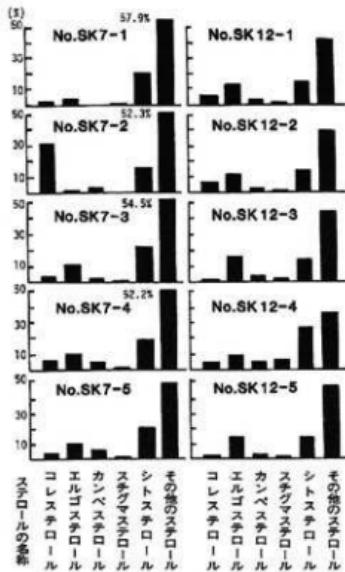
遺構内外の土壤および甕棺土器の残存脂肪からステロールをケイ酸薄層クロマトグラフィーにより分離・精製後、アセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

残存脂肪の主なステロール組成を第89図～第92図に示す。残存脂肪から16～18種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペスステロール、スチグマステロール、シトステロールなど11種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析計で同定した。動物に固有のコレステロールと植物に固有のシトステロールの比は、第12号および第16号配石遺構、第7号および第12号土壤のいずれも0.15～0.61の間にあり、植物性的ステロールが多く、動物性遺体の存在を示すコレステロールは非常に低かった（第89図～第91図）。しかし、甕棺土器ではステロールの約70%をコレステロールで占め、植物性的シトステロールはごく僅かしか分布していないかった（第92図）。これだけの多量のコレステロールが甕棺内から検出されることは、土器内には動物性遺体が存在していたことを示唆する。

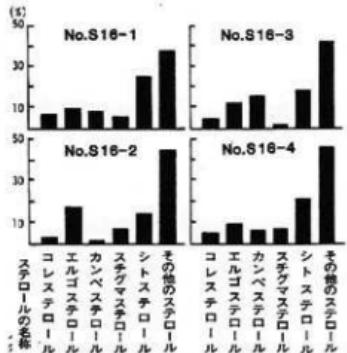
#### 6. 脂肪酸組成の数理解析



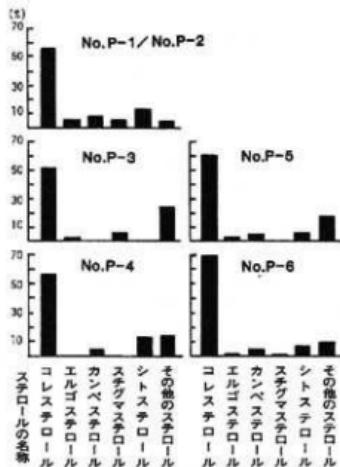
第89図 第12号配石造構および配石造構外に残存するステロール組成



第91図 第7号土壌および第12号土壌に残存するステロール組成



第90図 第16号配石造構に残存するステロール組成

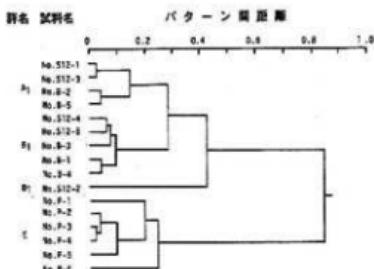


第92図 第12号配石造構焼成土器に残存するステロール組成

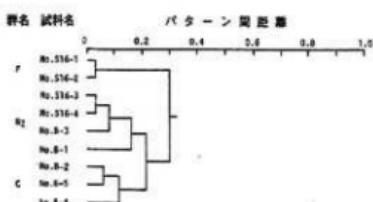
残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行なって各試料間の類似度を調べた。

第12号配石遺構の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にて表わした構造図を第93図に示す。遺構外の植物腐植に由来する脂肪酸をもつC群とパターン間距離の短い試料No.S12-1およびNo.S12-3(A<sub>1</sub>群)とが類縁関係のあるコロニーを形成し、高等動物に特徴的なリグノセリン酸を比較的多く包含する試料No.S12-4とNo.S12-5(B<sub>1</sub>群)とは別の系統に属していた。しかし、B<sub>1</sub>群は遺構外のC群とは系統的にそれほど大きな差を認めなかつた。土壤中位試料No.S12-2(D<sub>1</sub>群)は、これらとは別の系統を示し、異種脂肪酸の混入を示唆する。甕棺土器No.P-1～No.P-6は、A<sub>1</sub>群、B<sub>1</sub>群およびD<sub>1</sub>群とは全く別の系統に属していた。甕棺には特異な脂肪酸が存在していたことを示唆している。

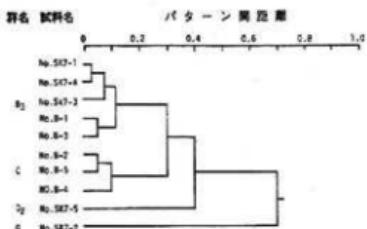
第16号配石遺構の脂肪酸組成樹状構造図を第94図に示す。動物脂肪族に由来する高級脂肪酸



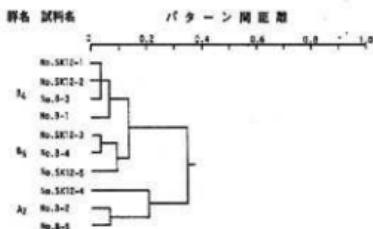
第93図 第12号配石遺構および甕棺土器に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第94図 第16号配石遺構に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第95図 第7号土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造



第96図 第12号土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

を比較的多く包含する試料No.S 16-3とNo.S 16-4(B<sub>2</sub>群)は系統的に遺構外試料No.B-1～No.B-5(C群)に近いコロニーを形成した。しかし、植物脂肪酸の多い試料No.S 16-1とNo.S 16-2(F群)は、これとは別の系統に属していた。

第7号土壤の脂肪酸組成樹状構造図を第95図に示す。動物脂肪酸の痕跡が認められる試料No.S K 7-1, No.S K 7-4およびNo.S K 7-3(B<sub>3</sub>群)は系統的には遺構外のC群とは別の系統に属していた。試料No.S K 7-5と試料No.S K 7-2はそれぞれD<sub>2</sub>群とG群を形成し、どの群にも属していないかった。しかし、D<sub>2</sub>群は第12号配石遺構のD<sub>1</sub>群とは系統的には同じコロニーを形成した。

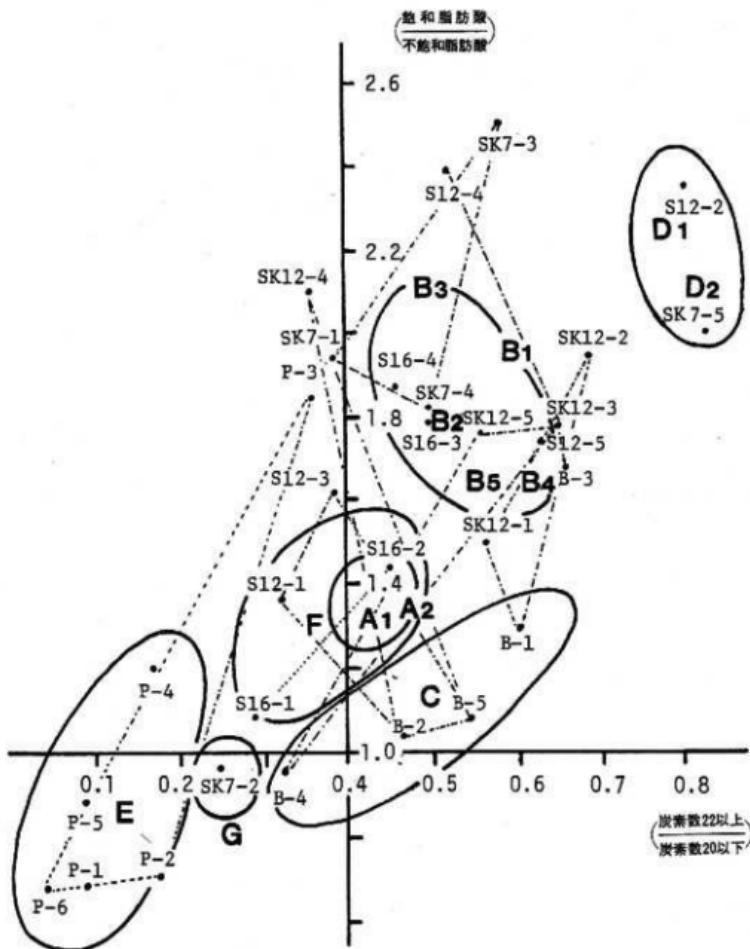
第12号土壤の脂肪酸組成樹状構造図を第96図に示す。動物脂肪酸の痕跡が認められる試料No.S K 12-1とNo.S K 12-2、試料No.S K 12-3とNo.S K 12-5はそれぞれB<sub>4</sub>群とB<sub>5</sub>群を形成するが、遺構外のC群とも近い関係にある。試料No.S K 12-4はA<sub>2</sub>群を形成するが、遺構外のC群とはパターン間距離は短かった。

このように、各遺構のA<sub>1</sub>およびA<sub>2</sub>群は遺構外試料とは同じ系統に属し、お互いにパターン間距離の短い位置に分布していたことから、この土壤位置には動物遺体は存在していないことが判明した。また、甕棺内土壤のB<sub>1</sub>群、B<sub>2</sub>群、B<sub>3</sub>群、B<sub>4</sub>群およびB<sub>5</sub>群は遺構外試料とはパターン間距離の短い位置に分布しているが、系統的にはB群シリーズとC群とは別系統に属していた。この成績は、各遺構のこの位置の一部に同じ性質の遺物が存在していたことを示唆している。しかし、上部に配石を有しない1号は擾乱のため、系統間に多少の乱れを観察した。第12号配石遺構のD<sub>1</sub>群と第7号土壤のD<sub>2</sub>群はお互いに近いパターン間距離に分布していることから、この土壤位置には同じ性質の遺物が混入していたことになる。甕棺土器のE群は、土壤の埋土と全く性質の異なる遺物を含有していることを示している。

#### 7. 脂肪酸組成による種特異性相間

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のパルミチン酸から炭素数20のアラキシン酸まで)と高級脂肪酸(炭素数22のベヘン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸の比をY軸にとり、種特異性相間を求めた。この比例配分により、第1象限と第3象限の原点から離れた位置に高等動物が分布し、第2象限から第3象限にかけての原点附近に植物と微生物、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

遺構内外の土壤および甕棺土器の脂肪酸組成から求めた相間図を第97図に示す。A<sub>1</sub>群とA<sub>2</sub>群は第1象限から第2象限にかけて原点に近い位置に分布し、これを取り囲むようにC群、F群およびG群が分布していた。C群は植物腐植に由来する脂肪酸を多く分布するところから、A<sub>1</sub>群、A<sub>2</sub>群、F群およびG群には動物遺体が存在しないことを示唆している。この成績はこ



第97図 配石遺構内外に残存する脂肪の  
脂肪酸組成による種特異性相関

れらの位置に動物性のコレステロールが分布していないという先のステロール分析の結果ともよく一致する。B<sub>1</sub>群～B<sub>5</sub>群は第1象限の原点から離れた位置にほぼ集合していた。この位置は、前報の第1号、第2号および第3号配石遺構と比較して原点に近いところから、植物腐植の影響を強く受け、動物性遺体は痕跡しか分布していなかったことを示唆している。この成績は先のステロール分析の結果ともよく一致する。D<sub>1</sub>群とD<sub>2</sub>群は第1象限の原点から離れた位置に分布するので動物性遺体の存在が推測される。しかし、ステロール分析では明瞭なコレステロールは検出されず、動物性遺体は特定できなかった。斎棺土器のE群は第2象限と第3象限にかけての原点から離れた位置にほぼ集合した。この位置は、大阪府能取町成合寺遺跡の焼土壙に見られる体脂肪並びに骨油の分布範囲とよく類似し、先の動物性のコレステロールの多量の検出とも一致していた。従って、斎棺土器には動物性遺体が存在していたことを示唆している。

これらの成績とクラスター分析およびステロール分析の結果を総合すると斎棺土器には動物遺体が存在していたと断定できた。従って、配石遺構の壺形土器は壺形であり、この土器内に遺体が埋葬されたと推定され、斎棺の外の土壤に遺体が埋葬されていた可能性は極めて少い。また、上部に配石を有しない土壤にも動物遺体の存在の痕跡が認められるところから、配石遺構と同じ性質の土壤と推測される。しかし、遺構の擾乱のため精確に断定することできなかった。

#### 8. 総括

2ヶ所の配石遺構の土壤および2ヶ所の上部に配石を有しない上壙から採取した19試料中、斎棺に隣接した土壤を含む13試料から動物性脂肪酸の痕跡を認めたが、動物の存在を示す優位なステロールは検出されなかった。しかし、斎棺土器には動物の体脂肪を示唆する脂肪酸と多量のコレステロールを検出した。これらの成績から、斎棺には高等動物に属する遺体が埋葬されていた可能性は極めて高いと認定された。従って、斎棺の出土した配石遺構の上壙に見られる動物遺体の痕跡は斎棺由来するものと推定された。斎棺には幼児埋葬用と成人骨改葬（洗骨葬）用があるが、斎棺の大きさと多量の体脂肪の脂肪酸およびコレステロールの存在から出土斎棺は幼児埋葬用と認定された。動物種とヒトの設定については、この成績からだけでは認定できなかった。今後の研究課題である。

残存脂肪分析に当り、株式会社北海道測量工社総合科学研究所 長田正宏、福島道広、中野寛子氏の協力を得ることができた。記して感謝します。

## 参考文献

- (1) 中野益男：「配石遺構の土壤に残存する脂肪の分析」『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書』1, 秋田県鹿角市教育委員会, 1985, pp46.
- (2) 土壤養分測定法委員会編：土壤養分分析法, 美賢堂, 東京, 1970, pp430.
- (3) 中野益男, 有賀裕子, 根岸 孝, 安木教傳, 佐原 真, 田中 琢：「脂質分析と考古学—その活用と問題点について」『脂質生化学研究』第27巻, 1985, pp41.
- (4) 中野益男：「能取町成合寺遺跡の土壤群に残存する脂肪の分析」『近畿自動車道和歌山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』, 大阪府教育委員会・㈱大阪文化財センター, 1985, pp78.
- (5) 第12号土壤は、整理の段階で配石遺構と判断されたことから、本章以外では第31号配石遺構として述べている。(秋元)

## 第VI章 大湯環状列石周辺の古環境

### (1) はじめに

秋田県における縄文期の植生の変化およびこれとともになう気候の変化を究明するために、いくつかの花粉分析的研究がおこなわれている。鹿角地域では、玉川温泉（標高770m）の分析結果がある（辻, 1977）。これによると、少なくとも約6000年前から現在を通じてブナ・ミズナラ林が広がり、約2500年前後に急速にスギが侵入し、この地方に分布するスギーブナ林が成立したという。考古学的には縄文晩期にあたるこの時代を境にして、スギの増加は気候の湿润化・冷涼化を示すものと考えられている。このことは秋田県海岸平野で得られている知見（辻・日比野, 1975）にほぼ一致している。このことから、大湯環状列石が配石された縄文後期の植生は依然としてブナ・ミズナラを中心とした落葉広葉樹林で占められ、湿润化とともになうスギの侵入はまだみられないことになる。縄文中期北の林II遺跡（東北縄貫道遺跡報告書）・天戸森遺跡（天戸森遺跡報告書）の花粉分析でも食用植物の豊富なブナ・ミズナラ林が当時の植生としてうかがわれる結果が報告されている。本報告では腐植土中の花粉分析の問題点と分析の結果推定される植生について述べたい。

### (2) 処理方法と問題点

花粉はスプロボンニンという、たいへん化学的に安定で強靭な物質からなる外壁を身につけていて化石に残る。地層中の花粉化石を取り出して調べると、その地層の堆積当時にどのような植物が生育していたかがわかる。また、それを定量的に調べ、それらの植物の花粉の散布量や生産量をふまえて考えると、どのような地形、気候であったかなどの古環境も推定できる。ただし、乾燥や長い間の酸化などには弱く、十和田火山起源の酸性の火山灰腐植土としての黒土中にはほとんど残っておらず、古植生を復元するのは困難である。今回の分析でも古植生復元に必要な木本花粉化石250個におよばない数10個体だけとりだすことができた。（表3）

分析の方法は次のように行

った。B区南壁の大湯浮石層  
(IIb)より下位の IIc・IIIa・  
IIIa'・IIIe (厚さ30cm) を5cm

ずつの厚さで6サンプル採取  
し、実験室で表面をけずりそ  
れぞれ100gを測定し処理し  
た。10%水酸化カリウム水溶  
液で脱色(80°C, 20分湯せん)

→水洗→傾斜法による砂の分

離→塩化亜鉛水溶液(比重2.0)を用いて

遠心比重分離→氷酢酸で脱水→アセトリ  
シス溶液(濃硫酸1:無水酢酸9の混合  
溶液)で膨潤→氷酢酸→水洗→残渣をグ  
リセリンゼリーで封入を行い検鏡した。

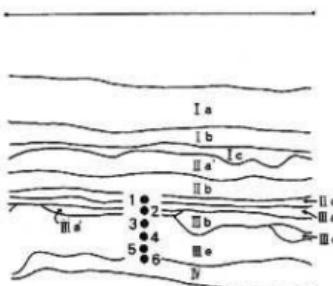
通常の花粉分析では、木本花粉化石250  
個を基にし各花粉のダイアグラムを作  
成し考察できる植生を示すのが妥当  
であるが、本報告では検出された花粉化  
石が少なく、表にあらわしそれをもとに  
述べたい。

### (3) 分析結果

花粉分析の結果、同定した科または属は以下のとおりである。ブナ属・コナラ属・シナノキ属・オニグルミ属・ケヤキ属ニレ属・ハンノキ属の落葉広葉樹、スギ属・マツ属の針葉樹、イネ科・キク科の草本。全層準を通じてブナ属・コナラ属・ケヤキ属ニレ属・ハンノキ属がみられる。ブナ属は現植生や花粉の大きさ全体の形から、温帯下部に混交林として生育するイヌブナではなく、温帯上部に優占林を形成するブナと思われる。花粉の形態からイヌブナは35ミクロン前後でやや三角形にちかい尖った形をし、ブナは40ミクロン前後で形は円形に近い。コナラ属は、現在鹿角に自生するミズナラと思われ、オニグルミとともに食用植物として利  
用されていたと考えられる。B区からは炭化したオニグルミの殻も出土している。縄文時代の遺跡から出土するクルミは、在来種のオニグルミが多いが、ここでも殻の厚さ、大きさから、亜種で脂肪分が少なく味がおちるヒメグルミとは違う。天戸森遺跡では炭火したクリの堅果も

採取番号	花粉化石							
	マツ属	スギ属	ブナ属	コナラ属	ニレ属	ハンノキ属	クルミ属	シナノキ属
No. 1	3	1	4	2	8	2	·	1
No. 2	4	·	3	2	9	4	·	1
No. 3	2	·	2	3	7	5	1	·
No. 4	·	·	5	5	8	6	1	2
No. 5	2	·	4	8	5	1	2	·
No. 6	2	·	3	2	1	2	·	3

第3表 検出された花粉化石の個体数



第98図 採取層準と採取番号



出土したが、本遺跡では炭化グリも花粉化石もみつからなかった。しかし、大切な食用としてのクリが自生していたと考えるのが妥当である。以上のことから、花粉化石が少なく具体的な植生は論じられないが、当時は、ブナ・ミズナラ・ケヤキなどを中心とした落葉広葉樹林が広がりオニグルミやクリなどが混入していたと考えられる。草本のイネ科は今では普通にみられる雑草のたぐいのもので、タンポポ・ヨモギなどのキク科の植物もみられる。

スギについては、個体数が少なく植生は推論できないが、大湯浮石層近くの地層で1個体だけみつかっている。マツは二葉マツ類のもののが多かった。

花粉化石の保存がよいのは湿原の泥炭層である。1g程度にたくさんの花粉化石がみつかる。このことから大湯環状列石遺跡の古環境を正しく把握するには、近くで同時代に堆積した泥炭を分析する必要がある。菩提野にある蛇沢湿原は基底に大湯浮石層を堆積させているので、縄文期の植生は考察できない。宮野平から中草木にかけて広がっていたといわれる大谷地湿原がどのくらいの時代までさかのぼれるか、その結果によっては大湯環状列石遺跡の古環境を正しく考察できると思われる。

(成田 典彦)

#### 参考文献

- (1) 辻 誠一郎・日比野紘一郎 (1975) : 秋田県女潟における花粉分析的研究 第四紀研究14 151-158
- (2) 辻 誠一郎 (1977) : 秋田県玉川温泉地域の沖積世底湯層の花粉分析 東北地理 29 162-167
- (3) 成田典彦 (1984) : 植物遺体について 天戸森遺跡発掘調査報告書 476-478

## 第VII章 分析と考察

### 1. 配石遺構群域について

昭和6年、中通地区の耕地整理中、地元の郷土史家である浅井末吉氏によって発見された大湯環状列石は、数度の発掘調査を経て、昭和26・27年の国営調査によって、その全容が明らかとなった。調査を担当された斎藤忠氏は、「下底に墳を有していることが普通であることの認められたことは、それを墓壇と見、組石を墓標的なものと考えることに蓋然性もある」と述べ、遺跡の性格にせまつた。しかし、これを示す積極的な根拠を欠くことから、祭祀説も依然として根強く残り、墳墓説などには至らず、今日までに及んでいる。

大湯環状列石の性格と共に、この周辺に列石と関連ある遺跡及び遺構が存在するか否かは、国営調査以前から関心が持たれ、その都度発掘の手が延ばされている。特に昭和48年から51年にわたった大規模な周辺遺跡分布調査では、大湯環状列石と直接あるいは間接的に関連する遺構が、両環状列石を中心に東西650m、南北400mに及ぶこと、さらに野中堂環状列石の東方300mの地点には、第3の環状列石と考えられる配石遺構群が存在することなど、多くの成果を上げた。

第1次・第2次発掘調査は、昭和48年から51年に実施された周辺遺跡発掘調査の成果をもとに第3の環状列石と思われる配石群の形態・規模及びその性格の解明を目的として実施された。

以下、配石遺構(群域)・弧状列石について若干の考察を加え、まとめとした。

#### a) 配石遺構の形態と規模

配石の形態については、第1次調査報告書で数少ない資料をもとに分類した。しかし第2次調査においては、さらに多様性に富むことが明らかとなり、再度分類を試みた。

配石は、配石縁辺部の形態及び構造から大きくⅠ～Ⅲに分類され、さらに縁辺部の内・外部の構造から、いくつかに細分される。(第99図)

Ⅰ類……縁辺部に立石が巡らされるもので、内・外部構造から3つに細分される。

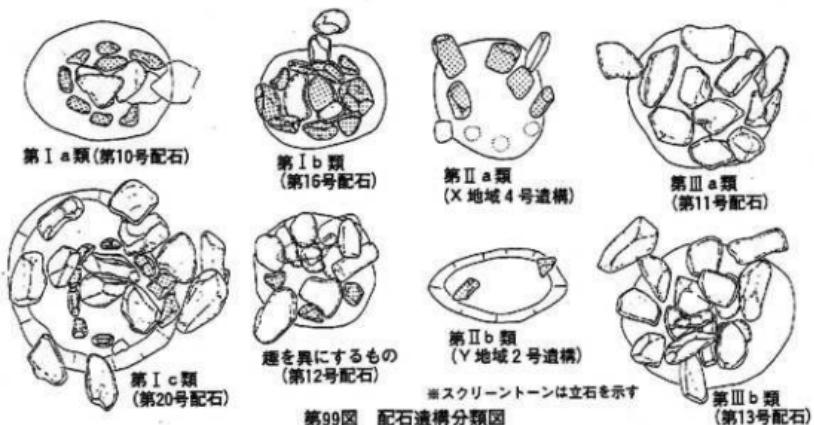
- a. 縁辺部形態が橢円形を呈し、その内部に平石を数個置いたもの。
- b. 形態が橢円形を呈し、その内部中央に立石を立て、その隙間に平石を置くもの。
- c. 形態が円形を呈し、その内部に数個～十数個の平石を積み、さらに縁辺部外に石を環状に巡らすもの。

Ⅱ類……立石のみで配石が作られるもので、2つに細分される。

- a. 縁辺部に立石を円形に巡らせるもの。
- b. 配石下土壤の長軸両端に1対の立石を立てるもの。

Ⅲ類……配石縁辺部に平石を巡らせるもので、2つに細分される。

- a. 石の長軸を連結させ円形に一巡させるもので、その内部には石が雜然と積まれる。



第99図 配石造構分類図

b. 石の長軸を中心に向かって、所謂放射状に置き、その内部には石が雜然と積まれるもの。なお、第12号配石は、I類の要素をもつものであるが、構造を推定復原していくと、立石を下部土壙の四方向に立て（西側立石が存在しない）。これは土壙西壁に接して土器が埋設されていることに起因するものであろう。その内部に平石を数個置き、さらに縁辺外部に配石を覆うかのように斜め立石を一巡させたものと考えられる。しかし立石が縁辺部を一巡しないという点から、別個に分類される可能性をもつ。

以上のように、配石はその構造から立石・平石を主とするものに、形態から橢円形・円形を呈するものに大別される。これら構造と形態は配石下土壙の平面形と深く関連しており、規則性が存在することを窺わせる。

配石の規模は、長軸95～416cm、短軸71～400cmほどで、Ia類としたものは小さく、他のものはばらつきをみせる。

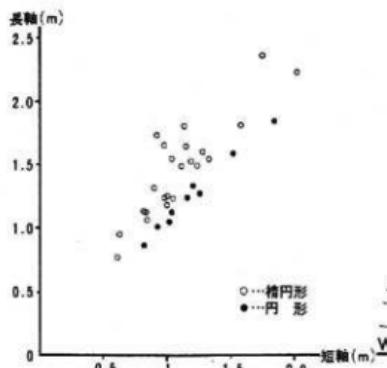
配石の構築材である石材については、第1次調査の際、その種類と産地同定を秋田大学名誉教授加納博氏に依頼した。その内容については前報告書にゆずるが、第2次調査で検出された配石の構築材は、石材の特徴・大きさなどからみて、昨年と同様に、安久谷川が大湯川と合流する地点より下流域から運び込まれたものと考えられる。

#### b) 配石下土壙の形態と規模

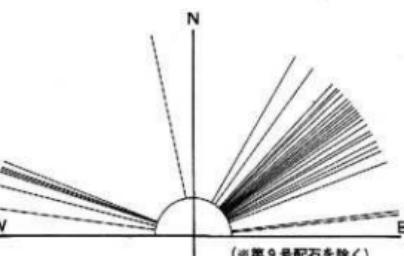
配石下に土壙が伴うか否か、これは配石の性格を考える上で一つの論点となっている。

第2次調査では、A区配石造構群域に存在する30基（第1～3号配石は第1次調査で精査済み）の配石下の精査を行ない、性格解明の一助とした。

その結果、前述したように、33基（第1次調査分を含む）の配石下には土壙が存在すること



第100図 配石下土壙の長軸×短軸相関図



第101図 配石下土壙の長軸方向

が明らかとなった。土壙は、上部配石と位置を一致する。平面形が横円形を呈するものが23例、円形を呈するものが9例、このほか馬蹄形・長方形を呈するものが1例存在する。第100図は規模を表わしたもので、長軸77~223cm、短軸61~184cm、深さ22~84cmを測り、概ね長軸154cm、短軸132cmを界とし二分でき、形態Ia類には小形のもの、III類にはやや大型のものが伴う。埋土は、いずれもブロック状に分層され、地山ブロック、砂礫を多量に含むものが大半を占めることから人為的な堆積である。また上壙底面に赤色範囲が認められるものが25例存在する。

第101図は、土壙長軸方向を表わしたもので、北東方向を向くものが21例、これと直交するもので西~西北西を向くものが7例存在するほか、北方向を向くものが3例ある。この数値から北東を向くものが多いといえるが、これが方位又は後述する環状帯を意識しての配置なのかも今後の資料の増加をまちたい。

### c) 配石遺構の性格

配石の性格については、明治19年渡瀬莊三郎氏が北海道小樽市に所在する忍路環状列石（石塚）を人類学雑誌に紹介し、その中で「墳墓説」と「祭祀説」の2説を提示した。石塚は研究史・発掘史のなかで、環状列石・組石遺構・配石遺構などと、その都度名称を変えてきたが、性格については、2説が並列したまま今日までに至っている。

第1次・2次調査では、A区配石群域に存在する33基すべてのものに対して、配石下の調査を行ない、性格解明に努めた。その結果、33基すべての配石下には、土壙が認められた。上壙は埋葬可能な規模をもち、埋土は人為的に埋め戻された状況を示している。さらに数例があるが土壙内より副葬品と思われる石器のほか、カメ棺と思われる土器が出土した。また第1次調査においては、第3号配石より漆塗木製品が出土するなど、墓として示唆させる資料も出土している。

第2次調査においても、配石の性格を科学的分野から追求していく目的で、残存脂肪酸分析を帯広畜産大学助教授中野益男氏に依頼した。子細な内容は報告書(1)および本報告書第V章に譲る。その結果を要約する。

残存脂肪酸分析は、配石遺構3基(第12号・16号・31号)と土壤1基(第7号)の他に、第12号配石下土壤から出土した壺形土器(底部破片6点)について実施した。

残存脂肪の脂肪酸組成は、遺構外より採集された対比資料には、パルミチン酸(中級脂肪酸)とオレイン酸(中級不飽和脂肪酸)などが多く、高級飽和脂肪酸であるベヘン酸などは少なかった。これは一般土壤によく見られる植物腐植に由来する脂肪酸パターンであるのに対し、配石下土壤および配石をもたない土壤の埋土中位～下位から採集された資料には、炭素数22以上の高級飽和脂肪酸、とくに高等動物に特徴的なリグノセリン酸が、昨年実施した第1号～3号配石の分析から得られた成績ほどに顕著でないにしても検出された。また、第12号配石下土壤より出土した土器胎土中から検出された残存脂肪酸は、他の資料の脂肪酸組成と異っていた。これは動物、ヒトの脂肪酸パターンに非常に類似しており、さらには、ステロール組成は、動物遺体の存在を示す。動物に固有のコレステロールがステロールの約70%を占めるなど、動物遺体が土器内に存在していたことを示唆している。

これらの分析結果から、第12号、16号配石下土壤より出土した土器内、第31号配石下土壤および第7号土壤内には、高等動物に属する遺体が埋葬されていた可能性が極めて高いことを示している。

以上のことから、A区において検出された配石遺構は、すべてに土壤を有し、しかもそれが人為的に埋め戻された痕跡がみられること、わずか數例であるが副葬品と思われる出土遺物があったこと、さらに高等動物の埋葬を意味する脂肪酸分析結果を得たことなどから、配石遺構は「配石墓」と、2個の土器は「カメ棺」と、上部に配石をもたない土壤については「土壤墓」と判断された。

#### d) カメ棺を埋納した配石墓

第12号・16号配石下土壤より出土した土器は、残存脂肪酸分析の結果、「カメ棺」と判断された。カメ棺を埋納した土壤上に配石をもつ類似例としては、近畿では青森県月見野遺跡・天狗岱遺跡、岩手県下村B遺跡などがある。秋田県内においては初例である。これらはいずれも縄文後期初頭～前葉にかけてのもので、北東北地方、主に青森県に広く分布している。

ここでもう一度、第12号・16号配石遺構について概観したい。

両配石は、配石遺構の集中する環状帶内帶に存在し、配置に関しては規則性は見られない。

配石の形態は、第12号配石は立石及び平石を用いて構築されており、形態分類のI類に属するものであろう。しかし、I類の特徴である縁辺部立石が一巡せず、立石が四方(西側の立石

を欠く)に配置されており、他のものと趣を異にする。第16号配石は、Ib類に属するもので、この他にも1例存在する。

下部土壙は、第12号配石が円形、第16号配石が橢円形を呈しており、長軸方向は2基ともおよそ北東を指す。これはA区において検出された配石下土壙と変りがない。ただ規模の面で小型に属する。

カメ棺土器は、第12号配石では、土壙西壁に接し、正立に埋設され、その上部に蓋石が2個置かれた状態で、第16号配石では、土壙南壁に接して、横転状態で出土した。ここで注目されることは、土器の埋設方法で土壙形態が異なることで、正立では円形を、横転では橢円形をとっている。

カメ棺葬には、未成人(主に乳幼児)の遺体を直接入棺する方法と、成人遺体を朽らせ遺骨のみを入棺させる方法がある。2個のカメ棺は容量的に双方とも可能である。しかし、カメ棺内からは、いずれの方法を取ったものを判断するに必要な資料が得られなかつた。そこで第12号配石より出土したカメ棺土器についても、残存脂肪酸分析を試みた。

その結果、カメ棺土器胎土中より、多量の体脂肪の脂肪酸およびコレステロールが存在したことや、カメ棺の大きさから、中野氏は幼児埋葬用と認定した。

これまで、北東北地方における縄文後期の改葬カメ棺墓については、葛西勲氏によって精力的に調査・研究されている。葛西氏は、据合1号遺跡・原々種農場遺跡などの調査結果から、カメ棺のうちで特に壺形上器のものは、成人骨を入棺した改葬カメ棺としている。その上器の特徴は比較的大型で、頭部に橢状把手をもつことで、その埋設方法が正立であることを指摘している。

また、菊地実氏は、これまでのカメ棺葬について整理し、天狗岱遺跡などの類例から、成人骨が入棺された土器が埋納されている土壙上には配石がつくられるなど、明らかに未成人を埋葬した方法と異なることを指摘している。

第12号配石遺構出土のカメ棺は、その器形・形態及び埋葬方法で、葛西氏らがいう改葬カメ棺と類似している。中野氏の分析結果は、これまでのカメ棺葬研究に、新たな一石を投ずるものと思われる。

#### e) 配石遺構(配石墓)の配置

配石遺構(墓)は、A区の中央部のP~Tライン内に33基が存在し、配石遺構(墓)群域を構成する。この配石群域は、東側で昭和51年調査のY地域配石群と、西側では同じくX地域配石群とを連結するような状況で検出された。現時点では昭和51年のものを含めて42基の配石と1条の弧状列石からなることが明らかとなった。なお、配石遺構群域内で検出された縄文後期の土壙7基は、墓壙と判断されたことから、これらを含めて、配石及び土壙の配置について述べる。

この配石墓群域は、その配置から南側に大きく弧を広げ、その規模は推定で外帯径 154 m、内帯径 134 m、帯幅 20 m を測る。しかしこの外帯径からすると外帯南東部は台地よりはみだしてしまうことから、弧状を画くもの、あるいは徑を窄め環状になるものと考えられる。この点については今後の調査にまちたい。

検出された配石群域は、これをほぼ南北に二分するかのように存在する弧状列石により、配石墓が希薄である環状帶外帯と、密集している内帯とに分けられる。

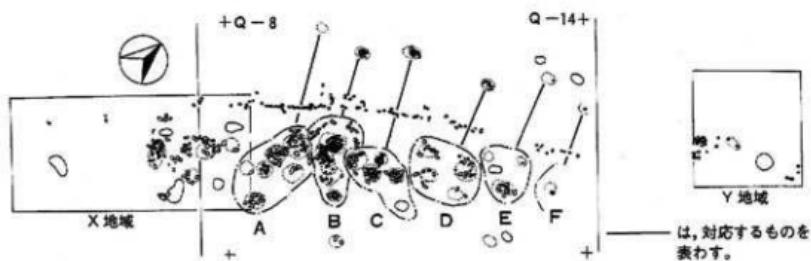
外帯は、Y 地域 1 号遺構を含め 8 基の配石墓から構成され、各々がある程度の間隔（2 ~ 5 m 程）を保ちながら、ゆるやかな弧を画くように配置されている。外帯を構成する配石形態は Ia 類のものである。その下部の土壙は平面形が橢円形を呈し、その長軸方向は北東 → 南西を向くものが多いが、例外として西 → 東を向くものが 1 例存在する。

弧状列石は、環状帶の外帯と内帯を区画する。人頭大ほどの偏平で不規則な形状の石を 9 ~ 16 個ほどを、線状に配置したものが、列石をつくる一つの単位となり、これらが断続的に連なっていることが看取され、現時点では 6 ~ 7 つの単位に分割できる。

内帯は、X・Y 地域で検出されたものを含めて 31 基の配石と 7 基の土壙から構成される。これらの遺構は、その分布状況から 4 ~ 6 基が集合して 1 小塊を構成し、この小塊が若干の間隔を保ちながら環状に連なる状況を示している。<sup>(注1)</sup> 現状で 7 つの小塊に分割できそうである。この小塊間にはある程度の間隔があるにもかかわらず、1 小塊を構成する遺構は、切り合い関係にあるものが多く、配石墓・土壙墓の構築位置が任意の場所に行なわれたものではないことを示し、かなり限定されていたことがうかがえる。

内帯を構成する配石形態は、Ia 類を除くその他のものが混存しているようにみられるが、各小塊ごとにみると同形態のものが共存することは少ない。また配石下土壙の長軸方向をみると、北東 → 南西を向くものが大方を占めるが、数例これと大きく角度のずれたものがある。各小塊ごとに長軸方向をみると、対応する外帯の土壙の長軸とほぼ同一方向をとる A・D 小塊と、角度を大きくずらしたものを含んだ B・C・E 小塊がある。しかしこれが環状の中心又は方位を考慮して設定されたものであるのか、葬法による違いなのかは、これまでの調査からは判断できなかった。

水野正好氏が「信濃」の誌上で、野中堂・万座両環状列石の構造について検討した。そのなかで万座環状列石の外帯は、組石墓が数基から 10 数基集合し 1 小塊を作り、これらが 12 小塊集まり環状帶を形成し、内帯は 12 基の組石墓からなり、外帯の小塊と対応すると指摘し、これと同様の状況が野中堂環状列石においてもみられるとした。このような状況は A 区の配石墓群域においても看取され、外帯の 1 基と内帯の 4 ~ 6 基及び弧状列石の 1 単位で小塊が構成され、第 102 図のように分割され、対応するものと思われる。しかしこのように両環状列石と同様に



第102図 配石造構対応図

小塊ごとに分割できるという類似性をもつ反面、外帯と内帯のあり方が反転するという異質性をもつことに注目される。前述した配石下土塚の長軸方向と同様、今後の調査課題である。

A区で検出された配石造構は、諸条件から「配石墓」と判断された。これらは外帯の1基と内帯の4~6基の配石・土塚及び弧状列石の一単位が集合し、1小塊となり、これらが互いに連続し、数10小塊が連続し、環状帶をつくるものと思われ、所謂「環状配石墓群」とみることができよう。また外帯に存在する配石墓は、形態的にみて他類を含まないこと、かつ小塊内においては弧状列石によって内帯と明確に区分されていることから、外帯のものは一住居の家長と、内帯のものはその家族として得えることが可能と考えられる。

注) 水野正好氏が「環状配石墓群の意味するもの」『信濃20-4、1980年』で、組石墓の集合する小さな単位を小塊としている。本文においても同意として使用した。

#### f) 配石造構(配石墓)の構築時期

構築時期については、これまで遺構内からその時期を判断しうる資料も少なく、そのため周辺から出土したものに頼らざるをえず、明確な時期決定までは至らなかった。しかし、第2次調査では、配石内及び下部土塚内から、その時期を判断できる資料が出土した。

第12号配石下土塚内出土の壺形土器、第18号、30号配石内出土の深鉢形、壺形土器である。

第12号配石出土の土器は、腹部上半に2~5条の平行沈線が横位に腰開される曲線文が施文され、沈線間に縄文を充填したもの、第30号配石のものは2条の平行線で幾何学文様が施文された後、縄文が充填したもので、大湯式又は十腰内I式に縦年される。第18号配石出土のものは器面に斜位又は縦位の柔軟文が施文されるもので、後期前葉のものに比定できる。このほか配石の構築面からは磨消縄文による入組状曲線文が施文されるもの、大湯式の特徴の一つである「花弁」状文が施文されるものが出土している。

これらのことから、構築時期は後期前葉とみてさしたるあやまりはないように考えられる。

#### g) 弧状列石の性格と時期

弧状列石は、限られた区域内につくられた配石墓群をさらに二分するかのように構築されて

いる。この性格については、資料も少なく即断することができないが、配石墓の分布状況から推察して、墓域の区画（たとえば、一住居の家長と、その家族の区別）を目的としたものと思われ、野中堂・万座両環状列石の外・内帶間に存在する空閑地帯に類似するものであろうか。この列石の構築時期は、周辺出土の土器及び構築面から配石同様、後期前葉と考えられる。

（藤井 安正）

## 2. 配石遺構下土壤・土壤底面の赤色変化について

A 区配石遺構群域（P～S-7～13グリッド）に位置する配石遺構33基、土壤8基中、配石遺構25基（第3～8、11～17、20～23、25～31号配石遺構）、土壤3基（第7、11～12号土壤）の底面より赤色に変化した部分が観察された。これらは弁柄（ $Fe_2O_3$ ）、朱（HgS）等の無機顔料の散布、堆積とは考えられず、土壤底面の化学的、物理的変化と考えられる。これらの要因が自然的なものか、人為的なものかは、現時点でははっきりしないが、自然と断定できないこと、縄文時代後・晩期の墓域からのベンガラの検出例や施朱の風習等との関連も考えられるため、以下その確認状況をまとめる。なお化学分析によりこれらの主成分は酸化第二鉄（ $Fe_2O_3$ ）であることが確かめられている。

### (a) 赤色変化部分を有する遺構の位置

赤色変化部分を有する遺構はすべてA区配石遺構群域に位置する。先に述べたとおり、配石遺構では33基中25基において観察され、その割合は76%に達する。また土壤も歴史時代に下ると考えられる第5号土壤を除くと7基中3基（43%）において観察されることになる。

配石遺構群域内における赤色部分を有する遺構、有しない遺構との位置的差異は弧状列石の南西側に位置する遺構のほとんどが赤色部分を有するのに対し、その北東側遺構では第27号配石遺構、第8号土壤の2基にすぎないことがある。

### (b) 赤色変化部分の位置

赤色変化部分は配石遺構土壤部底面及び土壤底面においてのみ確認され、壁や堆積土には及ばない。土壤中央部や長軸線上にのるもののがほとんどで、その範囲は8×22cm程度のものから第4号配石遺構のように58×110cmと土壤部底面ほぼ全域に広がるものまである。赤変の厚さは1.5～3.5cmを測る。

これらの赤色変化部分を有する土壤の深さは22～84cmで、第V層の申ヶ野輕石質火山灰層を底面としているものや、第VI層の砂礫層（鳥越輕石質火山灰層）を掘り込み底面とするものがあり、赤色変化部分を有しない土壤（深さ25～61cm）と大差はない。

土壤底面が化学的にあるいは物理的に赤変する要因としては、熱、水、赤色液体の浸透等が考えられる。熱すなわち燃焼については、赤変部分が底面のみであること、土壤内より炭化物

等が検出されないことから否定される。土中に含まれる鉄分が水によって土壤内に運ばれ、酸性土に触れて酸化し、酸化鉄として底面に付着あるいは浸透したという考えは、赤変部分を有する遺構とない遺構との自然的条件（位置、深さ、振り込み面）において差異が認められず、説得力に欠く。

このように見てくると、赤色液体の浸透という可能性が強くなってくるが、そのようなものが存在するのであろうか。自然、人為両面からの追求を続けたい。

(三ヶ田俊明、秋元信夫)

### 3. 野中堂環状列石周辺の遺構

今回発掘されたB区は、野中堂環状列石外縁より北東方向へ約11mの位置にある。このような野中堂環状列石近傍は、過去、断続的にではあるが調査が行なわれている。

昭和17年の調査では、野中堂環状列石北側外縁より10.9mの地点に、人為的に埋め戻されたフラスコ状土壤が1基検出されており、この土壤内より多量の土器片が出土したとある。また位置ははっきりしないが、野中堂環状列石の南側及び西側外縁近傍に設けられた3ヵ所の試掘坑の中の1ヵ所からフラスコ状土壤が1基検出されている。

また、昭和56年の便所増築に伴う調査では、土壤、フラスコ状土壤各1基が検出されている。このフラスコ状土壤内より、1個の復元土器、多量の土器片や石器、また、土偶、耳飾り、鋸形土製品、円盤状土製品、ミニチュア土器各1点を出土している。

今回の調査結果と昭和56年の調査結果より、フラスコ状土壤について若干検討してみる。なお昭和56年調査のフラスコ状土壤を便宜的に56Aとする。また、遺構の分布には昭和17年の調査結果をも資料として使用している。

#### (1) 形態・規模 (第103図)

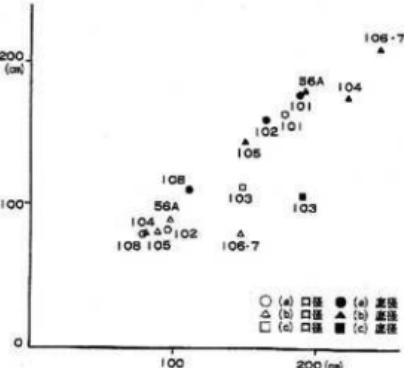
検出されたフラスコ状土壤は、土壤底面に施設をもつものが多い。

a. 土壤底面中央に小ピットをもつもの…  
..... 101・102・108

b. 土壤底面に段差をもち二段構造となるもの… 104～106・107, 56A

c. 土壤底面が平坦なもの … 103

口縁、底径は底面施設による違いは認められない。口径は79～96cmのものが多く、最大となるものは101号フラスコ状土壤で170×164cmを測る。底径、深さはばらつきがあり規格性は認



第103図 フラスコ状土壤の口径・底径相関図

めにくい。

土壌底面に小ピットをもつ例として、秋田県館下I遺跡、杉沢台遺跡、青森県小金森遺跡、螢沢遺跡などがある。

#### (2) 堆積状況

- a. 人為堆積を呈するもの ..... 102~106・107, 56A
- b. 自然堆積を呈するもの ..... 108
- c. その他 ..... 101

101号フ拉斯コ状土壌は、下層部(8~15層)は自然堆積、上層部(1~7層)は人為堆積を呈する。土層断面より鉢底状のプランを思わせる1~4,6層の土質はよく似ており粘土粒を多量含む。また、1~4,6層から出土した土器と7層から出土した土器とは時間差がみられる事などより、再利用と考えられる。人為堆積を呈する土壌は一時期に埋め戻されたものと考えられる。

#### (3) 遺物及びその出土状況

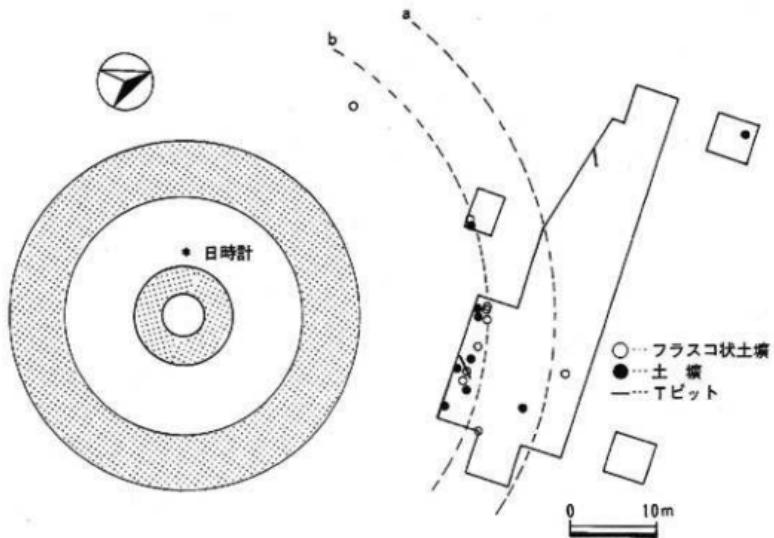
多量の遺物を出土する土壌(101~106・107, 56A)と少量の遺物を出土する土壌(108)がある。前者は、土器、石器の他、土偶、耳栓、土製装飾品、鐸形土製品、環状土製品、円盤状土製品、岩板、円盤状石製品などの土製品、石製品の出土があるに対し、後者からの土製品、石製品の出土はない。

101号フ拉斯コ状土壌の出土遺物は、再利用されたと考えられる1~4, 6層に集中する。また、104号フ拉斯コ状土壌底面の一段低くなっている所より、まとまって3個の復元可能土器が横転状態で出土した。

#### (4) 性格

フ拉斯コ状土壌の用途は、貯蔵施設、土壌墓、冬期間の簡易住居、祭祀施設など諸説がある。秋田県館下I遺跡、梨木塚遺跡、古館堤遺跡、螢刈沢遺跡などでは、土壌内より炭化した稲、クルミなどを出土している事、柱穴状ピットが土壌の周囲から検出され上屋構造をもつと考えられる事、土壌口縁部に蓋をしたと考えられる事などより、貯蔵施設と考えている。秋田県螢刈沢、梨木塚遺跡、青森県小金森遺跡、螢沢遺跡などでは、人骨、副葬品の出土、ベンガラの散布、堆積状況などより、土壌墓と考えている。また、青森県泉山遺跡、大石平遺跡などでは、堆積、遺物出土状況、規模などより、呪術的祭祀施設と考えている。このようにみていくと、フ拉斯コ状土壌の用途は限定されるのではなく、遺跡の性格、環境、時期などによって、使用目的を異にするものと考えられる。

では野中堂環状列石周辺におけるフ拉斯コ状土壌の性格であるが、積極的な資料に乏しく決定できるまでに至らない。しかし、101~106・107, 56Aは人為的に埋め戻しが行なわれている事、これらの土壌内から土器、石器の他、土製品、石製品など直接生活用具と結びつかないと



第104図 野中堂環状列石周辺の遺構分布図

考えられる遺物が多量出土する事、今回の発掘区より住居跡が検出されなかつた事などより、単に貯蔵施設とは言いがたい。

#### (5) 遺構の分布

104図は、今回の調査結果、昭和17年、56年の調査結果をもとに作成した遺構分布図である。この図からわかるように、これらの遺構は野中堂環状列石を中心とする同心円状に分布する。水野正好氏は、「縄文時代集落の基本構造とは、中心に円形広場を配置し、その外周縁に居住域を配置し、さらに外周に廐棄域をめぐらすという円心円構造をもつ。野中堂遺跡の場合、内帶外径の3倍、1:3が外帶外径、外帶幅は内帶外径の1/3、内帶内中心部径に等しい。居住域の圏域幅は円形広場の1/3であることが予測される。恐らく円形広場1に対し居住域1、1:1の構造をもつ集落であると考えられる」と述べている。破線aは外帶外縁から外帶径の1/3の距離で、水野氏のいう居住域である。この範囲内にほんどの遺構が分布し、その記述と合致する。また遺構の集中する範囲を表わしたもののが破線bであるが、これはちょうど外帶外縁から破線aまでの間にあたる。このようにこの遺跡は、遺構の密になる部分と疎になる部分とに分割できる様相を呈している。

(佐藤 樹)

#### 4. 周辺遺跡出土土器と大湯式土器

##### (1) 研究史に見る大湯式土器の現状

大湯環状列石及びその周辺から出土した土器は一般に大湯式土器と呼ばれ、種々の出版物に紹介されている。しかし、明確な型式設定には至っておらず、その内容も断片的で不明確な部分が多い。

「大湯町環状列石」において、八幡一郎氏は環状列石出土の土器を全体的に後期に位置づけ、このうち磨消繩文手法による帶状文の土器については関東地方の加曾利B式との類似から後期中葉に、また平行沈線による渦巻文の土器や繩文の地文上に沈線による曲線文を有する土器については堀之内式に近いとし、後期初頭を予期した（八幡 1953）。

昭和31年、江坂輝弥氏は角田文衛氏の論文（「陸奥における二、三の薄手式土器」『考古学評論』1-2, 1935）を踏襲し、東北地方の後期の土器について、天狗沢-古野田-鳴沢一大湯という編年を考え、大湯式土器を後期中葉に位置づけた。氏は古野田・鳴沢遺跡出土の土器が籠がきの平行沈線による曲線文であるのに対し、大湯遺跡出土のものは磨消繩文による曲線文であることや、器厚が薄手であること、細口壺がみられること等差異をみとめ、「大湯遺跡出土上のこの大湯式とも称すべき土器は鳴沢式土器に後続する関東地方の加曾利B II式あたりに併行するものと考えている」としている（江坂 1956）。江坂氏の編年は一時多用されたが、不明確な部分が多くいたため、磯崎正彦氏による十腰内編年の発表（磯崎 1964）以降、その影をひそめた。

磯崎氏は後期の土器を十腰内I-V群に分類し、前葉に位置づけられる十腰内I群の細分の可能性を指摘した。また田村誠一氏は大曲I号遺跡の出土土器を第1類から第9類に分類し、中期末葉から後期中葉にかけ、山出野A-C, 式土器に変遷する（田村 1968）とした。

1970年代には青森県における発掘調査の件数が増え、後期初頭～前葉の資料も増加する。それに伴い、十腰内I式土器の細分・再編成が数多く試みられるようになる。鈴木克彦氏は中の平遺跡の資料を用い、十腰内I群をa, bに分類、さらに山田野B式に比定できる土器を大曲I式とし、大曲I式-十腰内Ia式-十腰内Ib式の変遷を考えた（鈴木 1974）。また葛西勲氏は養沢遺跡、木戸口遺跡の調査から、十腰内I式土器を第I～III段階に細分し、第I段階を前十腰内式とした（葛西 1979）。さらに成田滋彦氏は養沢遺跡出土土器を養沢式、山野A, a, b類を前十腰内I式土器とし、養沢式-前十腰内I式-十腰内Ia式-十腰内Ib式の変遷を提起（成田 1981）している。

この間、秋田・岩手県北部では、発掘件数も少なく、良好な資料にも恵まれなかったこともあり、これらの細分案を傍観する立場にあった。しかし、1980年代には東北縦貫自動車道遺跡等の調査が岩手県北部及び秋田県北東部に及び十腰内I式の範疇に入れがたい資料もえてくる。

ここに、大湯式土器の型式設定と細分の必要性が生じてくる。

## (2) 大湯環状列石周辺遺跡出土土器の変遷

遺構外出土土器の項では、土器片もその対象としたため、主に施文技法の点から分類した。ここでは、遺構内出土土器をも含め、一個体土器及び全体を推定できる程度の土器片を対象に文様帶、文様に主眼を置き、大湯環状列石周辺遺跡（第二次）出土土器の変遷を考えたい。

### I段階（I群1類、2類、3a、3b類、4a類 第105図1～6）

隆沈文や沈線文により、幾何学文、曲線文の施文される上器類を特徴とする。深鉢・鉢・壺形を呈するものがあり、深鉢形上器が多い。深鉢は波状口縁で、口縁部が外反するもの、口縁部でくびれ、外反した口縁がその上半で若干内寄するものとがある。壺は波状か平口縁で、口縁部が短かく、若干広口のものが多い。また胴部最大径を胴部下半にもつ。これは本段階の土器が口縁部から胴下半に及ぶ幅広い文様帶を有することに起因すると考えられる。

文様帶は口縁部、口叢部、胴部文様帶に分離できる。口縁部文様帶には粘土紐貼り付けや隆沈文により「8」字状文や円文を主体とする文様、懸垂状文等が施文される。また口叢部文様帶や胴部文様帶を区画する部分には隆沈文による円文を挟んだ長方形文や直線文が施文されている。胴部文様帶はさらに縱位あるいは横位に区画されるものが多く、横位方向に2分されるものは、その上下に幾何学文、曲線文を主体とする類似する文様が施文される。また縱位方向に細分されるものは、「S」字状文、渦巻文等を挟んだ縱位平行沈線や縱位連結横円文、「8」字状文等により4区画され、その間を弧状線等により連結するもの、渦巻状等の曲線文が施文されるもの等がある。

本段階の上器の文様は主に隆沈文で施文され、沈線文系の土器もその口縁部文様や胴部文様帶区画には隆沈文を多用している。一般に幅広い胴部文様帶に縱位方向あるいは無方向の文様を横開する土器類ととらえることができる。

### IIa段階（I群3c、3d、3e類、4b類 第105図7～15）

前段階より胴部文様帶が狭まり、胴部上半に限定されつつある。この文様帯幅の縮小に伴い、文様も横位方向へと展開し始める。深鉢、鉢、壺の他に浅鉢、台付土器、蓋などもみられる。深鉢は依然波状口縁を呈するものが多いが、ゆるい波状や山形小突起状となる。また壺の胴部最大径は胴部中央へと移行する。

文様帶は口縁部文様帶と胴部文様帶となり、口縁部には花弁状文や「Y」字状文が施文されるか、長方形文や横位線文となる。胴部文様帶は前段階の縱・横位の区画が薄れ、波状文、階段状文を主体とする文様や三角形文、楕円形文等の幾何学文が横位方向に連結、展開する。

これらの文様は帯状文、2～3条の平行沈線等により施文されるが、帯状文のものが多い。帯状文は2～3条の平行沈線間に繩文を充填する方法が多用される。山形小突起を有する深鉢

口唇部の棒状工具横位圧痕文は、前段階の粘土紐貼付文からの変遷と考えられる。

#### IIb 段階 (I群 4c 類 第105図16~21)

大湯式土器のメルクマールとも言える入組状曲線の発達する時期で、前段階のように主要文様から区画帯に延びた帯状、直線状文がなくなり、全体的にシンプル、流動的になる。深鉢、鉢、浅鉢、台付土器、壺、蓋の他に注口土器もみられ、器種が多様化する。深鉢はゆるい波状口縁か平口縁で、口縁部が若干狭まり、口縁部が外反するものが多い。壺もゆるい波状口縁か平口縁で、細口のものが多くなる。

口縁部文様帶は退化し、帶状文や花弁状文等の装飾文が付加される程度で、壺の口縁部は無文となるものが多い。胴部文様帶は胴部上端と胴部中央の帶状文に区画された胴部上半に限定され、入組状曲線文が施文される。平行沈線による入組状曲線文などもみられるが、帶状文による入組状曲線文のものが圧倒的に多い。波頂部等に花弁状文等が付加されているものもあるが前段階の名残りであろう。

#### IIc 段階 (I群 4d 類 第105図22~24)

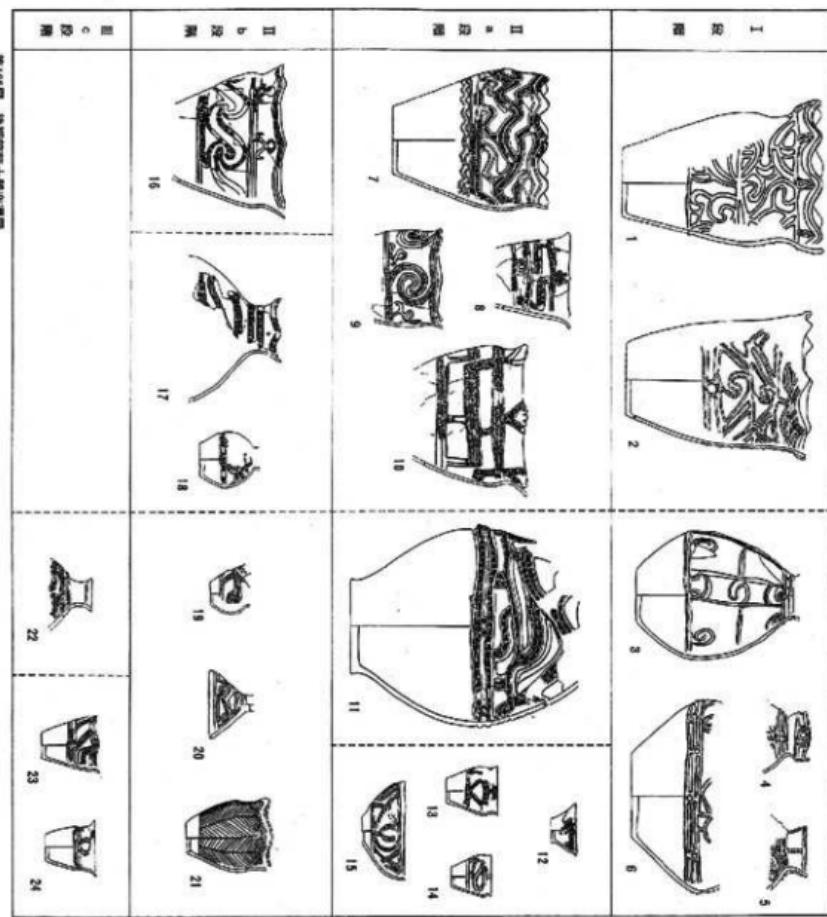
入組状曲線文が退化、簡略化する時期で、文様帶幅はさらに縮小される。出土遺物が少なく、詳細は不明であるが、深鉢、鉢、壺等の器形がみられる。口縁部文様帶には深鉢、鉢等では横位帶状文が施文されるだけで、壺は無文である。胴部上半の幅狭の胴部文様帶には区画帯間を斜状、階段状文で連結した文様を有する。帶状文の施文技法のものが多いが、沈線文のものや多条沈線文のものも現われ、II段階の終末の様相を呈する。

I段階はやや幅広の胴部文様帶が縱・横位に細分され、文様も縱位や無方向に展開する時期である。文様表出技法も隨沈文や沈線文が多用され、II段階とは一線を画す。これに対し、II段階は胴部文様帶が胴部上半に限定され、文様は横位方向に展開する。沈線による施文のものもあるが、圧倒的に帶状文(充填繩文)が多くなる。無文の土器(I群 5 類)、口縁部に撲紐圧痕文や平行沈線文を有し、胴部にのみ繩文の施文される土器類(III群 3a, 3b 類)も本段階に位置づけられる。

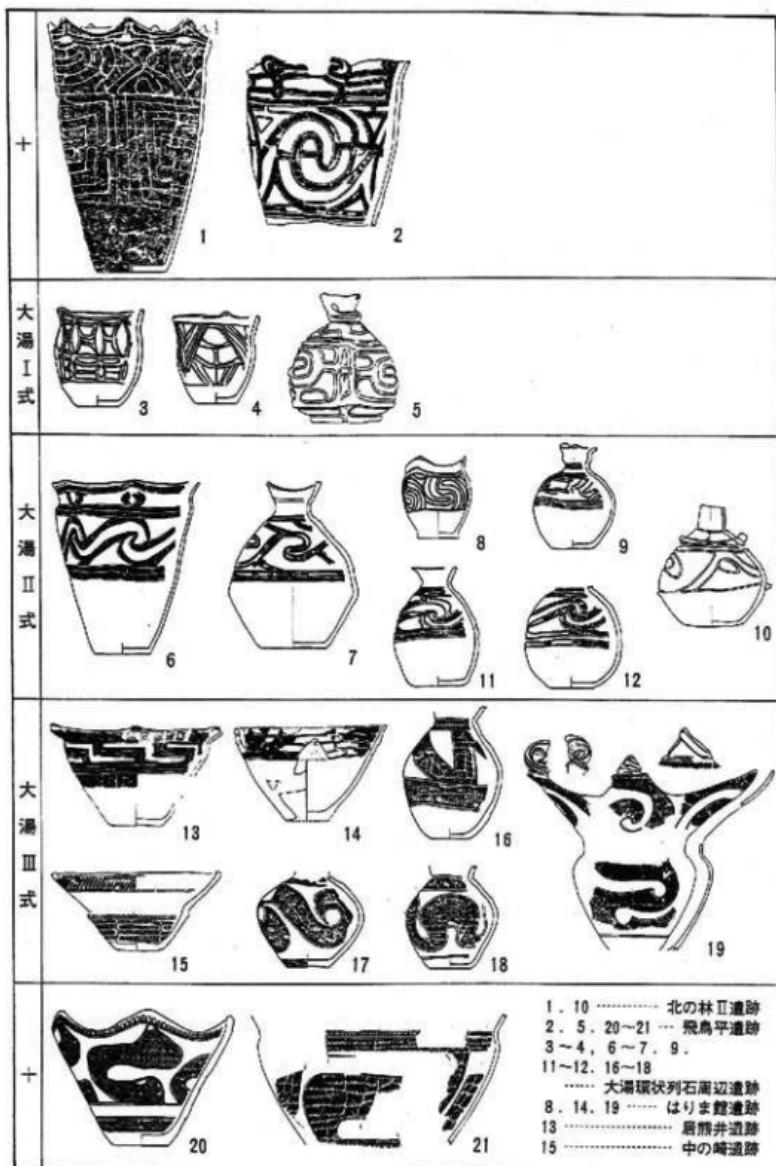
I段階は関東地方の堀之内1式、青森県の十腰内I式前半に、II段階は堀之内2式、十腰内I式後半に併行すると考えられる。大湯環状列石及びその周辺からは、この後期前葉に位置づけられるI段階、II段階の土器の他に中葉に位置づけられる土器群の出土がある。この種の土器をとりあえずIII段階とし、前述I~II段階を大湯I~II式と仮称したい。

限られた資料数であり、層序的把握も十分でなく、時期尚早とは考えたが、大湯式土器の型式設定と細分の必要性から試論を提示した。本項について、資料の蓄積を待ち、再度稿を起したい。

(秋元 信夫)



第104图 快乐的武士精英墓



第106図 鹿角地方出土の後期前葉～中葉の土器

## 第Ⅶ章 調査のまとめ

大湯環状列石及びその周辺遺跡は、米代川の一支流、大湯川の南東岸の標高180m前後の台地上に位置する。大湯環状列石は約90mの距離を保つ野中堂と万座遺跡の2つの環状組石（配石）遺構群の総称であり、その規模は野中堂で42m、万座で46mを測る。その整然たる形態、壮大なる規模から、将来にわたり保存・保護すべき重要遺跡として、昭和31年には国指定特別史跡に指定されている。この遺跡の性格については、昭和27年の国営調査において縄文時代後期の墓地と推定されたが、それを裏づける積極的資料に欠き、この説は定着せず、墓地説、祭祀場説が両立し、現在に至っている。

大湯環状列石と関連ある遺跡が広がることは、昭和17、21、26～27年の近傍の調査及び畠中の表探資料によりある程度予想されていたが、昭和48年から51年に行なわれた周辺分布調査により、直接あるいは間接的に関連する遺跡が、大湯環状列石より北東300m、南西180mに及ぶことが判明した。

昭和59年に実施された第1次大湯環状列石周辺遺跡発掘調査では、51年の分布調査において第3の環状列石の存在が予想された野中堂遺跡の北東300mの地点（A区）を調査対象とし、円を意識した配列の配石遺構群の一帯を確認、僅々の配石遺構の性格については配石下の土壌の存在、その堆積状況、残存脛跡分析等から配石墓と推察できた。

本年度の調査は、この推察をさらに確かなものとするため、昨年の調査区南西側の隣接地（A区）1320m<sup>2</sup>（第1次調査地の追跡墓地300m<sup>2</sup>を含む）を調査対象とした。さらに野中堂環状列石近傍の遺構の存在及びその配置の確認を主目的にその外帶から北東11mに調査区（B区）を設定、550m<sup>2</sup>の調査を行なった。

調査の結果、A区からは縄文時代の配石遺構24基、弧状列石1条、土壙8基、柱穴状ピット8基、焼土遺構6基、歴史時代の土壙1基、時期不明土壙1基（51年分布調査時確認の配石遺構3基、土壙1基を含む）を検出、遺構内・外より縄文時代後期の土器ダンボール箱5箱と19点の石器の出土があった。またB区からは縄文時代のフ拉斯コ状土壙7基、Tピット2基、土壙7基、焼土遺構3基、時期不明の土壙1基を検出、縄文時代後期の土器ダンボール箱47箱、石器625点、土製品482点、石製品36点の出土があった。

A区の配石遺構は第1次調査の予想に反し、南側に延びる配置となることが明らかとなった。また円形に一巡する可能性も低い。これは発掘部分の曲率から、円と仮定しその直径を出すと154mとなり、その南東部が台地からはみ出るからである。曲率を変え構円形状に一巡するか、一巡せず弧状となるものと考えられる。

配石遺構は幅20mの弧（環）状帶上に位置するが、この帶は弧状列石により内・外帶に二分割される。さらに内帶側の配石遺構は4～6基を一単位とする小塊に細分され、それぞれ最も近

距離の外帯に位置する配石遺構1基に対応するという規則的な配置を呈する。弧状列石に野中堂、万座環状列石の内・外帯間の空間部分と同一の意味を持たせると、この構造は両環状列石と極めて類似するものとなる。配石遺構の集合体であり、環状を意識した配置であることからも、本遺構群にも野中堂、万座両環状列石と同様の意識・規制が働いていたものと考えられる。

第12、16号配石遺構からの壺棺の出土や、第17、30号配石遺構からの副葬品と考えられる石錐の出土は、配石遺構を配石墓と推察する有力な手がかりとなった。また、第12号配石遺構出土壺棺土器及びその内外土壤の残存脂肪分析結果より、中野益男氏は壺棺土器を幼児埋葬用と認定し、北東北の縄文時代後期初頭から前葉に盛行する壺棺葬の研究に一石を投ずることとなった。一方、壺棺の埋納率は33基中2基で6.1%にすぎない。この壺棺の埋納率や壺棺、副葬品の有無が何を意味するのか新たな問題を提起することとなった。

これまで、配石遺構の構築時期は周辺の出土遺物から後期前葉と推定してきたが、壺棺土器や第18、30号配石遺構からの出土土器は、この時期を決定する貴重な資料となった。

配石遺構群域に位置する同時期の土壤7基は、その上部に配石や石の抜き取り痕が確認されなかったことから配石遺構とは別に記述してきたが、平面プラン、規模、主軸方向、分布、堆積状況及び第7号土壤土壤の残存脂肪分析から配石遺構と同一の性格を有するものと考えられる。

配石遺構群域内で最も配石が集中するR-10グリッド付近より検出された柱穴状ビット8基は、長方形柱穴列、墓標用ビットとも断定できなかった。配石下土壤底面の赤色変化部分の解明とともに今後の課題としたい。

B区で検出された遺構のほとんどは、南東部のJ-M-101~103グリッドに位置する。昭和17年の神代文化研究所による調査や56年の便所増築に伴う調査結果を含めると、これらの遺構は野中堂環状列石の外帯から22.8m、すなわち外帯外径の7分の範囲内に分布し、さらにその内に集中する傾向にある。これらの遺構が、この幅で野中堂環状列石の周囲を一巡するかどうかは今後の調査を待たなければならないが、少なくとも同環状列石とほぼ同時期と考えられるフラスコ状土壤は環状列石を意識した配置となっていると考えられる。

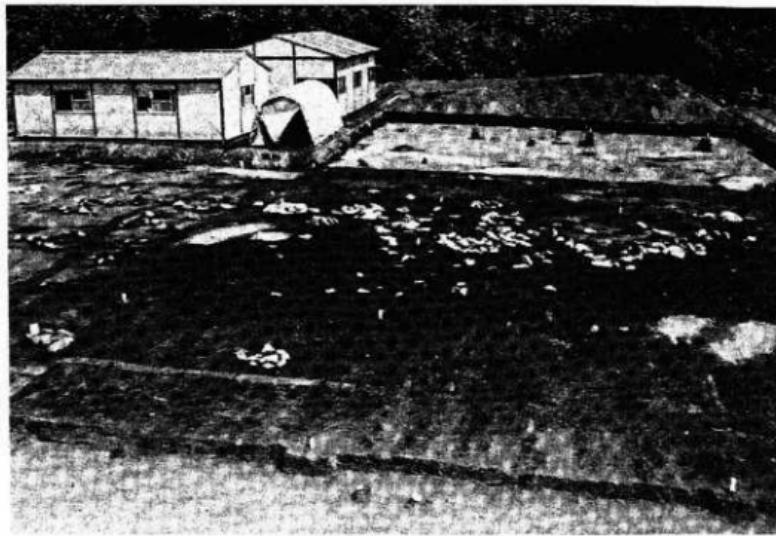
フラスコ状土壤の用途については、貯蔵穴、墓穴、祭祀施設等諸説があるが、本遺跡の場合いずれとも断定できなかった。これらの遺構の外側に分布する遺物包含層（捨場）や近くに存在が予想される住居跡群との関連を考慮する必要があり、資料の蓄積を待ちたい。

出土遺物の大部分は後期前葉から中葉に位置づけられるもので、復元土器は103点を数える。これらの土器は一般に大湯式土器と呼ばれているが、比較的時間幅があるため、I~III式に細分を試みた。A区、B区ともその出土土器の大半は大湯II式（甕之内II式併行）に位置づけられる。

(秋元 信夫)

## 参考・引用文献

- 河部義平 「配石墓の成立」『考古学雑誌』第54巻1号 1968年  
 \* 「配石」『縄文文化の研究9』雄山閣 1983年
- 磯崎正彦 「後期縄文式土器」『日本原始美術I』講談社 1964年
- 今井富士雄・磯崎正彦 「十腰内遺跡」「岩木山」に収録、岩木山刊行会 1968年
- 江坂輝彌 「東北一各地城の縄文式土器」『日本考古学講座3』河出書房 1957年  
 \* 「縄文時代の配石遺構について」『北奥古代文化』第3号 1971年  
 \* 「配石遺構とは」『考古学ジャーナル』No.254 ニュー・サイエンス社 1985年  
 \* 「縄文土器文化後期における改葬兼埋葬の研究」『北奥古代文化』第1号 1968年
- 角田文衛 「奥羽に於ける二・三の薄手式土器」『考古学評論』 1935年
- 葛西 道 「青森県下の縄文文化後期の改葬兼埋葬遺跡について」『北奥古代文化』第6号 1974年
- 鍛田・大里・秋元他 「鹿角市史」鹿角市 1982年
- 後藤勝彦 「陸前宮戸島里浜台貝塚出土の土器について」『考古学雑誌』第48巻1号 1962年
- 斎藤 忠 「大湯環状列石と日本の縄文時代の類似遺跡について」『北奥古代文化』第3号 1971年  
 \* 「配石遺構特に環状列石について」『考古学ジャーナル』No.254 ニュー・サイエンス社 1985年
- 諏訪富多 「特別史跡大湯環状列石発掘史」大湯郷上研究会 1973年
- 鉢木保彦 「集落の構成」『季刊考古学』第7号 雄山閣 1984年
- 田村誠一 「大曲I遺跡」「岩木山」に収録、岩木山刊行会 1968年
- 喜豊泰時 「大湯環状列石研究と今後の課題」『よねしろ考古』第1号 1985年
- 成田滋彦 「青森県の土器」『縄文文化の研究4』雄山閣 1981年
- 林 謙作 「縄文期の葬制・第Ⅱ部」『考古学雑誌』第63巻3号 1977年
- 本間 宏 「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第1号 1985年
- 水野正好 「環状列石墓群の意味するもの」『信濃』第20巻4号 1968年  
 \* 「ストーンサークルの意義」『季刊考古学』第9号 雄山閣 1984年
- 秋元信夫 「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告」「よねしろ考古」第1号 1985年
- 文化財保護委員会 「大湯町環状列石」1953年
- 葛西 駿 「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」平賀町教育委員会 1974年  
 \* 「釜沢遺跡」青森県教育委員会 1979年
- 坂本洋一他 「詔庭遺跡」青森県教育委員会 1984年
- 鉢木克彦他 「中の平遺跡」青森県教育委員会 1974年
- 成田滋彦他 「大石平遺跡」青森県教育委員会 1985年
- 村越 潔他 「大面遺跡」青森県教育委員会 1980年
- 高山 昇他 「一ノ波遺跡」青森県教育委員会 1983年
- 岩手県埋蔵文化財センター 「岩手県の遺跡」 1985年
- 小田野哲憲 「岩手県の土器」岩手県立博物館 1982年
- 鈴木優子 「下村B遺跡」岩手県埋蔵文化財センター 1983年
- 中村良幸他 「立石遺跡」大迫町教育委員会 1979年
- 秋田県教育委員会 「房熊井遺跡」東北縦貫自動車道発掘調査報告書に収録 1980年  
 \* 「塚の下遺跡」 1979年  
 \* 「笊下I遺跡」 1979年  
 \* 「梨ノ木塚遺跡」 1979年  
 \* 「喬ヶ長根I遺跡」 国道103号横浜バイパス工事間連遺跡発掘調査報告書 1981年  
 \* 「大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報」 1975年
- 八竜町教育委員会 「壹刈沢貝塚」 1979年
- 山本町教育委員会 「古銘掛頭遺跡」 1977年
- 施旗市教育委員会 「大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報」 1976年  
 \* 「大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報」 1977年  
 \* 「大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書」 1978年  
 \* 「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)」 1985年



A区配石遺構群 NW→SE



同配石下土壤及び弧状列石 NW→SE

PL 1 A区配石遺構群域全景 (1)

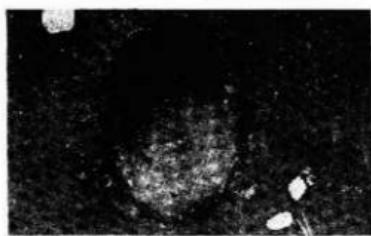


A区配石遺構群（59年度確認の配石遺構下土壤） NW→SE

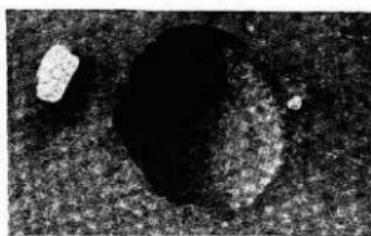


A区配石遺構群（下半分は未復原） E→W

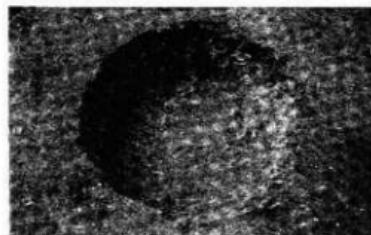
P L 2 A区配石遺構群坡全景（2）



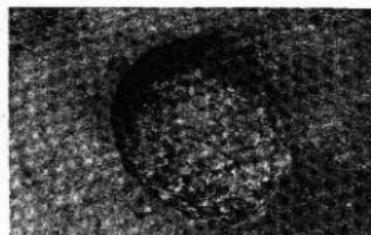
第4号配石下土壤



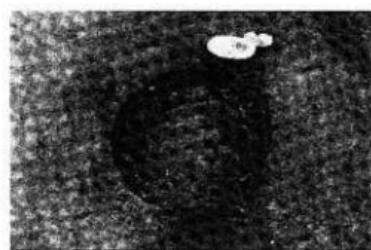
第5号配石下土壤



第6号配石下土壤



第7号配石下土壤



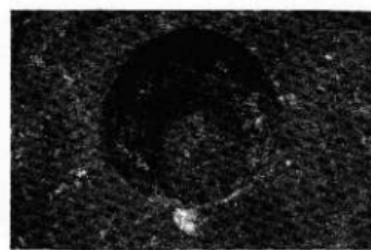
第8号配石下土壤



第10号配石遺構

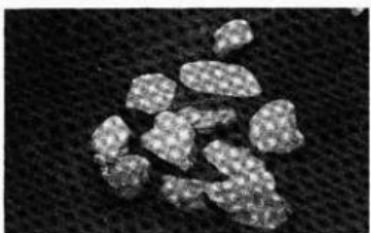


第10号配石遺構断面

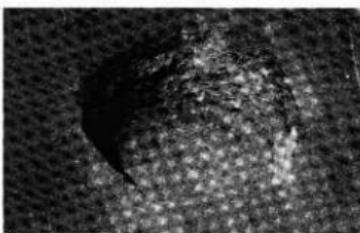


第10号配石下土壤

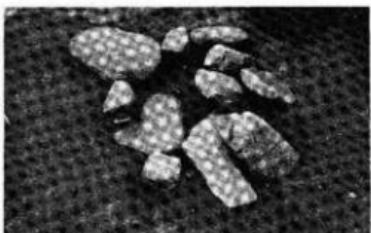
P L 3 第4~8, 10号配石遺構



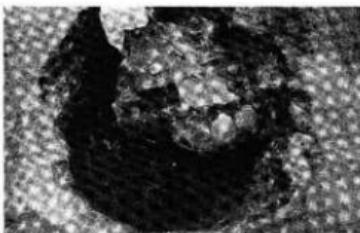
第11号配石遺構



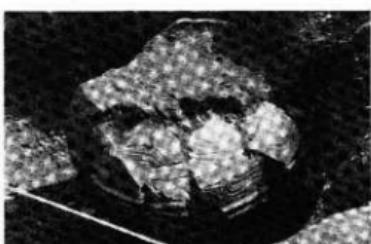
第11号配石下土壤



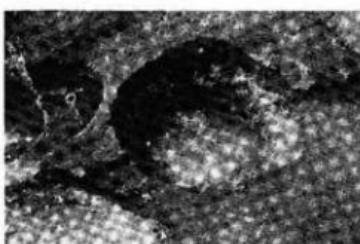
第12号配石遺構



第12号配石遺構甕棺出土状況



第12号配石遺構出土の甕棺



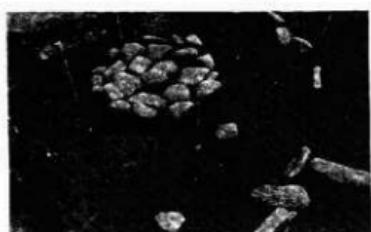
第12号配石下土壤



第13号配石遺構



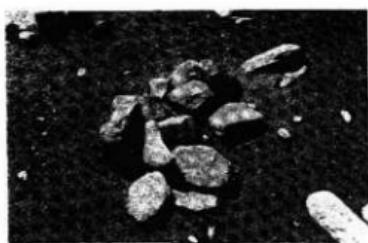
第13号配石遺構断面



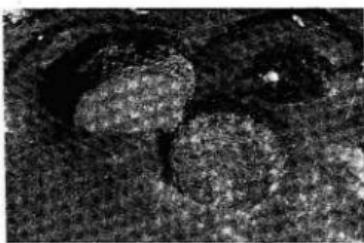
第14号配石遗構



第14号配石下土壤



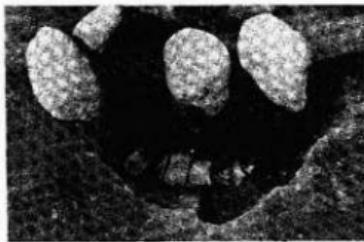
第15号配石遗構



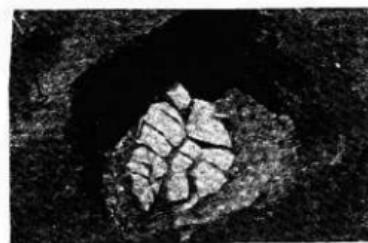
第12, 13, 15号配石下土壤



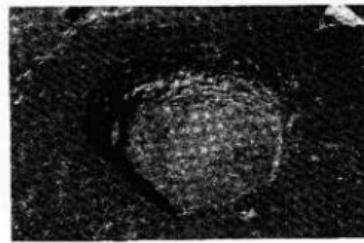
第16号配石遗構



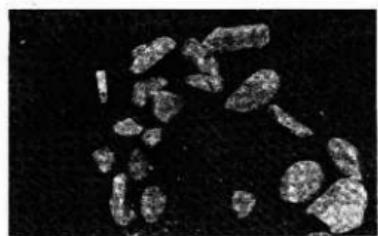
第15号配石遗構断面



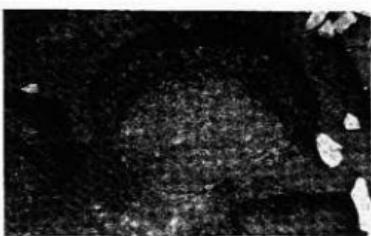
第16号配石遗構石棺出土状况



第16号配石下土壤



第17号配石遺構



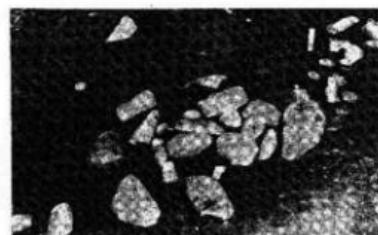
第17号配石下土壤



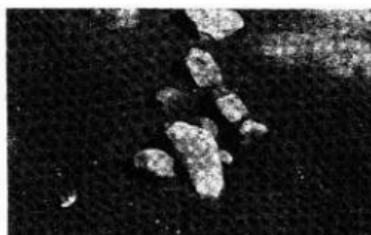
第18号配石遺構



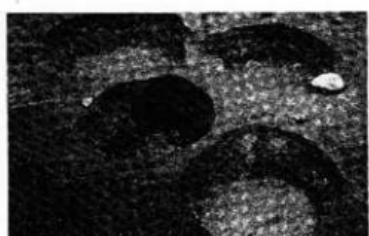
第18号配石下土壤



第20号配石遺構



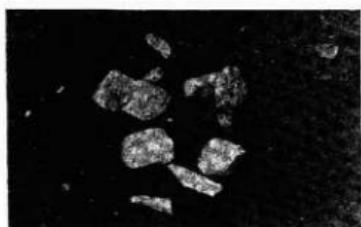
第21号配石遺構



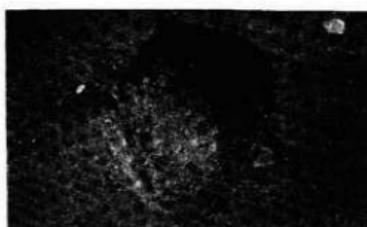
第17, 20, 21, 25号配石下土壤



配石遺構調査風景



第22号配石遺構



第22号配石下土壤



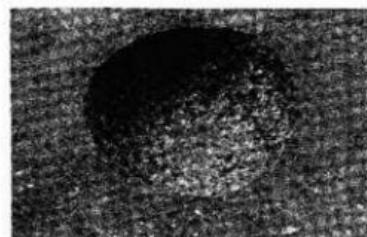
第24号配石下土壤



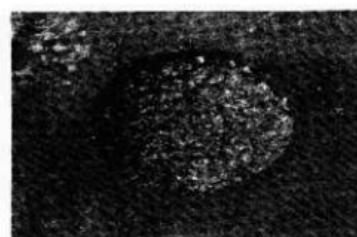
第25号配石下土壤



第26号配石遺構



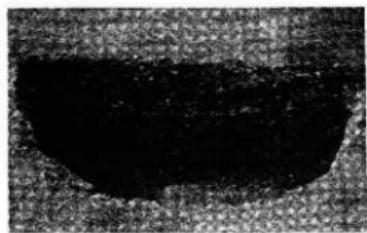
第26号配石下土壤



第27号配石下土壤



第28号配石遺構断面



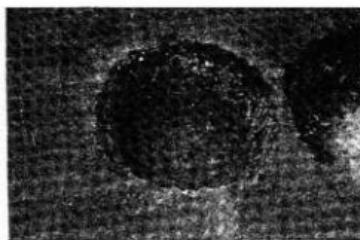
第29号配石遺構断面



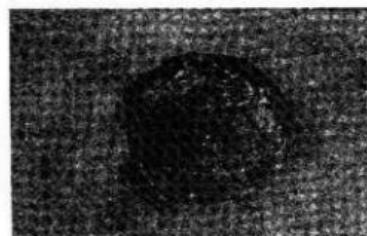
第29号配石下土壤



第30号配石下土壤



第31号配石下土壤



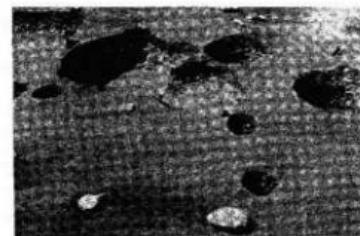
第32号配石下土壤



第33号配石下土壤



弧状列石

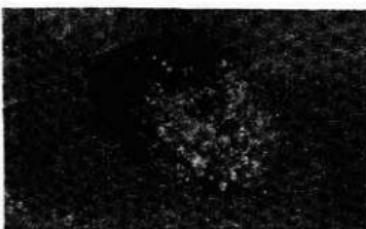


ピット群

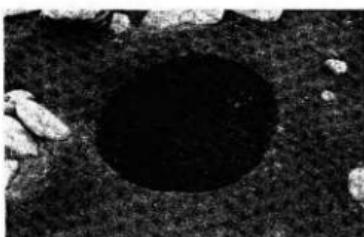
P L 8 第29～33号配石遺構、弧状列石、ピット群



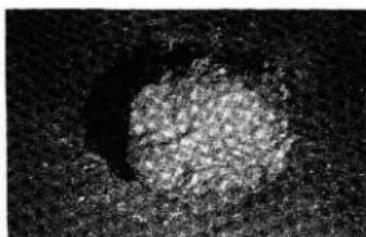
現地説明会



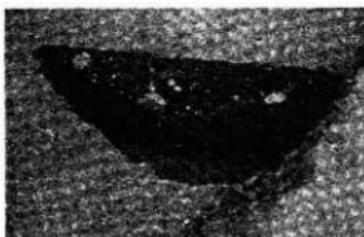
第4号土壤



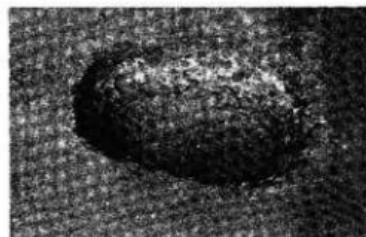
第5号土壤



第6号土壤



第7号土壤断面



第7号土壤



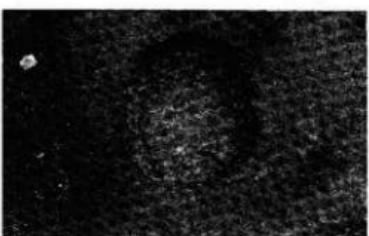
第8号土壤



第9号土壤



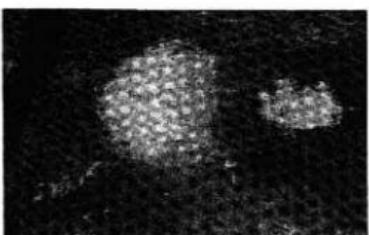
第11号土壤



第12号土壤



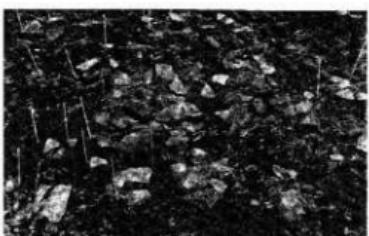
第13号土壤



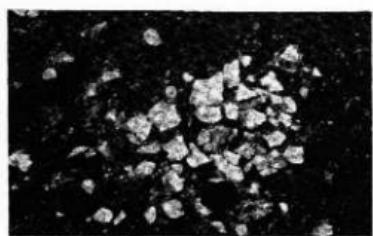
第15号烧土遗構



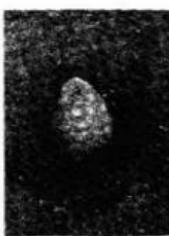
B区遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

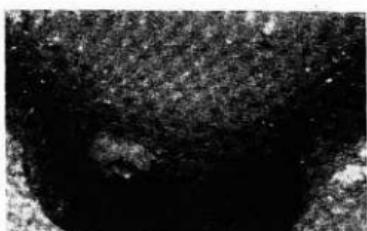


鐸形土製品出土状況





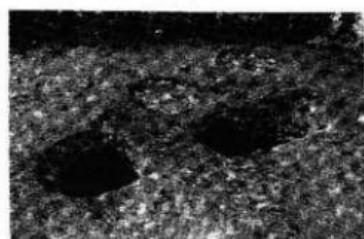
B区南部遺構、後方は野中堂環状列石



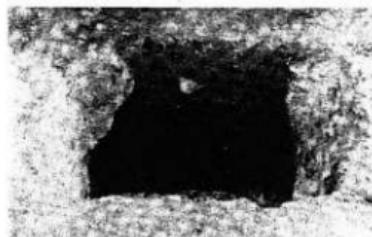
第101号 フラスコ状土壤断面



第101号 フラスコ状土壤土器出土状況



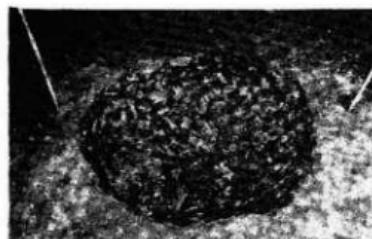
第105,106・107号 フラスコ状土壤、第105,106号土壤



第108号 フラスコ状土壤断面



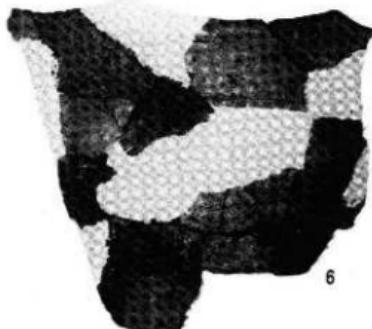
第102号 T ピット



第108号 土壤



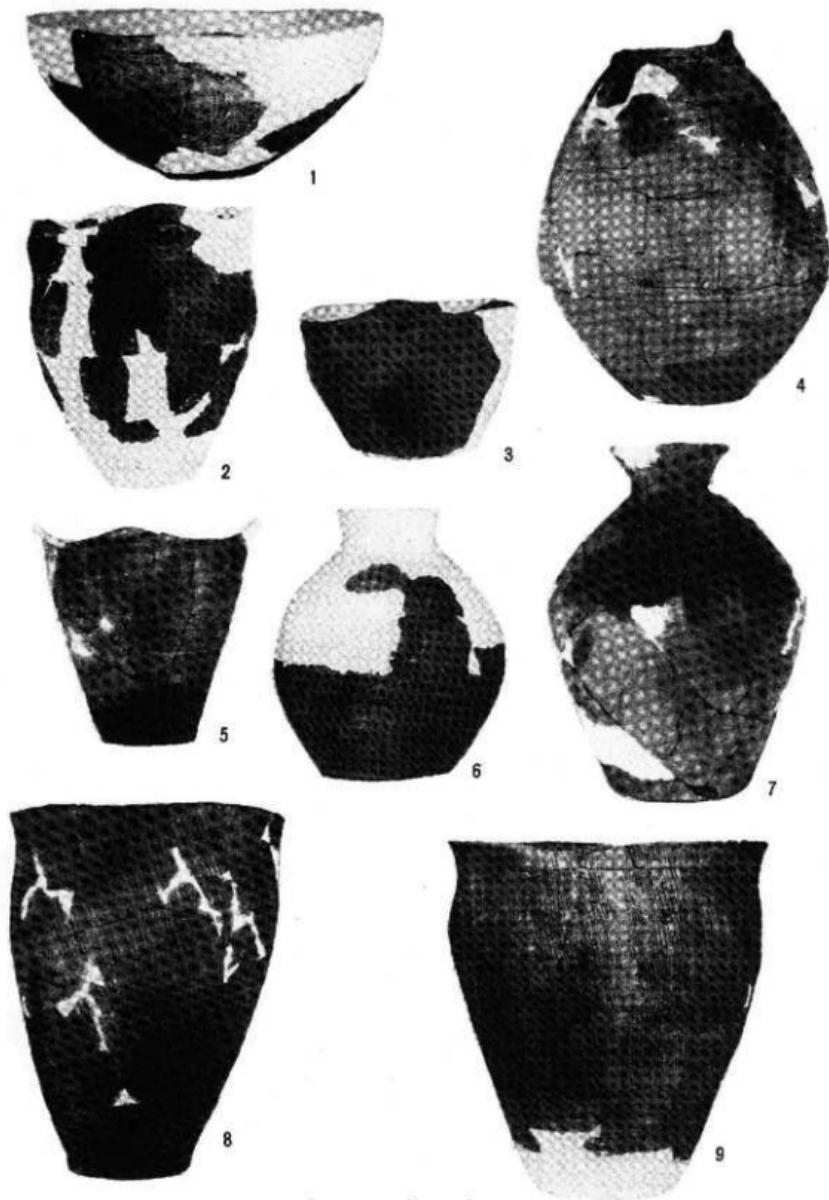
B区調査風景



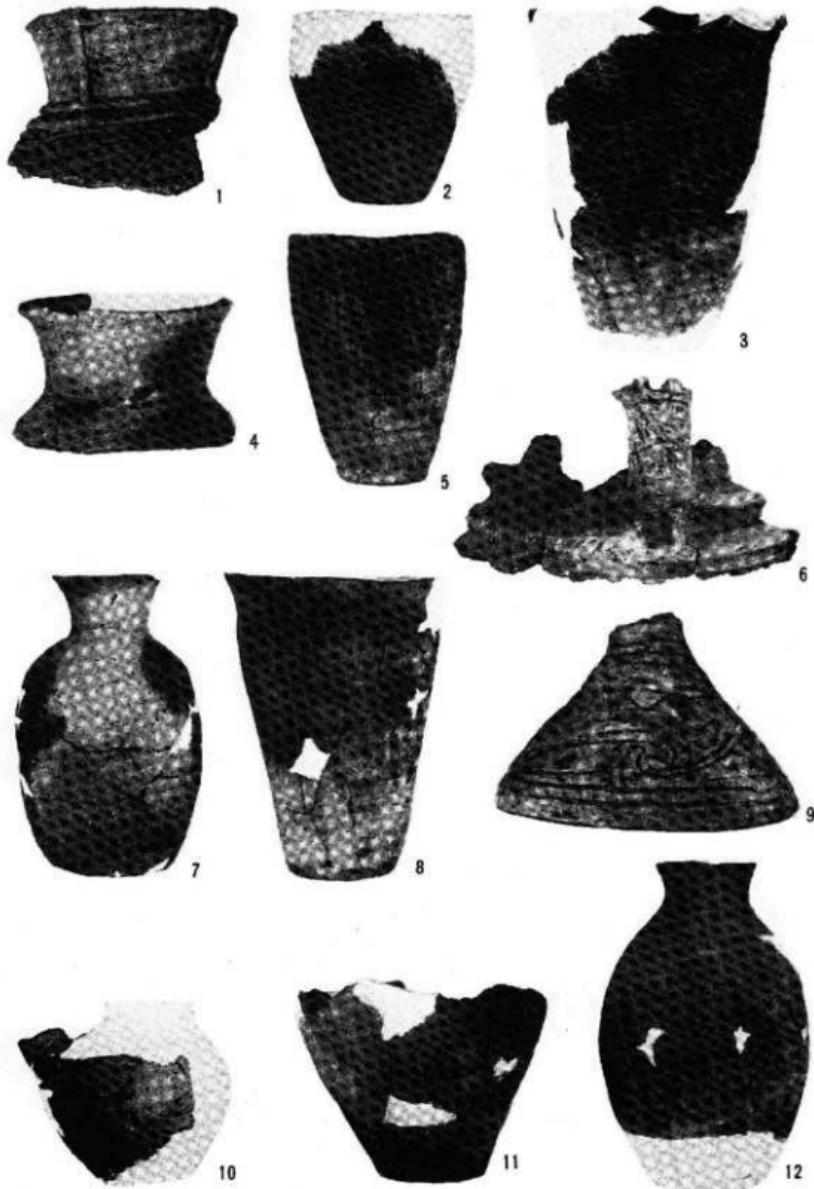
1. SX(S) 12  
2. SX(S) 16  
3. SX(S) 18  
4. SX(S) 30  
5. R-II, 12グリッド  
III~IV層上面  
6. S-10グリッド  
IIId 下層

P L 12

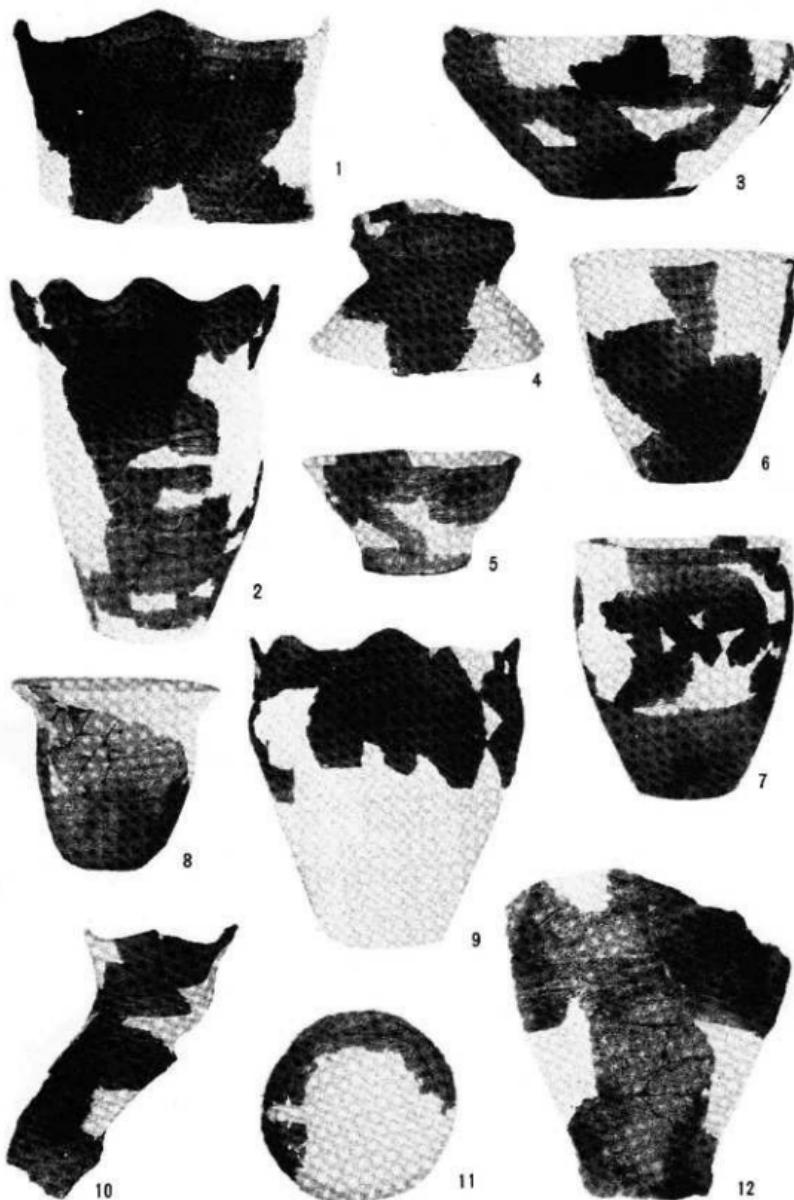
A区遺構内・外出土土器



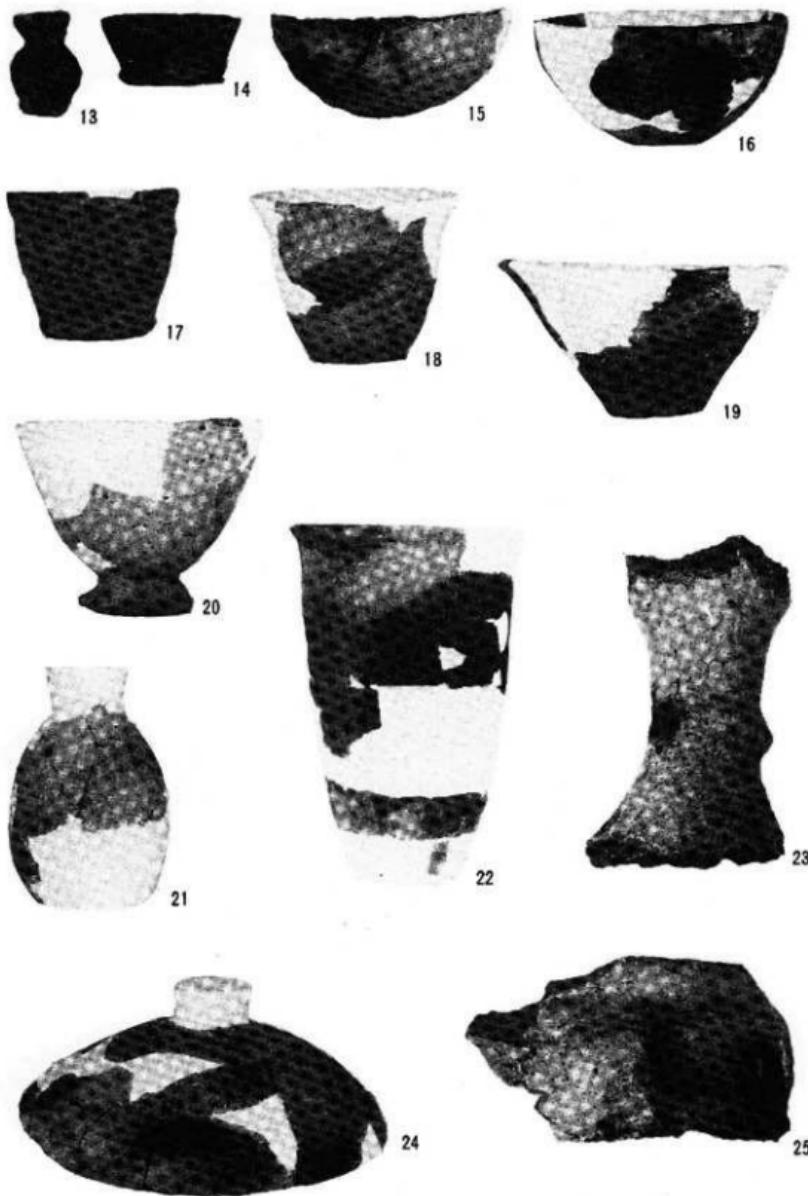
PL 13 B区第101号 フラスコ状土壺出土土器



P L 14 B区遺構内出土土器 (1. 2...SX(F)102 3...SX(F)103  
4~8...SX(F)104 9~12...SX(F)106·107)



PL 15 B区遺構外出土土器 (1)



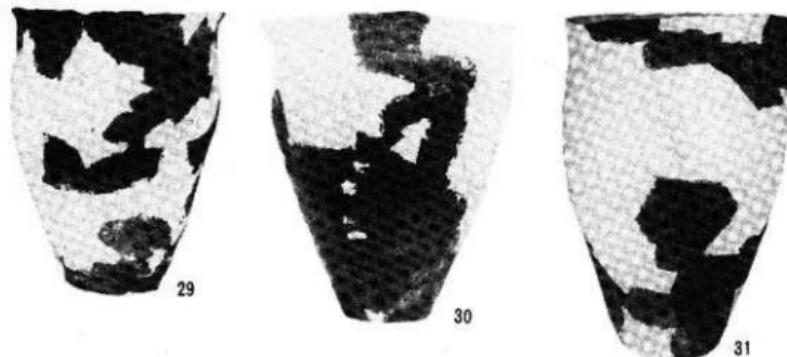
PL 16 B区遺構外出土土器 (2)



26

27

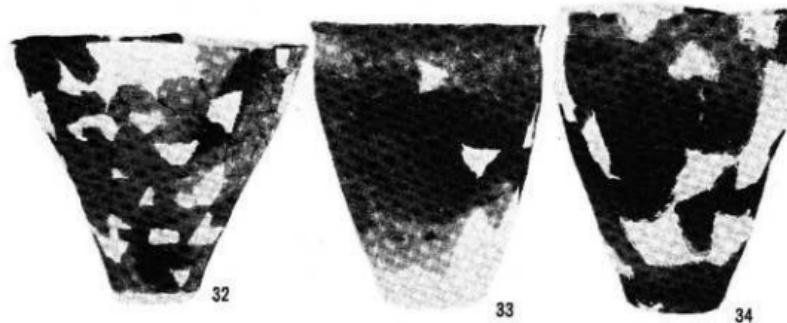
28



29

30

31

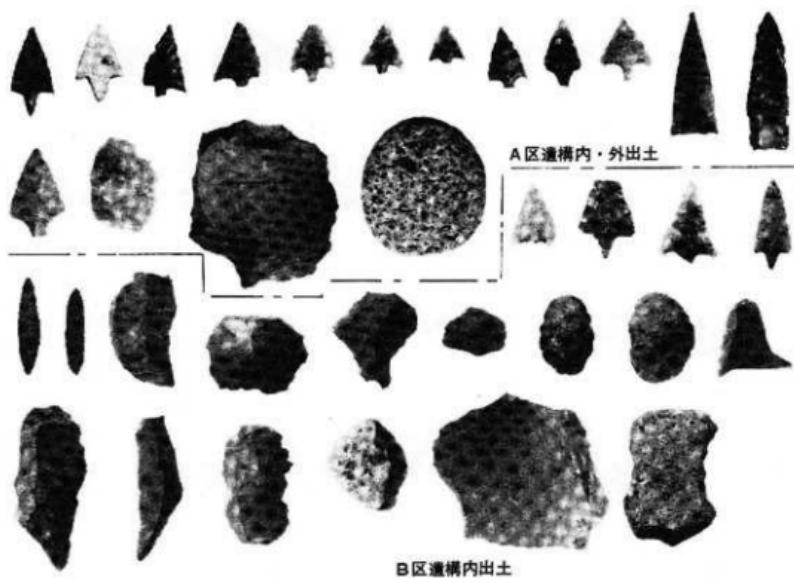


32

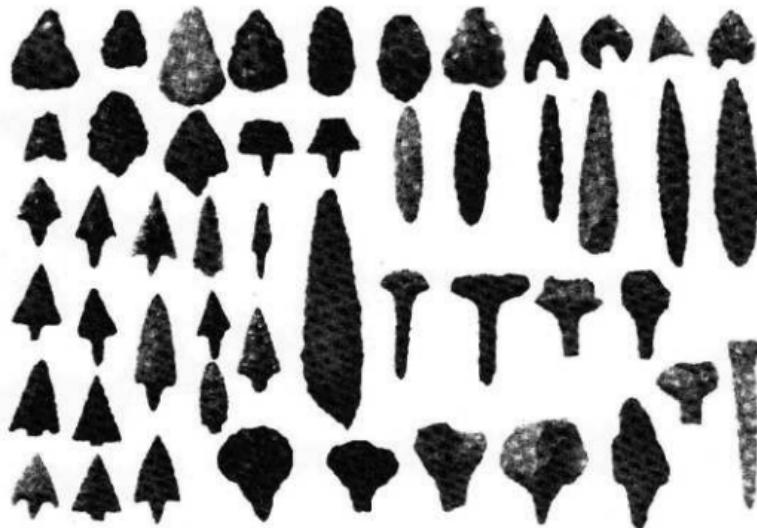
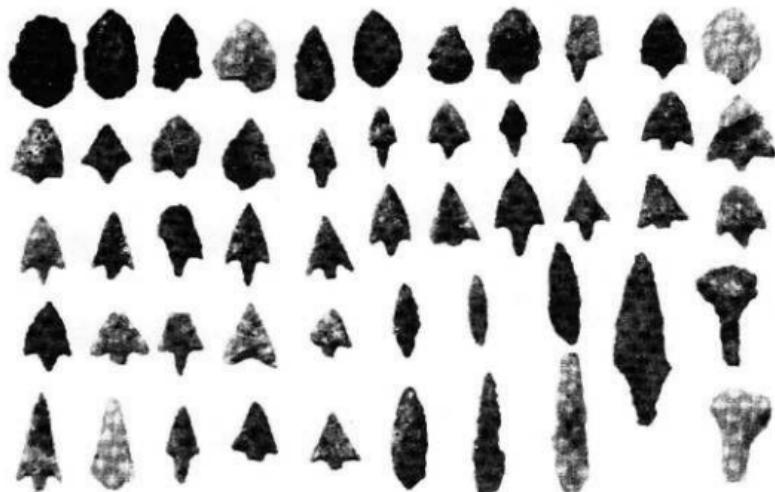
33

34

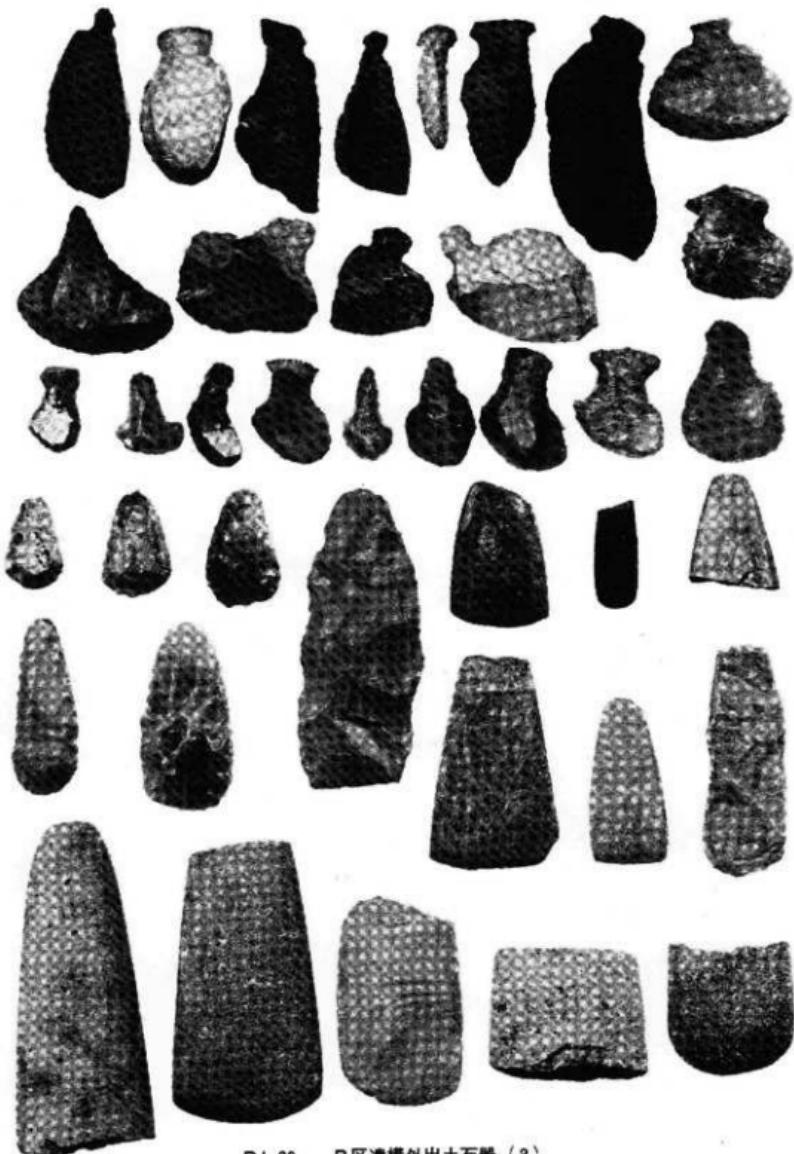
PL17 B区遺構外出土土器 (3)



PL 18 A区・B区遺構内・出土石器 (1)



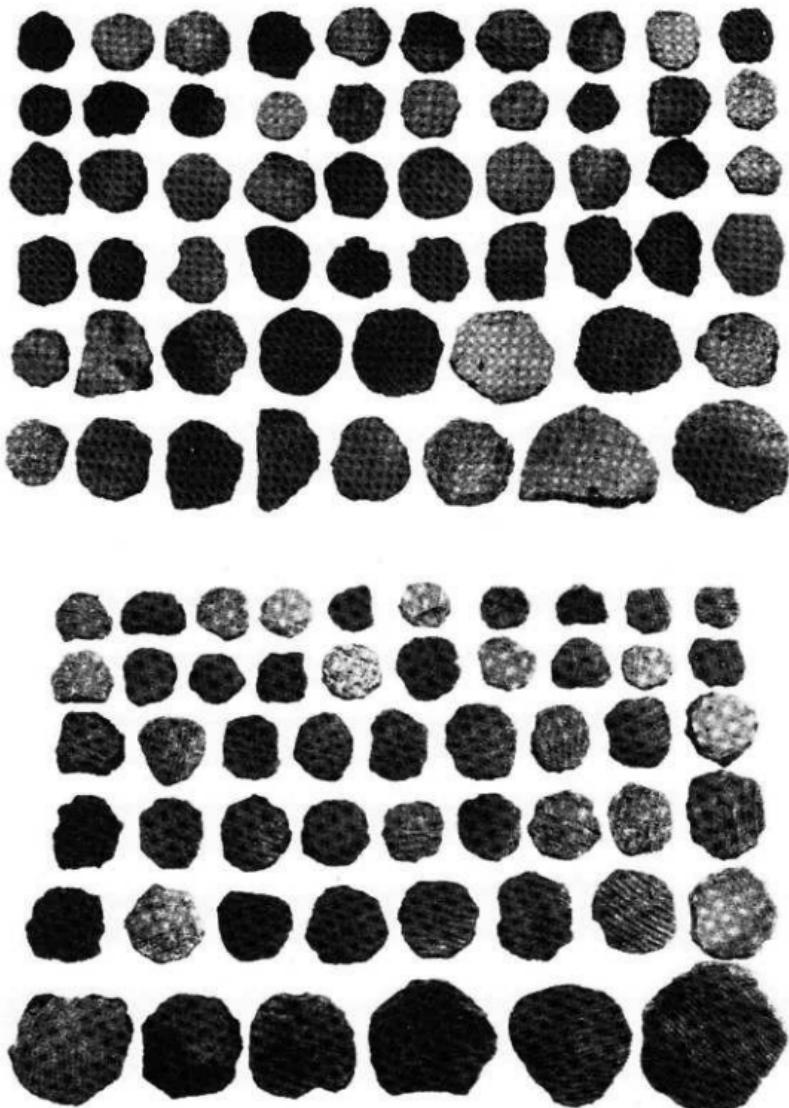
PL 19 B区遗物外出土石器 (2)



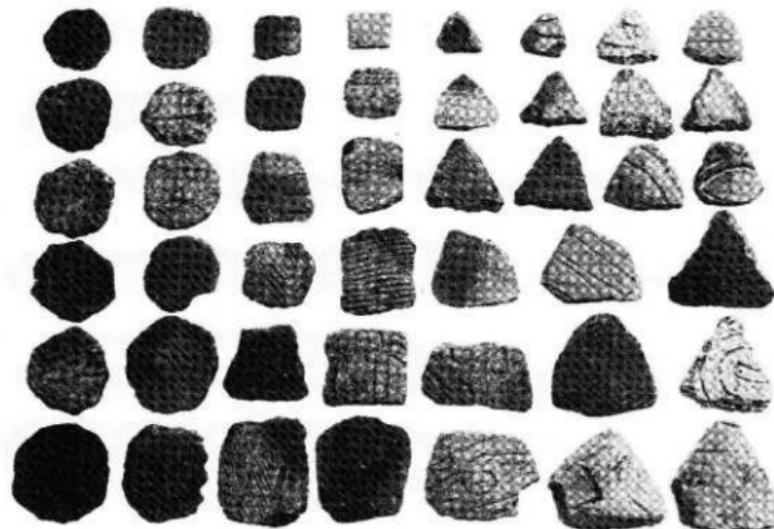
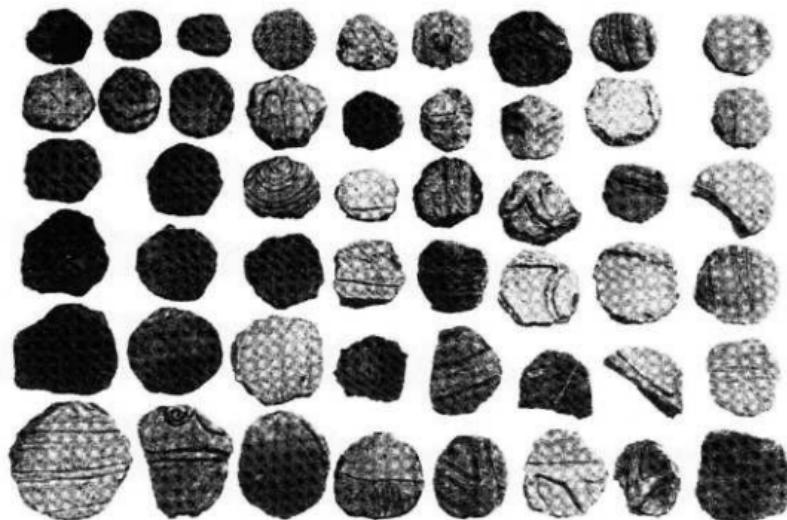
P L 20 B 区造構外出土石器 (3)



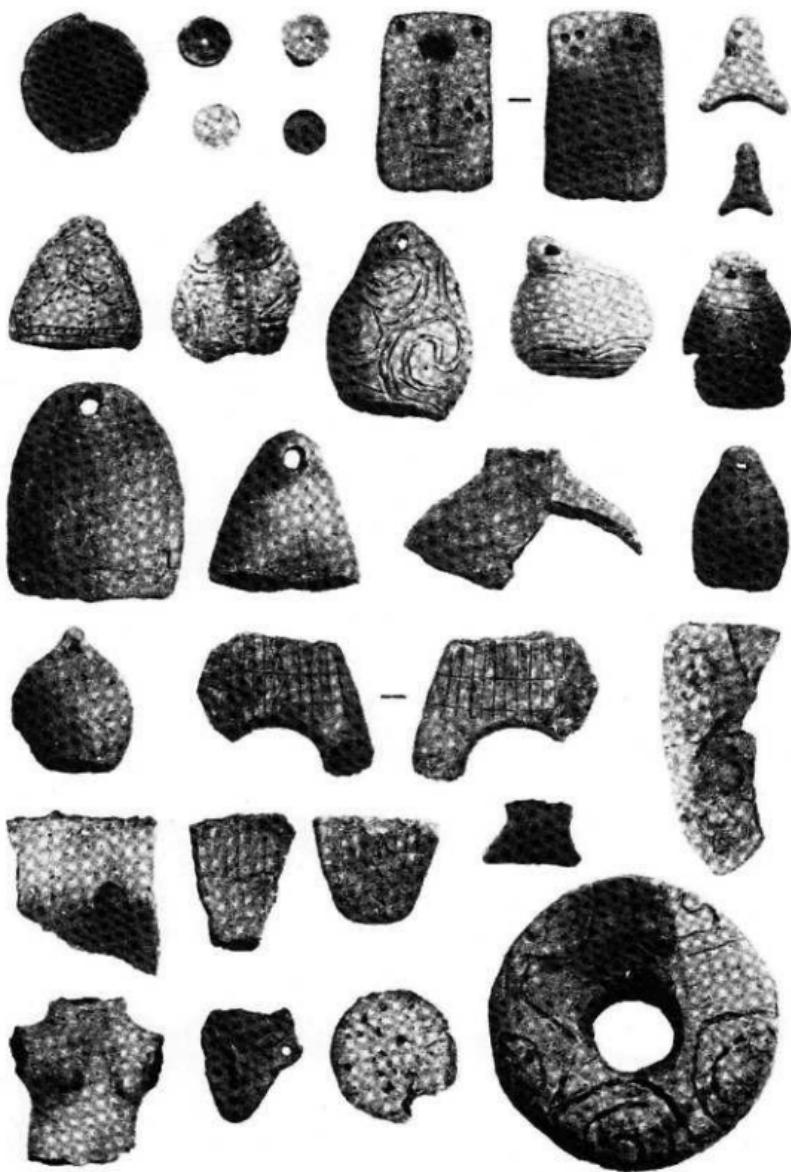
P L.21 B区遺構外出土石器 (4)



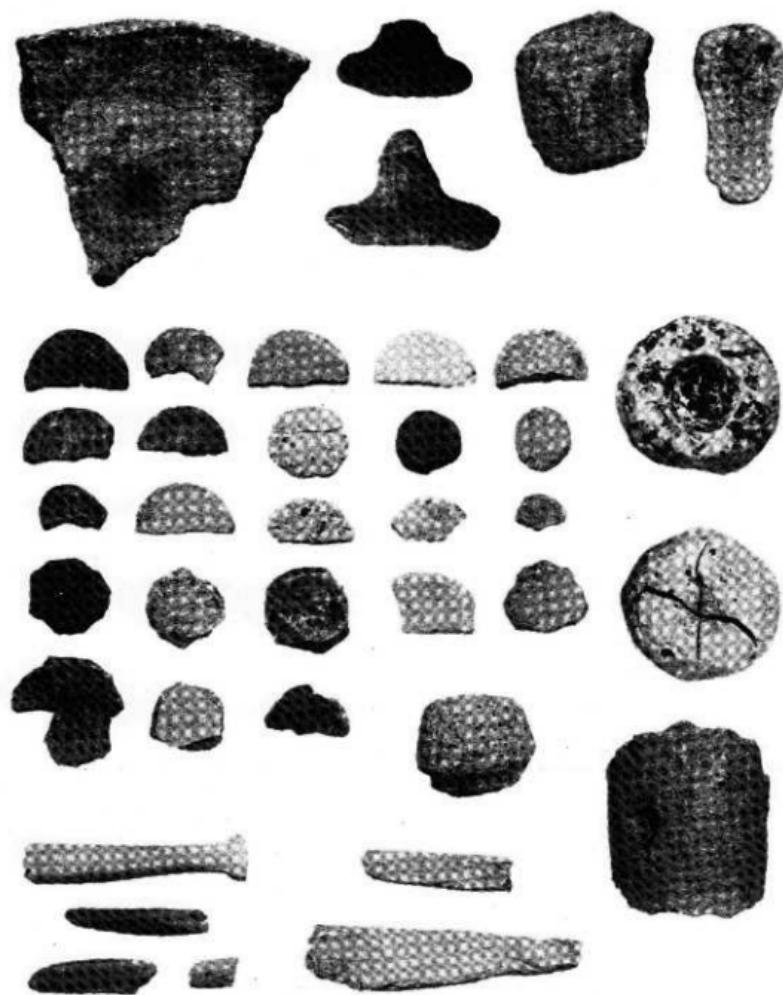
P L 22 B区出土土製品（1）



P L 23 B区出土土製品 (2)



PL.24 B区出土土製品（3）



P L 25 B区出土土製品（4）・石製品

---

鹿角市文化財調査資料 31

## 大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)

発行年月日 昭和61年3月31日

発 行 者 鹿角市教育委員会

〒 018-52

秋田県鹿角市花輪字荒田4-1

TEL 0186-23-5111

印 刷 所 (有) 大館孔版社

---